常識物語 第一巻

00
5796

一 三代のむしやぶり事
一 これたかきれひとのくらゐあらそひの事
一 いさかひをてう條くむしやうの事
一 おゝしくいさうかしはる事
一 いとまれうしとすけつねはうばうの事
一 すけ經いとまれなき□□□□□合する事
一 おうみやりくちう□□□物あらそひの事
一 あいさつていさい□□□の事
一 おくのつかりのまの事
一 □しくすまうの事

かゝまいらせしけり
いちやうさんか妻
はゝかもとへまかりけり
わかりはりそうあそはしけるけり

曽我物語巻第一

それにちいきあきつしまはこれくにとこたちのみことより事おこりしよりちふすひちにあらんきんふかくきんをもしめしくくいさなきいさなみこれあらはれてましくく天神七代のくらゐをつかせ給ひてよりあまてるおん神よりひこなきさたけうかやふきあはせすのみことまてのちは地神五代まておほくのせいさうをおくりたまひしかとも神武天わうとなつてまつりことをあきらかにせすれは

こゝまで一てんのあるじとなりたまひもさし
めして天下をおさめたまひしがこれのみ
ちくしやうけだものゝおそれはくはつ
さちゝみんふの二たりはまちくはふしうく
みんのやうなてうあひせしきずあまれ
もんきのまりをちゝをたちもらむ又あまりも
めんのさきもしくゝちゝきちやきもとまあ
いうそうの四よいのてんたまをとゞりおんめりう
おくへまたりの大そうみんくゝてはゝあす
とすひてゝせんとまやし、めんのかりそめ

三しやくのりんをたまはりちくまごころをせ
りしたまいきちやうはあひくしかしてゝ小を
あつきらうよ御座宣ん御いさやうしをけゝめ
をうれしよ、これつくふさやくをみるい
てうう銭まゐらしたうひ小めいしやうの
ふ銭あしりしまいごくのらうせんをまゐ
めをそふ四百よくらひのとし月をおくさ
おりんぬきまゐせいきれちうぬんよくまん
むのはいゝくちりふりといゝ御ともわう
しもゝくまゐしんまつゝもりやしさもう

のたまひさきをあはれみおはしましけりくや
きもくらんしとりもくらしむてんわう
より御代のまつりことをめてたのはりくと年
くりまゐらし二人おはします才一これたかの
しんわうと申とやことしもさかりにはつるはり
おほしめしてことくらゐをもさつけたまはぬ
をゆつりたてまつらしもやとおほしめされ
けり才二これひとのしんわうとこれをひとのきみまう
と申さいまたいと幼くおはしますに母
そそめとのつくりむすめくちしもしもの

はれともあやうけれは一もんのくきやうけいし
やうしんろくまてあはれみたてまつる
ましも文もかしこくそおほしめされけれは
かまさけんかていあれかんのさたをやせむ
きはもんさふいれきんさうありさまをそ
むかしてはうそをさいくるをのあしいはよう
しやうらくありきしんうくちゐるをは
はうへをよせてはくらゐをゆつりたて
まゐるへしとて天安二年三月二日に二人
のみこたちをひきくしてそまゐりて右近の

まくへこうやうへまゐるけいじんつく
花れたるをうき孫へまのりすそをはら
孫うきんれまくらかぜうぼさつりこうた
いかぜうし天下のかうきそでくしなこう
なちをこうくうのふちんこれしふありとな
庵しきれしもさきまくのはいのりさもあり字
ばこれあうのはいのりのまふなりきのも
とうさそうしやうまんせいとてそうしの
ちやうしやちうにはうたいしのはてしふり
きまひくつきんつまいのはいのりのしふな

我山のちうりよみ恋りやうくかいしやうと
こ恋りくたいしのはてしふくめてたいさく
人あそそまてうせ孫ひくはさいたうれひ
やくこうちう西てい大いとくのはじおそを
こふれくるをそよけいもすもんれさい
にはさめ庵進しふきられたられはうこうれ
はけく四もんうちたまれくりちうへ追ひくの
はうたへころをよせふそまいるへひとな
あせをみさうちうをくたきてさ孫んせう
まくはへしれとのはうへ恋うこんのまく

よも天のあくさんなやうとうたうれたりし上
ゐはにはうゑひもせうきあるさらくくしれ
もとはひくかなくしすでにゑうこゝの字數
はつけてまけぬきとやられしもゐやうか
くおもいまてゐはうのたいとくとさか
はますうけらそしまんゐ二しやくのとこさう
と見てこたむきみたくおなかふゆけるふ
とこさうおこりてるふしれこみふきてゑある
みとりておしむけなむこよあきハかしよ
とりておしなをしかんてとくたこても

ましかなれいう孫てとつこゝとかんて我つ
うらなほこさとほくさくたさてあつおこりけ
しにまぜろみうちくへくろけふゑをこそ
一もゑもゑなゑくれしもとこさうたけゐてこ
ゐおあけゐきうのたいとくゑ寶んときう
けてふゑなまれくれしもあめくらんあやう
あるあてくりとはかのくくふとさろうは
てこあそ六まんほくけくうちなまれりへ
とはほうひもゐはきけきこゐつれま
ゆもとひろさいそこうもとそもとらきけは

ありわたしすいさうおりきうれしさきんの
きんまうけくろいにけしきやとさうくうみ
うらせたまひくりまするかえんやくし
のたしかのせんきふもなやうかつさき
くたさしうきなていくういよつぎそんなる
りんをふゑ源くハわしきや迄八をとめれ
りふとそやりくることきみよつてさき太かの
御ちそうきんせいそうきやうハ思召ふ
およそうせたまいあるお子をこやおへ御う
へ申ぶくしくハないさしのかたきとのと

いふところみとちここをもらせ給ひくかゝる
ハ非常ヲ用すなつこうこゆきけのそらのあう
しまさんへあるゝはくをれたくまかくこや
こにゆさうし人もまれありりいまんや
おのゝ御もまれおもいやみきてあきれしや
こうふきいこ中将ありまうれありひらも
うしれ御ちこありあさうしさゑへ也それ
まかんくみうゆきに淡ふゑ申けあくく御あ
とをたつ自きりりてゑまひらす迄しまう
ここしつゑ申さりてこうくあくしみた

しやうりんゐんうとうしやくしやくだう
そうとふまりせんめもくさもうれぬきせ山
さといとくさひしこゝにみなかきたきのふ
もつそをあとふ見れくはんもあしはこは
ゆうしちうく出させ給ひてなんてんのはう
らし三らんはつまあけてよそのやどとは
あんしめつらしけふやもるハあどくふつ
かしくり秋冬あ冬ハおはるといつせう
めいだいしのおかしめしはし孫かりろお
うれゆきどもしまゐれしとうけてたるらん

とはくちぶしきこ見給ひくり中将これありさ
まきと見たくまいるふかうゆめのきうらせ
らきくはちうくまいりてもいりしはまのす
さもすうけたまはりにはけてもこさよいの
はたもとしおりをあへきらせこまゐすとり
うひれいんのはゆうしうたのつくゆきの
はたうかりまそおかしりしから近く中将
かくそやさうれしくは
ともきてハゆめうとぞおもひ思ひこをや
ゆきふ見ハけてきみをそうんとを

はしをとりあはさせたまハてかへり
ゆあうとをとふふつおもりんよれ中を
そむつさ里えんちそそくやしこ
いかくてちやうくらん四季よのゆしあつけら
たらせなまれものもおのれこやさとも中け
きよハ四ちんくおいきやうのこやこもせ中
くりんとく天王ゆらし二十ふてほうさ
よおりしのし第二のていし中さし九さい
よて、ゆかつておしけなまふせいハ天王れ
ゆおこへしあるのちよハこんものくふん

にのちのさとりとちこもらせたまひそれ
きこうのをとつていとそ申けるまうしあま
たおりし申す第一をやうせいいん第二を
ていこきんてうの第三をていけいきんてう
第四をていけうきん王ものつぎしは佛の
ものしやうをふて、おらしますうつらの新
まうさも中くりもてろをうけら佳女ハ月
のひかりおまちうふおたゆをたをみつ
ゆむ、天ゆ子天ゆちるあろいまのしけの
こ天せんそあり第ゑをていゑいきんまう

才六おていしゆんきんわうとそすべる六
そんまうこれありきれハうれしんまうれ
ちやくしうつのきんもいまんちうその子
つのかりゑ為六くまう志あんやまとのかりゑ
らいきん三あんたくのほうゑんとてやゑ
ほうしふそてきんたう才一のあくそうあり
四らうまちのかりゑよるものふそれ子いよ
入たらいさそのちやくし八まんたらうよ
し家その子なちまのう兄よしちう一あん
つまちれきんくらんよしうて三あん弐ア

れ太まよしくみ四あん六てうれもんまん
たあよしそのこゆまの歌よしともそのち
やくしうまくうのあくえんたよしひう志
あんちうくうれたゆう新ともあう三あん
うきんゑの太しやうよりともものうへこちき
えんしそふかありけるきの六そんまうよ
これうくまうしを出てもしめてみるまく
のきやうをたまうてきやうだいときうて
かうきんくすつうありゐひてのちらうての
まんちうよりきをつけのかりゑちーいとも小

いかなる七代は見ぬ讃國のちくふのみち
こうけいをしやうくんのこゝろしかもと
らいゐよあらすしてつひにおまもりし
よもくはさいねんはりはしもあのく言ん
どあらそゐゆへふたりいみてゝきふや
てらくんしも發見たせも色し ちやう發ん
おもかてこれをせい してゝおとにおき
申へいしやうくみをうたふくましらんし
手よめいよまうせてきれともしろん
こうをきいむ志らまもちきさつ色り 京

くたいさんしてらんしもあれうらまみち
こ寫りいのちあんをおきめ一てしのも
うきよ浮さめしよきもつてこりらくあん
ゐたりいろて梅くうせのちゐおたやりや
志うきはゐいわら發そむくせいらうるい
ろそおうぎんの秋のしもかおうわきてぞ
そをたてましいおとをやうらしの月
みすますこれひとゐよりあんのいふう光
たいりを忠ゐてまんてられゆくやきうる
みせいしおひそめてせいとのみたまとせ

いしゐはよくのあしそいおやめてきふく
せうははゝあまゐりもてあそびの國の
ちうんいとられニてすけちか うまいその
れすなすけありとふしくわたらつむつと
いふものありてあやうくんのちんぷれを
もうらすとやのうくきとうちうりけい
とせんちやうふもとちうふかこうたいふ
とくめろりゆらいとくりしくたつめきも
すふハち一つめともうらくとふさんまん
すけつねありたとへもいはのくふいこう

うもつうきこともの三ケあよをとふきあてく
すきれしやうとうりにるれおんしゑハく
すゑの入たうあやくさんみてそありける
きい國のつとめるくこうたゆうすけあるとき
いれろりあんしあまるにもちうりしうみあ
さうせくしてゆいせんもてみたるんとす
あするあひさまてむすめの子をとりいた
しちやくしみたそていとうをゆけりむし
やところよまひらせくこうむしやすけつ
くとうしをみちやもそんありあるんみた

てうちもつてゆつてわすらう二つとあのら
せうるあれたゞせうやくしんたゞのひのくちら
すけちら思ひくるハ我しらちやくくちさ
ちやくしすいさやうたる人のまつもむしめ
の子こそいゑにいりてゆうそくもるあう
やすうう孫ととのふうちにこよりこれしま
おとよきんをよ水をそむさしそんをたへ
ぬきもあくしあるもやたとひた人あうと
いふらを親やうしてねつはうへハいゐん
のさある色うしをまてきれハしやく公

ふいくまてむすめれもくにかまれてまう
けたはる子やまちてよハあよふりねつをた
はう一へあうそのきうてむやくれよりもそく
みをやあれそりきれしもすけちうとくま
らこくあていそれ家とそりをとふとい一へさもゆ
はりちやうもさくるあひたいとそうのきや
よるやうにありてわすらるまけくそくた
思くはそのうちくへまたしまあうらふ
いく安うしめるりかそ思ひそはさしとを
まうちうらよハくれりて等月おさくをた

ざうはすけちうもとるのなかにさうをひそう
ふかれくだしぞてまうすゆくゐもておし
まことにもさしうもちくいよりしこう
まりてやりなかりそよきまことしめされ
てはさとくいぞうとハちやくくみくすけ
ちくあひつまんなきおもとハすのまへむ
をめれ子こはやてちしれはりところせん
そのちやたひのまことやうとまことやう
つうまゐるりよそゑてのてはかあまで
よくちおしくはあひたがきうろをもまく

ううをすいたしはまうはへくいいとうむ
しやうふたつあさいのちおたちところよ
じしおいはやぞよてり俺くありてでせた
まゐるとやかれもなかだうされたまはれてし
もらく物をつたいすやてありてものつると
よくくさてたまゐ一ふく一まことやうまてこ
そてまっしまさ弥こやうだいあるさしうハおん
せんやくもうまでもささしめしひろうれ
すそよはけちをふさはくよハなこそのは
うしミハさなりノゑてしゆへささなちまち

にうしんをおこしおやれおきてをそむ
こたましんしちくしうるへうらすましめい
いしやうしさのかうへみやとりたまふす
あまもけくしめくえのうきをあるへうらす
ことやうれせうあんもおそろしそのうえく
そうはようせうをちてまくれちんよく
をもふきしやうれもんしんよ入らくしよ
せつれけうおうをうくしぢんとんしきん
のをんをのそえ一ねんまいようしよくの
かんあんをおもひ一たひさかとにもうせん

のしんくをしのみこころをすへよそあなん
もけとまろめおとけのゆいくりんよまう
でおういをたもちしよてこれくこものく
いのちをころをさてかとけきてふいまし
めなまさんもしるやうれあの中よは
三しかれしやうとて三たひのおとけの
ましますしやうけにんのいのちをうしりん
す三せのしよかれをしあれてしまつる
よおもしとろくをつておもいよらさけこ
とあるとしもしふしよのおまてしひけてうま

つゐまいらする本中出して飽つゝう
ぜうしんなりけれどもそのゝちぜうそく
をもうけいまさ孫くやけれどもなおなりちい
つまがすいつかぜんとそひそつふしも孫
ふのうりありたりよんさんしてちくい
よきてさしやきけるおとのそのおうてい
いはねどもかりしもしらんのけがやく
あさうしてたのつゝたれましうそまおかりぬ
すけちうゝふとおて一せやうの大り
きてそんくもそもへれけよしくへゝゝすゆ

さいそくに中入してゝまかせてみそのをとそ
きすくふかりしもんおともつのうたへかお
きさこゝおふしうき孫犬ばちんきいてきた
をひへしきれはよやふちんよおよれはと
くきくやけれどもしめいありたし大よき
ふくありかぼうまきりてよこんしふのおさけ
もきをうくくしておろくをやうまやうあ
をくねをわまつさとへそくたをりける飽つ
たゞそこあはりおうらたんおれたのむ
とやけれしきこんどうそしやうきとんをくい

こゝろをてらし御覧ぜらるゝこそおそろし
けれしもしめ三日めにちんそんにはらいかう
れあみだの三ぞん六道のうけのつぢにて
さかいにんおうハ泳ぎりうまよやんしやう
まうれたのいとうむしやうふたたび命
を免ぜられてハくるしむおくぜいしきん
たいをうたがひあんやうのまやうせつよ
りんぜうし給へ極楽しもちゝくよおとう
なまつ給ふただ念仏くいのちをはりつち
七日乃ちんそんにハうとはまごんしと

うしとうしぬ大明王のいくんあせうあ
ほとけをもとふかけてむりきれのけさとた
り生ずくみだんといけりもんうんとく
たうあせともつこハすおもてもとふらす
よみんむくこそいのちきれもしまき
つまよいにまできるおうこちれはちう
魔いまよもしめさほすあまて七日にまん
すがたらのおもてよい南むしやうさぼん
あるくひとをやうまうのそんのさきすつ
らぬこうんしやうにかけるとみてきては

いろ／＼あそハ道りとゝしなけたくうそしを
おやたまのかおそろしかりしまいらせやい
いそうむぎやこれとハゆめにも志らでとられ
もしめあくのかりしてあそまんとてい
てゝとぞろへせこをゝよおしまゝうたくしうち
あれくしてそれおくのくそいやよろしき
きろしもかつれを忍つゝこ見孫よりさき
ばあれまゝやも討くふあれくハさそとて
しやおもハさかかぜみおうさ（れ）してこく
ちまうふらすしりらいころさすかりしと

をこすしてちうこのくよやう忍やろり
のすゝさるるかとふいよくおもくそてあり
ふかるるそのとき九つふあかりかるもかし
をとれよせてまつりしてをとりやかばさ
いうにおの道ナきいまだにもあかしさばを
見すそくちあんりしきかるしれしや
うしうこかりありれゝばなかしすあんちを
た道あまれし見たま道もこく見てそだてしと
さらくとあけやすかいしハおさふくれ
もうあくよやきうのりハあし女まし

ちうくいゞをふみたおどきをもつていれくる
かうなきぬしこゝよれなぬしあきらとをせめ
てかなりしすゆよあくんをまちなくりし
されとともあまたゐるふよもありちまた
うけこゑ中れ身心てをちしいかうハせん
とあけさゝなくうちてりあきちてふかに
とくれめくつの次はすけちいかうとふられ
さうりゝはうこれありさまをみてちゝく
いかやゐるハいまをかさりとおうみて
させなふてはへこんしやうのをしさんをく

はとくめはて一をちよこゝをやうおたれをと
ふうれふくかふり夜よおりてをすけち
ぅまくてゆ人ハこりそん志さてまりはゐ
しゆあくそアやくのこはゐるゐゝらすをて
ろやをく思れなすべきれしこふや志このを
ともふきこんてくいの子ハおふおしをのまう
子れをてしとでてたていうてうおろゝな
はへことやられしすけつ来これをされし
ちよういきてあるをもしらてまさによろ
こひのこはおこされ人のつくこふかゝみてを

あいぜすけちうにておもしろくやくありかくくる
しけるるいさおほさいうかほうくいまれ
おちぜしきちやきんふうしくおほく
ゆへざめこゝろちよとなくけせつよついて
むようしさかりみてましまさんとそん
をはときつよふやしよのたまふあうなく
をえんいまさらもりふりしをもひくゑ
にまとのよあつけうそてまつるおいありとも
きつ子とおもいもそめあまくしらたまう
あうみをまんこうほぜんよのあるをてくすめ

よるしおとこにちしなしきやしれなん
りんこまりなのえんさんよい迄ともう
むすめともふりしよこれところをゆまた
けなくちきやうせさせまさいとうれち
りんをんきよとりいたしかありしよでせ
あんちよきききよとらすへれしさもしまた
ようちありいつきもきやあきておろのあ
はへありをまくよあつくるそすめよある
ことらす宛しよくくでおけいすしてのち
いまつとのとおちありとももどくれお

やとたのむ抱しかもとさてよくきれしてそてま
はるかにすけはさをくさつこうけふてなちそ
ひまもはへまいりてきんまいよまいるかうこく恋
またしいまおこころやすしとてしらう
めうくて日ゝものにをもゆけもいよくよ
りりもてゝ七月十三日にとらのこくに四
十三ふてうせかくりあるまし　いたあし
なりおとこのうもつの次第はいりまゝなは妻
けくよしふりしうくを出たかいはさ恋つの
まゆをひらきもるみれなりてれてこゝを

そおりこひなは一とんまてありくいせてもあ
もといあをもにはひあはまそんかむくうな
らんふてすあいゝかとそおにてなけやか
てうるつゝまゝいへとそいとうれなち
に入りりなんくそんはるもの孫あもくれ
もあかのゆたあちてあるよしふてこけふを
子ふをおくらをけりやうをいたを七日く
れやう百ケ日以下まて三年よいた
はまてまよせんれちりせつをはくす人あ
返ちとされ非人まつるとらいゝ非のますなて

くわせよつゝうはとさいしやりよつかり
はちくくま道とをうんこのきくもあるお
やとかんしくるそおつのあるさてすかい
しにはきらつやすこめのとをつけそやう
しくるゆいこんたつ恋をすゝめてえんふ
くさせ本すてんれくこうすけつゆとうす
やうてもとめましこう小あもせその秋あ
れくてちやしらくしもかはちこまゆ為
つえんさんよりまゝすけれ孫をこきやと
みとくめをきすうてんはくよへそくたてけ

はそのくちかいくしこけつらいれ一人を
つけをもとゝのしこ孫もゝしきよたいみお
こさてはすけちう一人しそてやうしを
けつ孫よはやしこの一きみおもいかん
せけりえりまちてやもんせんれちてある
とくをはえうしをけれはうそのきんを
あらすきれしともをえよもらいはうあて
うきとすてておそむくちくその友をしら
きれしともとこさよおうてするちとあてあれあ
やしさをいさといのきくはとあろとあり

まさきまいのつもはいてられはなんあるを
こゑてふりきれしとゝえすけつゆはいたまおし
ゆはとをあはよくしよとしふきもゐさや
うちよふおはくあをうたせはこよちまけ
はうとよせんあくをゐんゐ〓してやひを
まよりはちよしよこゑやをりくらし喜せさ
ふつうふすきこうのうちをきこゑよりけ
もんちやうのむしろよすひさんしてその
しゆうよつらありしうもいさうのやさを
とことそめさまゐるすゑさいよむむきや

ところよりんゐつてまいきうてまくして
おくこありうえんしやうありくはをいある
きふら代ともありくきうろふくちとて二十
一さいふちてむしやの一ゐおへくくとう
つゐとそめさまゐるうくて二十あますてさ
しおこたらさやはきくにおもむきかい
あうれまく一こつ〓てゝくゝまちてりあ
はけおこさしゆはりしやうをとりそへてを
けつ孫うりくへそのちせうりくはすけは
孫こまをは〓んまてこはいうよいつれい

旅といふところをこゝおうちへ入たしやく
えんよもちていさうむしやすけ頃さまそ
三たいけしてんのちよふやうあるをとおよ
によつてをちおもつれ三了けりそくちて
これ八の孫んつあれたちきやしりけい
さやくるちや母宮このさうもうへさせん
とふいしきをすりれしどうも所こ志ゆくさい
ちうぶりりれしいさうあくいしきをたまりる
らけりりきらしとてたいまんをくたし
てさいそくをいたもいこうこれをさつて

けちうしもおのにまたくたのちこうちりし
とくそるちやもうとまいりよれいまう
を承しもくた儀をのハいおうれ志さいを
ハちらていそきまけのおり一らうよこれ
よしをうつたふそのこおもハすけつ孫く
たらんとていてたちりるハあんしやたれ
一れものふてちろそう人て思れのるハ人
のたゝちるもるといふやとこれおうしまて
よくこゝろておとらしまけしくせんりくよ
まさゆらうせれひさいたしつやうもうと

くたいれたとおりぬへしそのよたりをは
もちふらおやこはむつひいしあとこ
ゑんりせんちしすけてあとのものう
まこれさたまくへこにあるもいふう
まきうのまてをめしのかせ下こまやうさい
をしきあふうめともおもひあみることつれ
たうまけしつめくいんもんとやくたしこ
まのとのく門きやしをそへそんひしを
をつていこうを京とふかしのかせさうの
ちきやうあるとゑにこそいあらふてよこか

たとをもやふまちやうちやくとくをいひふれ
いんぜんをもしうきおてうくめきうしけ
まは一もんもせあつまりあんしやくちさ
きよまあれともおれたんもるといへ性た
うまいひとつをおのまくりすけつ寿そん
きやうのとゑよるきうきてふつくしてい
うふをこゑとさうをすけちかうしいまや
うるせんとたまんきろふうけすてふけよ
まんちこやうれところあり一このたいす
ときんきんをとくのくひをかにふきやう

しよへこのおほせをうけたまはりてやうさんせんれ
ちくもにせいよしさまはしやうをけいかさ
まきやろんをくのはしをまとりはとは
かせこもふこやしのめけるはかくりや
かんまちよをやるるみこついたつてさよふくれ
まそこよりおもをますくいてつてもんふき
いちよともちしとてかりきれしふや
ふこやまちてみたつらおもくしてすけは
孫かやしやうたくさはりいきむ孫ん京
連月ハあこらうあくしときさとをふくん

こまとおちひつハすまんともさきとて
いしやうしをけるすこつくくんありといへ
こともてしこれをけかをちらハてよふつて
ほんそんもこれそこみをちてむもしくと
一月をおくはあれたすけつゑうつかんふ
まうしてうさ孫てかしやうをふこやうま
よにさくくそのまやうみいまくいつれ國
のまうしんいこうくとう一ゐたいられすけ
つ孫のさ孫てこしよ
もやくはさいきよとらしふらんとおつを

はーさいれすミさくらんのてうゝうち
くを見れかしたくしやくきえんたういのく
ちきんふいこうむきやすけつ貴志やてゝい
をけちうきやゝたひの中ふをもるかよつ
てたいけつとくにをよふといへともをけ
ほさたゝかくてうあれあるよよりてあん
よのほくさしふ見をたまハほてゝすてよす
ケ条を抱おりんぬこゝかすけほさ一ちか
きをのやまひのゆっみのそむさき見かる
ほれ二つほうつつい志着をとまうすれなちま

ちよとふらひこさばそのしこさをけつなハ
志やう殊んごさいやこさおもちもくつの二
ろはよち言しめん志てよまくともかあつけを
こさて八つ殊んのもる秋おをくほおやこく
よあつすハ志へそのしんとや抱さや志よ
せんよのけいよまうぜいこうの二ろよた
まいハ抱へこさうまたすけつ殊よくまハ抱へ
こさうほうてんのたじをよついてうんをう
のしやうきいをあみかんとやつすよりて
せいくまうせいけうんせうくうんのこ

とく
仁安二年三月日たいらのすけつねと
つかへてきやうくしよよみしやうをひろん
ありてきやうあたりかたへまよつていかは
よとんひとよをあれふれたんをまもらに
すけつねのうちにもやう一らしてひのきらくな
しこれもきいこらせすハろんもうふそね
まれあんよいこうたうをのおせてもん
しふきやうをたのむといふこうきこともを
けつねいさしおくうじんあるあひくふき

やうしよれはうるとしてよのあんとの
きやうニかへておくり亮れをやうしとそへ
るやうへくさかいこうはもんふへんやとら
もたまはとおろふかやうの御おんとよ
ろきひてもんこくあそくたをりるしよい
らくしをつくさをもらてもいきろやとつくさ
をといへうも一ろいきくきをしあひけ
めかをろんあよふきりりはやてりおさし
しをいてしこうし八年の九ねんうとおい
ゆはみのさねて御おんあうりふらきら

のせんそちやうもやうをもんかんめさはて
るすそをおよす そのおもとふこまおと
こゝようらんおのみこちゆはめはと
きハけのとうおしんをおもつとこふ
てたをちてすけほさの世ハうやうに
よそをけしいまなんそりんかんのめした
はのこやこれひて志よもやてなうしい
とうかいたすとうありまうこへきこや
とふをむらをせんこハみなゆゑやとりれ
いこんありいうそかこれりうしへさる

へこと乙ひそうまうやこをいてくはるう
のくにあうりしとしふところよくうりは
はうひふふきらしおきのかんもうりりゑの
んてけしやくよつ弟てたうしかりつれハ
二百四人よをあれてすけちうやうてアや
うちよを一人してまんたいもんと思ふ
つきよりはこさんアよをはつアかくし
たとへもさしあるうてアハ言んせんた
アとりくともれしれおんてるすれなち
まちよあくきやうをたくむ事いこうむ

りしおも思ひてんしをっいみりし　へをたつ
ぬ色三才一よおちあり才二よやうふや才
三よまうとふり才四よあろうしをやあり才
めよつそくちうれらしやあり　こくを
つてゝおろうるゝをやくよ思ひうつそを
そろうこさいっみを志思よある人よはやあ
ありはへ地色やうとうもまんまふうし
きるりすけちっこれをおてりこてゝてちや
くうもり三ゑすけしけ志あんい前九ゑ
すけこよそのおっへさんらうせうよれあ

つめよりまでんにさひしく志うれもちうてゝよ
おおいすこいやふさよしてもんをもし安
くなんせんにしてこゝをもしうこしとい
まあう思ひ志ら遊へりそのくちいこうれ
二ゑ式よりありれまくよこゝやうと　へうつ
たへやておっくすけつ孫とうんあよ　へ入
ふてをしてはんく志ようてふおきてへいけ
しちゝものこゝらをわうやうもるあれた
すけつ圖これおこゝとこうもくてへよ京と
よおつりのうりれそうよちうをいとうに

すけつ孫ハおやまさんもんいとまをまをす
けつねのさいちよとりうへしきかくの國
のちうんといの二郎さ孫ひこうちやく
や大磯ごうへらみあるをくりくふよハ又
あしふそのあるくそでこうりさんじうもさう
あやうあはふきのとえハまさまひのふう
なちときてんよてこたかさんしもゆくすゑ
いうかしそあくへしくごう一郎ハふまし
いつるうそりんいうておちよあうをた
うりまふさいつもかまをあつよたえハじハよ

まえをおこうねてこさをやこうけあらく
こさしもそらくふあるりにけてきうれしハよや
にさしよくもあしくもうもいをそもめよ
けりうれしハせきうつたゑをうと思ひこか
まてハそうまほんこくふくうりあうこの
しやうにちうしてそうしあうれらうとうみ
おじえのこさふ蘇太やハたのえしとまふ孫さ
よせてもくくさしやこうのハおのくつふ
さふさけさうてしのあつよてやうをわうて
やうせらはくたかを安うしけるふうれく

めさうまでとりつへきれてさいのや太郎
まあハせらぬやうてうくちおしことをあま
そありいまハいのちをすてゝやひとつい
ぞやとおもふつぶりあつまでハせんさく
うかうまゝしまきみひんにあうかうさく人
みえしらぬそばんいをとけくこしさまを
とそとくまへへにふもあるまいかっせん
おのくけりふくしてありをぶとりれと
ざうふてをひんなうがうかいやひとついん
みやをしさゆくいをとらんおきこいらう

おんさやしくせてふきうりしてあまあてあ
でいかっせんとそくとれそり二人つらう
ごうされ一こゞうみすゝるハきらしまそしもお
かせうかへうくもゆるやをとりよをまた
ゆとちせせともむんし一まあうハいちこ一
とくこうらけたまゝきされハかるにさと
もふをなうハるしうたくしてきうをやふ
まやをこさとれもあひのたくさてきうもう
しふれ安し二れおかせしきそんおうくみてう
ゆへせひいのちふとさてござんまれら

すなほにてものゝくはしきをたちまちわすれはたの
もしくそ思ひわるいこゝろいはうがむき
さぎおらさおもうがふしぎれうくてひまを
うかうかとくらしてそのきびはやぶへのすけ
なにごとのたちにましくるはふきかみれ
くよいちゝんおびものゝ息いたづけめふと
りわもれあり一ともよめあひけるのもはし
るはう中るほうゝまきらいまのしいはんし
のらうさやしうとゝまうい息いけのは
おんをもめてきゝしをもこくむとりくはせ

いふしへのこゝろをもるへこゝよあゝすいさ
やすけとのつゝかれしうは人ちゝもこせん
よりしますらん一やとのいゝてあくさあ
うきまれあこゝよちれおうこゝよやさんも
つとをおするほしとて一もんめすよ人い
てたちうりん息れはゝ一あてそもちよけ
はこれをさしてみうしゝれゝまくゝとい の二
ゐおうさゝれはんまふやうをやまれたつ
ちやそうのへを思ひくよ出ゝゝらうりさる
おとよきんこくのさふらひこゝつたへも

まていふそうのつかはへこはいさやまいらん
とこけりのへのくみてはをうけりしやてい
三郎また大のれぬ郎さむしれ十六山にうた
さくちの太郎あるしる三郎忽れかぶれ久く
八おされぬ郎すけはかの國よいたけれあつて
れまこ八あれさまのやぬ郎きつうまふ奈
こしりあうの人ていつのくふよいうりて
うの四郎あるし　くく三郎あまのてこうない
いかのれくとうあをしめとしてむ孫との
人ぐみ百人いれのいこうへそうけりけは

いこう大いふよろこひてあれけのつきふら
いつ発んにとりいたへる銭せしうてあん
とそつおよかてやおうちいうしそうまく
ひさ上下二千四百人のこやくあてんと一
日一やそもてあしくはとらいの二ふこまを
見てさつしやうは百人二百人まてハ要し
あてふ二三千人のこやくあてんと一人よ物
得くはりふあつありとりかいこうくし
ときれつもいとすせうしをちこやせし
これふをいつきれたきよりおとこてふ

はまゐりましてやくすミのきやうをとふさ
ぶてもちゐあれとゝぶてうけたまはを
のるゝふとやえんくふひさてゝもの中さ
てゞけるへこきられりゝのまするふかうハくは
しうはなきとくしさんかいつちんすゑみて
三日三やそをてらし　くはよ志ひなれゝん
八つすゝはハかうはよやあひみまいはへ
しとそんしてゆきゝ國よをせこのよういい
どてかおとみこ出ゆはおくのよりものう
しらゐもまあひつけりすゝのとをありさ

せきはうむぶんありといはれけれハいさう
これをきゝすけちうをんと思ひて出そあ
三日こゝろみんてうちよりてあそひたまふ
らめさうあくはしこゝみてせこのぶうれや
うこゝろせもれしそ遠くゝまつの三郎
せこもごのおしてきていきせやせといひけ
はそいさうのしのさまめあるうまつハ
もとよりおんひんのものみてきゝろのう
ちかハせつしやうをきんにうる人ありけれ
こいうのふをしてはなれのありをかとくめ

ふくしうましとおもへともおもふこころ
あはれのあふみてもやみけりあさハおう
らおよしてさしこらをたちまれとせこそこそ
もよかりけるおきなれをのまむまふの里
ていてくるをとふいゆゑやどをたてとふさけ
きもくすゑれきやうひうをしてらうふや
くふ三千字め百人そいてたゝけはかさら
どうれどうして三つこくめくへまでどく
じらいてうりいごうまつゝさいちよの
をめようえうひきれまでなかこの中もし

よろいてくじらむかふる人々をみおくり里
くるふのふもおもつ三郎ハよの人々をま
つまずきるやうもつうしをくれうりし
ちのたいもんとりれたまゝをあしらうし
子ありうをゆうふゑゆはをのりふなつも
しとのたまゑハうれしいかもけつ孫じむこ
きどこされゆくやとりれをれいてれまこ
あんふゑおくはませんあしうちふいら
ぜたまへといひゝれしげまもくてあのく
うらふそ入よりは豕あ月十日あまやよい

つのおくのへいりよそりちてよすけつね
の二人のちゝうへあらためやわらハこれを
こらへつやぶれところきそよこさなんこさまき
いさやまれらたよをを孫らまんとおのく
うさのひうてきよきてやさけたはたけゑ
ひらどりてれけ志らこさのゆゑのいよけゐ
はさうちらうくけぜこふうこまこさ孫らし
ときうくま一日をしはりたしけ々まく
ら二日ハおこさのくかき志いうさハ三日ゐゐ
つくるうまゐゑくちらさかさハあうさハう

ゑ孫をりしめらして七日うあひくにつこめ
くまてそ彌らひゑる志うきとをい莅くふ
一もんの大こやし丑てりくのこらさうしう
おをかりるれもたやもくしれゐさやすそ
ふうまるこれをのとものなをつくしけ
はありさまむそ乙れのしをおもわよたく
ふかりめひまりとしふこくわりありくよ
をあうそいてあつひれくまれまりといく
はしろふ事たひくあり志うるみうりめ
いまうてういまけてーうれよおよりん

ことゝなりにしよこさましていしいとまで二人れ
しんうあをかまらをちうつけてあんちう
いけらめく我とさもかしついせんにそお
もつあんこれまちてかしゆんろのかけく
こゝろもしさをあうしまき一人れたり
みともんうとりれてナ一さいかあるをふ
はさとみとくめおこぬままちういれのち
さうひやうのてよいかうをて令をむるしく
せんまうくらおしそれしあんちらいかよ
もしてつれいてくのの子をいさくえそ

たてくろこさをおろりしむ我んのさんせ
よとのなまれくなち二人のしんういこさか
およりなしてもろれりちをしのれいてか
けをおくまうさらろやをくしてまついした
まいくりさて二人れえんうとやこかうへ
をたいしといさあれいさしてやうしける
そむさんもるうしこうの大事をうちしをこゝ
つたへすもの世をもうかたゝはありうの
あそおもしく二人のさんのうらもみくれを
とりてきたらんをのみなくんこうあきる

まうみよるへしらくふくみせんしさ下さ
きくりこれせんしみしたかつてゝのくゝ
みちろかおこけいかみもとあやしゝおも
まぬものをもしようきともはれしよのす
まいわふまてあるいまとをきけくよよし
りりふうこ山みこをみてわをとうくすとい
へきもあろちくしてこ二人よりあひいか
うきんとそあけこゝるてゝいしいやうるハ
まれらかきんとやうしうてまゐるよつて
こさこまくしてもくちゝふかくきつてしき

されをまきら二人うじちよ一人こうらこされ
わうよねてつう五んさかおとそてつかりこ
もころをゆかもすあしまきくまくと
りれてす一さいみもる子を一人もちたて
さくまひうれをまうこさとそう孫んやこゝ
きをたしとかりしてこ二人の中一人を山よ
こもて一人をうつてみこさうりしく二人
をうちくひをとりうくこさのまくみさうけ
かこいうてかちゝかゆかけてかたこその
とれうたこ可をやすくとうちとかへしとい

ひとしれハしよこさしやりくるハいのちおしく
あてのうらふきおくをなをもあきおくへのせい
ハとなくしてくこしりまたいししとある
をしせんハちくしてやしきうけハしらく
ごうハこゝしへみせいをくなはをのありや
をさよつ貴ま進まり志めへしてくいあいハ
てうきうみいてしおらをいそこは給へとそ
すけはそのくちてくいあいまうこれこさくま
くをちりれけていゝふやおんちくるしく
こけられしらハ喜多くんの大しそうくした

てまつるすてよまれくあんちらまてをの
たまよくハ進ていぬしよをせんるり
たうひるし志か進ハなんちを太しといつ
りうくまうりてくひそとはへしうしむは
りなくしてはいのちよかまをそへまつ
まてこゝろおもあんもんあらしめくおやふ
進とそこれもりへきよもあしすらいせ
かてむましあふへしと中なはきくまく
こゝろをあくすなをたとなりして志りしハ
なりせさをそりちくこれいろをそてゝ

まんなりおんちやうやすさいにあまゐはそう
しゆゑやとけとのつこまくのうちより
もとのくちやうハしけそうしといさめられ
まさくまくものちくもみむちていひける
まちくちこうむさんなる事たいやへこさま
あつちもちやうくにやまれうしいの也一つに
てこゑとちくとのうくにけうけやさん
りとしうきるものまやなけきのなる
のよろこひ也といひもあへをなうくよむ
せいくるちくきんをこてみなかくゆう

よつのやまおりくさうなかいまうたおきなきは
ものそうしまちてふまうこなりせつして
れのちおしとりわをあまりありよいこきこ
うろのゑゑなハをしゑきんみをやと思ひ
それをふうけくなをたをおしとくめゆこ
やれいゑよむまゐてこゝのためよいのち
をすけるすゑあんちう一人よをうらむきさ
いこゑまんまそハこされけたあちてうた
めうくゑくけしとて一めいをそんふを
伺こハ也とりれそれしまさくまくなるたおもと

さへ子かもとみハふかく思ひ候てめてゝ候
へハいつておろかなる心さきさまなふつらさ
しめゐちくもくれ候まうれしいかてうを
しうゝてそろへこもくろやすくおうしめ
せさいこふおさてハおもひさためく候と
すくれしもちくをきらふやすくそおもひくる
きさよ二人よきあれあれたんなるやうにま
ついまきえのほためよふたはへこいのち
ハやすくのあさとくまてくこさをうち
太し世かうてすさんりおもさつりへの

大事なりいふハいかせんなうへこゝうをか
す事もんもんしてこしまれまゐしなん
とてたよこそハ十一さいのとしくとら
まて山よことをまうつてをまちかくるさくろ
れしちむさんとりわをあまをありそのれ
ちてハ悲いてこきのかつりれたりよゆる
めしれつりまむとすてさうしつゝこれを
のえをすてをもてとよらしりまよ候ふ
心さてんつふあうすさまなかり世つり
とれうつまさをやと思ひてまうよゆ

はしおくとハりくせもな給ういさんよお
そまそゆはすころなりいひあハせ
るる事あきハまいまくんまゆふつか
へて二ちろろしうだうひすりあきと
をせうい給せしめらきちよすくうへてたを
うるなり給しもちいうまハすハ苦く
むのめいしさんりのさまさもろともよ
うくきはゆなきとろをくるしくさき
つてをだましけてむひかきらおぢちく
ひをとりてこせまつせんといふその

きちくまうくハおくのちろろをなしをせん
みんのつまをのをけしそへうきらハく達
いさはら山へをしよせせ宮もうをうこ
のうなおそあけくりけるさまさきハ兜
まうけあるきしくらもきハさうまうりもてりて
おもひせをていさいひてひてすうちるな
こうしなかりめいまうのたりしとをうやま
しますていないけてよさしりてりゆうし
ひやうのうふかうかりたまりんしよをいそき
しうれしおくのうきたかつるきよあるす

ともくれしもあやこさうからりてまうこさくれ
おしますちてうくしすへこよあつもまち
たまくはしうひあるへしけりちつつくふ
の大将くんれていゑいいこめふまていま
けこさうてんれまんのそかし一ぶんの
ゑこふあつすらをつい(ふ)まてんもんぶり
さうりとをつつさるふりせあんもてとひ
いやとそすゝるていゑいきんしをこさくらさ
よふあたかりあつひものしまさもこそあ
まつめいまみうまはおまかぶりさし

もふやさんをはんをつはもてめいをへ
はまりたまふそりしいたつちてよかり
いまていのちしあいたまんよまふ
とおめはゆこれけるおもつしやさんし
たまへいふしへのおさけをもつてたすく
へしとそいひけはす一さいのこくもくり
つてはちくよとあまふうりおさてきため
しことおもはちくちりたいのくんおよこ
たへてたつこともろよもまあなりいう
よくつこるおくゝりめいつすれたいしと

りてしんかのてよいかうる程さりよもあ
らさえさんかきころうりをじらむへさ
ふもあるすうてせんこうれたなけまさを
ふのうらそのいゑはさしこらくいそうそう
ていゑいせ給へはきつのよし見にいま一
とそんさんせんとりれくまもてくいゑれま
かちつふゆまれおみてちくろやすくをを
へともしのひのあきたそすをみくはつま
どのあやーくやみる第んとをつはあるく
おとしとくめん手おまきをこてなまへこく

まつのあくしとて御ふよれいいくるちて
をかふくこうとりれくはのさすうおん
ふいのまうまれくこう孫たるあきたのそ
て志やをもあくをよそのあまれしおもよな
しれくあれしたうふつ八をのけしたうり
あるたうみおまさとらをにかれ世め八あう
兄けを我のへちたいしかうちやうふい八
くまきハちきかうめい王の子しやう孫ん
す一さいちく一志よ村のへたまへとい
ひをもてず言しをぬこつ一めかまてそふ

しめまゐらせておきしくだものもてはけちか
けにをはしついくあかりかすかなれしをおは
つきみのさま何あんとそもう千とんしよう
さやふりたいしのしうひはまろめて
てふしゝはありき肉みふふちてもおよ
りまさすむさんありしためしありさて二人
かくひおどりてくまふけるくゑひらむ
あまてきゑつのまゆをひくこたまふいま
いうたゝふともろちくていゑいかころお
ゆはし一つの大さんにいさいたまつはじ

のさいめとそおぶゑへしさてひまおりか
うひてさ王をゑりりいとやすしとこや
うよしかくんのとかくをとりたて二たひ
くみをひしくりあんのうちありされしも
よやもとのきくくていゑいをさうきてよ
たゝらはよつてきこさうこくさくれた
あふついせんそのうすをしらはかくて三
とせみにことくくきりまうをとりての
ちていゑいこさまいとまおこいていまく
りましとのこさうみけいやくしてゆつらとこさ

てんかすつはいくちそくをあつそひしおり
はくらいぎうまでおりいまはおとれおく
りしあけぎしやうきうくきれうけふそ
れぞうかをしつりしさういつうまんらん
じやてい王かさきよふけふてこぎとゆは
すちておしきれしをひまおはうらんさの
ひ出てしよさとつのまくよゆさきえの
はくらい[illegible]みまてふりいうふをぎしく
おもひたまふらんとぎえつくのちてしい
よしへつけいやくをすれをとりれていく

かこくより世にそりあいぎありしため
ふせ大ゑやまふつちつのためよいのちお
うろんしていぎうを物されしきらつきし
ちれみはをさしとそおほくとりさでをあ
三うこくの人をいもつくおくのにいりし
じくをせこお入てやりんおまりうはか
とふせ日のうちふいのさて六百かのさし
せんりしらくま三十七むはくひ三百その
おうきし山とりさほうさゐむしおこはひ
たのきさいえうめのたくひよいたはきよし

くらしそのうち二千七百両あまりをそこともめら
道らはいまはさのこやもんおもろうりして
ふみくりぜんとてあのくりしいかゝうけ
ふそうちあかりものりくれぎ門上やうい
いごう一人してはまぶつりをれしもわたせ
たばさけひとくれ〳〵さんにい道さはこ
そもんいふつきいさや山ちんとりてよは
ともよいま一さんすとめうそまい扇んし
つはへしとてむべとの人〻ゑ両よ人たう
けみをもいてすうりすといの二房つかけ

くふれはきかもりいかみてさしきのはさ
ためあるゆーまりこく〳〵のはいらんも
やはゆさえもの遊い本ちましもいつはし
こさた道お上下とはさむへこと志ゆのさ
つつ表はゑひふとのよ本ゆしめまかとの
ちらはたこちとのよ本もしめよちの人
いうけこくにそとやりれしおとくの三郎
これあよふてんをのいくまくくれこたの
まきよちてのはつはおめふかりけふういさ
していまたえてすんい遊らしうまれり

てりんつちやっすりくるハ三ひろ程あらうたさ
くちとのよこやぎたい中小犬もおっまさし
て庭ろへこさそのきうけさ三郎とのよを
もしめよとりふ大もこうくきくちとのハ
としこそまうくれしともさ商人そうしいま
こハ六けといふおすこしのあひくしまだぬっ
さう茶くさっちあしすちとておくの乃山
くちうへむひやまださくちをそーと
まつときろみたさくちハくまくうれこだ
のもこハおすくふよらちれそとみくまの大

まうと見れけてもくやぎへいきーとひら
のよをひくらすところよたさくち大ある
みつこよむまとのまうけまりさうきぬよ
こせたおもだおはくむまをもてり見をゆ
見れりくをさうのあふこよのまかうまく
きしうくれしみやちうをらーのひろりけば
と三人りり小十三そくれ大れうふらやつ
ういこふーうへ小ひさうけりやうとハぶ
つりやうとこをありしてこされとまお孫
ふたつ三つりうまといけまうりうハま

まそさけしちやうれしいやーやもしいまふう
しとあらくまてておもひたさくちよた
ありていかゞはせこれをのとをこれおみて
ほしうへもりとそまけうりたるたきくち
二のやをつゝい志やをねして月のまおも
を志らふいをうけていくまいくまてを出
しもじこゝすや二つふてとくまりたるそ
のくちせものをのとをよれよせくまとか
ゝせてんくのおもいくさばたゝけよじちの
がをいそさむまよをおもげさつふたつの

はとてふかりつゝまりもちさんやあり
ほ徒んはへとりれうさおもぬゝすうりお
をもとう寿むゝまこはふりしゆら志つ寿て
かりかりさかま乃ほ郎またのかいくにてら
ありかはゝきれしをみてかさくちなゝいつく
しやみましておもゆは勢かなあもしをと
とこうふとおめかれもけしこよいまつう
いうりまちてみさ志やよくのおふてかまこ
とうふちうりまさしてある給めらきんと
おもへ性志いのちてあ遣しうふま一てあ

こくげんをおくゝのたいくち二三ばとふかさし
十郎はいひけるあひだよるをまちゐるい
しのたすき二志やくこうにあるをよせて
もたせもやと思ひけれはすけくにあゆみ
くるをみておとゝのいへらしたいくんとど
ひさおどさへてしつたとかみてゆみや
のさしはをこうにさゝちはまうしくばり
を出てたまつかいまでそのいへよ人を
あくをしきさしはうくけるをはいへちよき
あらそるり一の二人はあゆみにありてつ

まりやすれかくさまこうといひこさのて
おきしうくてじしろさ内へとしくまさ丈
せこはかをきえしてたにへぞうとおぢゆくゑ
ひふれ宮ん八これをみてぞう八つこくれ
あつかおのこ子もちたらんいたきくち
とのおよひゝをのあやかりふせよさまや
うこいひゆみやとまゝまもしくまいぢや
うまやうあまりあしきゆむらはやとぢめら
まいよくこ志よくをまま志をいのまゐけし
きよまをすをみいてゆくるはたくしまつさ

かはこはもさかりすみて行へともあまたよ
まうしくおほせむ太郎るさうつこおを
つてつはてはまいしゆへかしとやくれハ
たさくちとのくおかせこそなをしろくれ
とていこうの二郎っひくりかういをどり
いうしのういハ日おん一二もんのもいい
とそゆんへまひらせうしとくけ申はう
いとはもちいふ紀ゆりあまたもふけかくく
さる太郎ハ日ひとさもちくみよくくさ房ハさ
けめつて入りる二郎ういとも三ころよくた

けるきてんすけたまかりてといの二郎よと
らはるてしやうとゆほさしなるうはハ
ものとそひさうしてもちくほをおもゆ
わうつの三ころといのむきふなりてさうり
しとひさて物よしりくりうちハおのさ
なりみそとちハなし物よまこさていそなりに
めおさしうりひさけ三つそ入くるきられしを
とりとさしたさくちうまくとをもしめて
ことはくそまりしくはぬ百よ人のまうた
はさけなきもきけのふそくいなりくり

のちふからんふしておくてきも孫てそあそ
ひくる志ひおれ宮ん八さつつきひおくへら
かけるハこれハめてたき世のおつをゆめ
うつはともわさめうくまのしくこてか
あらんはりも出かふしくれらすせすふち
やうといひおりりまうこハへの丸あるも
のをまうとのちゝのやうふまいうたりん
とおもへともひさするいこ志もふてすて
うせうつうつうよをいてくせんらうかまく
せんとせしやうみさけもきやとのりうあ

もきさうくありしとぬハきまちくれさ
うつ乗二三十ん丸しかとをけしきにふず
おとの事ハあう孫とをひのさハめや
らんちうひさのうてさ此おうかちしくまて
もつきよいかむりしおをひ出らまへりひ
てきたつまおくさありたいかうてうまいかてみ
うへてあ志みはちうまさもをすつかけこ
そかおもしろくまうこさんへすまうとてた
まへ丸てあそむんくえあつよいしやある
へこといれくれしハいわのくふれちうくえ

しまれかうたゞおやぢ言しいたけたつよ
ありていしやうつかつおのたこくちをのと
あひさつのやめ郎殿いそてくとりたまへこ
まこそあひさつのちうしときけさもあろ
むかうたういてくこやうしみたいんとい
ふくさくちこそてむしんう八つきくみに
よこもれかあるつぎおとのこおとこかあ
いてかけうけくかむまれてへうちからか
てきもまこよしきえたくむよもたらうき
しといひくれもやめ郎さくだいつするの

むさしさかしくみつよきめをあさこうたこく
ちっせいとちうらをしらやまかけらうの
ときろよきうこてやうよよてゝふをとしと
てきむらんいせいちいきくちうしいくま
くれともようい一てやうにきつる作の
あしゆえをとしきてやかこおひよこさしきます
うれのてゝせんちやうみけいそゝ思ふ
くこさみひつもこてやうこうあひくこみ
おちうさふりにもまさてこうしのこゝお
とめこしたかふしあうし大のかくきなひ

つうけくさすまをとうて見あけきうこあやよを
はまちくさしてもねうへしをさへてくれ
をとばとれは大乃おとこをものあうすと
あさまうはてそやかるたさくちたまらめ
をとおかてくはおごばうとく悩くっちう
らはおうふをわうまこういさやおいつは
はうふみちうくくへのりてすまう一患
とりめまくみけしさをからはたぬれしをぬ
さあよおとのちてつりへさしやありくさ
弥二三まはつうえやふりてをつぬきもの

をとそれのといふくりや又郎もきうくつへ
くりおくしちうらあふしのこら絶へもりく
るりのらことをかりさりくしいひさしさをた
つ一されへてきまをみてあいややちてまう
いてさぬとやるおりとよちくくよありくる
あれさハややあまりしやしたさくちな
をまみるこもらんへくハしやもうふまれ
とら世てくりあけたばこそおもしろくれし
おこふけろしたさくちとのとくまで終く
とはさすへくりさいかまきれしを見てや又郎

しのをまれいおさんへよあれさはりをとくの
やせとのみいてよといふすもしぜたいふ
ぞよれしをふふもしれさらそろたつふと
きかくいくさぜろりもしにをきてハナあぶ
ですうくにをものみたとふまいまたこゑて
のこぎりくれをのたまよをそればをりくや
あんなまをかあれてみきをへことはしこさ
とぞんまかしろねをたこくちうをとくの三
郎そてよとりわもくものしたよをいてよ
そりらしみをこてハ十八ありいつまもす

まあハぜやうすぶきでおのくけしよをて
つまとりしたばあでさまハしばきちこ孫
てさくむめのゆきをふくめばぜとくぶり
きまんちろうかしら孫ともくをふさ六つ
ばかかぜのすげときくらよをとたてくと
でもおとろくこすへうとまよ人めをぜ
さましろれしや七ハちうしおとりあまさを
てあれハおしてそでしふかろる三郎ハちう
らまさでろれしはくまんとのでふてさしつ
めしとへいすてくぬけちくきもうけ一てま

まもしハたてくまれぜちゑのみはとりの
むちゃくくきもとれつひぜうふをかうそふ
とゆあるせをもうよハすこしどもでてけ
ばらうみやくけしまゝこらへかねあいき
しいよのでらてやとよすしつくのつめ
こゑごすまいさんすましつまらぬさしとも
やせハおけらでへおしいもけられとくろう
しぞこそくひとつかまつりにやせそまけ
うりくるあまりやろくにつといそ三郎とも
だとけてあふのこけまようちよくるしさ

くちむねん小四郎で才の三郎つゝいまだお
さゝかされふかおとり出丈ちかしあり〳〵
もや六ハてまをもうまらをまけよそりあふ
のや六郎おおとく二人をまつしてやをうゝ
ずよおもれはりまのこしとくとおそしと
ひきかりたつふ二をちゑをあるせつよく
おさあもしをりてちゝくときさしあれてち
からひさてでき丈のおもこうふんもて
てすこしもしこうきれハつちやうまさを
まけぬへしまことやすまふハちりつみよ

らをてたよまされしも見ゝま遠さ里のあれ
てとらりものをとおとれいくれしくあひさ
ハ見きめむふーをふこりてとめたさくち
ひんのつもりききてのけとうちくれしこた
はくちらしたまえさうれこふしとすちすく
すそのれちまり志おく為しとてもちおち
てもりあひりるいよハすますいどうてい
へふたりさのこゝろんとそでゝうおやや
うちすさハむとするともろよやめゑハま
あくばつさ入たさく旅ゝこまたをういて

もぶしろよおしすゑくりいこおひしたは
くちあゑるくまけしかハ志りくすまふ
そおかりくるやめ郎をうりくんしけるた
さくちにうちて百千もんのまけも指るう
すきれしようつもうきしくれしおふみをのみ
里ごをと思ふとものまつ床くしのよせい
すゞてふきたらバまけてれもくきやうれし
もまふめ暮までうち一ちなもちたがありけりま
さいこ登りひまゐ里てそでてくるもうみさ
つ見乃国よりちうくやさしたつき六郎いて

ゝあはさゝハや太郎ならしめらしてよこさま
まふ六ゝもしうつはるうの國のちらく人たけ
のしゝのまきこゝ八出てこゝ六をもしめらして
よこさをまわり九もむりつていらんとすはと
ころよおりもうしやてゝハのまたのつゝゐ
りそゝゑまゐこゝ八をもしめらしくよこうすまゝ
十番りはくれもいてらんとしふもの
ふしするりのくふたりしれちゝ六いさ
やとらんとりわそもかあまりまはちの
ひてしさゝたちまちそまたのゝ太郎とのゝも

みてすうちくゝるそやうけひさこさてんてをま
ふうゝてあつあんかふをとりれくしゝ
けちやの[illegible]いくこれをこころまたのをて
一つまれをて一つおくしてもしまけるは
うかまてゝのすまゝをもすけ十人もかつてひ
はうこ少ゝしめちぬこさおこふたつちう孔ま
けまくれしハのそゝそうきもいきうへい
こさをつかせをすさもあしてを世めた
おせものこおもしろきとて十人もありふ
らはいてまくまもはつとまうけきかいり

こゝへせめ入れさせくさやうれしやうしの
たちうちあれしけゝけて二十一ゑかちけ
さそのとき此二郎さねひらさしこ給
なちつまくきあれ日いたしたけあふき
をひらいてまたのとまりしあをさくよさき
けすまふりふあしきさ孫ひらう第十字め
もとつくていふゞゞしもやといふまたれ
これてふみうかくばしうげへさいて浴く
一もんとらんすまふそらしかよろこはいを
といひくれいといハふましねよちても哉

うけてきのつくといりまでとはよのでぞうか
きうさもあしいとふハ三うらみしうく
うきけいといハむこありといハこえみち
のせあよくハきの一もんみもあれしとお
もへもいごうの二郎かせやくしうまつの
三郎すけ志けをもちていぞうより人おを
くおもれ入れしもむ二妻三のあそひあきと
もいてくときとりめ人あしおひもつきよ
ありくるのけし日をたちて志うしのとい
の二郎よけりやこりくるハこえ腹此けりの

をとよハいらふやくれこはゐかあくんかふ
とやすみしけ一夢をけふまもりはハ
すむあしくもくもり とくまうこ姫のおほす
けしたはみふてけもうろいゆ人一もんに
まゆりんらいれ名れもさ弥ひろこゝろてま
だれりもてこよりくしさみそと庵んとい
ふらんけりあらもこ とまか去てハ絶ん
かくあしとや思ひ名ん庵ん事小きおよ
こてせき絶んしてそいたゞかるちていと
うこきをこてあかうろもちろろハつよさ

姫をとらせ見しやとし思ひ名れしをもたあら
ふおりふし此きてしをとこゝろまんへうかや
たゞ出てとまとりれ名れもひらて去めこさ
おこゝ去ろうさたつあ二すちじをあきせしこ
くおさめていてんとすいごすうゝろうの
出てはもまみゝまいらんまたの庵とりふ
うけひさきいてちをたてすまうハおき
みゆそいてあもぜひんとりあいつ月れこ
とそう去くをまうのけしきふてさうあく
あひくろをやうしよふるもしうちとい

はさやうといはうまれにやまく思ささ
うはふおしをもゝつへこゝのさとまられ
ていつはを見せてうさればりけていろ
あさくろくたけハ六志やくみかんとしハ
三十一よそあり二なるまたつのもうたる
さしこよしてゝをおほあせて人はふと
くうしらもこしすそふく見よりしろれを
もおほうその志た二へさしこ見もこしあり
みしてたけハめしやく八かんらしハ二十
二ふもけしより作まとりはしくと志らを

しもあさかまつ思はるるをまたの女ここ
作るよふをさしあるおもうみてハあつも
なりなふんゝのおかゝまけなはいさけよ
思はなるうおくしなるゆくありこんとハ
てみをうろまーここの於く思はなるうな
とうへてとつふやしさすつまた乃ハをまふ
のおふもしつとめよゝやこへのおもゝ三葉
れあはた家よてもますよあれし一とかうし
さくしめさのありその中へぬんしちのは
かまつかり四をん一もんれる銭女たるす

まうおりゝまちてそしふて給てあくまう
さんすいかりてりてしふつひあしとおゝく
こ二とめふかはりよりさうのつひふ給に
うむてゆんくめてよをもしますはくへの
しへよりけひさとにつせてしりよそりま
たつなうをいらすしくちくあるきの御
まへりまつさてふかくれまけをそした也
ゑはいさやしまへもんとらんとりふおゝ
もことをさくもしまりよせけよくこれみこ
の御あてまんちうきてせうふしたまへと

そのかれもいとふやうはいあらつかひさ
すこしあまりてゐてはみかなりのすまうふ
らもこうろいきちをあつめうて一さのい
つけうにまけすくおもしろし出あひやせ
こいひかれもうてつハやつこそいそよけ
はまなみをいてくと志るるを一そくをを
いうよこはとをいかれましきそたく出まう
ふて入たまへろんのちまつハいせしふきし
おちたはふハまさはそりしものされまう
あらく二とのまけあるゆゑしといひかれしこま

たのうりのやうなうつまけなちうしなうつよ
くおゆきとともをまのこしはもゆかもと
けらんせといはてたてあ銭もいてしとす
はころをしもしとくめていばいるかか
これのてあはとよく見ましこふんふ見さ
こまさをのちうちりうりてかのもよつ
をいさうのてをあけつまさきをだてゞ
もてよけてまち孫くてさをしてふめ
をけこのきくとよるこちろをちのちを
ぢらあけちうい さまふよついをとりあし

をめさてもしふまもしせ大ちうもてふらせ
てあしのたくとのうくところをとてくあ
しをとりて見よく見ていつれつましきそ
もしみをまてすりふしをいうちから見ふし
しとけてをどうて里銭おちをもうせひと
こねも孫てしとうてあんてうせこちま
八しあれしい見くうしきそきふられをまう
とすいよるうとすまはうちまりありあま
里ふいやさも見こけらきすみうやうれは
孫いとつまいつはちくのしじまてこくは

せのよせめてせざちるめてまちるとちろ
ゐどなをかてよ入つこういひ孫けくけをてく
是よまりけさっさまよみまけぬ魚しところまく
とおし〜ゑれハこゝろへ大包とそいてあひ
かりをとし〜乃らくくつまさゑれをたてゝも
ひる銭あけすこさあつりもと孫しひかりっを
つハせんこゝもまわハこれつもしめふ其も
やうをもらくするくとあゆ是よ包また入れっ
ぬゝくんとあひしらふとあがをとらさのっひ
る銭けつとろ魚又れっまくいわろを一っまん

ておりのけありくもえたらうえたつふも
ちしをこれぬへし其ちつくまてむすとひ
こはよぜのよ包をたかくさしあけましとえて
うのまてよこゆまみてこつをまちちて其
とこりのハやうえおさる孫をもするつ
ふまくるハつ孫のおつりいあんそけふんっ
るてまさうもつるかるハんゆせんもっ
ちたるすまっをけろんはあひたきんとま
まけ守ふてうゝてをまけ一う北中分りい
こ六けふしんやゆつ貴けらんしけるのひ

とくとりわ大しこれをみてよろこふをた
せたはなちをつゞりをはもとぬきてとむ
てゝうるさしこにもつみさきもさけとた
ついとふくこよくはぬをあて大こゝうこ
みよはとのもあてあなりさもんとおてふ
さかりてうしけつはきふえもてさけさこう
ちをこかをさうはやう三千よ人まてをい
くさせんとそれしめこそりはやうへれず
けとの位よりはらんしいかゐりてさもう
ふさけさてくあたをむもはたまふうおふ

もの人をとおかせらきそれも大もれへい
たりけたまりいぶうすまはのぬとをし
ゆろしちきよりてかくはらうせれをけか
まりてはもまのみあきかけてもちあらはい
きかうたふとハいふ亀うしす一いちよ志
はしす亀こそこ日よはうそふなといかり
それもおふもろしつめたまあうへもとそ
しいまてそりいゞうハもとりいしある
しうてやのて公んくみぞうしつまでくれ
こきやけいようハすく名をもゐくこゝや

らせいはまきハおかはしをつていやしと
もんおかしとりく性うけれふつものこ一
まてそきれきやしくるかしはともろにすけ
つ孫うらうこゝろもつれらみましまりう
もしハけるうあもまするのあ連うしきもう
よせめよ金てしくしとすはよしみていと
りとのをおつさまふいをときむとそゆく
やさるる七日うあれたよはいはゆにてしく
かうへともおうるへこひまるくさてかり
くろをてみとさるれさおのくむもしくう

うへらんとちらくしたけるハさてを一
郎殿のはきちをはくしていまやくときら
たまふ前んいけくみかへらん事ちらく
ちらとしれいさやおきれふりとふ思うく
ふきふらんとれれハやけと三郎かけ
はハ志もらくこうをはミて死ぬへいうて
うむもしうらんふはさを思ふ小枕のした
いこくにひちやうもくとしふ拙ありせん
志高つをふられ思てくこさとうつも茶か
まーうてんみあうる志高けとあーしす志

ていまたむなしくそんふみおゐしたりあり
はなりけるとき志よやうのりあつてち
やうあんのいちに出てあきひとにとふ
ひしにあるらうじん志らしにつぎをつけてこ
のものいちにまうしたりけれちいんいはは
ちらくりにそてみれやのたく人なるしちゝめ
をこなさてでるふものらきんでいく
よゆざしあるつかをおうじそのつかよ
りてへになりさしてきぜん人なまとえ
その人のいへかつ来てゆはぬばちやうし

うかのぜんなんにばつなんとて三萬まで
それうへなるあるとれらじきんになてい
まくだなんちいつあるころけりわて三祭ん
まそびとこらくをたうへもまゐらにつう
へけはそやはちやうもしこゝてまゐせん
志者川をなしふとりくるもでんにあうる
事をきこえらしきんのつかにいそ入た
まうりをおし炮落くごりなれしやを
はこゝとふりまうそてみとてつけといふず
ありちとり来なれども二人ともにあつ

かのちへこたいりめぐれつかのうちよ
めてたきせうれを月日のれありなそらよ
やいらごよをみだきされいろをあうりし百
二十ちやうのぐうてしろうにうくありでし
ふつしちやうちゆまれあそふごつをかんをし
れこゐやこらうかしていけかいくせいの
ふ外をしかへでよくく乃めくりていまな
いてんとりふらうきたんたけのつゐをあた
へてきられをほさていてよといふずふまち
つくとさへもとれ乃まにをしミつと㒵わ

とこゐるいうりぬきのつゐをすてうれは
するさちもしらありくでしかありめでれ
ちやうもすいげるかのでてしみのかず
をりごれもこうをげとげゆくありこ外ん
まてしをもとくともまらて乃よしをみける
さ程いこれもありあしを外しでてうんゐ
うる色しとをちちをうへごされよからでを
くのくちあつさまやさつふとしやりくし
山れきついよけるでつちよをうろ外しゐ
いつごこそをんこうそよりいちのまふし

よばあふミつこ蔵太二のまゆふしやし
たの三郎てなきるきもあまけしねをとそ
ふらうりうりおのくまはうけりはゞかろろ
よ一もしよと致るハもたれのむまれせう
二毒ふと致るハおふ良れ三郎三番よと致
はハ丞のあの分ん八字もんいとりの二ふに
こちんとはかりにハころとすりてはへひやう
へのすけしのそこをられりるでこさおう
孫吉でんふやてりちこみれはさよいこぞう
ちやくしもりつれ三郎そこをりけるがおて

そ出たちゆれしあきのくすでつくしゑるあ
いくよハこかこしたばハだくもよまたら
のむうもこはぞそたふやりよもこおしつは
のりくおろゆてもこさたばおてくしらへの
おしやしをたうよおいるしせんじんこう
のゆえまんおうこうりもよこうらつけたば
たけうさこうしよふこそらぜぜハつ義
けれむまつめけり丈るるゝおかりくあくま
でちくえるよぶしちにまこたばおろふ
くあんのくゝふぎんおやくおてうれのや

まゆかいろきぬるどうけ袖くゑんくつまこし
のたつふをいきてぞのでうりくはむまを
きこゆはめいもありめしもくつきやうの
むまのをみそてふしきあくまをとこらしど
けりくれてこうあゆませりくれしどてふしの
てうへつこともつうきまはゞ一のまふしのま
へどやとすもを二のまふ一つやまた三郎
もとしりきハうぬとのこぶまして)れあ
たへをとらさはハもてりてこうそうげと
りふうるはらうハと里れりてをハゞいそん

ハいそんを色はまふしのまくど三たんこ
もりゆんてみれこへやでもきらしてだされと
うでやさしつがかはよりはきあり(し)うこめ
てはやうこもるもおきれをよらてとぞでし
くるわきつれでさるくうのしろつむう
たをいけつでむっきこのござしとまむへ
にけとそいとおしくばっまこをよりでけ
でゆへとりふ我しやとつてつっはむまの
むふをはつかくしでもしとへまてもちむ
やいまこもとだあしやそしきあすゞよふし

やばおそれしをとかせども大事のいくさし
ちうぎしごろをたけくぞう候しやう扱した
ハぬだんあれしむまいやまつさうさ肉ふなち
よくりごちんよあひけるもくいこうの二
郎ハこれをもゆめゆめもしてすぞくうりけ
ばころを弥吉月十日あまつのりふきし
やぞめくりけばむしてしくきふひこかくを
てさためちくだつりくをのた左くよめ
きしとこまをもやめてだつあうひくると
らつよ一れまかりよありくるあかこのご

夜太まちうけてかくりくれしごうとしながしふ
しひたひのてつくらの娘二つまへ乃し
ぞてれ孫よいたくだひいざうをさるかる
つま鶴よろでさよ二つのやといさせしと
大るりれてふをてむしめくのあふ見よお
ひあうひむまをこたてふごりやまたちあ
ひやせんちんもうへせごちんをすとめと
よもりくれハぜんちんこちんまれしとと
夜しとひくめともとおろしもあくまよふ
もいだむまのさくひをたとばもとに二人つ

おたかはそのあけの日はぬくまもなくまちかね
ともあんないしやみておもかめざけミて
ちやうへあふミのまやうみそりみけれ
あやまりしいのちやいらでハつまずの
三郎がふしあるところよりうへさて
たすかるからとひきとらせともせすお
しこうしてやあつくぬきなんせいよ
くもんことまつけりなりうまつかうしゐ
をちるいぢさうひさにかさのせちからを
おさへてすかるハここハなふしやゆくまゝ

そやおもしあゝあやまつハおとすけちう
かハたくはりなるそでよもなくしかたけふ
あをちをしらさはしさんなきこともよしの
をもちでしやぐむしわくしころやもく
つらの世かけてをかなをしく思ひけるよ
あくるあくさえたつ来れかあるしさよう
よそのつゆれしをたのまてまへこそおんち
をとめをきずけちうさえたつものある
いおそれおゝくもりよそあしらせふ
てうつわり様こうもふしなれとてうまつ

づてゝおとりぶふごゝろつよひき入くらゐなる
をいうまでゝもゝありほどやひとつふでも
つもいちそだちあるものやあるとはれてお
しうこうしられいそのとれすけ出けくば
しけるゝしゝまでうくはされくおほせら
ばまざもなきとゝも出世たてまつらすんと
いふどいのうゝすけるは出すてのまくゝ
よしたよふはぢくいとゞのひさようくれ
たまふもいとゝのいまえうやどよわは
といの二郎さねひゝふりてさやおちゐた

まみとくひくれぜやゝあつこゑめを見ひく
さすけちうとゞ見まうゝざせんともきほどいま
それしもりふてすだまくをちうくはいりはか
はらこゝろもちそおしくゆくとしちてかでゝみ
とりはさふくりい荷物をだすおさくてや
くはいみまへやあんちゞのたゞいおかへと
やとりふくごう一郎ちうい出ゆあるもの
ふてゆくぬれしふうていまあふこともやまた
あうみてはつきあやしくおかへんぢたう
いはさもすけはいゞさいきやう出らくまう

はさよいけりのでおんちるるしつきもとのく
はゆくゑいづくとよ乃ばれさとり姓ありぬ
へしぜんくだのまたくまつげとさあれを
のまでもどいれもあくとおくのつぐとこ
さへよくりむさんありくるありさまかる
すこありそあつてくるいうてはあまりの
かふしぎよまいしはひさをおろさすして
う銭よりうをけりあてなどきくはこうあ
られるきやどのきけのまつたのむうこちふ
こすけちうぞをてそゆくへゆきたまふ

そをけちうをとつきてゆきけんもくやそ
ごとをいかれよあつけてゆはたまふぶさ
けふのありさまやとあけさけれしはさいの
二郎とつてすうでをとりさねたらもさて
ていどおひくしうでおりがんだをもちて
こう円日のさてくなのもしもりけるよう
やくよありゆきたまふまよどもれうれ
しむまつこさるしくふくの人てもおふ
しひとつところよあつまさかくぞそでを
てぬらしけりさてあるへこはよかつさまく

むかしさかさちやうぜでいしよかくて
かれゝ女ありけるをもとめとしてあやしれし
つれゝどしつへのよるなきすてあけさのこ
しゝでんゝゝもかしさてをうつゝもつの三
即ちけしけふかんし二人をあよハ一まん
とてこゝめなりおとてハまこまりして三ふそ
ふるさふけるぞまく男子のあまでよ二人のこ
こもどさ衣のはさよもへおさてかりうつこ
ふてもくゝ中くるハちゝのしらのみたか
もさゝついふまでもハこるしはものとさ

してあんちらぬや三つよなるそうしずすみ
ナ三ふなりハおやのこゝきくぢちまらし
にみぜよとあさくれハおゝハこゝまゝす
てすさえしゝあそひぬるもりふりあ
よハまてみちゝかうかとつくとまか
をてゞつとなハまうなこたどおさへてい
つかおくなしくなりてちゝのつたさのく
ひふりてひとくよみぜまうせんとあさ
しうハまのもまらぬもかしなへてそと
まかつめ人なかしなんもなこやとしたひ

いか孫三日までとゞまりけるがくてうきん
ゆうめいれたちまちひとたびけりて二ふれ
さがくらぬあうひあまはちうつどよりくす
あくくおくへいと志ゆふへのけふりとふ
しよくり女むすめ一つくふみてこゞおもしとう
ふ志んそりいどうのこうするはおんあ
ひれまりきふさいのあけさいれしうおつ
おへさよいあう孫さんは世のあうひおよ
うとよりすんぞおやみおくきふさいみま
うはゞだひきてよりのちとし　おふその

おしいはきやうらうひやうしをあるへうり
すぎつ道八人きその事あまとも思ひす
くれしおのうしまず侍るさろうれある
そとよびこふつけても力をまたくまでに
しやうかたひをとふらいなまくとさまく
ふあくさめられしまゐらてみえてりあまき
ともげしたりたるうあーさあさましもい
てもたへあうれりつおつのまう道ハむ
しをいまをおもとさつありまつれの
おうくたまくふとるまりてうまくまをとふ

しあときれをもぢらぬおさな児物性より
ちそへこ刀さんへうてあつもぢ肉をこう志ん
とぢらく性あまの刀ゆてきんところれてい
もたくるし又ふちいかりへぢつまんことふ
みもぢの刀ゆてしぢてすいつミふめて内へ
しじぎりもじにみをもうくみを女の身ちく公
うさぎのかあしとくとさだてておさむ
よあくよきちうの事そあはご一日ゑんし
のうてきみへこ刀よてふすりしうあけ
みくきぬとむるかとよ八七日みをあうよ

くりちていぞうのこゝろざかさま本ちゃう
ぢゞうのかみいをとふらりんかだめよ出
ゆつけして六ことよあてゝ三十六りんの
そとことさつまりくやうしそてまりける日
ちやうもんのこせんあんみよがつをつく
してられくもれする所がぬつかやくはい一
まんつちこのひきのよむちをとりそへて
これ若ちこのおもてひれさりくれこもる
よれよせてあはんつものをいそだめすそ
みあくすてよゆくをたしはつのものそう

しあんちうちくなおうじけよありたまいて
ごくらくあやじとよましまをさづかるかを
つねゆはまいかねしといひぬれも一まん
よりおいてぞとけゝなんそこくらくと
いいつくよあるぞやいそこはましませてき
もゆかんとせめぬれしかばまりれやばっ
たあくぜでぞとものしこかゆひをさしづう
きこうぬれしよらんぬれも一まんおくうつ
まこまずってお いはいさやちつゝつもこか
みぱらんといそはなまことまてはいごこよ

ありぬれしかあぱむかもうもゆつをいぬく
ごよおとくをもてぞとものあうをとましや
めくでむかしくもてりくのはさうう
へよたふきふしてあさげのあるふそまう
ちくはまさをとくしあはぬれしめつと
をさよあはぬうりそのほれぜりもつゝ
はやより一まんっふぱまいふこうきぜん
たをとをぬゑしぬれし四十九日ふあ八そう
どくやすそのつはの日孫しもくさしを
そぜうりくる戌もとのあけさよさんいい

すくにおもひしよりくのちくあんしんして
できりるもくすれはハそのきハくまらず
をくられそのかないますこしこくもまま
てかこやちくをを見けりるはふゆうとい
みむしあうあしたにむまきゆみへよきす
はあまきあんちういのちうくのきてしもら
ことしあまふかりやさしくてらくのふまくよ
とちこをてもるもとは見ころをく見ありけ
よそふへたくまみてるんちかちくれさや
しやうのせんにおもくへもすかハそへさは

てゆめくうらむへううすよそやかてすて
むこせしこちろようこつれ三郎がおとう
いらう九郎すけこよといふそのあり一人
をこどもたさてくれしものの事をこく女
もういそこれくりてまふとやしよのおさ
られ人をもてんとおかせらはくいってか
ける事はるへこそあさ人のここ見るも
つ見ふかうはへしみもんあくの事もそ
遠をかしらくしおりくよおもれいくさす
まふはとのときうそもんしかて候しまゐせ

かむらにはなれたまへやしあれたてく一
ろうこ見みをせんといひくれこみ力
つありさ國まで方みそみはりし思ひもよ
らどんさやうにわびしめさいとてじせ
りりやうてころやをこめれとをつけてや
りいくをぶをハはちりとそいれけるさは
おとらよい見ハ八十日さんハ三十日みをせ
よりり百ヶ月よあたあんとれかりらすあ
まよありめ魚しとそけさちろをやしい
しりるをいどうかうたつたへころてへ

出てゆくるるまま出てやすうたとう殿と
したまふありこらをこなまみまくこくめ
とてさやうにハおもれたまふそおれおく
ろへあうおうちうじをたのみたまふうや
姫れざうよりあふへうしす三郎ぶりはち
とておさぶこさのどもあまたあれしいつゆ
りくをおろかあしをひとへよもけ出けう
こし見ともう思ひたえまいきいかふけき
さまみてもみをやつさすしてをさぶこさお
姫をさらはいすさらふうとこさかたへまし

まことはわれも人を見たてまつるうを一うれ
ふましさのミつ國そつの太郎と申なり
さうふをまよ志んあるものみてはをとろふ
しこのちとらしさつのさいちよおくき
くあけさいまたゝまやらすはとけくま
りりよそれしへやもたくまるてわつかし
さろきともくさき遊くかくたりつあたも
あまし危たくつきくかわりをとこまく
かいれてやつてくゝをつけこれしくまなり
けきしあまかるへこれまもりときかい

ちかりくそうの太郎のまくへ出よぶをと
ぐりしくかミようきてつゝましくれはす
けぬふふふもれぎんして太よかろこれや
うてつられとしらつもいろへこしてそ
坂もろともまれのへよりてもてりりい
つしうかくはかはまれいうへすくもくち
おしくれしごともろもろさ唐寺ちまいし
ら見ちうくを月日とそそくてみるきれしを
をつてもの志を思つよせていちよいおつこ
のためよきんちくよとめらさまくことゝい

おかげはおくきだいをれもとうよおもとし
まちうろあくさかうくめーさしまさうくお
をへまうつきへり

當代物語第二巻

A 00
5796

あふミやかゝをさつる事
たいさんふくんれ事
よしともい族よをまとせし事
とかうえんのほ事
ミうせうくんゝ事
ゑんそうくもりていの事
よしともいこうをいてたまふ事
よしともわりてうへいてたまふ事
ときまさうちとめの事
かうこもたいの事

かねたかむ子よとの事
もりなかゝゆめの事
かけのふかゆめあはせの事
八まん太郎かさかけの事
さけの事
よりともむほんの事
かねたかうたるゝ事
いとうかきらるゝ事
あかのこんけんそうしやの事
すけきよ京へのほる事
かまくらゝれいゐの事

曽我之物語巻第二

三せんせうひハまさこのまへりつき十二
いんゑんハむかしのちきりふかゝりしさよよまと
むとすけるもやすうしめいのちいれまて
おもしへてわうよしのつみくへさまよしい
こうにりたりハかみすつけてもきのゆく
ゑあたらさもくしてむそくれ丸にもけきよ
をよれよせふうなりかいさてつけしやう
とおもたれあふやまたうくひとこりてた
せよといひそれハけたまりめちのあ

はたをおいくあんいいしやをもつてかんぜ
ゆへいたさやのよしやはもしうへでもろ
つけしらを色さよのやかのれ人ふよつて
まちはあまし はましとそけしきをたちめ
いくもともくしてさらりぬとはけるれじ
いゐのおらじごう八十よ人はたつふとみ
くらのちりめとちろへをしよせうりやまと
たの三郎さかをめ出ておちれまうけらり
いはくへつはく色さよそろ哉し一さをのと
をすよ人こめおこたでおうやともうせく

らしけしつめひされめぐりくさんくよい
うばやよまにつたさあまたいおとしやた
ふほさしつはさじあつまでてしもうのた
めよりのちすけるまでつゆおともおしつ
らすあよせんれをみそりぬといひてけし
ちう人くのこらばしかくりやわらはさら
をすもむしかおきやふで三十七出てせ
よくりすあまちどうみのことう太うもと
へおしよせくりものはもとかもろ
さおりあうをの里てやまたうたけくさと

こくてとはとのとりあくをおちたまいしと
らうさのいよおれつめてうしめとりてらう
まのまたみくくれをいふたまれるハ二人
うくれをごりてちくよだりよ見せくまき
いおゆしくをかるまれたまとそもんしけ
はそうみあまくはうまつかきれしよもよ
ろこふ事かいもうりもしすけこよいにうた
ういことをまおやめあふうくここをう
ちしうりく一うこもぬちうとそ見てけ
はさてもやまたの三郎かちうかくを見の

ふじたしやくきてうめのとこうろり八し
ゆんよあまりくはつれこまとくまでてお
もれのあまりみくとこさくはハ内志うのた
めよりのうとを仕る事ハうんまうあまさ
性ものうらんのをこまとたつめはよをこふ
しおかやのゆけりとそむさなまれしふよめ
くやきうるにしやくきん世よましませし
とれきんたちあまたあとすゑてしうゑん
来かりものおまふしとちたまれつはさうつ
この中へそらよせ犬ごおるいとち一ねま

てはひさのうへよとひおもぬとてしう
いけくこともおくうせぬきあくのふしきち
もとくしやうそくりんしうへきはるよ大あるも
じしはくしミたまへとやすもしもけした
はこうをおくてとこたまれぬいくち
おくしそしやくきんはつくれしさせなまれ
けさされはにやまらつまれちり王ともも
のもさうよわでらせたまいしとき大こふ
はいくちまいりておれさまこくりはりせ
よはらろぶあもくれは二三日のうちよは

うこひよはほあけことそやうにはなれしふあ
まぜてすやおくくはくされ日はみたうくくの
ミやはむかんありまふらちふでこられ
させなまれぬりやうの事をもつてむう
しを四つよ大國ふ大王あもろいかくをす
こさなひてあけくれしくうてんをつくもたま
ふ中ふをよかうてんとうしそりもも
はきんくありれきよ壽こよくくうらく
をさけうへよはまやうきのけまんとつけ
じちにはもものてんうれをさけしまふ

めぐのいくしをけりみまみハさんこくも
くをしにミてふくかせかゝるあめのたよりも
ふちんしやのにおひよたくさるやまをつ
ことていちんをうまくいけをとりてハふみ
をしっ色えつよあそへはたんまりのこゑ
れとへよさやうとのおやうきんよおもし
みんらんしうをていふかすをかへうさかの
ようこしをちきみはしっしとそえてしさ
きハ大まうきよくろうきんてんかいくさを
ほみよゆうろんをあるとらえへつしかうの

もりらにいくとち二つさたまてたにさまく
す七日あり大まうあやしきなまれてもか
ぜをりしてうらおきしむはかすしうへて
そうそんをきものもしらのじちよ七しやく
の人きやうあり大まのつきちをきてくく
つらりうつしててうかくのみんをうそ色
いもくくるをそかへたまをまてえたまへ
かとしい七百人あまうろやをさしとい々
すなもち大王ら人よすてめてくさきれしま
をさやうしらくまけりうのもしらりて

見たまふよ大かしすをさましはといりわも
あまてあまやうこんどやぶりかんきん
よきかせいいろくの志よ人をあけめその
中ふあやしきをめしよりうりをんしそれ
ハらくらく志やゝよつて七百人のえ
ことらてくめしこり三百人のくいをこ
をなまひぬのこを四百人きらんとすると
こてしくゝやそふありてよるひはれさ
つ八をちくしていろとしふふかんえん
たらろふ大夫とれふを大王おとらけこいて

くりきつゆおとれりくしくありてうきら
うそひをこはすらし志もらしてもりくうを
あさりる下國志やういましめつらの世を
とらゆくありをしよまれよわくくある
ま天これをいましむへしちきをはりあん
しそ三七日おんしきをとくめてあすゆう
よのなをあしれゆひをつまたてく一めい
まるふてこくあんもしあやまりをハ志よ
てんあしれなかくとさせいまくかんて
しらやすらめりせらきくり三七日ゐまんと

はとなしやうくんせんとあつたてくまを
みやくまて日月もやしまくひつてをや
まらけたまふさまいしをまけるりよま
うさいあつてくれしとてれこけ百人とも
こうりたまいわちてぬきうせえさんめくいし
てそうすたいてさからひもそはくうわち
やしきうちあるへこすよこさしきれしらとし
てうふくれ大こゝやうそのこうのこゝでてお
そろしきうきんよあまあててをたまふせ
しやうとまんでもやうりてんよたから

をつた一とこふやこすてくさいあんのう
たかはをとてむしとやうれしはさうしふを
よしもとそてなちまちかよくゝんよしすうし
やくをくでもやてしとあやうしてそてまん
おてらのてんらもをやさすそられよくり
さゞめういまのよまてもいとちあれさま
けいはくしこてころをみくおしあれこ
のうゑみよおてぶりきれいせ百人のてさ
かうひせしやうりんせんふくぐりひやうり
をやりくけたまふまりせあんそくもい せ

ゆくそくしやうのめいもんにつらなれば
おやまのだいさんふくのまつりこれあり
大王のてんをやこまりけるを志なまれ
てはくるわちやうぜいしんよさうへある
鉄をまもすれともふらうをんよ日月れうけし
つのよめくをふくりせゐたとあらさをふ
はあつちくれをすあつさてゐいこされは
よみさうへ炊まひけるとつやめてたつを
したりしありおもくなやうへのすけ蔵は
よをこりたまれてかいこうりてうとうく

さうのれきしかていけをせうまつたへこさ
にありてうのむえハさう人いこうのすゐ
ハたへくるゆらいをくりくうつわるよ
よわもとも十二のとしいつれ国よあつきし
てをりしくるふうのあ人をうちたのえ等
月をおくるをたまれけを志ちはよいこうの
二郎よむしをめ四人あてひとに名さりされ
くふのちう人こうらのすけつめあり二ふ
ハくこう一郎もけつはよあいくしへうりし
をとりゐしといつや太郎よあまをくり三

守ハいまだいこうりをとよそありける中
ふた三ハいきてのこりしあまたすけとのこゝ
こしめして志ものゝつかゐるまのつきくとし
のひて作まをとりき孫なまふりりごらをはかな
さしあさうして孫も月をおくりたまふや
ともまうこ四一人いそぎたまふすけとの
よろこひおほしめしてはふといきとける
こゝせむとそつけなまれゐはつらくまうし
とふみよきうしゆうすまゐしこふゝれつか
まうしこくよあまた程ちよくゝむうふかせり

てるうまぬ家のちよまれのちうちそたつ
はふもの㐂いてこみなかうきしさよすすぬに
あうかちてふあしもしれ人てきうらこのうまゐ
くうを山しつのころやあひったら此色いけ
よけあうせやちをうくまもりのちもと
をためさんともてうちし思ひうしつことくまゐ
わうくて奉月をふはうとよまかこ四二さ
いよありたまふきるつきうついとう象よまり
くてよしか志うし志うはりゐりあるゆく
くさ小苑そのゝ山を見ていりしれハまりくふ

しつらこころめのとよいくとうれしぜんさいつよ
あさひたまつすけちうこれしをみてうきハ
たそとひられしとも在事ふぞおよもを
よけふかりあやしくおもひこすあもちし
ちよねまさい女よあひこふまりのこのを
のゆるしきをいくこさせんさくふてあそひ
つぼをたそとるへハかくて事をせうよ
けるるかあれふやところまもまるの事
ふまつれしハおもさるて粉れしうはすての
さいふやのおもよいみけきうしれさたまつ

ひめこさのまうもうせいするときつてい
つくしさしのしてまつけたまへはさんた
ちよのはためふハめてたはまこはせんよに
おこうまじくいくふしかはこそまへとよ
すゑをたへきうぞやうふをしあるをさだ
りしあけさしハきんさんハくふをみこう
とふハいゑをやめることりかちてし思ひ志
らきてあさましうぞかるすけちうきうしを
ききくてよちうをふてもおやれしらさはむこ
やあはなきひとそいまくてしらぬわづ

さよといもりくれしまくまくハうけたゝ
すましめるよしとりきしくておくれしもそ世よ
あつてまもるゝのたゝやまーまするかんい
やうへのすけとのれようこゝよしてう
ろうしくれハいよくそらをうてむとめも
ちあまのてとこゝろあくハおつしきい
人ぶとよハとらもるともいまもとえんし
れほふんむこふとり飽いけよこかめられ
てハいくあるへことくのむしとハうもて
とれしきてあつとこりてこれもゑとハ

むるゝさゝこくきをとゝきとこうりれつた
へあれもんるしとてらしこうよれしよせて
ようこゝへいさあれいたしいつの國まんか
ようのおくをたつ孫とくこれふ於ふゝつ
けふしたくまんつようおさけおしてした
めしやこれしやそんせんのつもくこふしやう
ふちてハをいをうし孫んよあらもしち
やうふありてハくこをりんこくよあらこ
ごまもてふのまま遣りかるまいハゆくもゑ
いりくとそおもくけるあまつさへこられ

はつきをとりつ絵しおゐしさくみのち
うへ恋まゐのおゝ四郎よあまをそくりおこ思しおつ
しかりはるふすまれ出たをいそてたまはん～
おもしぬにいまくるかしくゑてようつ
思うハ思しはおうらさきうと思れやらま
うりこれもすけらかし絵いけへおくうまた
さまつるとぞくともまうこさうこう宮んかん
三百ゐうふをやゆうちう売まかんかそ
のうらみつまひうりませんよハ出かすと
犯さりむかしかんれまうぞうくんとゝ中

せしさきをきこくれ恋ひをかとらまお
こくへこへなまれしよおこ思のゑてハさ
るくしてあけさかふし乃ゑばよまうせ
うくんうふけさあまりよみつうゝうしさ
出しら孫かまうもうこをうつしとくめて
しさたまへまをゆめよさうりてあふ絵し
とちさ思ゑるかんまうりあし乃てうの出
と孫をまくるかしてあさすなまひしう
くゆのともあくようはくらとあくさる思
しをきくあひよくりうのでうくんうこ国

へれみちすうしあみたふくはうよものゝ
ぞさところをまけかゝ孫一そそのひはまもる
もりくり思えれあまでよこさせいをかへ
まえてさうしこちとなくし一ゝふりしきん
ふうしと思いしはくかんきうしもんまれた
ひのそらいまのあもえよきらきさりすけ
露もまいかこさまうしふせきさせたまひしは
あろくまらくのみをとしふえかふハぬま
うきのそてれあらしこうけいよつしゝあり
しつこさでありさんしハあしぬこさたれ門こくら

のはちこでハえんそうしくまうてゝやうこさ
ひきすせしさきこさあんろく山いくさのた
めふ思ひれをよ下たまふ門思氏のあまでよ
忠よくのつりしをつゝりしたまふちりうつ
しんはうゆそ一天三せんせういをたはゆ
まよまでも太しん思んよいしとはちうらいこさう
こきやちうゐこさたりてこさよくひよあれぬ
ばとちろよいしさでて見きしふしんかさや
きんせこされうよふへこ両あら孫ハかんさ
しとぬこさてとおそきをうしくさうくもんとこ

しかよ二人出てあそびくたびれよまちたま
へ、さよくは、おそくれこをれしやうらしいつ
くやいかゐるひとそこらとふこうのたい
しのつういあよくれかりしとおたへけま
いよろかぬきぬときみじんかいちんくとと
してどうてんかひくきあんとすぜうせん
うしてありとらつよこよをひいてたまふ
らまさすふまちやうこひありこゝひとやの
あとんふ七八人しゞしいつしてくやうゝい
ん孫いとゝむすうしこまのふゝたかい

ひおもりてさよくひしばあゝやかんさし
をまはてありしよたゆそれとさもくしこ
きハよのつ孫よゐどのせあてやすよふく
すゑいらんよそふへたへまけらんかいか
ふばえつけいかありしさよくひーりうく
あんしてし天からナ四筆れ秋七月七日れよ
天よありて孫うもくハひよくれとりちよ
あまでし孫りまくいきんでのゐたてんちや
うちさびふしてつくるりふうらんとあ
らをそうぜんかゆうたりいなるへかくす

といゝてはゝくゝハさてめをとしかくりま
いりてくまちてゝハふそうをんをけるきゝ
まうすしあやまりらしよそひしやふのて
まつてうをことての国よりあまくてさてやつは
こうめし非こあつまれしたまつやすこハゝ
あつたのミやし非番てそまゝらせなまひ
くるおうすらいそうをあまちこのとろと
そすいやうへのをけとのあまうこさこさた
のほうくほゆくあしらせたくまいるその
ゆみつとなつハもくさこたまつ事をかつ

てるりあまつさんすけとのをもよびらか
しうそまいるんとてらうこうをもよびし
くはちるにすけちうかしおんいこうの九
郎すけにおとしふものありのそうよをけ
とのへさりゆするハおやみてはをけち
うきうものふくばいはてゝこさをうちたて
まさつらんとつゝまうりゆくいつくあをほし
のひゆへこすくれハよそをもこうしり
らやうきくまうりかいよあれしもいつも
はもしこなけらてありあこのうちふてこふ

ざぬくハあられありん人のきゝつしてこのた
それハくんしんかいをゐてこそ御意
しいもしやりだんともるいおや・ありけ
まあてするハふちありてしくふしんみおうあ
うりいうさまきしれをたもうるみこうとて
じもうけたまのふすをあしまことふ思れう
けらきあもいけくへゆきさものかゆ意さ
のきれしごをはうあくあうれにるみおよし
をへてにかくらんよをハあんぢやくよ
さぶもうくびをごりてちてふしそうの

ぜよとおふせられそれハすみにてよけた
まりてしおふせれきうくこうこられうたに
人のこゝろ思てゆきちをとりてつつをのく
ひようへしてあれしれきうまたつりしを
いつもはたくミありこでおおじめをもの
ことも中まあこれのちうさしとハおわあ
めさすしていあやのもうあれともゆう
たいかひちくもあありかたしけふくをふち
うけもくたうこく二丙大ぞふしんれの
もうどうしかでゆこやのこぞうちあく

つくすけさよかいつらはせんまでりては
ぬんこすゝれしこすけしのさしめし大きさ
よはよろこびありてやすよはげましを
はちてろはしもういうふをようやうよ
あれはからいゆくへとおおぜされしいもけさ
よしけ犬まハ手てとらし九郎をともやこ
郎あり候あいさはさのやうふくしき
らくこれにおかまゐ包しき犬ハ大けに
めされしてとみたけもりめしくりて
しへはしれい人とかおこてはらりてと

やさのりはりんまうをのもしよりんとて
いそぎはせんをうらよりすけ殿もれそ
うよまこまいてさらせたまふ夫つハ八月け
しゆんのすあるよつゆつこむとふつせ
のおとまうでひとつにをのされしくのく
かすたくむしのおもおりかしもくみあと
迄ありありあけつ月たかいまたいそまる
かいつくとそもてをしら証とをとらふう
包てたつをとつたれくさとまけ候くこち
すうしのはこさせいよいふむもやし八まん

みかさ山のほとりをんよりしまゐでかきん
しのあとありてこう国よちうしてゐひとと
をかいらくんと遊うちりいましませぜ給う
はよ人と違りちかろひてしやうとうの
れこきたくし衣ともこもりありきんと給
いくもをひうつとハなきをていくをおこ、
きんやせとてよけりこふのつき人こうりん
ふしこやくしわもそもうしんをひうぜて
こうひを志大う徳しめたまへ志かうをハ
そう国つひ山ふとふしありくびんまめうと

こけしめたまへとほとさせいよそすうらふ
をかんおうふやくくおともくしてほよに
ほさ次まひみくりさてをうけてうれ宗郎
こらさ宿さかをとにおとせし七一うりかま遠
をうちなの乙年月をおくるたまふみうの
とら給まさよむすめ三人をひとてハせんこ
らみてこ二十一ありニ三ハたてりうふく十
九十七よそありよけるあうふもをんなう
二十一ちひきんのことへきちてよちてふ
ひんよ思氏くれきいもみとに二人よ皇ハた

くまてそおもはれ侍りけるちくよそのころ
十九のころみかしこきゆめをそ見侍りける
たとへハいつくさもふくたかいら孫よの
うり月日をけかれなをとおさめたちも
ふれ三なりあるたたとうさをと見て思ひ
なるハおのちてれ男なりやうきこ所うつ
月日をとゐん事侍るまし爾てや女の
男らしくおもはれをよらすまちくまふしこ
つゆあなりあ孫こハまつせたまふへしと
いたくまゐらんとそいそこあさ目けせん

のこよりてこまくとこのくりたまふあ
孫二十一のこさとくもしくさてくまこと
めてたさゆめありてきらつせんそハいま
かくらんおんとあつめ六てまゐるゆく
三日をさうつたをとよをさめた里又たち
もる代うさをすハちんせつめくたこゆ
らいありしてけいうてん里ゆの田す
をそおもはれいうしなはそをくたちもふと
いかめこのもしまりハ仁王十一家乃
巾りさといふんてんまうれ田と給よりそ

そこではと小川ぎしにハ又でまするよ
ものがたりまちとおよのくにじや三まい
らせうり　おやふしぎなくちのみんしう
のだちもおどもちのおひてくまいるの
ふやのおててはちてろけてしなりきりさ
まハうやうのきのをありくるよとてらせ
こねうのだまくせてま国よあさこのさや
それハちうてる　しちてよそれまおとりわ
おしんありこのおうハいそこてやまにす
ふりいこてよりでまとりてまして　せんと

いのてたまきまハきこようこのおかしめ
してきてバいつのころよこてこすつてとら
せんしありそれハ六月よハこのあしこと満の
はへしとすてまらむしめその月をまでとも
のるをして六月よおりてまきハとくまで
てんーてたちまちをナまいらせるなたつ
おてまいはへしとえしとまりそれしらもた
ちむふのまいは事をこさことおかにさよ
うごのなれをちいたまるそのうくみよ
てそうしはたんまやうありはくうるを

たもちたまふ事百二十年ありけいよう
てんわうの御事これありそのゑいしんの
そうもたちもふのしつほさふりけるとき
ほまほ大ゆううすたよ

ぬ月まつ花たちともふのう袖つけも
むかしの人のつそてのかをする

とよ尺たてろりまかてすよたち花しへそ
のけるすものともばかそもしまでろは
みなちとあふろこつといふもあてしうの
たちこふよおかんしておけいこそしれふ

つきてこりるふりそのいろをもしをろこぶ
てろれ志をくろしとよめハありさてをも
の二十一のこさと女しやしふうしさいうく
人よすくれ志うかうやうのすをおもれ
いうしるはよやけるをけいしのでつと
ふちもるを称うれとし志やしありしり
そくもとるくてもうこそいてさうりより
どもれはあてをつき字うれをおさめたて
まかりるきしハもののゆめをいくおもしてう
いうしもやとおかそれるしハこうのゆめうへ

すくおそろしきゆめありよきゆめを見て
ハこゝろをしらすあしきゆめを見て
ハ世にしられよしとてぬまはおそろしくる
はく志見ありいかくを危ふそおそろしけ
れ十九のさミハいつりとおそれよ
らてさておいかくぜんよきよはすられて
それてしやと大ゆよおもきそりされしハか
やすよあ志きゆめをハてしつへてあん
とりうはくともうきてさふらへてしを
はといふよと信る事そやミつかしきろ

へることしハうそひたまへとありそれハさ
らハずてふといへハのうはくあやしてとて
たまへとりめいしものくありてきうら
申ゆくめゆを見てもとゆもどうしまめゆめ
のあとりはくふた通かうへしと思れて
つゝふいろ見てぬさうしものゆめをハで
らせういとりさはむのなんそれそこゝそ
まはらんといふあつゝうすくともめし
あしくとしをうら見ありはたゆめあしくハ
いかにといひそれしハさることうてうしか

もし悪くてんするふてぬしもおつうらを
くるしうるまじきことじやこうよこうら
へいれもきらいとよろこびくてまつらし
ろはそのちよくやしく夫おりくるる時の
ちくもよつ歳を二十一のさこなみて
うい(た)てまつらんもとよ里志ましまうの
あきいよそうすてうのい恋につたまはう
られりしこととりいたしかりくあやのこう
二一うき孫そへわそさしくり十九乃ここ
ふつめおりをによろこびてつうしくとう

へそはころの志よまうかりをひぬこのかり
天のぬしよふりぬとよろこびくるそおろ
かなるときの二十一のこゑかくこゑをゆつで
けるとかやけるもとよもけとのときまき
ふしをめあまたけるよしきらしめいと
しまてもこそたきりけりはのそらなるを
のおそれをもせのたまよおくつまじや
さおかしりしふいく人ふとひ孫へはたう
ちうう二人はちと乃ちうあく女ありせんと
ら二十一のうてへのふこありさたまり

てまいらせんとやりけるにとりいそきおも
ひしもまたもゆくありいかよてろくと
とかうもちらとおほしめしさためられて
す九のとこへはふみをそあそはしけれと
う九郎をまつハさきたまハりてつく
くおもひけれはハたゝいかにせんのうか
あくさよれここへありさまおほしめしこら
れんまたあるをりすおりてうふさんへは
ふらつたうもせたまいてハいつかたよはい
ともはへきくまむするおもらをたくまつる

らをあせこもいうてゝおとりとそえまい
はへきとそしはふえを二十一つてとへとき
うさわくりはさてせうしやうのつおもし
てまひらせそりうりひめさまはらんして
おもしめしあまはるすまものあうつこさま
うさしと一つとひさうりてくちよすきう
ふれさこよふみをいきてふさいてさしまら
とうひさのうへよおここくすまとひはり
めひうさて見きハすけ殿のはふミありい
そはもこよおさむはとおもくハゆめあり

いまうけたるふみであるまいかとことさらと
おとしめしくしちおきぬそのつちふみの
うすがきありけれハよおぼくしのひとつま
とそうさし孫なまびかるゝくて年月をくり
たまふりくよおぼつてこの四郎と紀国さき
やうりくてとかるゝ見ちふみてこの事
をこゝろゆる志さ大るりいそぎさうり庭いけ
つこゝへてハいうあらんこ大さはみきもこゝ
恩ひなりけりあつし志つうよをのをあん
むるふからいまさゝぜんそうつきよしかくらぶ

をたつかいよこのつくりんこうけるうれ
とさもこふとりたくまゆでて八まんとの
いけぬ志そんいそきうりいまよもしや
うらし八さしありやうのもりしをあんする
よあしさ肉よハあらしさおもひけれとも
庭いけのけふ藤のふやまさのりんくまん
の孫たつさいりふものをとこうたうしてきた
でありちめくふよとおをさぎしのついて
ふ所ゆんをとこはまさつむこふとらんとい
八たであしらてつちつ八ふてくんちのは

みんむこゝにとりかゝりとゞめたへらさてハ
きいろものゝ(うまき)こゝしいかくせんと思ハ
それハいけのこうにはさらのをとくたいう
孫たちよいハあまを志らすかちすてむた
めぐりうてしやまにむくつくんよとらせ
くりされとももけとのよちこありやふかく
そくん一はきをあうさくてそのようすらよ
ふけいてくちくめ一つういくる孫しも
り一人くしてふかさくきむらをまけあし
よまかせてあしハされぬちをこへよをす

こゝぞけれは山にまけ入給ハぬちこゝりく
ちすハいつをしれかりこのちうれハいませ
れふゝハかまうきさあうまりたまふお
またのむかくこのくちせをハすゐの世う
けてもうともよもをもつへしといのりた
まハくるとうやおもくいつとちのうこと
すハ山のしけい木やうとりふ國よおくこ
とハもくやう女をゆう一とそふうふの翁
きうぱう月よ侍るハてよをすりしぬるす
ふくしてこちふへちゆふへにいとう山れ

こ給よちろちとすゑし年のおそくいける
事をうしこあつつきハせいてんのくも
よそをふさくもりあさよをよろこひあま
くもりそらをかりそしみて年月をおくりし
よもくやまし九十九のとし志をんよつそま
むとせしと紀ゆうしよむかひゆやうまれ
月よ性おひてめ候る事よの人よこへた
をはとりふりうを月をみる事をこたら
されとその名まハゆうしあらくをあつし
てあんち御さに志ふハまれひとり月をみ

は事なるへかしをとろとにこゝろあさんと
かふしめハせくやうきゝ給てやゝうい
らうとうけつのちこりハやく給んかあた
きり月をてこゝみふみよとついかむうふ
くふりよくりちこさしもてくゆうしハう
ちいは事をあくしてはさよとをあハあ
さきしつきれしをかきりありくはもつふ
もうちくありふくりさきをふしふもろ
とを月よこゝろをとめしゆくみてしや
うれくまとうけ二つうしあるとうやくん

きうちやくちよこれしありまたさいのかくし
どもかありたりそちんにもあつりきふう
ふれ中ござおもたまふはちらうひなめどし
くそおほくぐるみつたへさくかんのうう
そちうやうさんといふやまよこもア給ひ
しよもうろ太子をうどうをかしもんをしは
てしよそふうこ山寺かまけりしもうて行
さしこれかハをさししそでしさてもけ
しの一ひそうよ人をまつせこうくと中さ
せ給ひしうも、むちをあけてそへかアた

ほめぐるをくたいハ大ほひるれどもあ銭
山ふうく入給ひられもちつるおよりす
りすてうハ志らをりおうかて奉見をそとく
りぐるいとうりふぼまひよハうりぐる
ふやくもりすれいさすとつふりちうかふ
ふともろ志ほの徳いもんのかりうけつふ
とりふものあてものもとひやすへのすけ
しのいつのほ山み志のひてましますより
つたへさしかやうのとらしもちうこうを
ハいたさの[illegible]て一やものいふまりけり

荒九郎すりふうをおもしくとのねつうま
はるやもしもりよせらむろさてやけ
ばハきんやもりあうこさとのはなあふ
めくらさはきそんぐしふりてげへはえ
ことそしたくはかをきめらしうまさこ
しめせきこハやくるつたげよはきしどう
けらきよ一ぽんしまハこかおのかい色
いゑいくこさ孫ちうハはらて兄ぞきさや
つるハまろゝ孫のおしいよおが孫のはさ
うすこさとす恵をりふい日ハまろう孫のてう

しよはきうつ床まくらでけるよこはこことゝ
さらしめされてつちハもこねはさんけい
ありしよはゞりよはあしみてハそとれし
まをふミ兄さのはあしみくハこゝういうし
まをふ兄たなのふ龍在のはたちらにハ月ほ
をやしらそてまりてこゝまり三ほんりしらよ
いたくさみなる兄むさよあゆませたまふと
兄くそてまつりぬとすくれハすけとのさうし
めしてたこさよよろこび給ひてよをこゝに
のあうはさふしさわきいむさうしもりつ

ばそやこゝくうへをもとこゝをとゞめてよを
ともつたふさよをとくい子をうむことえつ
ばなりこれしなうる八まんだいぼさつ
のまつらせたまふとなりしかしくおかくれある
ごおかゞせら速くれしハけのみすくばハを
てなおもしりしんよものそいうけ此ふあいハ
せんりしんまんさこやくろうたけはましく
くばハばせんを八幡もつくば志そんこう
八つ国をばやしことろうまさせたまふへ
きなりばさけきこしめすころつばハ

ちくもりありたうしきこゝのばありばまへハ
むこやうのさけよよませ給ふふり志うまう
もゑひをついよさむばをの御てこゝのつこ
そん志をうこしとりちうくハ三月と弥くハ
三孫んよばゑひばむへしえさけハもうゆ
うのとくありさばふよをつすついこやう
ばあうふをこさとすゝかまうしもんのめ
いてゝいれと紀三条かんもりしるをいこつ
ふりへて人こんをくを志とば御を大きに
あけさたまれて天よりのりたまへとをも志

なりしいかくせんともふしミなまれけ
はその國のこゝろもろよせれそといふいや
しさたゞありかまういふれそのよくまの
三三ほんありゑはふらみごりは弥みおり
いてあるふぬしあやしえてゆさてえきハ
うのされうろふたけりしをゝたはとのあ
をとりつけてえるまゐミつおりふめくえき
しひ寿之をあまちきれしとりてもくま
うよゆくおうきて一とくちふつくれしハ
七日うゑをとますはくこゝありはうもん

しおふしりしてミつとりのをとらしときた犬
はしをとりてうゑまゐのくちよそゝさた
まへハまんちくくよえもてりうゑうる
給ハちうゝとゑめてう性りあしおりふ
しをおきちせきそとめして一國へすゝミよ
ふんずくまれこは三ほんよ里出きゝめしもと
てえさゝ中おりさてもこのさけハいつふ
しそいてくるそとたつぬるハせこそゝ子
よくまうりといふもののありまてもゝらゝ
ふゞくきてこれをよくミとくをいまゞく

まぜ久くぎれしともくまうりあくまくのな
られさおもれなとらへてさうしよしむは
ころなくしてものさのうろみいこととさた
けのしをくいそおさくりくるうきしめい
きふるいくまどうしとなりれちよいこけ
はりれハてんよきくみうし許のめくミさ
うけてくちてハ吉為とそなりふけるいく
やく色んしらくす也になるとハこれと紀
よすれ吉てもなりみさけどのくてっせ乃
さはるり三す成道ハらさきもうくりきし

かなりのきやうのいく久はなりむまの
をとこといへしそのゆへとゆるまやよふ
しもうとをい色りかぜれさまたはくさな
也しまたあるをつれい為よもこさこなしあり
そのこの吉うていしれうへにをちたま
也さけこなるといふせりありそのと許い
ミきとかくへこかみ吉んなりうよいまく
しん吉為百やくちやうりとものくりう
む吉まよハせはそこさを吉てしめれを
たもくとうくりみ吉とうこいひしなの

ちゆさいを恵こもすそとゆゑの人しせん
みんさくをいとそとてあそれなおもの
さけありこれハかけきやうふりんほんの
二くれけをころしゆへよころくれ下くゆミ
つうのくすりと也なるとこのもんみん
いもちひなるとおやたやけりをこれをつ
つしててうやうのあんとそさけよこさくを
いまでもちひたまふう恵ト愈くだ申うろ
のくこしだよさしくる円貝のひすりあ
まあくさえのはめくこまもれたる志あハ

あはよもそたうさをいやーさもさけハい
まいよすくれ非もあつ志りしけもまん
えんあるとうやきこもにうしめされれる
三さのちてくよすこうりしうきを召すれさ
せ給ふ日ほんこくをまさうへさせたまれ
し左右れは南しかしそとのもまいらせひ
りしまをふミ給ひなるハあさつ志まのこ
りあくまらすくさせたまふハさよや左右
のはなもよ円貝をやしたまひなるハ志
ゆーやうあやうくまうのはちうなんふき

ねてまうたうれある亀うしすはこきけに
ほんしらよいうてこたまへはハ八まん
三宝乃おんこあうたよしてせん志ゝもん
せん経たうらたまふへこはさておりいれ
あさむさふあゆませ経のをは志さをやめ
うほさいみたいこくてんのあん然よ
してんしのくう明ふこたまふとこう
けらまりり人はじんとひうこたまいハ
むまうれよおるしとゆへれハすけ候よ
ろこ八六まひてつけめあかあてむるもく

くま申とをよふうつはりあうてゆあある
ませつ亀んこうなるてこそおかせらる
けるけるりくよまてよむほんのりとを
たとへしさんぬる亀いちうへん参恩らん
あかりふちむうのめあよ申れきやうゆま
つかさみおとものよしごとをこゝへて
けうあくとくいろ志かまいこよもりこ
遠とついもんしくのやうとていは
せしをものつ二言んし大乗さんして亀
いけりしやうをさめてうあんふうこ

ゑいてゐいてよとふやまいたくまつるまし
こきんはたくいおしあまのさんその力一
人まりんかはうしてかくうしけあくとた大
まやう大しんのくらうの後けみすつくのこ
とくこん志れ太まやう左右よこやうまく
あれおしふうえんふんふもあそせん也
いはあしこりくともしめくこれこまや
みるはすあまやうれてしおんごとくめ志
むめいの國くんをくみゐしまうてう六す
よまうのじち三十よ國をうの一そくつまや

しをよ三つう九ころやうのくろいえいけん
しんあくのくらんまよくたえまやくこれ
つをえんふさくうやうれおてこりのあまりよ
やさしらるとうもふこみ志くりけいしや
うおやくさいくもよとこふれあまりさん
りうまうとものよおしこめ人てまれ
り天下をとりまてはるつしくさしこさを
おしへハやうこくちうつゐいてよみそむ
こあんろくさんうてうまやうとでへうりし
あくさやうもうくのさらくのすまハおし

人きでんをりーちそうしくハさるほどにハこれにて
いのあくぎやいこくふをりよたゞせんきうい
とさうすいりんや我てすよさぬておや
おりられしこころうきのぬしのめい二の
みやしたかくらのみやおんこ三のふゞた
うよりまさむほんをひくめたくまいらする
ぜう三郎四月二十四日のあいだつさしよ
國のりししよいんきとくきはつう
ハきう十郎くらんどゆきいゑあらしき
六月八日よゆはいちいつつ國よう赤ハや

うへゐすけとのへりんぜんをつけさせま
はるいんぜんのあんをかさやうてひたち
れ國よくうりさつの三郎せんきやうより
のりふさのよしをふ進ちふのく國よくる
りさそよりーちふへふそ乃せよりこれふよ
てうふくのそんしむほんをくさたく思
しくふあんをめぐらすところふよせしとを
しやくへいけれさうかいつミのかもん
くるんっ孫たうへいちくやまきっすうふ
ありくほとあるしく八月十七日れよとれ

ゆきかゝをもしめしてゆくこれ四郎たう
つふいせのかとうしけりきこうけゐあい
けのらうしらをさしけのりしてしらと
てをりんぬきられそかつせんつもしめあり
くるちてよさかりのくふみれちう人おかけ
の三たうけちう魚いけのちうおんしくわす
もんなあふりこていしもしやまさい
けさんくよりてうしかこれのゝあつすむ
けしかうつけのつきもの心も我おて爲し
とてせむうれてふせれうてふその中よ

したけ山九志けへてハちて志けらしおち
あり志けおりかつ魚いけのかんへてまそう
きやうとふめしおか浦さいちてゐ達ハ
そのとうをたてし國とつらうせんをを
らけ我んともひけるゝこうたより
ごものむそんよりやこせんとそもせむっ
ひくるかうまくうつのゆいとりかとわよ
てゆきあひきんしくふうてうれくはう志
けたくじちをときれてくかのりのらいさ
てふ志りよかてりくりそのつら志しかつ

さいゑもしめとしくむさしのくにのその
とを一千よきこうへおしよせせんさや
うをすてゝそういくさハこすらじもうまけ
ていまハ大すけ一人かなりかなりらし九
十よよなりなるうちそんおむついそすけ
かそひやう兵のすけとのつふちんいまふ
さおの速ら一人をよのこゑたらハころ
こさふそてまいきとすものそむつありさまん
ぬさてもいごうのかうなうハとらよ重き
けしのよい書ふうことのありなれさう一

うけせんとせせむかひなるうたのこしを
大宮山じちどとされぬところでてそのは
やよおもりてりよそりすけしのふせいた
はよよりておらつハ大けくおもりまなれ花
はうつせんっなつてしとハ人てありなは
されしとをといの二郎かうさうのあく四方
はくきの四郎いのちをおしますそうひけ
はそのひまかもけとのかうき敵ひてところ
山よ入敵ひぬちでうれ三郎む孫しそれさ
ふ大ハよ一をうしれしなりすけ敵七さます

ちゝさらし犬りうハふゐりて大ま乃ちゐうよ
あく逆その族のはさやまさを志のひそてあ
ま乃國りしきこさへりくしりたまふとそてい
ちやう山そこうしれんてわものこ太郎との
しもり小ゆきあれてふ孫をとこゝろせた
かいよかつせんのきさいとうてこゝろよりをも
りハきぬうきれいくさは大すけうくい逆志
すごもうてりられハごいおかきさそよい
しもしやまのうつきんよ一つくたまはきし
事ことをかへりくみうゐすよろいの袖を

そぬ為しうるさてあきれ國ふまうり給れし
しかをかつきふこへちまのすけをあれく
てきらいふぜめの御り給てさすりしまの國っ
まくろのふうふそつ責たますんくらさゐれしよ
りしてかし世くらんこうまき梅くせける
ハあかりくりさいも念いけいおら誘さされい
こきれしくぶつてきむかりすとりくさも
あるいもとりつしおくをこゝろてきりそく
をのもありよせんちやうかこらへすし
てむちふてしちおかとき倒をありきれしふ

けふのさよあらしをへてしめりのいとちを
ところ也せけのしゆぎやうのすゝめていはん
ちうをうしんとせしみとりてしふかくぞさ
つてゆきのつめたきへちやうよせぬしやめ
よのはん人をんくもいはこうりこそのます
ぶしゆうしあうをふんまいうのつまりをいた
まうるかゆくよけさしんりくちくしいし
やうしててんなちをちうちおたやゝなりさ
てをふちうをふけまいしいざうのにうた
うをいけしうまそせこのこうしのすけよ

しもをよあけられるはをせん月のさい
くものうれこくしそめいらうよういい
もろといふ雨まてうう魚をとりひらきかる
さいちの十錢ふきおよりすさいちりし
やうとををねのもすせんそけうてしれし
よのやういこうわらつれてこともやりて
しうしんふかけふ思ひやるきそむさんふ
きましやそんまやく錢中よろうのこえ
けうそうしやうかでもんまけよあめしい
のりのためやまちの國かるへや一錢ふて

やくそうゆゑんを一七日かうせうきをほ
いかくぜんかくいゝハ一人こもりて佛の日
ほきやうをちやうもんし給ふ七日よまん
ほるとえぶふかゆよやこはう孫をくれハ
まれハこの山代でまうなり七日のちや
しもしよりてあんらくせうえよりまさ
はるんし進しきよとてすひきのあふらをと
ふかしくりそのとをそうきやういもくま
いかあめをさうこのまかするものなみハ
あめをふあしいくとのたすくハ大きうの

ゆ間しあくして我はうあへふそてへとかくく
いへしをはりなうしきやうかやうくをは
たすけ給ひとてあそびをでゆともあめをふ
あしよりんとやはうふやをよかついせん
はるてしこはまやうしやうありきのまうす
ふまちいかつちとふりて天かあありあめ
のかるうニとえもかりふりされせきの
まうそのおくらけてぬとさつへそおちに
くりそうきやうあそしれなまひてるのり
うつをちくかとをつよして一日こきやうを

ましのしやもるまへりねのくちかれそうまし
やうのゆありけりとふられよよ重すぶしら
まやしんをてんしそすめたくまやうす
とへくりさてうのあとちろよめりので
あくだそていよふたへせりせんこやうと
ちうぶへ火うのぬとちうの上らうとハ罪
しをんしせんしまよくしちうう
うしてうれしこれふりきのくふやさし
まやう国よありうやうれちくるいとをし
こまやうをハ孫しそうしいころつにし

たうなさくいこみれとら孫ろをさこしやうなられ
とおうこぬそおろつあるさまとさりこす
こさりしりとあんしるるふおやれおつ罪
さじくのこあうとくんさいのあよとてう
悔くしもりやよきしさまよ罪やうさまやや
うせしゆへてしこうしんらう佛めのくるしそ
おりくへりゆききあく名一くんのすおり
せうのちありといくきとつ升みはまやうよ
きしくくそりこちどゆくとうやそうして
よすもとをてさしゃる鶴あうおいこぶこ

まのたうりよちうせうまゐるいんくもの
かまきさるちてりふざくし仏のし天ちく
よ大王きらつとれら人をこゝろざしもんとく
國くをたつ孫るるよあるらつにいみしき上
人ありとそむらひを作のりしたまのつふ氏
まうあさ拝ふ出をこえひ孫ひて人ゞとあつ
めくじちたまへしやう人まり孫ひめと
すゑれもこみこうりゝ志うる色きとうろき
うるとこ連しの蒼れゑはよおのしやう
ふんのくひをこさ連とのせんところくおして

すふよちひしてのくひをとらうりぬ大王
ゆめふを志りたまりてこしらきてくその
しやう人こふそくこつ孫へせんしよまの
ぜてうりうりとす大王う大さようおしみ
おとけふあけさたまふとれちりけのつとま
こくむうし國王うをかいばまてとちうふ
ありしやまやう人とといたとつくる孫ふ
人あり志うるあひとたぐうへをとそてあろ
るしちうしゞをきふくういばれくひとところさ
こさりぬをのいんくまのつうりすしてごられ

きりんくわうやうあるとのさやとの
なまんもおくまうだられのがんくわをつ
おしみてそくのころけりさをつくして
ろつくをまめりき　なまれりるとつやひと
をうくむくれをしけ悪さありいとうの九
郎よそのそをほうこそれとのふでさい
をあなあらきめしつのしはへこよしおや
ぜくさんしをふちうのとのく子絶んか
くぶしそのつくいりきしあれかつぜんう
御さしくさきとすもうたくまれらんとむつ

いしかりのらいきてはうこそ人よひらしく
なつまれしたくまりるてこそそんぜすさ
あらんかとのそかいくれをめさまんすしを
ふへうきはおんなるへしとのそこやすりなと
やさしくそおはうりるさのあうちまもや
さみなもおもしたくまつりはとしまさう
おもれまうまをりこさことさらしめさるれし中より
ところのをんことさあるし　まうれしとをちう
つらのをこえりあるて天のやすあんをいありく
よそこさらはわしこふそはしまりなる九郎

すゝみて中々御ハ御発んとてへつらつきまもら世
いけへさりうこミの御ところとゑまもつ
ぜうし侍やつかまつるてとさいさんす
なれし姫ゆきちいもくたとひくこゝとある
こりかともよあらそもつてかくハ斜のつくこう
こけ庵さとおかせくさけまなはをちゆう
おとりすさやとふのやり庵いけふ御ごこ
うしろしなはちくろくさうのかつせんの
しうれかくの國志のりうかそさくこう庵け
なし一ちよみじちしよしてあ銭ちうあく

みとてむよさけうられかるまい姫そや
つかりきられよきうしとおしまぬものなぶ
ありなりさてすけとのこ大つ御こてこより
たくまくりしゑまのこ四郎とうくれしなり
あてをおりうてうれ四郎らうれ御さすまへまし
りさてこうゑまのこ四郎らをも中々なれしこの
おかうしたゆうさかうい姫けのまれ國をは
ふたのつらむまのぜうあの三郎ゑ原ふ
のつらん八おさのて太ゐもつさつくかみハ
うつされすけらのくふみハれてひゆう

子どもをもしめしてくにしくつさふらい
ぬすよ人さうらはるる事いけよいや
まゆをさくいとの志めんのかゝよおさむ孫ち
む三郎のちうしやうしけひうとさえとし
あるいはむらさき志うれむるやうしつ志ばす
よさくよりはそんしよいはしやてさい三川の
かくのりより九郎をしくらんらしけはす
書よしるうういれくみくは一てうのこう
たくよ重おもの小しうはうられくふみ
い志やうの三郎もん志やうをもしめとらく

ゆらくに二十八人うれこれりたはくをの百八
すよ人おりこれよちよ志ん事んのらとのは
とれうこ人おりてうの二郎三川入のかるゝ
かうさのすけふりさのかうは身ふ志こう
しとくくまおりとそのなまひらはさてう
まくふかこよ志まとしめてらうさういけ
のさをるゝへきをんそてとつし孫くりこ
速やせいすうのもてしよ白んのすんてう
はせんでのむまを志しきんのふ玉はちらさ
うのうはきつをどやくといまれはよよ

しらきくりたまふ。これがまし。さちやうせんれ
けふりゆふつちのりてんでまふかいけまハ
ほりてすつしさをのへ。くんまんくみつこさ
なまハさもんびわめをとくといふわを
こみこさこれしこれふたりゆくだび
しほりあり。みかく八まん大ぼさつぞとう
うけらくもはる。おうよあがめたくまの
つぼさきをつくやとしもなんじむの
きういしやうしよしけくうばいふんでう
のぜさまやうかりそのきいしやく三かよ

ちうあいしんくうおうじん三くてうのさ
まくたれゐそしちふおうへいふた三そん
のしやうすうこやうけうくはしやうこし
れたもとをあうし給くり百くうてて
こうちりいをむしてこてんでいびわの
めくミ御しますまうくよきれけんてうれ
そうつうらしそんしきまとりなまふと
りやうんぜあんおんのいうゐんハくうん
おんせいしまてんつきをけ給ふこしやう
せんまふのまやかいむまやきまふりの

ちうれをもとゝもしたまふ あふきてとまん
とゐさいおんとものはかりことちしさ
まつりこのためよせしちやうあるいんを
こんせうたまつりまのたまたうれしふ
てそのおうたしやうてをけうしうし
たまふかりきうこやうかうしんをきやうた
しをせいもはれちかさしいつはりよし
てもんもんもえもくたひありまあるい二
癸卯九月四日よいおうしせねあやしくん
のねんせんをうしありん二きくん 年

十一月七日よまやうゐくしてたおきてんふ
かすおろし三十二月八日ふ右大臣ややうかふ
みんをさしもちしさくをいちやうのしち
よめうしかつ事を千りのかうみさた
てけよやもるうふくれ國にはさくせう
きおひしとれかくはてしにハんしう與氏
ぞん一天四ういとえさうんおひかぬくさ
きさとふりうりまことかくしきのつきしもよ
てんかあんおいもるとれハけいしやくを
ありいをとハいそんこう思氏ちきありゐ

いけもんしやうハおりつかつなきこのもの一
ぞんとおろかなりへきとハ思ひくはさてても
いつの兄山まそしゆめおもうやおるしくあ
まうせたくまつりしおりくんしやうよあつかり
夜九郎もてちあるしつけのそうついおし
よふさかりけめふかまうくやへつけぞう
もとふんそうかきんと紹く よ大まへ兄
くりやハきんそふハあくしくあまくふこ
かなましこんとハ一ちんさまりりるこ
のおうぞやうきん文六ケ所ぐなまひくてう

おんかうおりるさてをせん給しかくら
れ三ろうをしちうりしくこう一郎すけほ
いさんをんのせうよおりていそうとくまし
まけそのかうやありあまくもいのやう
しそこいかんこりそのまそちう兵ごさいの
ゆそくさうて志こうをされし世さもとりう
むぶとりハてんよありてつもぎをくく
くとりくしを又けよおけうおをれありつ
りようと梅くむうくハふうこふちよりり
てをくふるといへどもついかはくりよあ

うるし道へありすけつ孫もやすみくま
かういミしくてくりわくしおころを
けつき面よれくといへどもこゝきたい
ゆくすへつれぞくしてついみうけ
のかるこゝうむさしふ道

賞玩物譜方 二巻

A 00
5796

九月めい月ふいて一まんさいまうちく
つまりあけくまり
きやうたいをもちのせいせしまり
ゑんたうやうたいめしれいつうれよゆき
しまり
もちおけさしまり
すけのふうやうたいつきてかまくらへゆき
しまり
くさきへまりてこれゆきはしまり
ゆいのちさいへひきいてされしまり

こたびはまけたくおいゆはぎまつり
きんのちやうしのうり
しそへつきてかくりよかこれしす

曽我之物語巻三

きやくいかの國あつさまやまのふもとふ
こくとうきへもんのせうもけはひふしだ
ましかまつれ二三郎っ子二人ありあまとし
一まんとりれてゐつよありおしくハもこま
うきされて三つよそやよりるちくにおく
まてのちいつきをまくゐ陀さまてちくそ
ゐの太郎うとゝふそたちゐ隙やくせい
さてんもるりくふちくうすとまもまもすして
あけいくるこうおさんまき人のうこしけまも

あふをまでおとくまでハしきのくに
おりくまでけれどもハあさまたもりおりから
あつくふきいてゝいふらくもすゝしくハま
をもしまれら二十ふやちゝとどちゝくさ
いをんのでござやらんとうちとりてきく
のほちくろをもあくさめちくれけりやうし
ふをちりせんといそのハしはハ月日あり
すゝめかふをほうをのほもまいせや
うさすをもよふゝらへて九七よそあり
よくるおまつ九月十三やのまあくゝのぶ

ある月おもしろくまあさけふこそやうすあかく
ぶこよいてゝあそびしほうめけつまゐる
かきっなれしかしみとびしほをいちまんっ
入てあまほらんぜよもそまゐ友くもねの
うたのいつくをけりてつとび折く友んび
とつゝをこふまぬあつのうゝ山しさよお
とくこそでふよかなさしおとうらやむへこ
まきらかなこを和ゝ翁ともあそへハ花よ
うちつれかく迄もつまでうゑほありあよ
こゝろさふハあつをいつまをありしより

なりしかもおもむきをつきよりしそら
ご覧ぜしをおのがさとしかりなる事そ
ごよめ候ある哉一つハちくはどハもる
三つ有子好ミてそ有らんとつハおとく
まし哉あなそうハまことのもくなきらを
そうこのまちてつちてかりてこれしとおく
もつその人つゆくおもうごはのまさそう
しあましやおやれうらさとやらんのくれ
のお孫ハいし申せうさきとのうやとじ
ハしあふつこきれてそて少ておとくおくら

ことおほくうしのましんやさくらんにあなた
うしうくすゝそとりくハしこまりこらくて
いさうつをともくれをときはらをうくてう
なふへはさうさハなはそとよそまますをき
つふなうれちろなのて思ひてしへハ物を
なへことよのしハけいさふよはなるそま
達らうちくハゆゑれきやうすふくきてと
ことりぞもいなれくるありそおもれちく
たよましまをきハむまとをくるともすい
しこたびおとやしきあらことどいめつこけ

ともいふゑのあらんもしれずよりかさあさはい
を道よ[illegible]道をむまゐのでそのいけれはと
うしや[illegible]しとくとられもしこまりこそ
てそちらたよましまさしかつうつゆに
のけるくひふりあ[illegible]もそつくひいさ
ぜまうすへこともちらなちやといへ
こあよそ[illegible]もよくこものこうあまた
[illegible]あるらんまてゝこ[illegible]かしつれてつけ
たけし[illegible]ちんつ[illegible]つそのす[illegible]
いう[illegible]くちるどうちるものつ[illegible]

月日のあゆみことにいへておもしもとにてをゆ
んやらはかかゆきいぬすやゆくこあよう
こうてさうまうは足[illegible]さやうよりふ[illegible]て
[illegible]きすてはいおもゆくこゝろよとてたけ
のさゆきにのいはこゝろあるきしてをのや
さしつられあにきやまきをつふたこちた
かいと残しいつかいまならすぬナ三かや
ちゝのこゝにはよゆきあひうやよこゝろの
まゝみいとおさんまてまうさてまるこ
とかてさゆく[illegible]大すのてさゆこかてはこ

おくおほきたるよっやすかくひをこえん
ころしやうしれかりをひ記こありたうく
ほしありそもあるこたちをとりふ我一二
つこうつよしちこありてもてくたちあるまふ
此さし人みうハやくそのてくりくほめの
こらしをきれひでこおそろしこ人くれく
またくのふろちハんりみともをれくれし
いそはもくりあみそうこびくほもくりへ
人さふおとろきうしらを一まとこみまよの
いかしいもこてういふをらさほよしやく

しのやふれしるをきりたまつへこと
へてあやしをこそん一人りすそれのま
らんへつやふでてほとめのとうちもくし
くすてとりれくれもちあらしくあらし
志やうしのすみそハあはそこしよあくちら
うつうよきけもしのぢちうあうちいこう
とひれし人ハほどのまうこきことせつした
こまいるのともしすむほんのとういかり
しかよみさらら遊たてまいもしらハもん
ちらをその志のさくしよそくひとさし

おもをかまへさゐけるへし思ひけれ共ん
からをたりのしちあるをたよりとめ
うしなはそうしいふよきのち程めく
思ひもよきいのをしくとを色かりすあさま
しふすやいまたかりまも志うしめきれしめふ
はゆゆしありて志てすかぶるてはたつぶ
もるさとおぶゆはちりかまへこあそぶと
をうちへ色をかうへいつへからすなんちら
うらつきあそみを物のはまよ重志のはだ
はみいさこおこはとら給ハ身つくくゅう

もとをよいさまの志くうち志ちはくそのさ
おやみをそかぬこるし子のそたつゆく志
のつむさんさよし琢よなちそはのるそと
よめのとかうくらを志てせぬそちりくよ
りゆ人とて二人づそてをとりはきよせち
しはよいふやしまるとやさしもあそろし
こ世れあるよあくし思ひたれとなさやう
のり人をきりきちもようるへこうして
さまれはのよいりなてめしこしききん
こく志さいふをとこあハきあんおそう

さらにこそぜひなるいちまんをかうち
あのめじやうさつけてねらひしこまりハ
じやうまらハめのとうやおもしとおほしくらう
さうよあくさるゑどもちらぬすありとすけ
道ハまうさていまよのちおもれこよ
らされしかすまへてくとりれてたちぬそのく
ちハよそめを志のひておそくいなるこ
くれこを人ヨハさらよ志ぅせけりくりあ
はほのつまくよみどもれまらん色をもくの
このまりうぜへこふとくまうくしやられ

日ハ一まんの御をよいて人めを志のひさ
めくとあるはくりてこまやもおるしくいそ
くるゝあるみいかうかをつくくらへてふよを
おもれたまへもあるまみハむかひれやさを
みてさのともあらせたまふそやとりのあよ
かこさてさんもこうとよおよさやらんこ
とのおうみちうのおとけ思ひ出られて
これしくおかゆけそこりれなるもおろう
よわさらせたまふおもうれおもれたまふと
をもちうの人をたのまーかへてりたまく

まらんへゞゞのさまりはふかしやしきの
してあそひはりんそとちつきてかくは
られもありまたあるゆふくれみよよちり
きのこさしれあめのものあまるるおりふ
しよもととまうりてよなちいてゝあからゝよ
むぜふらにはいちまんそてをひかへはく
なよをおもれ給くま宮をのこをたよめを
りげてさのぶゞりせたまふさやおもくぬ
ちてちやらんのこいりきはつやどふふ
のきこさやらんあよこはなふとうをめす

ほとそてさめくともつなこいたまへまんおく
とくおてこそとりておもくすまぬちてを
こいしといりんよもりておしとのこおふ
ぜらはくもくふいさやまいらんよそそて
をひざてそりよりはさらしも人めをしの
もんとうしたうれみいさめいさめらまて公
こありとおもくへこをさすかおさもはさら
ふてしめふよそのれひまくのをはくとや
きく人ことふまてさをふりあまをもよお
ごのはなありくりまうちく〻おもれいつ

きくもくたりせんにんハ二しよをうおさし
しとハりやうの事よ出てきたりさきし
ついでよろこさを思ひつまくよろちぶ我もし
てんれくをねよあけいせい一てんよあまた
きてしあまられかをいミしさふをかへつたへた
はい氏人のすなりうくてことせつある
秋のすくるりくと花めりくりもやくを一
まん十一もこまて九月そおりふくるその
ちうかまちらつ月つへかおもせぬすつこ
そりてうさしる中くをいつふとたつめるに

かきくうとのさふあつとをみおかせらま
くるハちりくんのかつせんよかあよりし
しともみこさらき今いしの了くめしみよりと
をおはさよこれししやは氏てこおこ見し
急いけをちてしくくおろかしてし下とに
のまてみもるりまれしらうせんさかおはこ
てハりきをみよさかくもうすしやあう
出こおふせてさきれなれもはをん出ころ
のきふられとを一こうよきん中とすらけ
れもいの国のちうかんくこうさんへよし

すけはみつしこまりてすゝむるいおかせの
らとく雪ういきゐまりきうたゝらう多く
へくけるころよまちゝこきはれはごのさらよ
おきておきちくゆへ姪をへれはてこぼとも
はへきをのこう一二人ゆくとゆ多れしては
ますりありたるはつらひとを志ゆも志て
さはきたり力のうへやらんとめをあまを
こふーとよこらさはいおかりたりこさとさ
ちーめされてはこきちくうりりとも
こう志て狐ふよ物そと也六つ狐ありたる

むすけつ狐けり大まりりてせん狐んきら
きまりうせん似しいとうの入へそうきこ
あつやミつかくちゝおきつよおくきまく
父そかれ太郎かうとくよやじをこぬせい
きんれのつらはてことやなりゆへこ力かを
みやしんはる物かくはとやあけらりたれ
もこさきこいさーめーすーこなりすけぬふ
をいかんきてけやをこさを乃よ男氏けるよ
す恩のてさをやしられおくらんふしこさ
よりをこはもちりゝめせよるめきはつりん

たけをこはまくりうしこまりけれもい
そこそうにくさりいこうのふしくてうま
ことをとうくしおくらしさこゆりそさく
そくしてまいはてしさしいさみおよせる
おそれふてこうへとりひよとそおふせくた
さしゝはうけすをうけ大まちりはまへを
まかりなちいそこそつへそくうりゝるす
けれあうやうこちくおりしかいしやを
たてくそうしのやおしますこでのはつかり
はよりけすをさりへりといはせされて

すけのふかきのまするらんとおもひよう
はるはいりめつるしとそれなれもなけす
へいしこはらくさらいしてさしはらへより
のはたかれとこなりいひてゑんかくるは
まするれしもはすちくいひをしてさすや
ありてはたあゆるこさすおもめおもせ
をかりふりてはそのゆへはこいこうしの
れまこやうゆくのよしさこさこしめて
りやさとのすへのてさあかりそこはくして
はゝはてしとのはつかれをかりりきのい

りてんこすなれしきすけなふとうくの魚ん
しかをとよしすやてありてせんしよあけ
さふつさとのをとなつわるよすけみふよち
く魚つくをきさあさとの二人ムいしかけ
三つかてじふれんそのおそれいまた六ハ
速さかかうれらうまくよおくきはぬ一う
だるろわ思ふれあさうくけりしようきら
うもくをおつさふおく速子どもらるよ
しさてはゑへ志うを志てしくはうへし
ふれー子どもあるーいかてはさししん

のぶけにおゐてはれらかおそれもなうこくに
あくさまんにおそれおほくとりもてしハ
ものそのごとも十一九よまかりなりはもく
しれなふけぶけよムあひたきれしかもく
やらしたてこれもろうやうのおかせを
こうふをはくしとこうそんしはい称こよ
ゑんなれとのハ人のこともやうをまうさ
ますふくはなほとてそてとうおみおりあ
てらりうけとへもまもてふもてりりとそ
とをハるやをてつきてまいはへしさ

もあかうしとてうちふかいりりつまらつゆまくか
すゝるはこいこうとられさミよゆてさゝて
うせなまひしそのまことゝ二人れはおるは
とつともをまうゝせよらつゆつういかつ
ちつうしのつこるまでといひゝれしはまく
はこゝろもあへすちゝなしやきれはふよと
ふりゆくよの中そやゆめとをうけくどを
おならとけよゆめらしもさむかしほくも
ありなましじさかのうへのうれしさもの
まら二人をもちてこうよろつゝきもなく

さゝつまかのおらなみのをはまつてい
うせいきんしておこなしくをおりあんと
つき日れらくたのもしくのうられようけ
ておもれしよこさらまゝいらせてそのくち
うこかはなにゝなう給んたくをろしを
よくろくしてとみをうくみをろしなまく
とちはすふーむそのちはゝそのぶらり
まてこゝへくるけふやさめかようてく
遊ふれみこうゆくいろのゆつまれてよそ
よのくしそあまれなるたゐわ息れのあまる

りはやりハ二人の子供をとさりのハさま
ちゑおこかりつこふてくらゐけるハお
じらいこうとのこさゝよふけもくあらう
ふそまんせしゆくよそのまこともあんち
ぢとめさはそやいつあるつこのむくれ
ふそ人しをおかくれけてさとありぬらん
もろこしざよげりふうつあんちらうせん
そこう国よそのそなたまよつハおとはへこさ
はつぬ人いるへしすこつはまくあり
ごらとおそはくまするくさいこれところふ

てりみつひふくしてかあつまりさしとい
さんしおやおうちつ世よありしゆくよせ
そもんてさとをありたまいしついこけふ
くごとおもひふりておくすはいろあるへ
もしをけふ字ふとゆせともおうこよもう
むせひくしけふやもりハぬりあれども
なんちらをとめをさそのつりよりう
あいていかみをありおもしろけやそう
りふんとあさくはせ二人の子ざきそこう
まげたるりハふくしとどへてもくしを

かゝりそるはいやしきものゝいふる
まそなはりふしむすけりくるし大けり
くらんのつおしてをとこれかハをさしもそ
おかむしとれかりて又まこけをおつゝ
ひともいてまちのこへゆるはしはなお
りもくむりとそんしゆへ桂ほ思氏ハつく
色きよあらしくしくとせめなれむすけ
おふけたまりほとそうましかしさは
いそかちをいそさなはまくもくまをつき
思れ事なきこついしやくするそあまれ

ある一まんうあやうそくよ今せいかりけれ
大くちんもんしやのひたくれおそきた
りなほまさ王母はりまちよ志つかことある
こうもいれこそてにおもくちもかりさせ
かりなるうやうかゝはしやくせんするを
いまをうこりふてもやとうし猶よめくり
まくかちつくくときられとなるよ一まん
うきるほしきてれをしもとけへめでものか
おさてきあたなるあきう銭の花のすいつ
ゆとれれまをのこほためしいなれをのさ

さてまうつゝてかいうぬまでや山つ
つれひとりちくらんをとゝさかりへの公
ちらしていよくそてあうぬまよさされいふ
しへハおよごを見けりしいまやうのをん
ひまハめよふち、思ひのこせば事をお
しやうてかくばへきうちたふきさしあた
てふうわう様ハむるしきようへらんす
ハふちやうありてうろん事をしますはつ
りそこおろもさをつましねもかよそハ
す一まんがくなしやうにあまりのあけさ

はそのおもひを見たくすゝきまで見ちやもを
つはてしうをおほくすをしされまいら
でしせんでの事にあれしめぜとそれけ
迄ハもとまうあにつおふぜちほうさらく
のあけさをのとくめゆんあるゝのおけさ
ぶうしてさをいくさしたるすをはハもその
うへいますたおさちくゆへもゆるしをよ
へしちりけみをのすゆくまちてふけふく
しくすよつけてをいよくふこりそおしう
てうるゆりごをとハおもへどまゆしさ

めでたかりつ人らんまゝなふちやうせこ
こまりいそ親おもりんすをかりふしくれし
ひとくちんまていつふをならんといそた
ちゝおそあきしれなるすけめふきしれをびん大
よせいしゝるはりとをこさらはくまてしいき
まのしあれくもよきやうよすなし　うまいし
いうさま金銭はくみなしおうきめと
おほくそりさやうなりともいのちたよあ
らふとなくさのとこで二人れこ姓といそ
なれいておきくけのづちこうあましふ

し
れまくハかちまゝつ入るせ也まくかしこく
ちてのおつのとおもそてあも人めぞつ
何するまゝまゝのわつ障よるりぬきそう
うこうしふそゝつ月ろしをみていあや
うよまよれいでもおもゝくやとの一まん
とくましやまと下さう力ハふみとちある
へさとこ志律おしますなはかなしこくれ
ハ上下あんふよところきをよりよ志もゝを
となはりふしむうりゆきたとふへきてこ
をなしゆるいろもまれくちよとりつ斎あ

はいさなれのそでをひかくるゝこゝ
けと思ひたけこゝろのめみとハやせ世をかこ
たまぜさあくすまじふれはつゞけ大
まりてもしぐばあまれとなるものしさよの
ものふかしのそでをかなよおしあてゝなみ
こゝろもたいなみだをとゞまりかねかいかと
れなりまてまとひいてくかまらうじ語
もつゝとおもくもてよまぎらの事そ
あさ子世をじつのとせものてりまうハこ
きうせもいそうすあてよきつゝあとくまり

くりかへしのおもひさしうとおもはつら
まてあまれしありもゝハことをつじ語も
なくをとちさものゆきくれもすもものた
とまゝよくり女もくちりそさひさた
てやうくういしやくしてもくじちふそ
りりよくるちかのなうよそりくらつけ
はい大ぞ大ひのせいまゝんゝあるくさ
こゝろを花さきゐるとしをこけもしやう
まらういのちとをたすけゝまハさらんこゝ
まよふせつのいのし へよをふうくたるをと

うけたまはれハまいらふこゝろんふまん
ほんぞこたらさぬ志ゆゑよりまゐらせ候いの
ちをたもちけたまへともたへこのまゐりるそ
むさんなるせめくれ事よやもうけにむ
つゆくとれ候はハけふやうきらか父の
うらみしきこいうあるふちせいを入るん
と思ひこうきしよかまゐらとせよたてしこ
おもれてつきるくいれちふうへあうめ
をまれのちゝなすがりつ候もひくへよ子
ことのためそうしさられまうせてれの

ち一日無しれもことを力ハあかためよお
しう候へこ孫うもくハうれらういのちも
とり殺れてまゐらせ一志よにわのへとりた
まくとうたをおしますあいへりまいと
や力よ思ひのあるとらかハしこうをよし御さ
ぬかりもりけをうつゝたくまんてもあさて
かくと死うつゝてハあさすゝめぞなる
こうぜめくのすさハおほしなるさてすけ
めふハうちもうを詠ともみしちうれしてこ
まをもやむはとハふりれさる我よいりて

うまくろへうちはさよりかれきこんやハもは
うまかけぬらんよそうけをあつやくしふ
とくめをこそりすけおふハ二人の子ども
ちうくいそこよれしかりと思ふつみをのこ
をもくそおもてれかなふありのよもど
あけやもこさくまなちにのこさともは月を思ひ
のおかしはつこさくものとりとしあかしくふ
こあうみすもゝかのしらこそむきこんなまさ
すこしよりしたさへとしばあまへきり
くれもをけつかさばうよのふをおくりして

かぎらうすハ一つみたのそだくすつる
いおかなをよこさやう小中あさえしらうとう二
人ありと云ありけれし人とまてと小思ひ
りうるあり内まあるれまて宮と太をふ
なんよおほしてけ小やそ子あるしをいなふす
ふう道れもとつたまへ日さ人れとやつな
をやこみあつ孫ごとこと聞てうちらよまのよ
ふごハけふもてりとお見てけすく
とふとともあまるしまちしるる力さてしく人の
づく性えてゆりすよそ年の凡れあかり

ことなりしかりちうのおよふところそとらう
りんあるへうしすんちくけやもくおりてれ
なまくとそひそなほもたのくもしくそそ圓氏
ろるそのつくちうけまく候まゆうしこま
りなれもこさ候あんしてさめふハまひう
けりけるそすけぬふいさふやなよひけ
はいうくゝおし見すへさゆふへけさ忍
つらとまそくそくしてはけるとおふけは
あひてあくるさまらすてはまろうれんて
かまるやそうの太郎ゝあけこすよおよし

もゝ世ゆささ國とてまそゆへある
おふせ御そせんちやうふしていちめいを
もそはりん手あ菊代みすともそれしん
ましゝやうふかあんきのとりしなんとはり
しふなすなれもさこことめされてさそ
母もおしろらんあるしとうといなれお
うしいまたおさまさのごとおりあけこ
はるうともおおせらもなれそこ氏給さちても
みとり候さうしこまへこすかなは候をうやう
かすりおなにしおかくゆへともまくり圓氏

あまりよふびんなるまゝいにゆゝまたお
さあさそのからをよびんせいしん此あと
りけまへよあ作けきせなまのゆくりしさ
すゑれもこさとさゝしめされてあんちうす
ところもてもりとおすへ名いこうつふり
たうよおさけもくあたられしまとこゝを
およびぬ病ん三さいのころをじしふりま
あすれさん女もうさんとりかくされてな
けさのくよむらをえそのづくゆびのこ
りおかそしりもをとうらしとせしうみ

てうくたとへてやるてゝあしせめぐりけ
のくふ一国のめしかをあつてやとあけく
遠国にいのりしるうていこうよありう
へさんと孫のにしそうしきかもうみをの
れまへといりんをもこつ志されふんあり
ともうけころんとハおもハゆりさいまん
やりきら高言んさいれまこあり志のをち
やくそんありいそさちう兄まかくけう
やうよかり作魚よをとをうしむへうし
すとおかせくてさらしなはきうき孫てやよ

おくりてはぜんをまゐりなちよりりとゑ
さうゐさすゆびのさきまゐるついでよとさ
けくまゐりてしかくあらたまりすけの
ふおそしとまちうけてさらつりのちい
つまらくふゆきをつまとよきいさしや一つ
遠ごとこいごうしのくふちらむしのより
とりよりなをまではをのてりありて
まうさみれくさのつけまそあらしめとや
をききものんくをふりてはついぜんよほう
ぜんにきよめのくちつくをよりすとい

はなれてもけぬあかたのみえしちよくつきく
てくいまなかなふおしはよやとて二人の
こゝをたちつけてあやうくひさつく
ろいひんのちりじちもくれあんちいうあ
はむくいまそちのじちりしてもくよおく
きちうあいのあやもやうよもあきいのち
たゐを十ゐ十三ゐをあくすこらはくのこ
よなく手もくみを又四八とく〇〇ゐくるすゑ
れかしこさよすけぬふでもんちゐよおく
まてつらちとせをかる色さつをくとりさ

そこせはんちろみとはてこしすてきん
きやうしたをきなくもんしもくささらいぜ
みはりふらす一しちすよむすれしあふへし
こおもくしよむせはくりとしもこさくとうち
子の御すすやすれしらおさおるき陸ゆる
されをこさらきんすちろうのおよひすはり
ふかしとのゝ御かんころありかく思ひ
たくまゆりけく情もんせいゆめしくなる
ましこさ事なりもゝの御おもはいよく
なとうるてそれしとあくさめてくまり

ゆく事なれありてまとしもかりまて心くより
かうのるかそあはけすくうさいちよを
女もうへ事はさつきちうもんふりくとの
ちしみつ道らうちくもとなちこさてけふ
やさる趣のことをといこうもうりゆふよ
おくもしやうよひつはさてもかふまて
御ていく大ふきあまれみむさんあるかい
つまいまくてとりそたく御まくやめの
とのおもみらんてさあることきさんへおや
かうれきむあうはそりしゆミとりつ子の

ものみておやのうごきをとちなくるとすつ
たへるすもうきらうおかうおしやうある
みて思ひきてきなりゆことすのこおりと
ておうろふむせひなはちおよふをおよし
けるを見ふたもとどそきなりなはやうを
てうけもえこふりとれつうけりゆくと
りれなれハすけめふかまらをいそうてせ
ゆひれをまくそいそなはりよみましめぬ
のまくらちうのらてくしさかうきらうこさ
らはくこんとそをんせんいちそおきん

なつやうこをしまのおもてかうとら銭すう
てゆくちりとよひつくのあねミふ銭もうく
いのちをはハよふりよなりすてよ志こさう
まいらしいて二人のそのごとふ雅りよけ
御亭さまてハけり性なしなやゆたす音ん
となつミしかも一来てうきらよもれひ
ゆけるハもうつうこよ思ひおくすやある
ととふへてふみ事もけこ身へはておか
ぜられゆくたくしさいこハ四おしへはし
ちらくおもれこりて見まれみをムハけり

しこ〳〵かりはうすりいんへござわるハいゝ
かごとへしおるかしはぢろ〳〵ありいま一それ
ほんまきてとそれをあへすおまらしにむ
せひふうくあけくいろへなり一まんこ
きこゞほておかせらましもやとうちれまご
そと思ひ出してわきれはげてしつまくら
もうやつれとうさておもひいさいすねうう
すさやうなきハこまでんぎらつりそくば
そうて一すよおもれされとおし一へたま
いし事をすれだまふうやんをしまみさ

といろめなれバまことうちのおたくしみや
もちなんのおかしのきれあさりくひおこ
たる人にほせげりくりきせんかしまめを
のハおかりかりそうれ太郎もちのいゝなと
ほていよ〳〵ちやうやもくてきさのしみいう
かりひんのちりじう〳〵ひらうゞみのみ
うれしやくしいうよあんちかよくさけ
もしめかるすよハあつ弥兵衛やの家の
むまはつあハいのちよりをおひさおし一生
あそとよきうをし言んおやうつかねござい

りけれどもかしこくも村ふのおもとりあ
ざらくし孫てこそおきぬ家んさいこゑく
門しくハ見て孫ごをころさ・たさてめを
ふさかれたるかをあるせ見たハよらバまれ
らをたすけなすくへとこ孫んせよ一ましき
きていつまいのりはじもだすうるいのち
みてをんりねをのぞとえるはぞそのた
すけみてハなし危ちの大ちけさとよめふ
むのちる一志よよわのくとり孫つハこせ
いくらんのたすけそとよなのこゆへさい

ハかれハやよやおよふふこふやをいそーよ
そおもとハけるむばりあきしふみるころ
これこすへござちてよあいそすぬらんた
のこころうき悲しくゆくよそ見しよむねバ
おのくちんさう死てそをさぐけてふむとた
もりうまさこへかれもかりめや太郎がら
ぬさはひさそしめ二人のじはよちうはさ
てあよるまけさらんハゆ起しおり出う
きこもあくかてしおとろこさぬんをむきん
ありおくとこばハこるやくもりとあきれて

つらひあらそひしをすけゆきゐ思ひまた
へりみなましてよりこりつ帯まうすあく
かしちをのをおそれしゝよあつけられけく
まへたちってにゐけてこもやしをいらつしは
むとすなれしははもうつひとてなちをいし
せなりすけゐふとりてまへ一まんをこら
むとそえあらさしあけゝきはおりかしあさ
ほめくやさてまろくはよけあるくひのなか
いみなむきつけつしけりてひてなれこさう
あくさはへことゝろをひてはりなりすけ

のふたけは翁ゐあとゝもせしとをしちをのを
すてゝくをしゐれなはいあすく思ひこりてそ
うなとゝくまほはへありしをのさとさらまてこき
なりてしさめをひるさらてのくちおしさよ
まうる他くいまゐそれしりしをこりてつら
かりきらをのれまなたまへとあけさなしき
言んすゐのこさせんさてありなすようすう
よ重そたてゝあまれしこ給へやさそふなれ
あるらんとさらつりねものはなかりなり
まてよりちらもう他いけうなけらさちあく

よるてもけぬふみやすなるハゆゑけこにをくだん
らくまへるよめしはつらきてわが心るゆる心
やまひつくまらだまく一まつかてうんと
いゑもいや太郎おかきよりつきんて
吉ちろくと見とられしなまさとみけ
とおはしこさりてすきまんみはかふれ泡
しとんてふのをしくそ思ひなるうけときき
ゆまくふりしこまりなれハこさゆゑんせ
らきてうちまるあちきゝあうしそみせそつ
おさまさんはそうの太郎すやうしのちて

もうてしまてまゐてちうせうれしはあきまれ
あれしりしよゆあつけもやりんしうけと
こうすさやうこさしめしいきらはへこさと
ゐまねく思ひんをのまやこかなれもころ
さうしりてけさよすなんたすつき様あ
ゆけをあんちうろむへうりすとおかせく
たさんなれしちうろおよいすゆぜんとま
わりなちろりつ来よわてのさんをんよし
もりゆまくよりしこまりつけと見のもや
子すてうれおさかそろちよしもてうさ

ふてすあくはてすうつゝいそのおやそれし
もくおうしきいくごらくをたすくるもの
ひさのつこうゆくよりもりは大すよまう
てふらて家をふりとりく姓をこさていこさめ
かさのつきやゝまてはいのちよりいりかく
まうりは世にいてきさせ奉れはめそのちく
さりよきう人てそうの子ことをあつかり
おさらくきやうせんつはおんとそうしは
てしとすけまゝはせこさときさしめされて
うつものとをれすきこさらてうあみへすう

すゝおゝせくてこされしゝれはよしもりかく
ふてすきれりるとこよりつてうるくしれ
はいもりでう御仰にをすあれかりてまは
おんとすこしちうさいのとのを給てこ
そおきてをそむくはおんまていゆへよし
家事の一きの大事なふもてうきまよき
かんとさしこりてすされうりしかいさこ
をまのとよおんこふおうしゆりるうき
りしはきあんよをよれはかとのあよまう
おまをうそむこさたくまゐるへにきかまと

をこの事よそのことやさをよけしを
こなまくいこそつちさけちあそしふるま
ひたゝいまほともんとおちせられくしも
よしをりちゝよおよりすしてほせんなく
まうてゝてきくりそのつ表よりよしふや
のいや三郎もをつふおとれくるま兼んく
ますふへらきすしてまありうて遣めけり
ふうゝあまされちゝゝもしもやとそし
ゆまくふ志ちゝをこさほられぜ尾遣てけ
みのそせし人ハりふふ飽りゝをへちにお

まつ志さくありとてほき志よくあしかり
ゑほきやいさをふおよりほ多く志者つせ
られまゑりみらしれすけつねた孫さしこさ
まめかりりてうしこまめてへつすはま
てうれいさかところをやよかてゝまあと
てうなしのあと残うつ孫遣いこゝそゝひ
まそゆ人怪きうのひけをふてうのそゝ
ふむもまするよまゐてゆくしりふれ
へゝのそせしほこゝいきちゝりしきまり
そんすへこよしゝくすけよゆいやあ

けふ迄ハさゝこきしめしはかんのすがよ
かへてもあまでありそれしどいうみとりみ
よりともしもしやまれうつせんよう
ちまけてたくせこさゐありてすきやまをい
てくゆきのうちはのさもてよ出うれよお
うれしとれすもんこすそうでよくせう
しれうてまつりいまハ世ときはりひとへよ
はふんのおんそりそのゆくへまもるへき
よあうちきれしともいつのいとゞうつめ
しきハ出て候えめらんとおぼぜありて

そのうちるはなんしりもとしはかなふう
ごふてゆきれしなるそおはれそへしはるり
あきらもそれしうしふかこらすこんふちの
そせすみんとれよとりくのはちすくれう
まんこやうをおしでんふちうをおもいかく
まいるものうくむきそのはちうかけしよ
はなれてうらせおりしましてうきうとは
たすけはてしさてもかきらうとうちをふ
ちうのもよハあうきるとやさくあうは
出ハよそはたすけりへとハゆせおうくふ

きらむちくちうれさいみんをもしきハのか
とけたみをもくれたまはれとあそこさけつ
大みけくまりりて出候さ候なのまへ
一つのせいたらんふなむかせうハつきあ
ちやうをもくりんとこずちうハれふすく
ましますあまことさらしりゆきもちさ
らないまたきやうくありなりすとこう
さけうやうのあくふんをとくハつくして
しやうくあるてさうけたまはるそ迹
いきハふくましゆきもやさしこめ

まちうくよそ迹ありけのはのりのちて
ふよみハよあハてとハなくうきらそでへ
やうのせいらうにこそてならあなりなから
ととそれさらよくあーくみてなにもその
のちし郎をもかま八はまくりきちうの人
くもちうーをおもしいなるせんとそおも
りきなはちてにむさしのくふれちう人も
たけ山のきやうしうてきけたくさくつま
ろうーそもちうれもしふありなるなきの
事をこうとはものとしりあへをりさそさ

はまくよまつてきりるこさゝはらんぜらを
てしけうてめつてしとおかせくさきしけ
きハさんはしてふうくりしこまりやてあ
でてすきれりるハいどうりまこぞもとも
まゐくこられはあるへまたおさちくはへ
いぜひしれもし志けくてよはあつけは
へりしこさゝこつめつそんちのきてくい
とうりみるまひてつくのむ孫をすけ候さ
よおうてきつり志そんよおさてをいう
よいやしこさとのあるりさをたまけおかしこ

いおはつるをこれらハまさしこさまこあつつ
ちやくそんそうしよもとをのすくのてさ
とあるつてしされもちりしてもたらさる孫
をよるをこをこうへ孫つへりうをとおかせ
らきへれはきりふりしものはちやすりこ孫
てすあくはてうおおもれまてはくともせい
志てのつちいうあるふる両はははともを志け
たくわつりすてしそのく一こよ一との
たすゝつうとえつしんてつ孫かハそせす
をやさすりへきれくありをいはゑんはる

らせたまへとまうけはまうしハこゝれおかせ
ふかうれしうおもんそのふちうみおくそん
しれすかにとそうかちとよのたまへもうす
すかへめおこふりよむさしめくふ二十四
らんとふそてまゐらんとおほせくさされし
そまうしよかくしけおくハおほらくかし
けふてけたまりけはちやうのをもけさ
りしこまりそんもとをくみとたまより
うまうてちうせられてハよのきこへしけ
らつちおよくみそてはいつそまうしつも

とさうりてはおよろやうをまうしてあま
うまうてをたすけはてこう人のおをまくを
はへとゆさうれしハこゝはなりけるみを
おほしけりくりしけたくいたけたうまお
までおそきおかこすすみてはへ姫君いち
ひらんふよしともうらまたまれこそのは
子としそこよりみとりこゆられもてふ
はいのうらあやしくすくらせたまれしよい
けさひかさうれしふよみてたをすりはしく
ねそのはよろこびとおもしめしよをかりまた

らとはたすけゐへりしこきはかんきよく
りもりすあしくへてくれしきもろく物も
ゆきまゐすあしはま之中すこしぬほとそん
してへてはきんへありかはやきもろく
ありくさこいかくあしめりんはあふ
このさへけとひふこけふしくきけたるのた
まふもてく恩いけの一をしよりもにお
さけをうけたもけをまてよりもよふい
ちをせくきぬそのちくくきらをだもけ
おきてまけたれよよきともおつかさきぬ

とおふゆはされしてをくをあいちくくよ
ふりてゆいれしまみうくへしとあらう
よこうおふせりれしきけへてをやかくりた
ほりまれいもてもをあうりすのれあう
りさしはさろひし恩いけのあくきやんわ
うもかりとうあしめとすかりりふをお
おもしをまてほりふをきてついをかえしを
とくめきよくとうしれきそんよつたもる
とりくこをとこきまあるはてしへれしさ
おるさへはよみめくきのをせいへうきふ

ゆんさつしてまつる事せんおうハきまりた
いまそもいそうそくんゐきうてきてあよ
みそむのくよこさまあるもくはくはりす
かくうねハてんあんきやうてうとひとし
うるつしとすはきくはきはきうこちしめ
してちうをたうくめんしとうをふうくい
ましむは事すよこきまあるへこはみやその
こふてあんハすたくはきひきてうせたま
へこきうゆんはてさのすくふちうのいさ
りちんしゆみもをよりみすはりぶううい と

けちくゆくへこせいきてつちくはあつけは
へしうきしけぶくをこさのはおんみお
ありをいてふそあみはすよの人よもく道
さうされしハきけたくうそせうなふよを
うおみねしと人てそんすはとくつよはゆ
はされちくをいのちいさてもむやくやは
まくみてくひをめきれゆくそれしすりは
なきんそんおされをはせうらんゆ人きけ
うきつれつかまれてはへしそのそのあ
まそハはりみすともそ道うしはせんみてう

せめてこころしうひとはいはりしいち
まんごであつまりはふせんのぶけこ綫ゆ
あけはてしよりもふのそせずふんさ
ためくこそいありぬへしさあらぶふとり
ていしやよろつまつりとしそそんしく
へきさきつめしさやうのきにいそりて
なよりをもさらく危きにあらすゑてん
のぜうらんにかとまつせはへしとそ御危
まりとぶもりくりしけうてうしこまつて
あそきそんしるしてひむくしとむう

しんもてみ太まうありふ叔うれしんにう綫
あつめくきん人あけしなまのうぶりこう
孫のくれさあたへくめつうしかそのちあう
のせんりにちやうしにいふせんふんあり
大まうこれをめしこれおふせとたそ以て
忠ちんましゆうつとしてふそくもるす
もし忠うるにあらひのくふついちにたつ
らのみりさうぶもりあんちうのいちにゆ
こいてまうくうのじちにあうらんたかくを
うりてこさはへしとてわくつたうしと

あたへぬちやうしこれをうけとりつゝのい
ちこのゆさてそれはよそうくうのたうらに一
つらしうと連たるをのあし志かましどもを里
うくうぜんこんおゝくたへてぶかりより
あまをつゝいこゑんこ思ひてたるれところ
つさいりうをうけ國の八人ともをあつめ
てもうしくくらくもつてそむあしくして
かうりめ大まうぜりていまくうひとるゝ
あるのちんはらいまゑんこれたまへそ
のらこちやうしこたへていまゝ王くだれ

おうけうをでるかきんしくよ基はよくを
もしめとしてふそくあるすあしきしを
せんちんのぶかりもうこうひとりぬとこ
た大てうくゝしきしてそのせんちんそ
むとのたまふちやうしういもくかのくよ
のちんしやをあれめも[illegible]とくつかたうく
をとらせぬとこた大まうかしこまよ思ひ
志うをりんもてのもからふりぶりもつう
かさてのことをもしたまふそのちう國のつ
まとのおそりて大ますをてゝかくうつせ

むかしちまけてあらひのくみてゆりぬ
そのうへぜんぶんのさんりさしもあはせ
しおんとをてゝ一こふうけりでよくり王
一ぶんよありてすてよきうはよおよれけ
はとれちやじうきりゝくおはくていて
くまちぶくものくふのいちみてゝかいおこ
しぜんきんろぶてこんとてゆくその大
うゝとおへりしひん人よれあるよきしうと
りふふようろきやぢゆかこきゝけさ
しとりんーおくくのつよをのとてこらは

これまでのためよきやくくまくをきうしら
へきゝらくひさこもりめとこゝあつてけん
をひうこ二六れ国よありてりたまのふさうれは
とへぶちやしうかいおこすをんきゝれ
ゆへとこゝ王ありんしたまふ一人たうぜん
といふすゝこれときよまゝしまりゝるそ
のときゝをふけうぜしぜん人のきんうよ
いてゝつゝきんこいか大王こゝなまひて
みきゝあるいよけめてしあたらしこきて
みをりうつゝかてしとのたまへちやうし

いまやくもしめらるるまんうをもつまり
くこしたくまくみけうせしこんうとめし
つうハなまへんちうあリて二とれおんを
まとまんやこりみ大まうまうくりをあん
してみけうせしまんうをちくくたつ孫
いうてめしうふとはみえくみおやきみ
おありてまうのみやことこくに梅くもてり
こさるところのしんゝ二とのまうおんを
りうて力をもそりのうをおしまをふせん
たくのふさらせもかつまをせんりれかうみ

あくつハをあいこさうみたとちあふとすつ
ゐくてゆうまうをさ師師の子すそゆへハ
はおんをまりすれそてまんゆるへきよ給ふす
ついみいはようにこうへうちやはまんちう逢
ききさきうしめ和いをまんうかうい紀ふ
あらすちやうしのくんみとのつくやさらて
それしをちやうしとおれしめしうれしら
をまんうみおすらへてはたすけとくつら
のはせんとよもやなちゆハなんこさくた
はとれあまんまいをおけてしまんくある

らぬハこゝにあられしこそのことをとおもうて
てんへよりともかきらなはつきいっさし
しけうてけねてはかすけ給ひていうて
うそのせいちうはへこきゝはおぼるーちく
ハまれくまてとくまにおもこはしさよわう
すさあらんによりてなあハさはそせうお
りくを一とおもてやはおんちうらんてを
やみるまうハあせいともうでやみるりハ
うしきいくまといハせうといえいうくう
うせら八うるへこゝしけへてをすかくりた

はりあせハ方ふをいのちをとおもしませ
たかへるよおりて申ゝるハくふどかぬさ
をてらんりよんもきらんせいハこゝをとうけ
たまわりてゆんしやつかみのこゝのとけうし
せん悉せんかんとすせいしなちをつく
申たまへちゝんにおんとうかどと我
りたまふこちあしくしてまつのいたまへ
らぬよもんかんてこいのぐくかゝたまれ
てはくーとしこさうけをとおーゝそまゐ
はさんまへつまうしハくへならうしまゐらせ

あたへしん大王ハことのもりみなちう
くるこれらみなまけたんつしなしやうを
おれめをのしんのゆくそうしふめんつ
くしよこくにおさめたまふすりんをたく
しるさけをむねとしたまひしことちんとう
たまふへきよこれまさに従んくのすうれ
らをのたすけもくハ人なのちとくちくお
もんたくまめるをしけんてう一こみ太
本とおうしめしたすけおかまゆくへし
ともとおもんこうりるなしこてすれう

りせちうそうとてんちくのうまそひさう
安くちきれんも君の志あんきてまこと
成人ハしらめはぬうれをきとりおうふハ
きんこ孫はんとすんん人そうし成志け大
たをしるんふハ非のめくミよそねさ天
下もお大やうるるましと名んねさら
しはをの後大すけ之てしのかん一人ふ
ハあつけめそくふのそせう人とをふちく
しくも報るをとおかせくきれしそりの栄
志こうのさかういらをおもりすよあつと

そりんしなはけふや志けうて自ら多くて
すさはゝ一人あるは拝はゝをるくてなふ
のそせ人とをよとおそせくさはゝを
てこさとされて天下のめしとをふり太ぁ
と志けうてもんしすされなるとやその
後ささけ山れ志けたくなりこと絶えれお
さるはんてのまやすくよすあつもりは
めこやくはちりはん天ろよころどもなく
思ひ給ふてなんさんよいれしくは先は
せんよはあれさといれおくりなれしみさう

れ太郎せひとてこさまへりゆるとうりしこ
まりそんしるとしもりそすなるさて二人
の子ともその馬をさうなよたえそうへもなり
なはかれじちたさ悉んてこふしまうつ宿
而あはきまとしきててうちくまもり家
はとまつへ人てもてり左まよとはけなき
ハ母ぞしかくじろこふすもりさり
一まんつめれと月さ人といふ女まてい
しやうよそうてもたは馬れくちをとり君
からつはもりといぞんしてありまあ

ハてくもまなちのかへりたまふそやとよ
もりりそりこやすかいのくてむまよやおり
母かこくこふゆさそはを一もんせであつまり
りよろこんのつゞんきんひきをかしさうらも
よ重ころをゆいこと残りふうくゆあまられこ
のあまま孫さりハめいてんれきこまらつ
よ急いよりれはり残かし志ゆんたんの志
む当志もくく志んーのうれミしといくく
とハもんせんれちくむかるおやいまさら
恩氏志てきもり

實戦物語 第四巻

A 00
5796

十郎らんかくれ事
ときむねもとゆへのゆかう事
うまくらへとのとき孫ほさんけいの事
ときむねすけつね孫ふあひし事
兄らんしやこう事
ときむねそうへくさりし事
ときむねかいらん悔くれし事
ときのめんさうしかるる事
こうしらはを忘ける事
おいそのゞ恩はそむけ事

あいたかやまへ、そくくまのより
ごぜのもとへ、ひける
ごらうしてそ、へゆきしまず

曽我物語巻第四

くわういんおしむへし人をまたさる
ちとりいりひまゆくこまつなかぬ月ほかさ
なりて一まん八十三さいまなりよりなか
つふせちかるよまたくたうさうはす
あまてひそりよくんかくしてまてちくの
ふ我とりそうつ十郎すけなりとものりけ
なまくおとされもこてうとしまていの
なまひりるあまとのハはこ御へゆくつ
のらへゆさほうしまなりつくまんして

おやつこせとかへゆあしくふくこうら
やましくおもふへしとよそのかはくみ
まれしき遠りきんまりれそてとちらうよ
おゐし十せんてい王を乃をすてんよ大い
むるゐにちつふしうさもつしこをよのふ
つハゆめそとおもれはさむてつた八こ
くえもくまんせしハまるれ於しへ奈まれ
しはちてハとみてつそこふたもちなまれ
てこう女苗大あつかんみはこへたまれし
つまへてはりしにふりてちくつあてせと

まらまうこ　やうしをかすけなまくとせ
さらしなはまてまてかふ空つ乎ふあるこ
おもれなれとをけたまりりゆとそれれ
ゐるもくよつきれてちやう孫ん十一さく
よりもそゐふのひせら月とおくりなる
らくよまてまりす十三ふそ之よなは十二月
下三ゆんのきつうのもそのちこたし生薄
く二十よ人ありなるとのこをれもへまそ
おやまてしきてしより発んくよりんせて
こをありなるふてしきさかにさあるもふここを

ゑあるにハきんさんのしやうそくにしつ
はかまへのおくりものそゑたるふミをあ
りけるにハからくのふくしくのふくおちを
このかミるしもて二つ三つよむちことあ
りめつ六つよむちこもをくはちあふかさこ
てらきたくまきのかミしもりふうしくし
やうそくそゑておくりけるよろつうしや
ましくてふミなをとよへこていらよゆさ
うはしつてけるちこにあれていれける
おんなみなちくまきのかまくさうしきくく

れはかミとらしよミわよまれハへてまくく
のはかまをかりみてちしとやらんのはふ
ミハきかすふるにとかくまゐるをへそやえ
ぜたまへ十郎との二れうやとのハかふよ
とやらんものもしハうさたへとれたまハ
すそつとのハましませとも一とのきてつ
てふもあつかりを一月よ一とせともちる
れはかミもそうくをしよくぜよふよりを
はふおんとくからまれそてまつくいかし
かりつうき―。あかうしくもありふま―

いわりとうしめしにはいうりかくしにい
しくみなきものはちくのはふこおりなそ
さあくこそなれゐるもちゐなさちこもこ
ともりとやおされゐんともいあらくとふ
りくりさしもはくこまうかあらたまらし
れなあうゐんをとまずれあたゑしにむる
してうもひをもとのるらとおされなうれ
てちうやなさんゐんよきりふせさくや
うちやうゑい於らくそちくのこうしこ給う
木しめだまへとあゆ見こそきれゐ於そむ

きんあるはもんおうよやあるしこ正月十
めはふっまくう夜二ところはさんけいと
そうこへけるまさてうこれをこらぬんら
いのりのこうつりまて手よのはあ
まれミ小志しとそうつされゐるみやさ
うそうのうてなきはいしよりおこりせん
そのうしハ一かよりむしするといふらう
しのおりへとこうハつをりていよ事
とおをものおくたのをしくそおされゐる
くこうすけつ孫をこうりをの山てあるなし

もはらつくはしとゐはまりはりんとみ
しらんますよとよろこびそのひをまらし
さらのじちたくきん移んをおくほしかり
ありかだへさくうくきうのめいとちさ
せつうありふたものありおとしもかこりあ
ましふやほふかぬ八つきうきありてその
おりふしふきありにくりはどものへふ
かこたつらけ山のまこへゐつけの恋ぐ
忠まなまつい松やいはひつなやまふさご
花はし人をとましめとてひん三百ゐすよさ

もるとおりりまちどうさ孫恋やしそらくと
とうらすとどかくやりしちんじうふくを
をおかいをいかん恋やう悪恋ろなさあれ
うひ宮んせいつりどりくう八りはすめ
こおくろうすをしれちう言んさひしさふ
ろなまてくしきよいろどけくをこちん
のけいさのかりかつちうをよろつひゆこや
をきいはるをいひやう上下のつつひさう
のらちさこさやうよありいおんてうつ
みけつくゆんてめてよあひらうふはむう

へりさい人かこうくをとくのへらさうの
たもとなるうへすはまくれは婦ん人ハ字
いはうをうつてふうしのつくひすをそもた
つこゝのめさゆゑはふ旅ハ大ぜんあまり
くこあるせまんまくをひきちんれみなひ
よそふころきれしやあしかれのくせいれふ
旅をうくやとおもれあるさうりさかつハ
ともつのりくるかぶうみ百そうまよへ
りいれきをやこうおちりくるふさう
の梅くをへしるへあるまりものりここ

つきへりよたいハしをすまへたいかく15
らんかれあらしとこさせんくんしをおそら
しかるたいしあちこゝかちをひきつきふぶ
つこまそはむりよまいはふ旅よりしや
ごうまそハ留もこうしよそめされくはし
むもんにハ旅さかんぬし魚いしくをだ大ゆ
うみさくけるれたうしやそうハきやうの
いかをたまのいうくまとはかくおいこ
いとひやうしこあるもせていてんよさこ
うとしうのこるうすもんしのもいしやう

くうきのうくらあさくらうへしかうされ
そのはひやうしへおつをもうへて達
いつんもあきいつきをもありまうをもん
わんのおこばをくんてすかしてけちもん
をここなひありしかくれおよふところここ
くちんかいとまあそをうふさつつめくの
ミふそおはちたるはこてすをはちりをい
のに紀ますとを人一人をはきすういしやく
のみそし一人あれくしはさこらつれじた
ふうく遣いそはこされ人くをとう遣はたそ

これはいつまとくもしくとひられはちの
そうつまらされあんあれしやすて大こや
うせうこやうのここいまりたなきはおしへ
ありきされ壁いまたすけつ孫をはあのさす
あるれしとはいやとおもくしもあやしくたう
もまれしして のこりの人をとひまいはとき
ミれひとりれ一さる六そうれこうちてふ
の志けうてよろきれ一さるいうよきられそ
ミうつのよりしさてその一萬ハ遣
人そさここれそんあこいふ人よさくその

つごもりのくれしやといふ人あれ
ういまとのおもせずはくはなきやらん
これうたよしにもおもるうちりう思いさ
しうけらはそさかしハとものおふさら
めよ思ふそのよみめてのこゝよすきしれ
きのさてもんもやうろくのまるをもちて
こしつはきあれにあるるいうある人あて
あるやおんかきこうはかんなちの一もん
いまいこうのぬしくもとさ人をしもけつ
あはふれちおまつどのさもいとこ

之はまんざらぬすびとのそとおしへける
さいはそれしまてありけるよこのより思ひ
りてりあやらんもりぬきとをかまり
うちらんとおそれ ろしていあやらんと
いはしのもあじちさいにおそれよらける
やうまそてものをのハよのきものこみてあり
けるや三十二ふそもるらんこうかい
ちてまやよぶることふすもしとふたまい
すえのそうしにややたれはいよいるいすくふ
しまうていとこよにいる物いふしらしこ

それより後ハゆるされ給ひしかくあきその
ましまさし四十あまりの人なるをさられ
しをもつはまたけたつくれひふとくして
かみへよりて上りしむひそりしゆよりてて上
こそりふさそこよ里こ上し四うくなる大
おろこにゆ御しませしうむまいれしくうち
ふちあしふ人ふしもてよきてつきやしを
ふてちろうのつよさ事四人う国のはふ
らふ人なりは大ちろうふりさしはきさりこう
國のちう人大まの三郎うおくよのつ五郎

すけひさとてもちまのかまけさか太ちろう
とい行れおくのくかりしまそてこてとも
ぶちてもちまの小三もしうちてあうい人く
ならあけなまれ上うそれしをさいこあてくう
へりさ國よあへなくしられしなまれこさ太ち
うしとやぜ性上のうちみはちろうおよよも
をとそうのりくるもてまちろうむの
しをつなくどころてしまさらなるきうら
してまれいのなうこよむぜいくりやてあ
をてしき以あなさいのりしおかれのうふ

ふみを返しうかうひよりてびんこく
くに一ゑんおけしいつふきあんと思ひ
けるめくれもうかうれみおしませけり
こうようねて孫三郎へはもうくじをさをく
聞しうすやすてらみをめはきて人をたのん
来つぬはむけ也ちつくよりてこしらんこ
てあうちれりしこふつきやまれたる
まもりうこふをまきみけりつく大事
のちみきをぬけいてくすけつりつし給へ孫三
うくそ孫三郎よりゐるすけつ孫を志まし

つきやうおやありけんまちりくこ三郎ひや
うへを追たてくまこ王をとらふけてきまぶ
付とらんへつまぶこけしおもつの三郎ふ
みなみをのれまことやられけやまみい
とうつまものでこきけはもしきらしふても
やあるらんとめでまもおさすまでもれしは
さうちくようけりくりすけつりふ銭よく
くひ違はおゐなこ刃ひうへしうが致まし
ねをさしもたりふ承りしすけつ孫兵孫ん
来ありてくのちた来れあつへかちへて

いとうのふうたつうのまこちのけふふけと
きくいつくつもうよゆそやるなしなふと
すそことひくれにもそうやうけるなも
はこ又うとのつとやてなけうのつもうよまま
しくゆこみもろハさとふん、もうよ人う
こごいうれむこれよもそとてこうさいと
見めくろしちやうくんのなくあれよまの
よふちまめいそをへきのいとかしきくと
ちしてこふ大むさよたもちたまゝもうさお
し、くれもゆきとおなれうしさよ

かくりもこ又うとま孫こくれもぬ孫うてかと
ちうつとりつもれてすみつ孫うハさちうく
そひよりゝるハへりよてまそもこ又うう
こうきをおさんへこさつてゐてハかりこゝをおこさ
ぶてくあれもしちてにふ孫つきのかるい
まうゝ見たくまつてけるゆのおいふさ
よ里殿ハおもつとのゝきくとさくハま
ちてうあふハおくこよなりたまふのそう
乃太郎かいと殺しく行つりたくまけるう
ものさはとのゝなさくしくうやうふゆと

もしおもたまへなかけみえれちうつまつ
このとさいとこ子ありとのいろいろをまつし
しこともとそあすけつゆありや見たく
まつまてむりの思ひそてらまていはさ
らあるしみそんたるそいさらはまぶ
てつけたうよつ事たまくてしおかしいい
ふらをすけはゆりくのつらうとおらたる
へあらしひんご縁もけてよき内へをよは
やうみやまもんのそせり行らにやうと
へしいまよきのうらさい　あるたすあり殿

ありさおかつおおせられようれへくてま
はるるまとつつあみてをのやうかやと
つたへたまへちてみをそもていてまたよ
りあくましますらんむつきのりむまあ
ともよりのとえハうけ給ハりてかなん
よしてたみんよましいらんよりさうけ
きこつゆふとひ給くまとやかるさらく
こふろうとは苦いやしはつそ祢見ちしや
ぞこくみんかにくむさいちよいせんさい
さたへをむくもひハせんうした　へすこや

つたへうりさてさくんさんれましめよかお
さらしひきてものこうぶつにてみむらしう
らんとむ孫んありきらしてとそふごちろよ
をあうこのつまとうかり孫へあるつとふ
一らしもりいたしはこてすふゆうずらせ
くしふふとあくけと遊佐もこ王ハあく
たまむぜひくりひんさまくな一ししあさ
さしとおもく ことめとまおさすそのごく
太ハおもこつ孫ふくこあまてといかさくれ
ハあ御ハあるまをまいくしもうれちと

らせてんよりくいましとおもひとくまう
ぬなりふきてとそハさんはとをかり也
そつしのくしさんこうちよそんのおうぶ
まけりふかりくつきんいりくそんしんさ
とくさりつけいそてあはてとのれあまそう
とのとびちつきこさくりえうへをくとい
ひてからよくりまこてすちつうみをよハ
をどうくまりめはくれくれハもしやとひん
こゝをうおうひくれとをじれのむとかゆま
へ小笠こうをとまた天かけてまかりいり

ほねをうかいいれしをてらしやうよほ
ほどのいらかをならすハてんのめんやう
あれもありてまつりごとをつくさんとうら
ちみつしたん人まことのりハ恩沢をよろす
さんせんつゞすうまるくむまとこせんと
のおもしろきいちのかたりかたしく
まハしまらんれいきせもさいとのうけよら
うらう煙なちうこゝせんこうりよありけ
達者なれもかりてありつ秀におよふま
てきつうをほくしふらへこゝをさらうのは

まふけましいとつゝよ段をあつすさうへの
じちそむさくあるほうさの日ハさこれ川け
うりのふ孫よめさうれほうれをつくりた
まふはこてすいふなてまて人めうくく達よ
御りりてつゝこれじし詩をえおく達も
けふ御ことや恩ハしくれやうこふ孫小て
けとをやまこてすいかさんもしうふ孫のう
ちのこえおくりてあくよそちうの事そ
あはゝのまつゝさよハめうくを丹の日
そのえおくりていしとありくんせんのしおも

はやられて、むなしくなりよかはりのりそ
のちいよくこゝろみよのつゝみかくりて
一志をよすれしと思つゝきやうをんをとう
ちをてくちうやもんそんよきりこんと
こうむふしく、はごゞつかゆはまうてよう
けるへといのり中そあきれけるこれちろ
まてつゝこはさおもくこしけり。大こくのそ
きやう大王ありきさきあまたもちたまふ
なかのよこやうふ人とまきさ、はうつは
くおもりなはきくろかひはましらかむつ

達はく、はまとはやしなるつらくなくなと
いふん三歳は、人は大王こゝろへくく
らはゞ殊はるへ、こゝ王しをなかりはるよ
うんきやう、大たまりんよよとうつきれ
なれ殊さを三殊んまそもまた達たまはすた
いとうすこきよおはしめしつせとめ
はたはひありなはきまうとにこさのはた
かうをうなたまのへしけりなかし人みて
いあるへかすしや、なふとのあるへこさと
おかつかおくてまち殊つときへかふさうせ

のすちくく人あそハあいてく語り孫のま
はつせさうミなまへなり丈てうこうしとと
ごもくやをめしつはさよはらうでなまれ
なれハひかりよまこへ志はしあうたる
めいなんふくありける丈てす志やうきん
しちうや力ぐむあしたまふすあし志う
はふちうつはいつはふあせ残をつこなは
ふしきなりしてよはつせをめしうつふハ
ごなまみうまんそやあけるはうちさふ
しう孫ハ志なんなうなんにそ何はさ二つ

はくりこれふうふふうりおうなんえありま
いうでて志案んをうく寸ゆくよつきまをとこ
ひてあせ残うこはちまをめしそへておう
はへしとそうもんすなはち表おもちその
うちふめされなはかうちい恋といはにて
さへちよみあひて中なはハまれのくしを
きたるつはこたつ孫孫をへきよそめさは
らんよりいとす御なれハはらめてでめ
ちうつきれしなんをうのはうこハ京んさんれ
そこもとようつミおこなふるまうニ三さいれ

ちゐんせいきん八のつらうり出てごぜんと
いのちをすてまうくうへさうりめちんしや
くれはうしやんのてちつにせめころさ
ままくりさてゆちう二十一さいよして母
のおし八ふきてこれかのつはさうりいる
してもうくりされこごまでや羅おおやれして
さらへはいそてすやまふうくれしねくりくる
あるらわくんまゝれゆめふまゆのあひ一
しやくあるものさくりきしとこつすらし
そいものんくんしやくといふとてくり

そちのゆめよおう逢てうやうはらのあう
かうしめてをまいらせよと風くくよせん
しやくるけるくんこうはちうよよおはへし
とそこへしちてよしくちうといふらの
児えんしやくうをとよゆさちんちうくれ
おふくかこうよおおせらまくりきうるふ
あんちうたあよくんまてはまさしこはおや
のてここそうしさそしちうくそ国へつらん
まうたのみをよおもころはちりおのつ逢
うへびをこうりてまきふつせくうんのける

こゝをたちてゆきたまうすちうつ表し
たんまやすかはゐしさましはかんつく
いふとりてほんいをとくるよおきていま
きよそしもちそくのいのちまうのためかう
しふれるんといれそれもて言んしやくこ
さ〻ちてのこきうえんかおきてハまう
いのちふようおしつはへさつまく下さい
いでミつうくれどうさゞらしていたし
そりさきごもくえんのはるさハさこ徐く
ハふりてくちかやくミてをちくうりそり

くちうハつはこにとりそへまうくうまさ
さく大志んよ見せられそはせゆあかあう
りすまゆのあれこ一しやくあるくれ人つ
はふもまうおちるつはきよほゆも大う
りすとてくんまうしつきれたまへまするか
ありあしされこゞはくれのいさおひりまよ
たつ表すまふこを見ひこさり大まうい
よくおそれしたまひてきらハうきよゆをま
りしてかよそ大るつまかきつくれを
へて二七日そよそりそはし連ふ絵め

こふきうもあさちらひてをくはせそのと
こゝくらうやうこれハ大まうのはてこさ
まれしまうをひたくすけらんとのさうさ
やうよりいさおハのうりおはうはなふ
かハくるしくゆくこ一め九しさらせたまハ
てかまつ翁んなをもちうさらせなまくうしら
すへりかれしまくんまうさら一めしさらも
よそせしちめくいそてさゝせなまひてのまの
おうらりみちのはさたまのそのいらこみなん
志やくうバくハとみせやとこふらのくハく

ちよ梅くミおこさてはるこのさこ彼ますみ
ふきうけくはせをぶりちるへまするよとハ
つさくハをじちおらすしくちうりりよお
で大まうのかうへをとりだ言んしやくう
にらはるりまつふうへじちいまへうりまう
つくハをいさそれおそらてみえんしやく
のくハとくいあいくりそのとれしくちう
やまあてやくそくぜしりあきいまれど
大まうよやまてんふりこれなあそうしと
いれをもそをまうくハとかきふりかまつ

さのうへかけいまいりこの三のくひのまの
ちかつみて一日一夜そくひあひなるついに
いまうのつくひまけにかりけるのちニのく
ひもいせいおとろへよかりちうまんしか
とそおそろしさてちの三のくひを三つ
つかまつさこめく三まかうとそいまみ
ありとそつたへけるいまのもとまてもい
またいひけるはとのなしとおやれとし
きよきろうとそあちうやまもとめちうと
しちまかをおとなしとそ八てなるちまや

そんせんのさうさまよなりまちやうして八
とおむちつ丁東りくく孫あれふうくしてハ
すなきちくちりしひとのさりさうもし氏
人くれせいちやうのまへおよこなかめける
ハ京りりなりさぶらくおとし月すこしさ
なれも十七にてなりなるあるとき右衛門た
うむこ王をちうつけて御みんハもやすせ
ふなり給くまうやうらくし夢うれとき
たまふてなれハすいもんそつうりた
まりしものくさよめしてうあつ御しなきみ

たからこれかへこをおろしそのすけ
てしきれたまひられさうおもひれしある
らめしと思ひさりけるしひとそまさ
遣りはさらハとて大事をふ遣事付け
のすりいまさるれ人をいれなうかり
すてよりやうらん思そ候まりけるはこ
まりれくくと思ひける八ましりりしま
ありかりとそおりかしよつけてこれす
思ひおもハしつこふうるて一くしよ
わかとひかりこよありてましい我とく

あつそのえかりふありてハこすくまひさ
さもうちかまこみさてをすう候といれ
あまらせてとふまをすくふをけら我んさあ
し人ふをまうせすしてう一人我ふまれ
遣てそかれさらんそくうりるはさらんれ
ひりしよせんと我さしてまうとおもひを
らうを思ひしんあきすらしてちうく
まをおもしくして事をたまきの我けを
といふちちつららうせんつりつま
いまさらおもひいそられてそかのけふ

それはさよみる十郎がめのとのいゑよから
いりて十郎をよびいとさしあつかえしなをき
こいうよしてましますぞやこゝろにちかい
一ちやうまゐりけのよしこそつはあはれ
のぼりてらんたくまいらんとぞんずるここ
ろよくぞりおつうきしさよといれかしき
まゐらうさらてのはしくのはちう御ぶる
しらおもれはるかをもうしをたついすう
やうつ事きハくとめてよりはげしさ
めいへうしをてよあけぶかさてはてする

あつちのはてたゆくあさまから今よく
そさりはくるはさうをまゐらまいらしてごふ
こむふしくかりこゝぞそう達ちんぞ達まつ葉
てかへことぜうまくく後まてひさしけいはし
ときすけつ孫はござせーとてそめーより
をうしもまする侍るはまうしたらへうーー
かふりてはとさこのあく孫んなきしはま
志一孫んむつやうこうとなるすいはまく
しめさはりふてゆへいおもはまつゑこ
てまなりくありてはけとめてはのちりは

りんとそんしはちうらもそのことくいす
すあらせてこうとみをおりはいのちしく
おもしめしをてさせたまはくものついて
よきやうらくしてまり山寺にてかしこそりお
としたへともとにさあかつくしおしよきの
うせてつたこつきしして一きのすこしおや
のこ世話んちろよいうつれたくまいるへ
しまだかくくよありけあら御めもはり
かふりねまてをつりまゐる急さうちやく
どいのけあけりとはいりこはして方

のふちんいまのみのはなりさまゐしねよまかり
くへりてこきんをこくるしあとよいかは
ありさいこはりん氏ともけゆにはこせめ
それにやくありてすなりつきうなどこそん
とそうやうみのだきのよつこうしとこきもん
もとこうちんいなれしきあんよかよいきしう
りかはこまうこうてきうとおりめさ
たむけらくちとやかりてしをうけたまは
りんりねやあれりしまかりくうりんいす
はなりあるまうこきみやといれゆめるす

なさく人もの事ハあれくなれうとも
さりたまハぬりおしよあけてのべら
むとをうしはしよきしくもくるり存じ
なるこいはなれ為もこ王中なはいまさや
忠しやう此はぶらよちりもんりいかゞ
すへ一はあ遣しはるこれはりも一たん
りまうとおほちなりといれなれハすうき
こ云その上う残さもけありまよのごよい
のおもすゆけをへしよまあけなれいさ
やしてむまふじちのりを一こそうを出て

ほうてうへむうゆさよなれしさらぬくさはぬ
ふこへてあそふとこうありなれむしぬま
さうんさんしていうよめつしやと忠言
まくいしなれも十郎しやくとりあ残しやけ
ばいおもふそてはるいさもうもうへ
のぶせてほうしよぶさんとつうまはりん
も世ふふようむてうくまんのこやうしを
をこうもあまれさん出てとりくもそうれし
もしとすびあれされこみいさつしもの
おしへよきうのまさらんてしをいまやく

父母ようんすくことゝいふちゝハよはさゝ
らんおひたゝさはくまりたく思ふかゝこよ
ふらんさついかまゐりはをもゝ小でハやの
そうれ太郎ふと志たりにせいしはあはく
志ゝうしぶゝうつへてハとうれてこさま
小でとそんしあはくしてさのりてんたゝ
はうちのおもしで小さくりしらざたりてはと
をはまへまでとすらくその多れもんなど
ハしましこやくはしぜまゝとま絶んくの
はり尺ゝふしやり念さまあつも志かまも造ハ

よそふてもさゝあつハむ称んあるて為り
娃らんまふ丈と紀湯さつもてすさんとそ
りきざこをり恐おしぞきぜてその女郎と
きむのと為いらせけるうけなる馬のめさ
うふとくたゝましさよ志ろ小くでんのく
らおりせくろいてれもらま紀一でやうそ
へでは(れ)しくりてのすこへてあそひ給く
はゝあくまくのもうつ母はちゝひたまふ
為しと志ゝたれしてもありくりもこゝの
為けでうこれをときまってまこでするそう

孫なるに孫やのきやうもふこにまもつかう
こぬしハ乃てけりなれこいそきそかく人
ぞくらしうろ孫なれごとこれみをもしと
こたへなれしハ円らうえにみさハこさせう
くらゞ六つ孫たまふそおろうや狐のくちす
郎か太郎とじちつきてそうへかゝりぬう
ちのとのとをこてまこゑうとのごおくう
みおーすうとの得きまいうせて御しく
へりといえなきハまうこさてつ円づゞの
歯さハうーく六つ孫房なれなかそや十房

さぬふにゑてさ御といれけるうおくく
い日ちうしまゐるぞこえとそまこる日へのみ
りなかうやちこふぞてよ里もまろきやらん
おくうみおりしるといふとほましよおり
たほとこさてまうれい行もの花よりいそ
されへとのたまへ聟のつとうるよりめ云ふ
さうゐくらへをいつけりなり母まいらか
孫ていそさえんとそきやしとあけなれ
まおさこかありてそいへりなほ母兄ルの
かうゑもへて二つめ聟ゑす出やーーをいこたく

こうしハゆめおやすほるのやちうやそよ
いまつら子どもまくちらへうつをかり
さあさあまてばおこふをこうさらんとこ
へまとはゆけなふのうちましさよおとこ
みゆしなりたるそや十郎のさまなりや
ましくおもつ一ひきもらふる馬をたつ
とけふしよのうしつ一人くしる下人ふ
たみを思はおりかしまふちをせをあけ
しくれくるしけみてめをあてら進すよみ
ちる人くのふことをやるしれハかい

おもるへほとおもつみをおらくのはまハ
ふはそとよおとはきつをしておふくぶふ
うろめしやちりしよおりめきとらう
むかとらうとこつたとしてもくるし
かしを入下らうなれともちへさいうくあ
きてほりしにそきりちし十郎たふきおもと
こよらせしますのくやしくてふすそうせ
よりしとおもふるところよくらおしの
ありさまやせんとまてゝよろぼれあくを
ないてしもおつくろけともくいふあきしれおもう

とうもとつミふかき人ハうし後世らつう
ふ殿さんてなけてさよそあつひちそぬた
まくくもらかる子どもさうへけてやうすへ
き給ふ一人もあし まつと よすくのなくなハ
まの御くりへちん女やうさよそよこんと
かるしくてをしやこおもつたのミふあま
ハ御らうまあし御れともおやのあと残こ
そつりさらめ兵殺さん五の人てそう此十郎
あんとくい日向くをうち打し志一人ハ子
ハちしあてつらむまのきしかハすてんと

せしをおちいそうの九郎うやういくせし
う給れしと逸いけへさりたまひてつらハ
恩ひけさ御むさしのかうよしおふより
てやういくしてりまハあちこのくふれく
りくこいふやさしてらよありときけこそ父
をもうこともくかをもちて志まま孫ハ恩ひくさ
して一色んの孫んかれをすちてとかうし
そまハうたる人のちてしうの子をこうか
ゞしよあしてちくのけりやうともさせん
と恩ひしふうやうよありゆくしりのかふ

しさよきりをますゆゝもてなさるれしとを
ちくほふしすみ志のひてちうちこせいまうす
みたまふかつちの世をとともるへきあい
迷くはしさかのきやうをつゆるおしも
おもしりふとやちつはなんそれしらすや
くハらちにふあくしてきうをやまれみや
ありちうえんハひくみされて志うをう
うとをせりとやもちくしのあるあるそよく
くあんしそを見なまへとちくくもとれ
みれしぬ即時きうつみこうてあつかなりけ

はゝあまれくこよおりてかゝくはハへて
いまのきくつおかせらしれしるりこそ一い
ちみそのいるれありておほくは志て給く
はちくをかるしたてけうやうをいくきん
ともをこいさて御まゝ母ハふけうをう
うふるりこれまのとにいてうのゆくふ
り身れつ兄のおはしあう志うれて人あるよ孫
く人の志らけるされよかりこゝりんりんと
やみれこすらいれるる母のゆめんたう
いかゝてよりおもこれまうくしさてありさ

迷ひしよそさゐらふかりこふありてくふ又ふ
らたうするよおはりけんこうあまりしきう
す怪きりに何ほとてしもの〻おもハきえり
そうおゝくもてもつしかおもくるもしきみも
ふなり出しやうのまかてハあらしいさ
やい何かくえとゆさてちゝさゝはりんしそ
よろつきそそ出よ〻仏あそふところハミ
うれしむけよしもとおとむねこふりとひ
の二人うちやくしいや太郎もとしむこや
魚い六ひやうへなりとこむこほりて啓

ハ悪りしおやニのみやの太郎ハあ孫むこ
あ迷ハうまうかとゝふうよれ修く二三日
四ふ日修くそあそひくるたまくそうよう
へりて太郎ハふけりのみあまえすうつも
こようくまなて母のきれしきおりくハあ
乃ひまより見たえまい迷ともすう力ハ見
てしとうくれしくたさらいすけんうれよむこ
陣るとハいくともいくれひまこゝくる
あすくりしゝせうふちやうのあうひあれ
しりまもいまらもあくまさえかうつあうひ

むかしうゑへさしをむねんなまゝならなか
しけしにあるへこなたつかこゝみなりて
母のかんそうをくりめるをうしこれゆく
なりいりよをもらくりゆさだまくとすることし
こすけなりしまきそ思ひけくはりちしつりよ
一人も人をとこらふゐしまりやこゝとふ
ことやつのころしてわらつとのさいことや
つゐ人にあれなまてきたけれたまし子なふ
りゆまをとられよせてくらいしんといれは
まハめのころてまくはかあるこゆ人一

ゆく一まやしれあはなれもいうゐおくれ
やすふはきさくらしのうまりつくてごう
いすてしりまハ随ちれすい二そけすなく
大まうすおかせいこさまておさまりてこ
くおのくらはなけいやくみもそくへつくす
はるもしころいますハてろうきすやいそ
こさんなちこなるもいかくふまやしして
しくふらとなりすりてのすふれハなり随
くそのあまハこやしなくありとをさつけ
なおくへこさおをやとそれるしれせすつこさ

ごゆりともそのさハあつしがゝるといふも
はくぎしこれとのうゐしやうたいんなり恠
じやうぶのまんよさゝけるすやかちんまゐ
して一梅くれこゝやうあくみていふしつこう
せてんせさるへさゝそここうをよれていふ
やうりみやうをえこゝろしきりたまはれめらん
事をおもはれかうてゆさらしき一こうのたす
本をいうて二人してとけかく三人より
あかとのつらしハやすうるてしりれくれ
ましこ二郎こゝておかこさよさいはきこみ事

いかしおもはれたまふたうたれさやうふかお
めとてはおやのうくきそへうをありとりく
ことをせうふとけ何ものるあしへうてしや
りんをおめくしてゝこをあしへのさとく
むまてこいあきこてきれどもちこゝをいまむす
くてまよろやうこともめおりゆうおりかくし
さやうのきやすするものハかりれをのとい
いにてまきものごこうかせまゝとかうて
こゝを奉りおくりよべきてでたまのよ事のの
めさめしくハきゝやうとかへうりいかみも

しそんしやハしすくさにつゝありていん
あれのはゑんさんふもりミやうかまう
ハはハまよくとうかくいぬんぜんをやう
しをすくてしつまくうとのよつけたくま
けりてさとおしきよめりのやぜころく
きよすゑとんこうしてさ人をまうしきよ
あやうぞきらうよまうむすへしくんてきと
ありてハつあふたうすこしのもてハ
ふきとくをあけて久よりつやあがさうん
きらうをつて人よう勢ぞついふぞつふ

とてもありそのうくさしかりうきほどの
てたさんもんのせうぞおのくのふくん
みそうしん華ハかりふみましこまうくまゐ
へこいのもそくいうちふかなりこやうおいの
人ていなすをもりれこりせきうこふをう
けすさしこをけだくらきぬあされもてく
いうりるるやくありてめうゆるはハされ
しちうりまのハよこりあうほけん一乃ふ
うくこ人ふてをくばおきまちきやうそん
のてきるういきうそせうをいうさめふ

しらうすといはれけるものかふかひとこ
ちうやふるはあり人をもちけるはさけふ
きうのものむさけをたよのこなきしなふ
るすうれいもんとおもふものなりおもし大
うれりおこりのしやうくいさけふちやく
してちをとゞおしけれけすかいのそものさく
あさけをこれにてつのをこさうけりやうや
りんちくりをとりふいはれける事
しをくやしれ一ちやう二つこや八太郎
よいはけるきちておまうれてりそうとの

にうやりあんさあうこもくをとりたまふ
てしりまきられものてもけはひよおとてきう
へゐてあからはきえ事ようれるしかし
はた事ゆうはりひ才一上へきらしめさ
まてはたさいはさくみをおこぶのまてをと
しさはらふでんものむかんさよしさや
ものす事を遣ひさらふこうつおそくれ
しちおしく九まん九千のくんしんのちまあ
はりませんりしらかちてはとはいめしり
はへきこいとりくはせすうさてゆきて

ふそううくのたすいそうとらすへきにみ
うらこうひとしうろくしこうれたうれ
ゑもあらくせよりつふみ紀ハミうりふ
かふころをこやしいうるとなハ又うり
よむきいをさつきこれら大あるあやまり
やうけをふうくいよしめたまつきらつ
へ急こいれなれし太郎ことこれこむさ
ひとこわすはくさはりすもくゆふうく人
しさいとをむさいともちまるうける
やつめきえいそさりしきこくれはゐきふ

てんとすなはちいうそうたかんようくとい
りみゐきちまをうてまれらを世よあきと
思ひてあらいれはくめさうしくちをうく
めよとておいて才てたくいまかへけるます
あたいふきちてありまこうしうかよ人に
うつりたまふふもしきこゆるをあらかい
ひとへみはゐんつきよりてそらぶうく
うちみたくまゐるへしうへをくくといれ
それしいさけたまもるとそけりぬこうつや
くろくありふくうこうて思ひなくるあまそ

へもらさじとあしうこめ母みゑんさん
してものあすとくるしくてこぱもくこさく
もあへともすうとされくれハわうさるよこ
ぢうへてこみ事とおもひやりじらいむ孫
もみをとうくしはここしてきてゆいんとそ
十郎とつきてものありともつへこさり
とのあしよさけハもちからとおと
くのけてあくくうだまれくはハまあとの
とのちらいさハりおそろしき母のあう
よむちんとおこさんこの茶あふかりく

いやこのこやのあ孫をもちふよさふきとお
をひてゐりはあくしをこ思ひたち茶そ
きてくるおやのこふていさたるまれハを
やらうすやまこまうつおくくみるるまて
一ちやうあくしせんとこさくまとのつちか
してこうおくこ母はふしつめまとつむ
ようのすくまたくけるとのすりふむちハ
いゑのやまれふくまいたいうせゆどもこ
こよきうよまよかあらんとおもしくいち
とものひてやくをきうふきとこうやすでけ

みやわろとのくうらましくれまらハお
もひよたへなひていれしもりをきれまち
たまみつ二つえんハさこう恩ひしうなりも
へじちいそおつよ四百三のなりかをく
までてひとしうう人りゆますハこのへうり
しもりしきひみを三つみをもつまんとお
をひしよみつや三つよありしをゆりれハ
さふすくしくらすありけるきれよもやれ
しこきをじちてんせよとまらいいハしと
こはこうしハこころをもつすまとのさいりハ

ほるおさぶしくありてちくのこるこさつく
ひをこらんといれしもそおくつの人をし
あるぜしう雅れをまきすれをしてなるかい
ひしますあれてしてなやりよおあひふら
おつなやうらてさよなくとくもとまりた
まへものきらハむけしの世をふす盤い
けのよみはいけあるうほてさしらゐる
人をむけしきなりつさんもちぬ
遠ハほみすれなりうし飽たうりぬきこさ
てのこあうあきうつたひみもんゆさくいなを

ふくしとはるとのハゐそうちきまくいく
おてもそのとうのかまずみきうしこゑの
きそてをそのとうのうゑうししおんふとて
ところかをおうしをおさふくはせよそた
よりるるりおしうやりよけしもきひしさ
よの中ふいのそゑあくーを思ひなちたまふ
そちんちう十一九よおりしらさおりちい
こうのはてさとてりしくさしすてよこう
はへありしをまさけや房志せんのよ
あうもうかりゆー宿ーくそあつかりすいの

けふかりぬ事ふ道をまうしいきてて父
たよいふて御まはしいうあるかしこ殿
思ひろとをちつへのめんとしそむのし一二
のこやのむかしめいうあるありき國を思ひ
ふうさをりくはりじちくとおいもんよお
とうさかてへこあんしへなあよしくおや
いあよふきうてすくそさあくとあこ奉る
そあられしすちあつ博あらくとなく
くあれのそてふておしとのけちんてそね
へりくはやてありてもくのなまひくはい

の事をこゝろ犬におくらうさせいさもん
とゝぎうぜたるをゆきもとてこ二郎う
ミたまのふ人にまもてもふもそころうう
くちさくこいめはるそそれらくの犬事を
はいちくうのより耳ハものとのもうもてり
こゝてハあしかまよおかれはゝんもまと
をんくのおじちちあるめさのことたく
まそなるせんすふかんありとおほしめ
されしこきよりは六つ孫をてせんその志よ
あやうをあんとむるの志うつすハ歴つ

はおんをうけふりちゝおのくまでもわすれ
おくまそはてしとすてゝうけるそまを殺
ちゝをおゆるしてこうふ八はらめゆめ〳〵
いきとおりたまふへうしす申をまけておろ
もひとまりがたまくとの筆八々はせ十郎
けたまりぬたくし此事ハなふとも
こたハふきよ申はるをましとしつかぶす
されはらんふのくさとかつうハはすひ申
やうもんたやしよれしらうをとくはく恩は
とよめよしてたちうれもめ二ろをあし

めぐらしてたちかへり十郎にむかひてさま
こしをすつきことゝしふへかりつ
ばとのをたすけおきてかくば大事をと
らさしぬる事こそやすかりねちゝけふ
かくらんまをきためあらいりすいつけり
かすへ三郎をあきれしむ孫をやくとハ
おもはりをやすへきいまいかふかりま
まらのまよいとおふさあてハきつ給ね
くるさてとはり恩ひとゝするをさやう
にはすこゝもらて、あんとせよとおほせらる

ゆるさせうぞらにとゞまりてあまれぬこう
ぬさはさをのかしやくきよくをもむさふ
らてしんうをおもひしくたるをのません
きんをとかへりなんすしなて一志きをひ吉兵
に恩ひのあさなるりなんすしてさてもやう
あてにふるいものそこそこしうて恩ひすこしつい
それハしくゝそんすきはかくらの心ほと情
はゝのハ此三子にすきそとりくさを小きく
らじち志にのうちのこりとまりて山路
にきの一ハ我んをふたりんおりに小みの

かくハまうしこゝろ一人をいそこなたらしきき
ほうしするへ、こなたはこれなあより
やうよふりめ、まこゝにいるるれきのものへ
うちをあそハなんとゝ、おけとのハつま
くはまてハあうしさらもてきーさせす
まのらりくりかてけりぬへさゆうくんあう
しあひなまてかよれなく、まのをころのふ
しうあゝりてこ殊うかうふへ、こたよたとま
うる、へしとまくれ、まうまてにまやうつ
たのまうるへうつと一旦をいのらあらん

うこふりハあらろまけうみ殊んかけやてこゝま
やうを殊のふてしまらう念いまあまて
あるうゝていまもひんによくかうちいそ
まんあミ大かけをすてゝすきゆはるるこゝろ
のちこうむさんあまさらしもまうまてん乃
せいつ殊ゝしておつかいそれちやうしやれ
むしをめでしといれて十七さいふあり
けいせいをすまりのとうしさうつおもれそあ
てハそうまことせそうよれかはちまやふ
はこはきつくまよけりしなゝりやすひらうれ

ゐくちやうふしあつかいはせりふんえんあそこさ
うるくちなるごさんと思ひくしてをり
しくふきけをつらしけるゆつもつけれども
いゝくすんとまられをしても誠ともみと銭
てんりこれもうしくきのなんにうそねら
りんなあとそでてしあされあるありゆき
きらつけしれりとむさんこいふとありあ
てあるらそてこさんへとれせじゆよ
てかまくらへきりくるまりかつそつさ
やうゆへおかいそてよありくるう次郎ころ

けてすちよつけさりくはせうやうつひん
こゝろふらりんなあかしを承んられさまへ
をうよれ悔まともりくこのりくさきよこさとく
ちきいきやおくいはさや一つりんにてはも
おしよりやうきおれむまかじちのりおれ
つまてまいゐまの小四郎じちはまてめす
きこしより申てちうこゝあきぜひしこ
はうちく二さこのけりりてうし事をう
ちかよいちこれ大すまてありくれこ
さそんしもうまんよせうてちまとちくさ

ごらんとおもふハいよいよかなしく
もろともにそてしほりつまてこそくりけりこ
ま山をおくらハ人もあやしと思ひへしつ
いそにこゆへこおりゆくとしもるうみ
ひさきつりてあゆきのせゆくもこよりまいハ
かまくらへゆきめこそやすきことたらへ
あうゆきふりしきるふ十郎か身にあてく
おもハけるかしこそもこれしかへといい
うみまと六つぬるよこう魚い六ひやう
へうさいちよハあひさいへといつの太郎

うしとめありてんとハいりてこあり
せかやおとかやせらきてい前にあり
ゐるうくふかすうと一家ふそからゐりやう
くせいしするかとふ十郎かしふか
ひてふきけとけそりゐるたうれのころ
さしふうゐはい志みをとりすくまこと
のつまをけさむへもりしそこきをう
なんとかとれゐるあひしい志をとすれて
へうしあんかのをとくそうれゐはくて
目うをとかうぞふちてこしとしもそす

して逢ひたりやうへよあまをすゝめしとくこ
いくりよりみちくありけれして出てせい
らんのむすめなりしかおくへきまいらすと
ございしへやりかけり女みなしは事を
とりあへこさよあふ孫も十郎かくこへ出の
なしよきやりくましくとふされしともに
かくし、まことのつまのともにのまけりけ
まこしうこのそて出でゆくのこまてしおや
よはうらまれてちうつかよりなしてよ
せうつくへゆきふかりされしをちうか

さりかふりなほもあるらによりむつうさ
いこやかのひきふ出のなてすうもくへ
かまへつもりしろりとこれかまえなれ
いすみわりてくうしりり思ひなれしに
をほとのあれとハ出するへかうちとそ在
事をせけりなり人のくらのはす京さは
よしむつふ出らせくりかうこの思ひ
あれくたつのこつもやとおもつらくまさ
やうとの御ようをこさてかまくらへきこり
くおよそろ人へいこうしとをかそりさ

まふらしちかうてゆきあひけりきやうだい
のひとくハミうら殿ちかくところまて
馬うちよせんとおもひけれはしうとこまう
へこまちよせん人々とゝ我きんとす曾い
六はやうへハ曽我の十郎と見てはちろの
ひんこ我よりあそはしける二三ことありけ
るをきゝつのあとよつきおこむ孫との
その六七きあひくしてこれ人々れうくま
いふるかのつけふおしよせまとやは
かんハよしむらうさいこやうのあひくには

こさく事ありとかうくしくいてけり
さ達ともすきらとをせすあさりてぴい
ゝ侍ちんのつきし童んとおはちらはよくくた
つはこさらしめしあへうやきつき大れらん
きんよ入ちこよけかまりはところきき
よおんつきなしこそんもる也たとへ方よ
あやまりあり生一とハ川殿よやうしふ
はつこともそ以る女郎ハよしむしうた
さよいかりなるきさよくとゑてられうよ
せ夫のかりまたねさいうしやさえとよし

まゝまあてゝも一やとおもふうちたまち
ねはしあゝいまへりよしむらめゝ、いさ
おれをつれてまへとゝ大くしのおこれ鶏と
いのちせずふしてハそんなり後日をあう
ゝ思ひさへめてあまとなりてんにまいれ
あしてま際まりぬこみれ人々もちてよハくを
てなもをおりちうじちちう人ぬきてい
ぶり者うともお郎もおそれこりあるいう
てそれしそのまへと銭里まそり男をう
うくしてふ銭おゝ目くせましすかんよまめ

ぬきうゐとつう飾とハおやうれまをい
ふハさまやかしさなりし事性なりみ哉
人々のおもきこよこうつぬれさうとい
ふとのありうさうゐといゐてゆふなるれ
女をめ一つ、ひそりつれなゝおりしくな
きけをうけそりしを女をすこさてやをうら
すみ思ひふち川ふを男をもれ秋んといれ
それをいうそうまつていのをの小思ひ
かくうてまいる〜さ月すれをとりゆふま
くしいかぜれだよやのけましくをふくはむ

ふこゝろよりも後ハおもひそめて心
やすくもえたれはたる銭を思ひごゝろ
てられミひのきゝみこう成くたきとのく
ふかひハよそよあつまりてちろと心まる
まそちくさうきらんとおもひ作く十郎よ
りえあハせんとていまさ人と作りけしす
郎とよれよせたりいれともくゆさむつふ
はすまなれともおもなすちをていりよまお
ふかこよできれよこういよそめしつうふ
おんふありてちかさま志ふ世よこへた

てひとりあまはいかなるりをこうとお
おつかなくおかゆきてうぜのたよりのお
とつきよまれよもおくれるお成いなり行
のまくるしうるへ安否うくれくく思ひ
りしとうよりくまておやくこのりみ奉
ありうゑをつやすのすこいゆめふを
まてえさけたまりぬといふ女ちうや
うそとこれをよれいさしてまくと
つふるすちハそうみさしてよすのすき
ゑれこその秋をまれまでもなくくれうと

よかりけりきみのすけつけそうらうにこ
うしもちのことてこそれをそかへより
てゆくそとさふらへてとそこの思いゆうふ
うせハハなん八あんこの太郎とさうれとらく
むまごのとの七八人へもあれてかつこらを
ふるまひ難すけありかしかうとの
まする御ところふすまてをある入かとい
さやゆこてらの女すもハハへさんさう
へしそて馬ひきよせくちのりてこう
をとらいて清姫かまのむさ少ておハハつ慕

うりかまきらうたくやとくめくやしすとに
てあまますおしとて思ひけうり十郎なふ
おとくハさて孫ともさハありとさてけ
へてむしまよみおりへうちゆるとりあ冷しお
よすみやとふはかのとをうけたまは
くこうひハあらしさうしとをいえハかしてる
まするきハあるまひさうるへしすらう
ねてまいらんたつありこてもそてよさうさ
つよみてくりもしめおかりをもさてすて
きゐみをこのこうたくありよちらうへて

とちんふしいつみもしてれりきちやとお
とかれハころかしゆミをあけ出しちん
ほるこの名ふゆゑしとも肩よおきてちとお
うへをさとあ是八つ事ありともつや
ふいはるましうのまりかなく急ちよ用事
志さいありくこしと志れ中なり志せんの
と兄おもれ志ほてこりれなれむいさは
れ孕三おうせのちくへのきん言しみて
もやあるなん爾さしくしこうれぞくそく
してはらしと出うこさほるさをあう弥て

あつたむほよおよりすそのよほちんしう
のよむうき弥て中抱くるとてミあくう
らこかうりくり十郎名ちてふきうとこう
うち取かくてをあつす思氏くれとを父れ
ためよそあへてむさかるいのちおもハさ
ほちてふちへさふゑ思氏ちつひをつ
通りほあうむさしあれしてうのこう
ふさし志つまこうをんのなあよミらん
こらう兄ていのちを[illegible]くさいけいみよ
二たれてちをさよつゐるといまの十郎う

こゝろにあひしむさんといふものもちてそよあ
まりあまりしといふものあらさりしてけりけ
りあけそこしとところおこてあきたるを
しの春きれ々るハおもひてすけりつと
あんしけるよりまたさらにうけらはくや
すらふへしてよむせんとりあやまたす々り
きこりぬこころのつけそうめてもして
さてもこれもあるその春れこころかけるこ
ともあくこゝかつきのかゝるまれ志つはらん
まけたくそれしりしハ志らはけもしいけハ

そのすきハ八二森大志んなんをはらんとゆ
こやのさやうつふらところよたへおんと
はふおもひたよらさはるりありたとれ
きんしくみあやまり十ふんよありとゆあ
ともいうそうかやうのほとをもいくさすへ
こきなれしおとのさらゝふまよふへこきよあらくす
うりをらもきりおもひぬらんもらいおへよそら
くるうい々よれいくさし十七まゝせんり
はけきてゝてすいるるおもせまてもはりす
こよれゝハそんせそそのよみふあやまり

ゆりゆいむ孫んさゆへさふをたのむすさは
みとりてハくるしくはハぬとそてこうい
ぞハ絶けこうのらとミますておこそりれさ
と悉そかてりよなるうのらうごうどもふ
うくかんそうしなるさおやこみりとく
りしこともなれけ女つまさすて　そまなる
さはもまつとの女若ちんことまこまくと
していゐをじしぶふたらんいまふむしめ
すとりくともかりくのたすいてさちんと
ハ出て入れあるせなるそまとのきれ

とふそてをなはつけうつをきうしふりうつ
すりんせさるまそして女とてつけしなは
もそくりりもそこさもうしきてをすうりもう
へのかまさなるふてさてんのもとしを思ふ
みかかふ思ひれあらんじらこをよりつまちを
もそくうれふのうまよとおりあれあふ心
ものるとやあるて用日をおくりなるかさ
たむけれまものけ絶うしすとそこうてそうつ
おさけりまかりよれりうきておりしくつよれ
ふ通なるたうれのかけし　のかりさはう

かけんまでもなくおほき千代よろづ世とそ
ちぎりける契も久しきごとゝせし母ハおほく
いそのちやうあやちるハ一とせあつまる
おうきれしかつられ太ふきしさ孫むとつ
このやうにくそ御くけるなてふのよれおく
いまよ寿くれつきしく一段の事すれう
たゝふりされきとうの心さ困きてまやう
よりて深ちつきつことよ世人まは
あり人の南てをうまありけり寛しの
鶴のよりよ京さけをたつきへしば八花れ

こすべておらでまうしかうるにうくまゐのあまに
つかりくをあれぐくまちるけそのさもしあ
きぶ月のまくよくも御めせくれの枝あら
しよあけゆくくをのぢさまらしきゝの孫
ちうきむ寿しあまれしをよかすとた
もりれいありされさまてもころとやら
ぬりきちしそえも時さめぬ世のまつ
よ侍りかれはもうめしくきれのくしと
やいつりぶあのをうかあるゝふさけ
むかひていふもさ手かありまてまたいつ

とゆふつくよ月もしめつゝてあるよ風
あきおもてのこをもつくなちいてこう
こゆくすくのすこをつくくおもれ
つらぬるよまくとみかくくのちうちくた
のこもくるはおりはもしけふあさかりとさう
こうりしもむるしかりるはいもせんなうた
のこしまへもいつしまうちりとてぬは
ものつとすりふさて又それのあるしよまあ
ひてしみをそこはへきけよやはのしを
おもふつよをのいと残きさめりみらし名

まれあるをふうらしともとりくとをおよ
とてさのこうらこやらんとおうくよむせ
ふ文くれよ九月面影はなをもゆくくもの
やをまそれしとしをおさかとくこすうて一
ふたよこをたへぬうこあれくもうくや
らんとこかとと思ひいて
あれよあくうとくこすもうわあつく
そのおもふかふしたふきつせそ
とじちあつめくからしるところの十郎そ
うしよをかてりなはつたくもとするたて

のこされこまじらよせひろそんよおりた
ちいうみやちとそばうみ音しさんよいろ
さばちゝばもとゝなさよとそむちまてとた
まーちあけかりゝりゑはきとうハ座敷
をぜをしてじちよ入ぬすけなりちゝろへすお
もいふさけハ人のためちうとふこいのご
ちろへきりかりよあうまうめいそこ
後ひさよせのらんともどういそきへうい
てくさやうよハおもひたくまけゐ寺きの
おとうこさたへ座敷へばうろりしとそれよ

ろい世の中のあぢさなくて淑のむかしく
こう浅こぜれまいりしくてとじちまういそ
袖けうさしやへ古事のけふら娘志し
し座とこひこ宿れそてふとりつ来る
むよしくをすけなりをれっ情てそてよなち
かつりさそおふすらん内ちそきふろふれし
よそみやも問くきそ里やく尋ねをおね
とふくすちまおつれしくばおいなさよとこ
まくこつかりてこぞれハちゝにごゝ雨
思ゝまゝうつゞくれむつきちてをゆめよ

をささこそらへ従えしてちよまつの志さで
ありいさゝせ給へしとていさかいのりたは
馬よじちのぜ形ちのけて志そろりくる目
らつ世よたし物の君を思ひてふれく母
のせいしたまふよしわのこゝくはいく
かとあるよし一力の心くるしきおもはせ
ふそきまつしとて母うけしをこゝろよは
くりける家ありきてよわくしきさぬもは
ふりこれかともるうみもくを見つでまれ
ねすまりて見はりしせんとてくれむつ

もさいまたぬりきはよ母のうへそ出くる
すけありを見給ひていりよやしはりよこゝろ
おかゆ途中くはちうつやうふあつらそん
ともと思ひよりしいふてうらう言やう
よつのよかて給へ王後の父じうれ給ひて
つゝられどへよこゝろ見と思ひいとおしく
をそのとしくを思ふそとよはこ王とゆせ
しまはおいふとり一して能く志を志らす
まとのい行をふきんしそ寸かともるうみ
みてたまりぬるとくとれ給八かりのちふ

思召ありけるなとひらけましましてうや
うやしとあまれし松寿郎殿頭て書きたる男子
やとはるへきんをいましくおとくあまれ
ふらちなるとうく書てし四方よあそ八はうと
て黄ふこ歳乞ちかし去のふ渡をはまふ
し母よおほせらきしくおさゝしきりとくみちく
くしく親よおもはきて行にかいでんせめ
てゐ思ふーとはてて頭くとまてれしいすら
渡さおさくうけ宿りぬとてまわり立ふ
かりとさしその天とてめ若さかり

曽我物語才五巻

00
5796

あさまのけむりのす
よ郎ど言ん太とえんまのまつよ
えりうのけむりのす
ふをのくれむりのす
あさつまうまくらの事
ゑくしやく恵らまうてうれの事
でんうのよ一ち為のとしす
よ郎女よおさけかひしす
けすふさよゆうつす
てい女かす

おしのけるこしのす事
ごらうかなさけかけし女出家の事
こらのたくうひの事
うくひすとかはつのうたの事

曽我物語第五巻

宰ハ鎌んうまくちてをかしゝるむねかしくけり
めんおこけふうしして馬おくゝ諸うぬ徳世
武川つあるかよりよもさもハちくやつゆ
しあんふ月日れゆくとまずれさせたまひ
なりあるとほうちもうとめしてさしある
りうもあにはよ国しくのきかつひとめちよ
おはりすきんこくれてこくありありんよ
きこうれてようい あるたしちのくくふ
あさ間れをかしせてうんとおもせくさき

まゐりうけたまはり給てこのよしあひふ
まいりはんくわんのしやうくわんかたすとそ
おもしろうのめのとこそてあみあてすゝるを
しふのつゝあはまをうつゝらへこゝまてきむこ
くれはふたいよみきられはあきれはてを
かくてひんこよりかくいとゝやゝやすのこ
ちろあうよこさまとありぬほくしんあり
めしたちしんとやうはゝいかにせんしふ
つまてはゝとつうまうはうつれらうちう
よむまの守めのはさをありてこう思ひて

めさりみつやうよき給とちの事いち
つれあはしつちみへかゝをおもしりて
けんとをあしこはころへとそんしはこさ
よつうへはおんりみむりいこしこ給て
をはらむさなをれかせのりうへをとく
てひらしくはて つやうの事おもれた
つわいむちそとおもみへうつをさいらま
こやうこそん當世との御ありて御まりはくんた
たこれすきらし道しはらいるとの守め人
りしとるとなりくてりろくの志り

ものにはやいちくくしからかりふく
さうみんかおしもりやさしくみてなんこ
とてもありみちはしくへかりくすそうみもしみ
うるかすてうかるいつをのさらくくみそみ
らんとおもひしめしんちんとすなけさにう
ゆへしてそいそてよりけりその日もかりな馬
にのりうりまたとよおそれいりたるす
かくあさしかそへてしかまくるとのいむ
さしの國ぜんとの五郎くまけりで太郎か
よ五郎くのあしらぬすべ人よむまうしらく

ぶあやしさそのあゆるかくくといかむへし
ぶとよりさんこれしかりなけきすんのま
ともありけりきやうあいの人くもおそを
かうまと諸國のまくるかをもち孫す
しておるやうしこまいくまいしてあう
しりるこうむさんあきあけなれていはま
れくめまそおれとりなりそありけなこれ
へてとせものことよましもりかりつ
へふりたそるもちのもおころぬとりをた
ておちこみのをとつけをしてをしもろ

ねる人をやとおうかと銭こたちまいり
ちやうやうしこは孫らへもこいこれをむま
ふてとこぜめくりうれらハうちあるくゆ
みやをたゆきもむおしくしそめてもありよ
こその日もくれてもそてよりいはま川の
尊くよその夜ハつうぜだまへ國しくつ
人てさりりてはちこくこめきひしまりくれ
まゐ人て多まりりつをのすうこさまざきれ
はうちへんくへだもくよりくてそぐあまら
たちしくはある尊きくつせんの人て

じちとけだまへへうとこふちひさそめ
やごうくくをいひめるえちてるる人ふ
くはきあまれようゑぶじちりおはさすけ
つゐつやこへそちのはいはふしんのこ
まめゐやおりふしかれなの三郎きやく人
ゐそてあうたしあまさへちちだくむまでて
ふまよたちそりちるりかさのじちあやしと
見いきたちのけてまたひんこあしくてこ
きもはせんへさりはせ三ちもりそり
てすひらんとちんしてあしもやよあう此

にかれむさけやさへしけたくはせんかを
うへらきかるゆきあはぬありあはいやとお
をはなれまゐのうけへそしのはかはされ
しさをしはをふりたてなふとのそと
こうめよかりしけらてこれてとうめをほ
れものそこの本くはもの事をいもてを
さよかりをてこもりふくみしり本はれ
はるとらつらかは思はして遣かるしけらて
もの人ものやこへやそくありはこゝろ
さしともあきかれよおしはらはまさとくるし

くるやさすはうしはたくゆはありやー面
はようい是はらめとそらうすれをさう
おくらせかりきらつ人ては宿事いはれて
くしてたくりしこまりそらしんとしてあり
これてかくしけるうく浦とはすまとを
あゆる花さ人あしりかりよろはよそめを
あのみ事あきてそのよかそむふしく御け
ふかくりつきの目あをくこたまのあな
そくくまそはんこ御けかくいかしきをふ
くたつ人のすりちんさはしくしかりはら

そのほとりてくれみそりそのよるつくり
つけのくふまのいさのまみくふつ載たまま
ふそのよそれしまそ孫らへしを山ふけてで
のんくとのねまさりよりまゐんいきのちく
てらいへきやすしふなりくりあく迄ハ忠
ふのとうりつけとのさうれあるうをめれ
みなとのさうの下に行きたまふその御と
申やう国のはけふんあつまりてつしく
ゑこくめ苦てさ候とのとこのむ迄くよりも
てーつへきやうをるしつきの日ハすい

つくうけふじらあまりてやくそのうやう
神ふうまやとまゐうぜんありもしめすく
らせたまひそりあさくらやましまうけふう
くはゆふさむとふうせのおくまいハあり
とやたハふらん又からつこはじみすくもの
う孫よ中も候うあさからけこまへまくう
れと残けて君をのくさとみや候くくらん
ところくのみすくさの下よりもあるたま
れらついしまのくまつたれさてせこうとう
りほへ君と玉けくおりうきらうすきくそ

かくぜ給ひなるみなりとおぼしくこそなり
ありさかなともみれるそうしみつ
こゝくまりなるかなおひらてしくしてあめ
うきくれてふりなれはつまくつ夜ともし
めくてみふしくとこそりけりとやしら
ひ花やうなりしすくこゑもおかしれなう
よひさかくてちくさへこれすけつおくさ
つもりもそてなるむしさあよなをといはしう
まゐすそなめきよ下ことよ御けにいりつふ
宰しさいふをあはれありその日なくとい

あかつりなれぬ夜まよまろくつゆしきる
あるてしとそふくくつゆふかさはさきり
あつまりつゝしくをそへてめけるそらの
人々なはずかしめんやまぶきとふるさき
のよあきかきふくひさこえてなちまさき
まきことあるところにおりすりくん太さ
へもんけすくこうつやこうさ御たは
よすとしてゆきあれぬ人てなくん太
とえむしきとふのくてけ玉のまつりよか
りてそとまゐりたる宮んなきさしとひかくれ

けしきあるをのとものあやしさにとゞこゑ
またそこにかめは十郎かうかゝりかさの
下よりわらとのつきりしこゝといふゑれ
はふよそてあそやふくらあまといふ
そこうくんしさゆゑのふりつくるはあ
あまつきはけるにまとしもりはやうこ
のあいのらくしかへつつうまうりはよしなり
うへはとえよふりはあはさいうさかり
はこいふ所よちまうつきりしさすこゝ
いてこう言んしあらしうし尺あてん

されはあつめをのすてはといひなれはさ
またはおもあやしかりつまうけじちとめ
よしそれしめこなりぬ郎こらへぬきのち
またかへりとりふてしきてくしさく人に
めはうくおしなんたかこまのむすしめつ孫
あさおときんにをよこらてをうんとこ
うふきしもろしもうこはゆまてとつふやさ
てあにをおしのけかくりなり十郎まいり
とこくむはらおすりふしよしもてあはせ
むよりかてりおひしうなんたあてあのた

つかれはなふ事ふやとそらうりけり
これハまだこのほどのつとのこいふ志
兄十郎すけなりとこそあし　よく見まじあ
むしふを太かハすこゝやうあのくもをも
めとこそこは方こゝやつしおそれいまするこ
さうつさしやるよあらうこそこな道りかあの
くましやりうなよしともうちのものふ
てほふくまいありまかり志されといふう
しれきこれ人ゝ志みたけとうつまそふあ
られこころからまこう志つれなれし

大名衆のゝちゝおまじらうよせ大こゝには志き
たれしてたのみはやうえそかてりはなる
さてをなん太つはい二段はいうよめつゝは
きておふかりをありぞやはくれはあやしく
しらおはずらずら十郎こそ一つ身はおそれた
よるくなりふよかよいすちつけのとのよ
かくりてないえしうきやう入事ある恋こ
なん太うしん事なりとやすいまらう
いのちとしいさゝこしさてゝいうちとうそう
こんそきつとほくしなはりこゝやうこ

うなちうへ給ひてかをたゝきりのちをとふ
つゝく〳〵そちろをとらけなまつて御をしく
とゝれふうゝ兵衛くはまてそかゝりける
やちんをかりはすけ人うしなしてまうし
くちのちくまかりなこたよめくれしりこ
とろ孫よしゑふたうくぜそとぞ鶴のく
おく志こまかりめ郎さうて御るつうちて
ちのいちん小ていゝさはちかるとのともし
ついてはなこせてとおほくへうすうきゝて
そ河まりゆくへそこ河のはゝある御かうす

じちのていとゐくるしまかりともしひとけ
ぜとそけちしいまやときちうけくうりめう
ならちおかどかてすそかやうこといてと
ところ十郎祐をハう人でどかまりなまくハ
ほちうあまうのよるあまじ一まくしちやふ
御てものせんまかりとやすしたとひぶん
す人さるるとりふらきけ一まんとこり
ふぜよ二りんけくきてよそいうしよして
こちんちうむてしたとひのりちうこり入へ
程とそさちさみぜようまなつてはみんちふ

はゝおやにそてられたるハかなしいとさ
くわかくへるいけへいしすをこほしとまとり
てもなみだをよりそのかほハのうつるへしを
しよのうれうさかくハさしちかへてハ去
めるとをきうなやうのてふかくすくはあ
といれはまことにふなちよりていまやいは
こまちこうけんりはしるものとをおもひけす
にまかまりかたりておとをてをかしきふ
りとてはくところよひそうまうと銭へて
こりう人をいこしてたそこをふりとの

ふやのはつこうひなりたるのそれくまあや
うくつうでてそつはこうけしみおもひけす
そてゑあう去うりは流まけしこふそふ
いかさかすはゝよりいあうとそそんすまと
を国よやりたせはそそふる二三らうきれ
そへてこいふ人にはけんよしかりのらう
たうみ去とろつうんせうしんとこさてへそ
こさすつなち出て為るりかをかよいすうし
こまうりりはゆつりそりはつてさひりうか為
しょきうへしへりさてまけしとこうりちう

まの道ふるきのともしものまゝよをあけ
つこよなりぬましけり人よ御ハらんゞ
てこれかきこゝろ志ちりもこ衣ごとも
よいてきろつけしくさのけあるちて
まやしまてもあされしとやおきれ給つらん
あらうそさはかこりもしその日なおる
國のたちうつとうしゐさまてそありし
ちのしく花ごすり出からくハちてり
や日かしもくよる終古て御しもこのけふ
らんさのりけとひくれさ天下よおきての

しまれあなようハもれかまけるへこはちてふこさ
こけいそありくれもけどものくこなすに
およりすそれあのこせんのやさをゆる
くもかりありうちハら責んた馬けまハ
しそ道もそろつなあるよしくれどもさん
日つたかりけせんよごさてくしこやうの
くるなくんこうあるてちしせけとしけ
まなぜとつけちやしとそてぜめくるあるあ
そりをもらひてそてえしきん給んうしさ
けつありくれところぜこうすとつくすらう

やくいたつきもてまゐれのくしこさこの
はなさんよまいばその具むまのこくふ
かまたそうよハうよくなりかこちりてあ
つやうくあかきかきさうはかをあくしや
うとめこのけすくをりしてきぬふあさまの
れあめなさておこきぬ又こもらのうあめこ
そむるんもきらう一寿とおもせくさ
きなはもなんたけ給てよりあへを
こめふ出うあき肉なつめなふハへて
えりうあはなまくゆうなちの祢

とやなれさしつまくう家はかんつあまりふ
うすひのかをきぬ百よちやうのところを
そこまりりなばあるかしこをものうらまや
めくこうりなんぶをむちあめいまいかせやこ
なはもいましくなん太う牧んうくこれしよ
いはうしとそ人て中あされなり君をまこ
とふはさうつよけよきてうせ奈れなれし
も前出ちうのけふ尿へともはまふもり
まかくらんとおもりぬもの名なかりなり
きりしともそうきやうめいの人て名君乃は

せんだうをもやめんとおもへどもいま
すゑの人まゐりそうろふかうはさう人は
あしり馬にのりゆき一日に一とよ
そろうしつる日をまたくむかしくのこそ
日をおくりけるさてを見ありの人には
のくはらともしれのつけるとをまてす
てありけれは馬のあくかりよきつねか
きさらきをはしてよいはりけり人々これ
とゝめいしもやうをとりておはけ
より君はらんせらまいをめ　夜しぬ

のこはひとこういくあつの野よさつね
ちくまうつうさ也のれつゆえらすまゆ人
とおふせくさきされなれてもけ次ぶけた
まいりてまかとよえん太のうたゆはある
祢めてあめまれはぬさらみをうらあう
まくはうるまたなまくはく中さしくまき
し大きやう小きやう我もくとあんしたへ
いくれどもよむ人かもありくりこうふむ
けしれくふのちう人あれうやうの三郎い
たけたりよありうう人はいうつてくれしさ

音さん太さんもんいうさ法あいさやうらは
つまつりぬとみててはもやくしやうれしま
やかりて
我ばかりさこうしくとまうあくゐさよ
あさまよもしはゐるさに孫うれ
しきくつりうはせ君にさしりこしきんゐう
よすかりまゝとよさつ孫よおうせてうれ
けうあるゐかりすしてこうつけの國まい
いさ三百よもやうもそ孫うるさてゝくさ
うちゝゝりふせやふいうるまてさりうよ

かりゝうし孫八まゝとよきこゆるめい志
よあかりけふやとゝろのなふしおゝふらゝさ
うりゝれゆふ月さかうしやみうきいてね
あんふせやよちうされきの山寺とまみて
てみてさるをもしよくをやすくはらんそ
らもをうてはおりうゝやを濱ゝをおしく
そ若うは我もくさん野よきつ孫つるは
ふるため井てもの一上田ろつよさくいちゝ
出やうありたうをうるようらん女をらく
発んとおとれ出よかしゝれさんさうよ覚

こゝやこへゆきけるみまさか山のうちとりふ
てよしある女にゆきあひぬとおもひてよ
つそてこなくしていみてくりくてこ
ましひとつはなしちりせぬいのちあるまか
よるひるときハ煙かりなりすして思ひのなか
さよふの女はひすゝむるかとみれと
出ていたきちつらうしとられやせん
男ハありあきさひとの声きけむ
こものうちとうさとさめいつある事や
らんとおもはれてすきゆきたるはゆふくれに

かるさしいろつきはあんおき人こもりて
かたきもまくあのをこぬとりてみまてありし
女のかきなり
いまはとてまちすれやとらんたまのはら
おもはけまのこいとくてては
とかくはおとろやそうへしよ
おもひつれなき世ふりなりし月を
あたまちこりてゐしやもとめし
うやうようこてやりなるうふ成あやしく
てはつれのまくはよはさてそうつゆき

てかへまして女のこゝろけるふはされいうし
なれよりもくおりてまうでゝ山のおくよへ
ぬいよしくあやしくこゝろけることけりみ
まはふはさしてつぶりおれのありける
ふおれるきつゝもうこきてはゝあつまり
ゆくはうはかゝつかへりますでゝこうは
いへりやくありて人のけりのしこれもおや
ありけるきつおどもをなりうり女すなりふ
くりつゝとみてはるところもいへしき家
ふおりじちよきかりきおんなとせてこれし

といえそりかしきよおもえちふしくりぬ
女いそてあれきもしくみをてあしこよれる
これふとりくもころありぬ女つかるきれ
ありゆまはゆちくともなりふみうりけ天
あけぬまは女いまをふるけてよそりなん
こいふこきやうとしいはくそとへしま
うのうしよをたまはまれこやしんれ
はつうれなりはありさまよしらんしてこゝ
きりいよよをつらをいつれてさるゝて
よしうきそれやしまうせよかり

わか猿をとくへ遣つあまれといゝしはけうむ
しくとうや弁しおゝれ上きうし
かのうちをも残りなしともへ人みなし上て遣
けりとなんいせとのうちにつはしくいわ
あるをやさて君よりのこやのいや三郎を
れしても上なのくはかりともい画ともしを
つけのあちのふ画さはかりなしにねて
よろの猿をかりせえはらんせんとおうせ
られなはせともはふけ猿子ではまうけ
れなあよいと西中てよりのミや志にあり

くゝは志うし子のことのかりくうのりくをとらし
ら志て君を入ゝそてまゐるいゝくゝなのつ志ろ
くいやうりつゝやへいゝせおりしきすの
のふるのは猿なれをふせい山でゐうあふ
龍しゝすとを従んしくみまりゝせとのとふ
まらもなれしておうせよきうれてつゝの
さんまん千人まいりすさけ山を千人川
ちうをやまをせん人あてたけたおうさは
らふ百人志ふやうをやをめ百人とひおゝ
されをめ百人まりたかいれし三百人かん

くにみなたゝかひてこそ八ケ国のさふらい
ともはせくはくにみなひらせなれしもをそえてます
まん人すおかれなりふものゝほろしとやせ
ともいつくにとしつをとこにてゆりなり
曽我の人々たせこのそのはようきまこされ
ひとめうらくれにまいりなりきれしともまそ
のちけられくさのちうてこにてちつはつゆ
ふつせのなまとをはさりおほさまへすあ
まだけおろしのすりもふやさんへとしれせ
しすけつ孫五はまてるめうよめをうけて

くらりさ殿にあはせしと一のてんなりしま
ありまそそのほとむらしなくれにたりむ
孫んといふもあまりありほ達ゝまあとた
けおろしのやこてはいり奉れぬかうた
けしひとさりまりなれともほとお帰るあ
りなりともはふほうさちまくよまいらんと
てとりしくのきようともすほはまくるく
さあたくちつなり君はさもつきをはうへ
さらせ孫はなるとれちうの孫みりうまさゝ
ゆるりけくそとほらつ孫ありなれをいそ

まつのかとりと中君さらしけしいかしへ
のいかんを志らの孫ちかこ秋の山こへとらこ
そよ兄しあつ野よ志うのあくきうかしさ
あ道とおもせくさされなれハともなふう
しこまれこ中なかおさなま事のふ出の
ほうきやうといれし人にんこつくふよ下
なまふうつ国よあさ作まよて貝なん一のう
てくろもそのやさのちうをゆくよりも
天よいもやうちはちまてあさきにくく
てそうをとほくしてもしひふすそのひま

すみ山へせこそいまそ秋ちうよひこさまいし
うへゆはみそうかくあつなさよおかれ
ひ孫はしまさよおひ出し思ひしくよいても
うへよへとしろうひゆてらしとらんこす
ほうきやうへしとこゑあさつまよちんを
とりいそこ三百人そゑせこくやさよいま
あるるをおそ志しきちなる雨す天もしさ
ありよかよひ志かれうゑこさちくうりおり
かいりこ或戸をめくしくりなれしこみ
うの孫をとさして

ちくりやいそうちうれあうはらか
こよれしすがいのちとおもへと
とよもうりなれをもうしやうられちく
もりよめくその日のすりをとくめたまひ
心あれ志らのあをれとあまりれし三道心をお
ちし給ふ三百人のらうたいまでくうちん
をおこしぬとありこれみをもあきたら
てすきみしあうのためよ六まんぱんれそ
ともをうきくやうし六まんみんれそうを
あやうしそうのおそれとどらつて八幡殿

かぶとうやあれよをしてあさつまのすり
くろとまみかいとくむてとのはなれを
すくしきれもろごをよもしとやうなおそへ
くおうきなれもしまよいなまでありま
みをもるくをとすがあとこりのさそうこれ聖
のちつをあものいのちをやすくりし見てゐ
きはあんとすなはちよやとをこさらしめ
それしハ抱りしの一ぱいふてしうやうのせん
をおし心ぶみや我宗んしのちやくごうや
いろしうちさをちつはつむもそその日の御

ありをこゝめたまふつこおしをまゐれなれ
ましてもゝの野にありをとゝむへしことを
はふらくはもんをくさんなりさらしひく
ゑみほうしやうのきやうとゐかはらまちう
とりんしすさぬなふりなりきさをせけ
あやうときんし給ふまやむしをおしへ
みえたるのしやくあたゐらするいくさ
ふせめまけ給てしはをせんをさしてまけ
のゐりかなものゝ山けしとハ申せなれ
しやくのくんをくちうしやのちとくさの

らんとをこそふちてんし鳥れつれこおふく
してこのうてうれのたあふかまちろされ
めへしゆきもまつ命なりしハはくしをい
そうせけあやうをおうきんとそあくしや
なあなこを出くてけちせんこしふ山よう
ありなまふつよあきなるすかなけておふ
そこちつらへてよけふなりそのいくさよ
まけみなりこれをせけあやうきんし給ふ
ろくよもていくさよりちかなれなれとく
ありやす君とあるのりのちとあきれしこあり

くろをとらめ給ふいかてかそのころあるう
はへきとそすゆるあけぬまし君かまつくる
へいり給ふこやすたのくをあくく
曽我ふそかてりゆるけふや且けんあくめ
いちやすくんのつこ色んよしそちてみしの
ひりしおみまりりのちをすて力たく給し
まそうここを思ふ心中やさしかりしをあ
まりありむさんなりしたしみをなりよう
まくら成まちまへなさそれしておもせくい
されかはるけふ成へきをすいて成こす

へうくをかりつもおもいしといふ色ともかし野
みまさは承なしついてようらんとおほせ
らきそれしたりけすくものむあさてれ詩しも
曽我の五郎時宗とこそあみてゆゆるを
まれらうさくこともちうはこ人志うしめ
されしはりすや思く思けふられしを為さす
してふし程をはかりあるをきまてはある
ふうしへて思ふをくるし志と詣はさめは
へといれなれしとすなりこくてきしき給
かれこんとなりとちうなれしもまつひさ

はるたよりもはしあつまりてはごとを中
ゐるときも孫いふやうはらくすまふあん
するおひまをすくめくなんこ娘うかくん
ゆへもちそいまゐてうん娘しこけされ
ちんさよちのそふ氣ひとすしよおきれこり
ひんさよくハ山水なをとそは色かくすは
益てことをまくうるへつくすよるをもい
いすひるともこうハをと銭くはいおく
ちつくそくこてやうかせん力をやうるの
みせこあう九まるをうかくいところとと

こうちめをし去そんもるとのあわしまあく
ひやう志をやうとあうていのちをうこふ
てあましいある命いさてあけくれ思ふ
もかるしちんといそてあんのち二たびかく
はへつくすおもれこりてはもいかく宮
はすみけるうこて志さいみやおよふそれし
もすくあうおもれけとめてゆへとこもの
くせへつらかるそあされあるもてふかま
くろとのはりそて御しくされハ寸人てる
みうつ浪おもののちへそゆさくはこてふ

見うりの与一といふものゝ子に六ひやう
へい一條思あまりて父をいどうくじやう
四郎ふり与一の母をとしむけいけりこゝを志
うしなりけるもむけいになりをもちてたり也
十郎ならくまいれさせ給うのよ一なのく
てきんけりとをいをもいもしめつこと
小五郎をはなりはてそこをいれふう
をしやとおとされけれなよ一のむさうとき
うつもとえしくかく我せきならしもしいれ
志かいのつましとてきりとり出しすゝめ

くりけりの時に三郎をころされハ十郎ち
うくいよをきれへさしたる事郎けつし
きつかハあつを大事とも中あまさせんため
ありといふよ一こそあまりけるらんだ
とひいかる大事ふりとをしちなつミ
おちそ郎をんよいそしつそはさたくまいる
へこされまつかといれハ十郎こそたゝ
まふりてもひてとこきしめさはらんまれ
らう郎よおもれありとハ見る人志りてハ
ちうまうてしこゝさ大せいまてはになれある

まろき二人して孫らへはかりすけかへん
たのもしなまく我ら三人よりあふさのふ
らこいつてうんいゝとけさは抱さちやう
てとさをもつくをきておもかつきんこうさ
ふさみやあまぜんとてよりくりだれま
きなまへといれ名れハ与一志りうくあん
してものりしをかつとつあつまけ
き思ひとくまりたまへたゞせいハ世り
みをふかきやうつあくしを仏とのハ亀ん
しをふうきあふりあしさしゆをおやのつ

たきれこゝにきたるくせ浮てにこさとすせ
はちとはするしましてやんちんはとを
つゝまつりふるをのなかりてふてもてよ
きたくふそてをあやまりておひくまともを
はへこゝをのつきんとハおもれとまでても
たくしありこさを頼くれ孫くそのくへすけ
つひ若こゝ若はふりをのつふそせんそのい
どうをあんとするのこゝろうとしやう君ん
とちきやうをはりうすをしらをこうこさ
あもとそんしよりきんこゝれしうるへしふ

ましいちもすつうまげいくさしそんく
のこおしすもくや曽我の太郎まとられもの
よおしみつぶまみておそれとしまぜいか
ふそしてはふきてゆるさしたくまつりう
こうをいうしでんそのいごうよあんらし
たまへそんくのありけまそてただは代よ
てじこさじちはさとくめ給へもたきよおく
給こさすしくはき十郎こそていとおしの人や
あろうんとくしれはるをまあとしかおよ
せいむるそやりょとされしらう力にくる

おそれもようすむまをたゆまるかりてを
又たかりすいめくくひろうにのるへかゝす
とくちをてこめたくむとすめつきたまら
ぬるのむかてむてふもしめ思ちてみは
ふをおやくしおそろしさよもてい茶よ
うちきのちてハとてころたまいは風しや
皆まくしおまよ逆ともしやうけれどるよおさ
さら紀とされさいのてこそもさてをどれ
らせつしめかつちの人はちつとよをとく
ひもしめり逆いて今ふさふむうひこ六

これをきゝてハいよ／＼たのむかれてかしは
あるうやうのけたものたかをかんにした
うちくけるあるそこよおもてしかりける
人よかくたまはるハちくしやうまてある
ものかふこりれもそくからよかりより一ハ
又郎よあつちうせらきくいうかをおしこ
やと思ひしうけハ一人うきうハ二人也
そのく又郎ることに称る大ちうしありこ
うれなとらきてうちみ色かしすきよせん
ばりかまくて底みゆあけてうれしらさか

わかさんまちうくをいうてと思ひさけ
まりぬさてうきうちるゝのよゆきつらんと
思ふつれいそさ馬のくうおう跡しちのり
うまくうへゆうさしりくれ山まこやうた
れもゆめみえきうてそねさりくはこうふ
わさのよかりハうまくうよきくりくる
よてさう川ゐてゆきあれふり与一をみき
もかあのくしきのりこ海のありあとこ
やかりくはきよかりはちうくこまをれ
うへいかくへそとりみよ与一やのきをいさ

てこまとちやのゝるゝやくありてかまく
らへとこまりこたふさくをかまくらふハ
なふ事のおまりこうらあしいうちのる丈
事の出さゆく参りしもこよあちて苓あ
そやいつこるれ事ありうもとしとてし
あるへうらすけかんようくをへうらすと
てよへり馬のうろふとよりなまおくとい
それとよ一中てしあちの志さくまてちは
りおすおもち鷲もの性うきくりはておやのう
たきうたんとてよしち伴と左のくムあい

たいかふまーさと申て山人し太郎と申お
られもかうきんくにあつかりけうまつり
ゆうてきかいつみともる屯かりしてかま
らを二人参れりしあうて一人ハしあひく
られハてうやすのさしいりを中ねまて
うまへをしふりんたのかまくらへいそ
きはとりれくはてこきらしとこうさりう
く指をいりすやてありてやとれ与一家
ゆこやらと元ととうさかもおらこさくひと
ささまはらちとれとのかいさや志あく拝

もんとうらのまんみちうれするもと流
やうとんともいちていぬやりんとこ
そすでおりんつくゆきやのもうみもいの
ちをもちんうれよりもう話くしてふ後も
でんきんよりをおりくでよとこをしふう
けふられのいのちあくふあまはあをまそ
とおのむねさうさくしとそもそもうおと
のちうをいれさう鈎はらのうちのも出うし
う中そりあるるそうまかいれこうのせて
いもくまやうちやうちくうれりしとおる

りくつうよ志られもるまそそけうちくし
ふをはこさあまんけさん人上へすさんとふそき
もとの大事心ようくはうへなおんひん
のきのまそきうくさもまとのつ命をも
たすけをけ上さ国へすあくるとこうてな
一やりもや為りいのちおしくはとくまり
なおくいのちありてうこやうへとかまあ
くうへをや給ハめよしもりうまうさかり
おうハそのけしこふそとりへさみよく
くゆありてじしあれなまくこさとこと一たん

なさりとなさともさたしきものてす
あしたのまちに中さんをしんけやうありとて
なつをしくもありしめさしそのしほうき
らごう志なれたまのふともさとはいおふけ
ませ候ろゆうそうあんおんあるほうさこう
しれさくもみをもせん人に御しいきもらん
しやのまゝとにいばうさらしそうをさせ
のおりあくみんみまいりましかこよのい
ちくゝふへつらそしくさゝ事のこれ
ほとてやり候ろはおこさて右あるしこち

なをゆくへかゝすちゝ候なう人してみたた
まふてゝてうちんよせゝ候てこふそめれ
まくよとさてみるもめさましくてこうい
ひつゝめこみ事そせずやていうちとの
くんちうふかうあつうるほこさむさしさかゝ
みはハ此度ちゝの一もんふゝめ者やはう
くすよしよりもせとうゆく右志りたまハ
すやせのしの御代と六よおとりしふゝや
庭一らつゝも候るほさたゝ御代ゑませハこ
そおいそれしともしいかたさゞ右もくふなこた

まつまつゝ心中をおしはかりまいらせてあさまし
やしてさうもなんぼおろかなるうめくれハ
くしふ我つくづくこゝろてありけりなんとや
おもはれ候しられども一くんハあてまいらせそ
ゆ人は如く ことうくのまさいまおよいず
とてもまつたけふをひこかくすみのくち
ハよそ山のものうかりしてこうへよち
つまらく身のありくりこれ事もしこうかれ
まんよいのりすずかしんおもつやまうら
をきいうそうこれ事すのうる徳こふしこ

あさりしかるまれ文ゆきもへて人ハまてんを
むかしらしんめ以後もけらるよすへこさお
やいまよましのぬりなれしせありころう
てしめくえなりさてもは人てこえうしよ
りもつりさまのよ大いそうよちよまてざし
ふかしさんせんといれくれも恋うる徳く
はばなれいてくぶうさわり勝まてとやは
へからん思ひさして一度んれいうつひ
もしすりうくきしふそてはそりし まいらせ
よおもはれさきまめこちにくんらきもしくにを

けていけのみせへはしりくるをつくはゐ
四十ばかりへてゆくうちあてもなくはいすぎの
たれいそぎんのちをよあれえん すぐに
しもやうかゞみしりあれやさんとくじち
まうきよくりさてめ郎ハ一と銭ありしふ
けうみかまくしといてくきしもうとめり
たせのきあくへそとおりたがおりかう
ちりうたん太さんをし十字めこさふくろの
きあくふおりいうりきうめうのと銭るを
でてすへこきさい人まむしこ面を殊へ

とてあしうきたまさくしむめ夜のつやらは
く本ありたきてけしらるこさうしのは後
申ふたんさん小入てしとてとおりよたり
けさめくめ郎あとうするらんこうしこせすり
もかうけつさしむひのおひのをこ殊うち
ありてでたはもむけたよりちのひねくれ
とのハなふとさうりへてうやうみはふる
まふらんとてこまをきめてそりてゆく
とられむハむまのいきやを袋んこひとつ
うの売くふおでいてきむらしくありたけ

とゝろへかけすくりつてきたるこれはこれ
おくかたそみうの次郎うのかるむまこ
きんのきやうしてそんのこまよこまじらよせ
かるかしきいかりあまりかれものゝうへ
ぬ六こむまよりおりひ源三んよあうるぬ
郎ざら達をこうてあしかりきんとやおきれ
言んいそさうちふそいりよかる言ん太右
よく左しろつねるよかよりみすとそたほぶう
ひくりと我りかりめうをのぢゝよこゝろよ
かおこりよ人をあけあるやつかふまし

いてくひくうちこまりいかよもあつさやと
思ひかれども寸二十よ源んおしかりける
いのちをかけたへつためよをかつをすけ
つ孫ふあうとおもひてとくまりかりきうま
麗ろん出よゆんまくすくとかんあはいそき
ますしてよろすすをとうされしとおいま
岩めうつ心あるをやんこくしをしため
郎つ娘うくありとられかれことをてきの
むけはひをじちひこすくうましし君の
御座りをいやきてまへかん太にむかれ

まきびんなどころよりむまれよいしなあり
いはなどもまごのみをおもふ事なし
いはとけよしくごいはなしてけもよれ
せんをまありへちら又郎ありなかとハま
いしけりとりとえむみなつきもさけやと
きうよりしてありなかくこそえやりこと
ことを悔くみかるもてりするてそおほす
かるきまやせじもくハしものくちふあら
りまきちうまへかせつあやじさよ志らはく
とはいまよきそおもれ志らきなまきちうく

もおかりなりしえむ孫ひとつみの志あく
みてハさこうおもれつとめ大事ありて
せらしるし身ふおもれあまハむしん大事を
すてひとつうり宿きてみけらりしくもい
けいのむちをうていますくと中あ忍り
思ふりたよらなりせもなん太りのちあ
宿しとそならしなる孫もくこつい志ある
とろわまはけをいけの此下み将君あり
ごさむ孫ふきけなけあきうりを思なしふ
れくてあまりのよりもきくきちるへのき

まゐらせしてありさまは此女のまくよりも
よりて我に性よあそびたりあつ霞うへ
内にそいつ出たんこしのうたおをまもつ
出たるを女のひきよせしてとくるよそ
いそくとそこさをかへる扇をすゝめい
おもしとのとや人乃見るらん
けすく馬よのりふしゆんてのあしを
どいまた今までる給さ手なすをそしたる
こゝ見とそ多さてさ〳〵おそのまても
おくとのつゞきさをうありたれ

そのころ音ん太さ人をしろのたゞうゑはて
いつかやうありとてこおとをへしまうさて
をはしらのおもしろさことおもひそめて
うけもくみてあれたりよそ思ひてまさる
とたまふをたれし女ひこきりゆつ一人
おものさらすまゆへしをとめたりきれ
ござあつて又郎あるとそのもくにゆき
さるみたれとをあしけりたりおみてよを
たかやとあやうくさもの姫君よとひたれ
いわりうたん太夜のとりておう遣よの

ろくハ男氏をよろこといれかれも五郎さ
さてあるきをたけるあそひ志さのむ色さ
ハいあら祢存世ふきあらきかん太よハ
男氏うへらきしとめ一月やまよ男氏かり
それなきをうて渋海また得とはおもしろ
ありかけちくハりふ人とを世とをうしむ
色々すをそ成う〻とよ事さていくめ
あよと見るゆめ詠よとする度とをかる
けらささてまよ彼大をかくらん
こうささてひさむしを八ておさらりかり五郎

むすりて懐きのさんふからいて見せむ
むとひたるかを花ありて花をは目さら
あまおりしうつきあせてなあうらをはく
くえてかをうおよおしあてさあしくと
あさけらきの指君よけらんせよやくを
まちともきてていりしや目をん我てら
あらうのおのけくとらしらきてめいひより
と度りうけあまへいまとみとりこをら世
給ひしとれあうおるきうといれみきめ答へ
さの三十一文字ゆへそりしむらしさ添大

りしありもちくよしいきんとりめかりもあ
りさしふとりめとのさるゝしをひきて
こしる所よにはよゆしらりふ寄んきん武川
わもさそれへりのなるをあるひぬへり
けすふきこえてあんち行よりてなき
てつみるけこあるふるやことはなきさ
よゆさこたへていもくるれハ武國にうく
きるにりんきてわりもうちて九十よ日し
てらくもゝこハらーまれいよたよしせし
ありゆきさきこいまつりちゝみへりふ

さてあるかなにみちれしみやこをいそ
ぬけをこさりける事みなひつりのみゝ
もきしよきさるなりきれしをあらふまや
こいれきりけりふさてきそ多武川七月
にこふ色しよききたるころつひこゝをやぶ
ちそてしをひさてきりちろ入かうへ
つときてハなくちなりくの國かゆはいか
なる音んことうなのむねきとふかん
しん二君よけうへをていちくるやりふよ
まのしことや中きさちやり山かきられ

さおりてすゝむるとそやつたへあるゝて
ひらよりやうかふまへてくるさハ大こく
ふしそうとりか王をなんまくといかさん
つきめ一つれあるときなんまくむをハ
ふるかをふおくしくりまゆらん出くい
りふるかをそとゆくみありくれさいまさ
こさしなまちくてはつもをとそりいさよ
かいなすはあるともりしそさいつしく
ふかくれしふるかをとらすらぬめやまゝさい
らんあおんとぜんてをあくす色こまするく

ふまをいまうふゆくみれかをのねよ
ハくるせよとおもせくさしなきハせん
しそむきこくてこつ女をとれて見せた
てまゐるゝはなんしておしとくめおさ
なまみりんまくやをしゝすにおもれなれ
ともうれりけす女とてうくられを海のもの
しくてうておこみ事のゝ思ひふけさ
くれこまうおとろこなりのすと見悪く
まんまくもやうしくといかとのをめしば
ますいりせんとまひたまふさうしいかま

うかゝる君かんりくをこゝ王にかへしてミ
じだいくおもひハさらぬてとすそりけ
きハさかりてしとえしりむちなりそこさくら
をさうえて見えで筆女まれゆくかくはうさ
めかあふよとおけきいよくかしこのさ
つおしミられもみ王のよとハ筆ふさら
いかんもくをきろしそをせ給くとすけま
もやすそふかきふちよきろめられなり女
こさて思ひすこしる給ひりかしうのふち
こらんとえれなり大王しもや思ひすてなり

とようきれを大きんくきやうをみとをよ
うのふちよのそこくるさんゆうきんして
あきひ筆ふら給よは女見えさまよ出やすら
ふしそでてしかちよとれいりて出よなり
大王をもうめらしゝあへおさいかこりおく
てむおきくかりてり筆れなりいくそとぶ
くしそこれふちの中よあうまいし二いそ
こさうりてさきあるせてそありなるきまふ
しきおりかんもくふうみ君をうこあるを
やと人すられは大わりこさしめしおゆを

ありしをきゝけ給ふまゝすれしとくて又さらん
人も詞をよろのかち之すとりみこそやう
こしありさいらんありしれもやかにかうも
すまいとかハいしニをかこさふ岩不よう
れいしのぐくよおし鳥一ほつひめありて
たんてうのふを後の下あつうしけふたし
申まうりこれをうきまう労いゐてもやと
ゆゑんしるゆ式おしとひありあられ
まふそてうす悲くひをうきおしくふちみと
ひりうぜよるりそしよりしておもひこ

そとしほくゐむこゝをかすありてくいちよつるやう
ふは後入てすとハもの方家の事あり
いうあるていちよりふさりのおかさふみ
ていかある力ふてつひくてあまりふむ
きれほらんさうぬたよまれらふせいのも
のあよくおてよもかれするとそれあれま
せ思悲をのきるまるそのくた飛ようこ
ちをほくろふとそしきしのもてこあるを
やまれようひくきくあくれハうけすくう
まあとのさいちよにあるたこるなにつゝこたゝある

しらいせうつゝ代をとうあまそのゝく
うらふる拝もちしみもあふさうしきひこ
なきなまよゆきも花みちくじくりすミつ
ふをむすうたふをうらざもよむそう
んきんや人としていうてうちきとりさ
がへざそてものつゝたをよんで
うをおうぬきゝけ深山れあう名ぞ
おくれふうこ殊さうふきいき
すける身よふ殊おもひ出とあるとのあ
うふみとましぬふさけありけり

爰ちて屋天人栄しんぜさる所あまさまれ
ありて志うをまさはひあしとこてたさ
そうちても思ひきてまできする為武せん
うきことをうみしやう孫ん十六さいにや
よきめけして諸國をめぐりやうして修
女はおふかんそのとうりもを家を六つ孫道
心ふきやうして心まも八十余りしてお
ふしやう思そくられをみけふなりまこう
かりし心さしとをこうし言ん太さ人をく
なりすくちけまをきててよしはしけ女へ

むかしさいしんとやうましてくるはらち
りを厳しくいましめ曽我之五郎しもちくし癸
ちう道羽ありんゐにくまさんの綾らうさんと
思ひなれはさてもちうひつけつ傍宿まてを
いかれうりなれしたのとおけまへいふおい
よふう娘人やある便安なりしつたかし野
すそ路まてを彼ちてふかくきりしくを
見てけりしそうしゆきて人て世にまうこと
よくしくしてさよゑへきぬをして人ふ人中
あまれなりよ五郎を氏の事をはなこころ

て厳しきくをみつらつのらてちくをそ思ひ
なけちまよりていよしく身を力こそせ
を世だまして思ふりのさいりまさなるは
ちてりりすなてそあまれはあるなけしくめつ
つかし野ふかくられけい傍ちらとこきよむ
とれなるゆゑをくはちくうつぬるよ
わつしいてうるこ園にて曲よてそあしひの
國ありこもくまうとハかりよのふまて
こまうふさとりれたれこつのまうをした
いてゐの子もてちやりこうせんとそい

ひろくほまれあるふうの帝王くわうとあらそひ
うちほろぼさんと奉る時ゑつ王を
あやうしあるところにはんれいちゑ
をとらはれのこきとふりをしかれをふれ
あたとのこきせいしるぶるたしくはれ孫んふ
おほよふ變よ志けまりのきこんうよもんまい
とりふ娘よりのえりしやありまを孫
さよせてれをくいよ忠こ王ハまさしさお
座思くこ越のさしをうとすしてくはち
ふ事をとりてあさくりを天下にのこす

り娘そのりちをこさせんことけの下よりも
りしむかまうしそへりくしこくしさいしも
たのみ國のつまをおもしおりし西へうちおこ
こうをとらあつかりふそのうつミをお
りきんと思ふありあんちも忠もしくふみ
ごろ商をてしやきよくをまもげてしとの
なまひなれをもんをいゆうるハ忠もろく
くいをもけてりとをうるよりまたの
ちかりまそこまりをちろかさん奉すも
かろこうるへしそのゆくハまりのやう

もくのつまとのこどうそめるふかき國みは二
すまん騎ありしけのくふかハあれのすまん
さやせざをられて大まてさせされとあり
そのくこゝろうつきんるよきしきゝて
ちふうしてさいたうさんを付ゆへゆうし
ありうれのあらんらくもこまりをおうろか
さんるりの御ろすきまんハつ恐よ
まてありてたけさるちをとさすせんま
うこごうふられてまれて一やうらいかく
りてんをまれ志りゝくつしとのをふくし

て娘をつくしいれこぐまらなまくといさめ
られさしたる王さまをもちりすて大まいもつ
ていくさつせりふハせいの為めよりす
たくらみ恐しんあよ大さ大さやつのも
かりちくよよるふりゆきもちくこゝろとの
なくうれ家くにおよ八志ゆうとられもる
らくあんちさてしくく志きりけはさみこそ
ありつあ為んかとはりふもしといもく我
りねにふそのこしやゝうらをしてうる見
とし やせん事を御しをいくさはらよし

しもつふさをまたしをやうしかへり
ありちうせいはとまらすさしさよとまれ
こうれ迄をうききとさらんされさうしふ
すしなんちつくきんありけき又はまをの
ともよおすすけるにゆく出國へきこゆらん
るりつはしか志けにこまうよおわかさうし
あんらさふくゆともあこあるましとし志
はまう十一歳二月と志ゆんのちう十万
騎の侍をのそけ志ぐ出雲へそよせた
りけるこまうきらしをこさせうてはあさむ

くる歳よおうちすとそころうう二十万き騎
せいをそのしてもくさうとのさうれふせ
うきんこいふふ不よえむりうふてうし騎よ
なくられけいきんになあてまくゆはこせん
といふ大川をゐたてくちんをとりて二陣
はうらんい かたあよ三万騎をいうしてのこ
はすまんさをとし騎の山よりかくうしなさ
うりあつまりふせう言んよつそれてうと
さをゐるよまけか二三まんさみしをささ
りうりおもりうす小せいちりとそ十万さうれ

はうそのとうしんにけいこさせ給ふ
たゞくみてむほうわざをこれつゝその
うらみをとこゝろをちんちゝよゝおはさい
きてのこゝろをうらむとはさめし事あれし
しまさと一でんかもおよりすゝぬせう
ぞんのちんをはさくもいけいさんには安
こもはそのつきそのかはよのりよくる
ぞおふ事三十余里はいのちんを一ちん
かあもせく馬のいさきはくりともおふ犬
きりつこふきのつきとの男子むしこうく

こゝをあんちよゝおは安いきて二十万騎入
はうその四方の山よりうけてりすその王
こうもんを中にとりこめ一人ももらさし
とせめてかゝり悪门要はうそのを守さ浮
うてうれよこをうけおし馬人をまはう
きしるゝく小せいちりけれしこ寒の大せ
いふつこまよそ一不よりよをはかくた
きすゝてりしらんとをきてきりんき
ふはう一て矢ちりをそゝ太てまちうけた
まちりそいそもうりんごを達しもとされ

かし候きやうされし焔魔王せんしこうこきさる
屋ふりしこう殊くうく事大ぜいにちう
かる人ふりなれとわりさもぜすうのたせ
いつ中にみけいりて十をんしにけやふ
まおひ候りして一而にあまをせて三而かま
りる宝ちりきて候八ほうかうてう百大
ひ千人ひりたくうれにせうきりあり上う
まこはりくとも多ぜいにふせいふ事はへ
ぬか急つまうじちまりて三万きよう形
きしそりさんしも急つまうこら急をしてく

まいけい山よりおりてじちのこされたる
せいをとるよえけりよ三万騎よ立よなり
むまよりおり遠矢たる孫ちとしくはさきちら
おしかれと一せんふをわかひてしまん
こくのつまよちうはう門事を西方よくいか
うひていはうことをえてすいかくうりし
こ王君しくさにてありとえてもとくちら王
のぜいかそくまりたはよハ三十まん
きにありてうつ山をうこむるしごう候ち
くいつさうくるう王りふまし屋おもひ

言ん以後くのしちふかりけれは老をあつめ
ていまくまれしんめいもそふつ来てつよ
ものつ出ミまそちうときかへしもうまきりけ
うくいくさつとのおほうすてんりきちや
祇おぜりしうむへやまあうとうしりんき
いういさあしそもみうしくれあたくれて
出しうほかけしどほしせさ附出うむ孫ん
千道けりあううちうおん出やしくせて
ふほしし我てしよそとき出らく浮あつけ
けしあれしハあけあうもろともようここと

出てこ王のちんよけ入てかい孫とくん
りんよさらしさく出やうよりすてしと
てよろハの袖をぬらしたまへこほまとの
とつけふ思ハけしするせいをたて今まて
怨さしかうよさるしとそとうしりるさそ
てうぜんよとそハきつよあるさいあれ浮
太子ありくりよれいうしうるんちいまた
よしちぶありこうこぶかいけとうきてしため
とうんりくらおしあんちをさうれたてく
心やとくしちきよしてきうせんハしこけの

さて三河の國の御若そこまでもいつのちん
あはすてしと思ひつゝありいそきちうすくし
らいれ名れも太子ふよ名をちかくてそあり
ふかはよすいきこのてう字を作らうさ孫
てらしく〳〵風きしおりんとそ時よ志
作王の光しやうくんよゐい娘まゐとりふ
きこつ在すゝみいてゝやうるなきやうを
まけうくきつくめ山環まゐ事と戦くきく
かし志をいかろくしてせ河をのそむ事
しもろくしてた風すし志ちろくてし言をや

こさ太子をきうさん事をとゝめなまへ猷ふ
こ河あきりとりくさをこまうをあさむきて
くんまう若志をすくはおん悪よ名ありふた
た花大くんをおもう由りをすもんと
をんもちるありきこうるよ今由やさをうこミ
一らんをもるさしやうくんもあくさいは
とりふきこんうふりかきをまうい事しその
はうゆうあり孫小名河き濃よとしこりれ
ふうこうふよくありよ出王をちあさく
してもちり事乃しりつにりんして

ちゝのくるしさはちくんしやん様にあさまし
くるしみやすき事なりいよこれたくられまま
くるしもちん達いかいさあなももちいにふ
まぬよりうくしち滅しく王なしもつく
してるよ許事を教るしくさいくんす男
思ひをすくひ殺くと滅そあつしてやされ
よその王けしあくるをはおりていよいよ月を
つらなれふ事なかしてもまことふてて
てうさとともやうる太子をもちうさけり字
りかいふしめよろしれてつてをぬきさし

たなまれくさいけいさんしやをおりよその王
のせいすてよつ幕てしのくんをくんまくく
げとよさくりかれもこれつき若三十万騎
うち附をつくりてしんせいのようもしれを
そとふへかばたれふ事かいすあいち村たち
をしよいりくほくしんてこしややうしやう
くんれけ志様つしてふそくすといれてた
けるしさん事してなくさいれいかまくよ
れさ通つくかいさいひあまれに思ひかんし
しるのくさけてよその王思いのちをいやふた

むかしより大ふしんをはじめてこ王のちん
よりかうぎよりくにくにふこまでまゐる
をみこ大みいかりてさくちくさうとの
うけれいまみつこさうすこしくらさらに
よねかりてこうせんとうはかりかまうと
もきせ老てん老まれよあたへいるみあう
やすもんちさりもうかまをたすけよと
いつあ志てちうきけれしんみはあうちと
てさうみまらいたまりのたれきいれうさ
ぶてさすくる老老んふせうおりといひとも

うこ志げるくをしやうくんつかうさゆゑ
されて氏みつうのあを一志んかり志うき
かえかりちてをめくらし大てさをやふり
めいをうろんしそかけるりをゑいせりこ
きひらへにきんう大しんのこうごをいく
つへしくんまうれためまてんうのたれゐ
いをはりかよあま一日もちうごつくを心
ふあうまさきらんやしきかこわうつうく
せいをはうるまをうまいたくうれますて
ちうし貴めにいりくともつこばつる者

いもの大三郎にありくれしみなこへいてけるハ
思ひよりふりきこゝハありしといへらも
こゝのふつくさよ何かまて於後をじあ
いうこさハ小せい火といへともさらにけさ
しを一かしてものを思ひ遣ぬ所と思まり
されやこさらそかりて孫こそくらひらし
思やくふんとおそ達をとりめへこまやを
しかさ孫てうしかわしミこうにあはあやま
ミちそうるてしとの孫くハまくさいひか
うくそう王をたすけて一てんのちをあたへ

へ山下まてにすてしうしもこそうあ
まくのこちしすせいそての三う面さて
くらくてうせをといふさくまへうらをさ
達そ孫ゆふらうまつしとくこくるうち
火とさらくりを何く夕けしるこ王こうお
りりてまくまふくお心そうくはしくしそ
さうかくまいけハ山乃かこみをとわそう
まうしとたもくへしとそ何さめくおたひさ
わいまさたれふまあふうるる大ふよろ
ちれて思何まうま何事ましけまそ何色を

かゝる万りを以て一しやうにあふ事
ひとへにたいめんかなひかたくよれりと
そうるされうるけるなどふつ王者に會ふ
國ゆう人承大いしの王せられよ此はあくいふ
ことをつけきゝし西へうつし我なそしや
かのりてころ其國のことをとくいよみけ
いやまくをむ王の下ことゝせずしてくん
をんよくさり在まれにありあさましけり
しこらいありさしとをる我しこ王こらけ
ゆるしやるゆりえんきけい人かちう

いまをそて何へてこゝでんみおりてをま
見て給りけあけん候へてんこゝ其人ゝん
小下されてこやうこうら出ださうしてある
ことやうにて入在まいそのすりを見る人そてを
ぬらさぬことゝ可りゆりけまやさぬふまて
しその國の大王とらしきけう心をこうさん
しる矢をあしらへ事とてゆふさりて給め
よあふてしと其執かきるへさこて激こゝ事
うさとぬるふかりゆりその王うの所よ入ぬ
事はてうつせあしうなむをゝしきくにみいふ我

さしからのつくよそほめらきしなか天明日
箸道とも日月のひかりをもてすゝめいあるん
へじちよ無月をとりむうんし滅ん俗
さあうなそでよ作もはらめあもれやられ
てあるれしやさはおとふ園ふとて免おさて
もしんきついこのますをこころうみこけすひ
みこおりて悪ハかくしあまれいうまをし
て雅君をおしらくよ随しだくまうてある
しをふ計まをつくうしくもいけいれまら
をこよめちやとていかんぶくさて孫う

おしきかる在時もんきつい計まをあけてゝ労
とる座りしいかこよ奠を入てこうりちゝ遥を
よあ新いあ貴ひとのま孫をちくこ悪をとめ
くりくはしやうのおとりまそちつぜんの
田那をハそりよとひくれしく人色をくるし
くるとし恋くりもれ巫いくまな教てうの乃もく
ちらくらくれしかけいこ僕もふかりくれし
うをあきあふよしまそちうはさいかもこ一
うしのちとをうをつちゝの中よ入てこく
中よいきくりこうちんあやしておりひてゝ

莫乃ちうよひつきこえとは書きうてもよ
いまくせいしくとらもれゆへりてうくし
をせしかしよふみふてもゐるてさふし
をゆるをまずふかきしそう茂りかまは
何せいふんしやつのてくまのこめすんき
いうまさうふりさらもみやいまだしさ世よ
ふらうるて我六めふもいむんしりと心
はしのらくあまれかを又そのもしくをさ
おもひさる一日面て志茂なうへともう
めしなりけるよりんきいかいさめをとけ

て今さうりのちをとおしくおもまれくり
かくはさうろうすることのこまうかまゐる
ぜんのんさいふやまれをうけてさんしん
とうしなへよふうらんをふけさんのれ性
志向しるくいしちをきとをいくをしてる
命をてみあやまりりくり家よた国よをめ
いくさうりてこれ登高のまてくよおもし
といへともいまだねろおよひるとこふあく
すもしこれぜさうんをふめてへるのやう
をさる人あゝもそのきうへけるをけて速う

ちせんにすなはちいゆゐしとゆるしは流
うはせきやうんとおめてあらしひのやうを
まる為にかとらふに左右のきんちてみな
あひかくりのくなむけとのふしこうせん
ざんしこころなまれまれくもいけいさんよ
うこまきすそてよちうせらけへありしとい
まうてたすけをうさて天下のしやとまれ
りひと為よくんまうのうおんなりい
彼にきさしをもてわりせすは光の日を
うこせんとそひそうよせ歳まんの元て京

のそのあちにゆゑりしよりけくれせり
すなはちあちこいゑこころてまやうちとく
にかるよこにうつ屋彼ひなちまはよ為い
ゆうすこ王大ふよつらひて人心ありさを
たすけすていうてかいましやぎやうあらん
とそむまうをはちのろうよりいくうしあ
まけさん文王の国をあたへおん恩にをし
なみ為うとせんけせられくりこしふ武王
のさんうおきしよとりふもとの在こわう
深斎にてまりくるは天のあた為をとらける

ちかひつけてそのつかうゐるこのてんくうかみ
附ゆの雲ことりすまこうをんさせし
なまりんまゆ千人の野へかとらえとしあれ
つらしもといさあけこ王をちいもしそ
ちうもんをこはん雲よ頃されるるそまんの
さいめとおほしくるあつまうりきれて
くるまの玉とめくるしいそ武国にそ
すりくはの道路とりすあまへおやくは
けまりてろこうおふさくこせんちあ遣羽
こちう志をさしてそくまいをそのすゐ式を

いはゝめてうしとそくるまよをおりてき
こゝおもひてと残らまくはうきたしそしふ
ちらくみしのはこは殺ひかくりかつこさふ
用さす八之まてあつ王國よもつりこそや
をみるよりあつ三華ふあまして鳥せ
りけいの恋たまをくひきつ孫らんさくの
草すむらふうくはむらへ人をさもんてい
よはらくようちてせとくゝりあつ王
頃ぬめと学れしもうく迄は備もんまい
太子乃王でそれよとこさらちよ入事又あつ

王のにされぜいしといふの人ありきられしそ
こゑまさこゆはちんこてあんいとういせ
いしもて宮人のひ人まゐる中にをせいし
かもんちよくをせふちくれしせん音じんゐるつ
らもせたくれあかりしのち逆川てすちて
まてうあれちて志りしをこていりて也
し孫ハゆりこ志つてすこまよとうりきて
志孫ハそのちんとのうまんうせためま方を
そてめつくきんなまれし　つ志川てすそり
孫ふとことよろちれてこきうに彼いり六

まよ式三年を待をひしおもれまゆはつて
六志志ハくむらろへらる御うなもいとく
りりふくおはすらつりものちたとまてを
志や伯て紗あり志う王式う我まぜてまいよ
くくなるをへ孫ひなりちてりりそでて
うは簑よこ王よをはうひまちう王まて孫
武てましまい殺いうして武くふ我君いん
れものう道をとくしてひ人を動り天下
よあまあ孫し志うれともせいちちてくの
かん志よくをちす志う王のいかしへらま

いけいゝさいて時一くんのやくそくを
まもきなふるときにいたりすもやくせし
そこれこさうへしやくさうまりきたの
くるねみそふさんとつまふりさうの王宮よ
まこ王よとうまれまちをまてすれせれつまん
とぶめく命をだをわりしすをもうとうの
せいかうれらう婆羅をもとれしゆく
ありゆきてせいしをゑ國へ行つきさんす
つふみゐかりをとりかもんまいかるるし
縁にくんまうれてんしあるる因縁をぞ語る

よさんう心ありしあらそ孫陀をすり
せいしをおしみ給ふこさうの廻いはニ歳
やすまで此國をとう修行のときありすせい
さをうもいきしやさくをさしてけら
ゆてしくらしく光をそうるみこ王りんの
これ尼連ふまよふすうらうれふし國川
りくたゝそむりんら江によれくゝ王者
ゝおきしことせめらまんにう川事立赤
ふるへしさうハふさんの瞳婆ちやうこさ
あらんさ儀をありしてくときやしさきの

王我さられよまもんきいついさあをもらいす
してこ王ふかくこまま遠命ほさるんとと今よ
うのいさ見さうすなけさめて天のせぞ終
ふきもれさあんしてぜいしと此へ遂
らまうるたうれのわり猛れそて志りたん
ふれし志はとりふもあまりありされたもと
きいついさめをたりくと一人の太子をも
ふりをそ出たまよ時もをさすくれ世を
思氏窒よゆくありけりふうし一しあう
故をかきのちりよ三さたとあんしこをふし

そでかのせりしも一たひたひためまをつむ
れま一たひきうちりて入ぬまはこ王命を
彼をりけすこ王をおもひよもも心あくうし
てなんらくをこのこて我ともをあてすゆう
ちんをもれらとまて国のあやうれをを
かつりをすみ残よもしまいのいさめたかく
をこでてくれ後よ出王のせてんうこし走よ
らまをたふ書き、王をいさめていとく君を
をやりんのちりてなくんきまよれて
ぜふたらう一夢のゆう王をはけしとあし

しておもひけられしまゝもとさとにあら
すみ家をいさあらためれはあへてもちゐさう
すゑ時こそこゝろせいしよろこんせんしてくむ
ちかきをあつめしきみれよきことく花にえいと
すゝめくるかけしとたまもし我こゝかなしむを
さしすゝむるうつひをのかはよりとすそを
たつくうけてふうこはこれをうけはこれの
もとくふせり人もとあやしみそのゆくに
らくはあらうかい今そうわうふあらうやさ
さくさふうく御心けきちとふあん事

ら我うろうといはきをしおはしまていのちわう
はむけしのあきうんよ袖よりをあまするけい
きよくれ孝娘うつるへきれすくれし然らく
もう楊にしてまらんとそやうけ君王を
もしめて守青戎いのおもひたおゐ驕りする
して思ひあるせらきくりよ五附さらしきよ
せいちやわもらくあるけるこはそめ戎とこ
王昭君よをさていゐやしけける戎とらく
ましやさまりそけてさことらしんため
ふりすらく国のさうつくへきとしいの

爲よみなせいしよりおこたりけれはちゝ
にすきなる大てきおこし絲らくわせいしう
こし色をりみてしやちよく深あやうきを
なすへくとくるしかりしにちくそ立より
くるけりに座ちりくんもひるにさしあらう
はあまきここ王大にかんもなりめ然まくりを花
てくふここ悔くこいふことをうろく我ちや
そむかん御して今しや談に入まりきりけり
あらすもひとへにおんてきのこくしくを
けんりやおかしうりさあらんにものそ

わせひをおしきけるさかにこしちよ紙ち
しなからは色黄にそゆくめくるちしちよあ
へてもをいとます我君ちん深てうおんを
すけへきゝなのすくになたまも一番に出
てこわり然たあよのし孫をさうしすくきり
也ちの王の作さ者のてよかく絶りくん
王いてよかりちおん事假名よある
をうし君ちんかいさあなさうもちくい
かりをいろくして紙にちとあたふは事
天すてよ君をそけるもしめなり君ちの王

よろつかさしてけいやく思ゐるよふせら
きんすり三ヶ条をもつへうとす御らくを
王ゟ安内んさうちて付きうまんよりけ
て受懐りへをも御たまへ一ゐまなこ
かき表すして待やてきみこゝせんよおろ
か得まんをりくりうまんやすつ名いせむ王
んらよくいかりをふしてゐなすきしきうを
貴らさりむきんありし末梧也きう達性
こ王こうくられされにうてさかちくり
おきれあうきむらさりこしきよ御うれし

ちくく二黒波ふこをぬきてちうをんふう
けるさらり志かりしそ懐あくしいよくし
けを達性さり志とうちそをりくあゑてい
さむかちしうをとりあさまりりしき梧
ふり去つ国のむんきうい色をこと時すてに
ねきりぬやゐわちえてうろかり二十万勢
つれ王者こそそりしてもれれくり都ふう
王うちきんの國そむくと守てれ王をのを
それしうの国へむうりまある僕ありちか
さしふてくつまをの一人をとりきんまい光

わうくうゐんるゐ入せりしかも色しその
のちうくうへうくしへまりをふせちこう
きやうをやきちらふ事いその本国にその
王ふむけしをけしもる志きいありくはせ
三十万き深けてとのを出しりん道いう事
ゐんなちうゝをそあるせなるこうてき道を
きて大よおおろ光志んの国のへてうれ経
けしとこて此あふひ光をしその王ふうて
うハをふをされともつせいそのつゝ者
しん所出てく前けりこにをへしじしろよ

きかきん深国のなうて此ちつよの御て出
けりけりこわうたてきよ前後をけて法
まゝのつゝる為年方ふもりなはて出をうあ
うしてうてゝふるり三四三年之をふるち
もんきいあらて経入うへてりをよ経の
せす事めなるなとよこ王れけて者二第余
人ふこ是志かいちけるよ百よ人ふありふ
なりし王をさけうしあらてうふつり三
十二ケ名之秋東ふおよひて百よ人のけよ
者六十歳になりしを山よのありてその王

若て文役を立てゝくん王もつしくらひけれ
山かくれしめなさきこと王こうせんこう令を
たすけしりわれ我為貴よりかゝすうろうか
為りきこんりきせいまた為ん若きをことをり
ひくゝ為またたすけしちくおんよりゝ今や我
を今よりつらきことまきれもろくよくん王
の貴よくしをいうくりし君をしくまひけ
いれしおんさらをいくふの志をたすけ給へ
とちゝも我にくしかりきことまうきをきそ
ていりしへの我思ひ今の人のつりふしそこ

そ思ひまもられてこゝ王をそむつすかりよりす
その志をすてかるくん事を思ひられ為いて給へ
りもん違いきをゆえよいゝおりりこの王の前
よきそりおりてをおかしてやりに告たる
大きことよあたへくりまたゝをそ今をれよこ
をそつまもとこをすきおし方若あたへと
こ王となすしてはりいよあいきつよりく
つきくうひかあかしむ事くんせんを
よきもとくつれてこわりとそるるし二子
ケ年の春秋あまおもひまで得られんや君は

ときこ京ふ時まてしかはけはゐちうまてまんお
りとこれもそこことの役よ大風らけ
ばにもしきいろうし路めはくこをおて
兵ぞすくめりぬふこ王をいけとりかして
くんしんの前ふひさしくをもん延いうせ
し月隠つそみいきこおりさあうと思れや
らき金追こしうきをそてよ発んせくせらき
てこれこうかしをとおり参れりくるよ出
さう見ちうきんこし志まういさめられし
すして ふ施試し孫屍れし死しみやう

かんまさきにけんつ志のこ王のして
をそへんして三年まてうれすしてえひら発
てありしうこ王めいむもくせられうの一さ
うの後ふちのまへをとうりくかなれくる
りうこうこきまうらきてよろふくし発れ
へくりまうしやうれもくそおそろしれこ
王かまふおりてを阿ません奉けすうま
りしくや思所意し袖をかおよおしあて
うしかへとくうけてとを本そいくさりし
発哉万のけまおききをてくちひるをせ

さぬるなかりけりそてつのらしもそのうま
ふこむ王のちそてを見道て義の旦けよと
くるつちらく時代まよこそてうせよりける
そむきんあるをふまちこ王ふさをとてん
もくのまんふ下されてくまひけい山発ふ
らとすそて附いふかくへとりみたくまける
あさましかりしためしとそ申けるくるさ
まはんりしへよりいまふいなまてるく
のらくもさよくらびけいつもちをきよむ
らははまとゆふあるてさて来るまし

ちこ國を見のつこもしをめん國まそまてか
へいしやつら志る宅なりしかは香ちうを
ぶやうしてむんきていとし第この志る其り
ふおさんと志發成志うはむん達いうけて
許くさけすたなの下ゐはさうきよのすゐ
うしすこうなりなこげて第るりそくを天
の道也とてついにるあうへこう志るこう
といされてぬるをいつ兩小身をうく
世ぞつまこりしてむくころのおさめ
とありこ後よし行方志うをとそ申けるを

ある人のいはくわう王ハくだらけいの
むちをすゝめしのひとめし世をさうふ也
今の時宗をもちをすゝくとりくせ一命を
しるふ也あさく小をあるへしとしそ
すゐるよを志ゑいりくはんて弓矢をと知て
のいさおハ折物をゐてのふるまれおう
のたくうれみしゆさいまなをのかれとりん
あるゝ人をおいりたりゐりゆ人もくちりとそ
するゝる擬も花にもくぐはすころふすむう
しれた小を学しをちむ物をとはれゐるを

仁王八代御かと おうじん天王の御時大和
の国の住ら君山おうりん寺にはふ所に一
人のそうありける人をふかくそしりこれ
にくむて梅のくあけ花をかりかさの年の春
うの寺の君との梅のまさくふかく
ひすお勢をゆし さゝやうゆめてうそ
ふりゐりそんそんせい せちはゐるをし出
よきれせとも学ずり
もいまる深物しだちゝみし君あれしとも
かきてそうん庵をしとおもしとく

受くる事やすき浅き教よりいる事とりしまで
われらの事よりまうるはもしけるに信言よ
三草をふるひゆい若芽ふうの女もしかふ
ありそうしてあくりき道ゆりきいえうしけ
そのまへ理をひとつ顕るあくとたまはるら
あり
善悪よしれも彼つかゐるめをわき死孫も
よりそ死人よまうさせ生れたり
色ようまけのまけしくと見し学ぶり

賞翫物語才六巻

400
5796

えいそのさうつきゐんの事
ゑんさいてんのほり
當秋まてこうつふありかしこり
やさいはこやまそのつり
はらいさんのむしまりのつり
かのもやうちくれあめの事
けうのうしやうほくりたくまつりし事

曽我物語巻第六

さてもすけなりなこうしやそうへ
もてりかはうはさめなれうこ世のならいは
ほとしくさあらむるまさやうよちかし野
かぢうちいでかくらん未ひるちやうなり
は三四年ふかきけりとうけてあさかりぬめくう
かいしまこいしとてまくうきまへい
たにやきころり大いそまあうゆさふけ
道おりふしかまくらあめしまさうれて
きんきくの大こやうはこやうしらほさく

ときをりをり十郎とらが宿所にかよひけりて
ありしが、かの心をうへて思ひける八國くの
はつ雁のおぼつかなく越るすがたしをらしさを
うたはるあそびをつれしかしぬおさけも
やと心よわしつおも遣て志らしくおま
とひかへけくもりてくいをそこきんいとをり
おてふしとらかちやすかいかはともの
まくんあまたちこいそちのてり志ろる中
かとらうくたしてくいかのひはくてを
いつくの國のあれそといふこころへまいらす

やせんちんなまさのむまれもけこちんを
よこやさいれしてまのせふしそちゃうれしう
さうてまをくやくしのつちらそうやみつの
なうしたところはけく志むゐかしすきろ
おそこはとこつよなか志いまてりおちかされ
とこすぜとをあしれしけふ武とのりくつれ馬
らくうつめいもつまれをすくさまよくれしよう
し女もうへちうこうてありねはなふれなふ
れはよめこともてそさはまやとすけありおま
いそせおもいまとこそもりしれておこうく

きうへくりとをしゆうくんにきゝてかし
こゝやお思つき事をなまなるなんとあやし
みふゝとふへこゝよはうちこゝにきゝちて
れちしきこゝのすゝまとハ思ひあるをならせ
なりゆきも寸人をうしないよもきよりなり
ともやあれなりすけふりをのちしよこゝ
ていうそうゝきれもとふさけふうこゝとのよ
からこゝきさりとおもまれてそのうちゝ
なこれさはてそれしきそふおそれあるこ
ねちそこ思ひはくきてさるていみをうち

しこまつくちを志もしひかくなふとなく
ひろたんふおりむつしきめこゝてむちゝみて
をゆれおしちあけてしちふいりぬらしを
やそいてゝいりりむつまゝしくこうり
よをあかぬせつふうのゆあうゝけくうと
おもれぬなりくるところふおもれのかう
ふる事あう出きうくるゆらいれとも
ねるまりこのよしなり一もん百八十きう
ちつき下野へと銭りくはうふとをよあれ
てんりふやうこゝやさのる事ハそいかこりあり

いおゝゐんふたさせつきかゝめゆるごと
しませうしやう大いそよとらしてうひた
う一のゆうらんそう一しんすゝめくら
ならまやしうるねくゆゑてちやうのこる
しゆうれをたてそうくさいまぜなはなの
めおしをよふわきれてとをゆふかいつら
りとらせよりりこれへこしやうしなり
とらよおくらぬ女三十よみんいそうてぜ
けしきしやうねいうなれあさいふの三
郎より九てふるしかりけん、こえん大称まら

ござらしる八十よ人いあうれしもてよし
ゆゑてんてもしまりなけされ然とらハさし
こへ出けりなるよしをりちゝけへ五男ぶ
てこれこさゝへうらをさけちてあれともどし
けさんのなんさんのたあおりおもやみて
給りぬよしなりあしくやよりてゆとい
ひなれけもゝこさてこれもとちうつもの
原ハしくてとそれふつうけしこ成ならと
らうえ入ゆさてあしやおそくいそしたまのふ
もくくいれおさて母あさしこらゝ出うて

いまとらがさゝりけるといひけりよしより
けうのきおさへていまやとまでしらぬ人く
けりくり中くもしめしやきらうきついらう
てとりけるもようる隠さ読をへていまこ
いふよしてもしとりこゝろをそへし御心よ
そむくすあるてまもりなむて後日よ傳ん
ほてこりふもくこうのよとよけしこと
なちなふとていてなまハわそやらこ世よ
さてうふふ悲しおもたぬ人よなはくとさ
のこしを人しめの外かるまりやとて

さるをむらしハ又十郎かこゝろをとりひらこさ
めひきうつこじちすめもく志はかとて見
なひていうのやをきこゆれみん女っ
まをとも志り給いすやさゝやうのまするかを
ありさそうしふ戯をいそまくはく六しの
こやうりうもゆらんぜよさやうくせら
まてふけりそとみもそてけしこさへ出ふ
ゆり我もくふんふよこたきんふひきくは
ゆらいとろめきなむりしたきらてうさ
ろみふかしくふみん女といへはおんふあり

てんりよこゝ持るちやうしやう之ぎんく
しあさよくのことはゝす七ちんまんほう
ほうじのくらにあまりある志うきうをい
かなはせんこそや一人みなかしかる
みこいのきしをうれいなるとえおもな
きるくまねみんすよつあれのじちくふう
いふ刄あしきれせいてこゝろはほきしきし
さふらのくろきどもおをなけりそりほう
すほもばちくみさんのたをとらゝきく
人のまわりてうれふなめ百りこゝとりきれ

さいうのみ一ありとをみしきつ事そうし
め百人まてむまほく事うて事ふあら
をえてあはこと志いてゐのはふよをて天
のよくことうふるとわれてうりえりあ
まいかもる揚まておやさをえらし人おも
うれをへきやらんそのじく茂らんきり
けのじらんせすけゝふうしことうれた
りおくへしうをしてまことふ入てをうさの
後よなうしをてゐかふしきあるためしや
もるうの川のすくよまうかんといふ不ふ

こまくとゝいつはりたくむゑんのうら人
ありあけくれしこれかいのくろくのにするふ
とりもてにやうをたすうるとのありかまり
かはりするところへはもことかきより
そりこりあけひゞきてかまはうれこあり
あまとのくこやらんと思家よりて居
りにまふくといふ女これしとみくとそろ
しやいうあるとのようかてりなんぬを
やりありてしをすてつらんいそさをとの
うしよいまよこいかうておこけ人うやう

ちるおやめはかしきをせうあまたとひひう
事ありしをまれらなよまれいえむしきを
たこゝもゝ孫もやうとえよしてとのふ候ふ
てあへてうよしておきうりくれもちくを
ふくいけくしこきなん子ふかてりぬまれい
わし一ともー人をふのるこ事をあけこ
よ田つよきうるへきあもれこみやとよつ
これてみえまはかてりくてめ百人ふそ
かてりそ詠ひくるひとけをもそく一とや
しふりん事うしみありまうりくくて

もりあつめやしなれなばよ一つとはくう
なくせいちやうしなばそわしこなるふう
ふ二人れしと見たかをとせいつなれかくて
はをのともなそうてくるかとよふさゆゑ
つゞいうよまれなれしこなやうしこよと
いくまれしいのちぞたすからんとするが
さふらうなりすまうあくよなりおもいす
をよくきこしよちうすきこし經也孫らしく
くふまんよあまりくれしもけいうかをちう
翼くりけるに紀くまうにれくるを我ら

一人なかをうしよおよへりゆきよとくい
たつしふかをすつへにまなしすものうち
かくまかん女とてもやうしやありきくか
うとくまよおこあ像はいさやゆきてんち
やからんたくう色とりあきめてしとりれ
くるまも一人かいかやうけるすまなしごと
御られらくいミしさくまはうきやとまれら
んやしこひんでさまでたくうをうちん
事思召をよらずかつけてられあたとぶ
りぬ包しあんしなまくとりかいまへ一かん

かいふやうさらむけいうしとをとこらい
うきうつか非情のちうつをりてやふり
てこんきする色しとそひてしけり道さいふ
翁のまくへ風呂さりのけきをとよりこう
きやうき養らをこみむ翁ありのれしえとく
ないさかよりしきらなきやうそく
ゆはなてんしやうしのよろひひたらけよ
あくちうほしなくのこてをさしとくつゝ
いさてよりんくまもいふのを孫あてゝく
ちあん兜りのほふぬこしこもく大にしや

なんのよろいゐひきやう二ほどのこそそりふ
とのさそじちさりなにさういむあんのき
らうし黒うみて小六ちかまんつけ帯て
しとんよく心の花くてふ紙はしやえん
もういちのたちをさしさせけきやうちうた
うれ大ゆみよもうれむきんのけるこつけ
てくりんむこやうのあひうゆはきよりう
あひちやくの風呂みりをさし切てしたうれ
馬のふとくうく御にさよ四く八くのくう
とおきてそのりくりなそのちういはか

乗こゝやうのちたけくらをおもひしくの
さやうそくよりろしくのしたくさうを
と忘らすみなあつまりけるさやうちうふる
されまりかりておいてをとをされはよう
ふんにはひしくてたやすく入へまゐやうはる
すりなりとらみとまいりしてゆるへまるるの
ふん女ハおもしく梅くしやといれはるしく
三りすをあつめしんこ御見たくさりふも
かりあさ寺人ありいそしさ間しふつは
色きあまてんこれしとあまりれ見てふん女を

かつかりきてさまはなはうくでさいかくあ
はへさとそて志きやうふちのけ道ごをすめ
きさけはてでたなき入ときにあくまうすふ
くの字天十二てんやうりありて字りく
字もりをまよりなふ字てしてもくよりか
つちうをかるはさうせんをとふさめゆう
しまれさおもてをぬらくさしへなつくま
てんさやうくまとをおしふうてん坊を
ふうせおのくさやうとまとりたまのふ中
かをすはてんるゆをやをぬをあんいこらう

はたまた筆道いうきのそんそくをひさつ
きめうかうん三つちのきさけうせちくふ
すりみて乃て筆その日のゆきやうそく
よのも九かんしやうくれよろいたさあれ
けうこうきやうきんのこてとけしやう
くわうえんの八さよ詩ハけう書しやうめ
きかあてし志くをやうくもんれはふぬこ
もさ大ハ又く書ゆちのほかあてしむしる
きう画んのありいと書よるハよ書ほまう
こん流すそりふとのとうちくはまんいう

ろんまんれ月まかりふじちいふはんこや
うくう書く書田きう書られうそくそいく
はふあめきう書ゆいのいうとの作そりの
いちこさ書るきうこんちやうのてこある
しるをしやきん伝ゆつ月ゆとふさ月けく
きんまやれけるをうけちこくむるやう入
歴みりをとはばいけくんのまこ小けして
きうりよおはふし路とそしをて筆道いる
大しやじ詩よりてはすくりさうかつく
ふてと書さうふとのよみよりしらごもう

ゐやうかんのひうりあこさうなよしてとらん
くわんあつまてもうふかちをいつされし
なかいろつあさ座りよしてまいりくらせらん
とふさいくさすいさおひてしみよあ御いま
の代にいふとのふうしらをとうけりて
と御しかをむしまいりくるしやうにさせし
をうけの御代なる右大あちらすう
たくつひのことさをふ河つまさみはかりふい
すまうてやんわましりらういさえありの
だくりとおなまらうりしやうちうちつましけ

とそけちたなるこうふちのじちよりかむ
しや一人すしてたてすなはいうていなよ
ぜきらるつてものあいつくつくふれなふ
をのそえいうあるまくいあるそくてし
くふのつきとひれなる百ふんのつてもの
さうこうれしらみはおやをふしじちもおし
じまはくとこうつまてきしい京よまやし
めしとなつはへさあさはつおもの事すと
くいたうし悪うしこさすりなりいそさく
らおひうきさいはすとあたへよ我らのみ

うとゝりてうへんかんといひれなるにちらへぬ
らてもかなる人にはまたふかんみちてうれし
きこやうしをあるとのをまうあくのつこゝ
みこきかりけむこいれなましとひこいけ
よしたまのみ色きけりたちうゝしにむなた
うきかきみるゝみ百人つけかんありいもまん
とのともあけなまして人すゝすいそこたりう
とうときゝてかくすてしとやりりたうま
またるつもりとりふでふんをつくく
こさしてあやしくおもをれ屋なるの志大小あ

ゆきいてゝみ百人のとのりうちらのくより
たまへうちぬへとるりありといひなれも
一人色いのつきいはみよりいりおきもなう
きこるとおきせられけるちゝまいれいそ
やそとよをこいるまふてあこれなるそ
たゝをいいゝさてむつりしとをれふ
うつまれしらのむしいゝちかふをのつゝ
そんみ百乃みれふてこなりしこるをなかき
いるを人とりあけてそたくなるといふさ
きまうとおもれそのみれこいなみく入

くはそやたまのてもらす入上ましついで
うきしやめいをハなふとうこゝろなるをまう
ごりやうろうじんまことうけり孝でハうらう
ふとちろなしこれハそあだの志せうなり
こたあよりれせうこにハをしきうつゝいこ
けうくうあくせいちやうあらしとろみこよ
かん女とうきこえもしをおしもとのそこゝよ
入うりしうせりあすむさへこゝしあさし志と
くれうけてまちうりとそふところよせ
もとりいさをきてハこゝうふところふし

あしちうハらろうゝうゝ子らをなりごとちなき
ひろさて出たれもおもふのちくくわらへ
あるるかこはるやをもすそふたり母こ子燈
のあつうしさよはるきのやいしをよすれ
うきらっ中よあち入て兄まりしたれもつ
いをのもうわくをぬこゆこやをよこたへ
おのく大坂よひさまれくいれ志つまく
あちわうしくおちれつおちらけうひたれ
もふきぬうりたるはまそのくあつさかる
たこふだよゆさつらりかまきをきこれしもう

といふ活の袖つよかれもう袂ちしくあ
まれこあまれむしそうかしてるめをすし
むかこたまりけるやまんあいのぶつうく
なりしこりあまりやきや座せけを大ふ
をきさりへ〳〵たけくいさのけもの〻娘を
そく一人のむすめふ伝ふしくあれくそあ
まれもる〻くてしやうちうよしそあれ記
あのむつれ並んきつありのうちハかうん女
大通んさいてんと行つ違案へとうや
百人のん〻出め百こ〻りしこありその一た

しんやくあつかりかこと知りりきなまへ
もうきやうろうつけここをそのふしよも
うしなまふ一さいしあきやうの辞それと
あてしくくミてあんらくせうれよ聞のく
むとちこの比なまふこうやうよたけさゆこと
申もそくみはきて〻ふちうれそりしなふ
とてとりハまくみきてうハけるやとそい
れそるとりハる袂を溺ふむせれふうきを
たけるまもりこかるりしこますハるしつまの
あうくとおもれきまハそくのめいよそなく

えちゝよ志たかくもらこのこまつみめくる
まふかりと小そうく小をて、おもとれみた
きそあゆくるくろかりしのあかぬあさけつゝ
あしさよいうちつるつゝれむくい小そし女の
おとあむまきゆくんさゝれしてみやみまやし三
せうとい紀なひゆかそやよそさあしくに
うはぬさり十郎これありさまをみてあは
りたくるしうるへきーこしのおとりなほ
とさしたまくうしもゝりめいそむさあぜ
こやうのせゞなんもおそろしとすゆうきし

ぞしハこれみをもさしうすてへてあくよなを
うりれまゝハあしよしありさまをとしおも
すしてあまとてとうハおそこやらんとて
一さいかゆふとしあいゆりもくもまた
まゝらう孫ゆるみや我らの十郎との御まま
とのえてやいそてかひの孫んすくなきられを
こまてちろへぬかるまひりふまれしうい
てゝなへ給んぜさうめなみきれ於君をふ
さく御さうまゝくよひつしよなり雲ゐさ
へもんあさいあをあさ、けむじのひこ徳ひ

まさりの四百よみんな氣いつとをまうやとあす
いさゝめといろめさゝるすみありつゝありと
ちうちうられもらしよりうちてもてふこ
ふやすみをとさちうるかしこやうおもて
ぬさくものいそてさたるそや方におそれの
あまはぜんきんもんぜよくよきもおしさ
命もされ壁のうゑぬ所ハちうちあしいさ
つゝある志引しきめ郎ようしこらまんこ
ともう思ひやられてもるしられけりあう
らかやのところハ孫とちしけをゆるし

銘くとくもんしてあらしふ哉しひた
たまの悔むしとひここよみけいとうち
たゞ此際しやくとうつりかへらで二三
すんのさうけこてはさおしたく一もうの
と錢ひうさちらくしこうの声もをあん
す人とあき一もしよいらんやさくふうた
うれさるはふぜ得くすし屋つりく鶴のか
ぞよやうつるへいらうのてあき見ぜんお
そしとしをハまうけりとうしもきうつき
さ國とさてけふやめいとゝかさしるある

こくそつのかつたけは道六めをおもはく
ふしやうのめいみはりもるそりしまして
やぶり波あんあけ悪ちこふりあさうろうさとと
なしかし拖いまつてもけ大へさくなるなを
のゝちのつ世まそとしふましと思ひふり
て彼らりうろゝるはぬのつきよりくゝ此
ミうし悪人ていのまいさそ入道入とも
行さふくなちまりりよき仏まよりもあり
と一こうるおさしいうみをふらんとうて一
なちふあしを八けさかすみりもりくねより

いまやとまりそあつかれあるし死より事ふ
なくはそつうらいよくもうそたくいりまあ
さいるかおさりはむゝ仏よまいきふこつ
のそせずをくはしうるましとそいもりけ
はよしひてころくもひさしこふあらとりう
むゆれよゆさうほうけくしくあんするや
う十郎こいふをいこす悪ちやくしくそり
ゐをよたてこりそりまめよりいくさて
かやうふありておよそいさけし我又あり
くいありし出さんをちたちよく也ちなせん

るんるいやうよりもむつれてすくさきちや
と思はゝれなきあるまあしをいりゝはの
はとのちゝきやうきゝなかそひんなり
ことちろきひんよひうさあうそこつよ入
てかそくはしもむかきれしあしりあんと
思はあふこさきやくふよとりあおしへしこ
まりてこれよおうのすうとゝのくはいりの
よし父君ではをのけ御つりはむすひへ
なあまなしはてゝとましうせらまてはなふ
かいくるきくいへこは些ありて就くゝは

きよはたはせんやゝはねきあれかふ又それしか
しーこよーとのきよまう忠ふはせんのす
ゆりしさすよよしまりおりをははつはさ
をそんちしてよしひてかとくめてゝ忠う
はねくはもろとをよはいそありてちくう
きやし海うをもやしあれよしはてもせんな
くあるやうよはははゆゝへーうつかの
ミゝそてまりはゆりふうはころよちう
はらくまかりかりはてしとしやうしむ
しよりはれいれい十郎さまてたのむとゆふ

小盃ちらさてさうすみやとよ娘あさいふと
ついえらいさはおよふへこさなちなまへや
けきんすみかりもいてんとえし志うし入つけく
おしたくハヘてれの恩をんハ父けくろい
とりとさえよたてらくものしく三人出入り
さてこうあきぬくりなる人くをいきなる
ちらうい志てをみて遣まあとよしハして若
みるゆゆのゆふあるそのかふさしこふます
をおさこみすとりもいてくすゐもきりとや
かりて事すこよくるきらしやせすする

よ國のまことあうこゝをはりなかしきて
よありいゑのゆさはさかんようつこうを
ばまずなかんしよめでありとのやうの
りとやすへこあきらせかりせしより
あれやりいて三十郎もうしれハふき人
おふくおつハあんちてそてふのそんでて
くつうをふむうちてくあやうかりしり
ありらしかりゑこを梅くるすう夜の御
しくなやよそのへつやうはきやくしし
ゆゑのかなはいりをありたくまつしゑさ

いぜんよりかへりける跡をしれいへくと
きやうしなば十郎しやくらうり成しさん
はも門ともはめよかくりはへこそはちん
しのちくいそいのふこつよしんきやく
をいうしはぬけんいよ所しけるよしきさ
きへしそゆんてのうてミに成りなるとき
らをけしさよはるきまりなれもけのつ親ま
へふそ幸さとりなはらしまりとしをはく
くえてきらしハをのくみすおしちかく
はをのもありなばよ十兵衛さらうりせらい

てさ浩さん屋さしくおかい戯るぶや戯しく
とりふかまともくけのほにさとりあけその
さうつきうくのこてすみふりよさ手そのさ
うつ親よしはてのこて花くくふくう
おもをれさしおとれとりそののちハらんふ
ふなかるちるよまたきしめたはつたちう宇とさ
らうつましくよそおこなるとりあけなばとい
まへとくき成らもてけてをちらなるよし
もりきうまをみていうよはせんそのさかつ
さいかるくをおかりしめきさんこさへおもれ

さし忠たまへちまそまえとのこゝろなるらん
とありけれはせかんよりけゐるさうほさ
よらくはとちてよつうひくりわさよさし
たくまゐらんすしれのしやうかうんのい
かんちしきれしをすけちりのさうのつむ
うしきよふうれしを大けるかふきさしそれ
とをじちうみ茶さふうけしきまいけるい
ゑんねふうをまして座ものさうつこよし
まりまけしなしきうめてかりこおそれ
なまりんをくちおしすけちりつみさしすな

もさしさか事おこりなんあくかける座
とまるかうハもしのゝちそをせてしら
まていうみをかる座さと二六八思ふかる
しさよらしくちまとせんせのますもし
おもりゐの事わうまくりまへさかり
よけしなまふてこなせうまういうその
さゆるていみをてかしうしいとり一くこ
ふけしとふきくみをと思ひけとめくよ
しまり一めすかり一めさうをけうひあん
しくりわさもりまよかうてハさ思ふこゝ

ろこはさはちかくて猶るさ世なまくけりとて
る思ひのこゝをとじちまらい十郎よしもを
けるもみれ一さの人々めを見あはせさられ
あいりおとみるところにすけなりさかけ
さとりありて力の路らんるうちゆるせられよ
ふたるちまをまけまく王とりあよしをり
こはて心さしつよことりふこゆちりいう
てつさる他きを度しくと吉ぬきてやさの
みなすくさよおつ千十郎けりの一まゐあけ
二とかすよしもりなたけたうふあらとし

もとおもしき事あるし　よしもりかよしは
二十たいをかりきる心持みてそむきれしし
たとい一人んきまで情く老のやまいの思ひ
さしまそいてまうけ南無阿弥陀仏とか
うちやうや分はちこのゆつまてふかく
ちくぬてみれしも九十三さの人々をよしは
てのうとをこゝやまてちて度いてさあんと
いうめきるるてもけしあるいまして十郎
ふとよをさはつぬあのこみくなふなとの
まあつまへこゝりいここあるあん十人を

のぼりしかりこのかたこゝろでせじふをもちし
たるまでとおもひしにあさましくそれ
よりなげこしふぬつきても我書になかり
けるが父のためにおや妾ことやすませてはん
そんじよそれ様ん書きにかるかしこりよ
むかしさまこそしかり心へぬしまうつくしさ
きやいうき綺すめりの大いそへおら様に
めるうこうもくのみ妹し野へよもいう
はおりみしおりふかきの君様ゆくへす志
いたし給ふよやとおろもしくおく男はかるさ

もちやうすきつよもしりいりれはおどろきのし
らまれぎれてひさうけ伊藤ちやうたいの雪
志やく六すんのしやくとをつくりれ志ろ
すをんちよむしをひさけくつおくる義はま
おゝきハもるせ馬よじらのりて二十余ら
やうのそのおもとうて一もくよりけと銭し
まんくま舛を見てくるぜもちやう志れまし
れおとりくるうきさ馬一二百は武はれたつ
とりきやうは不よし物のくつおもらしこりか
してたくいよよ事いそてきぬとそのでくる

いるへきところなくしてをんつそとをめ
くりひちろすみなりよゆさ候まてとおりし
ましん小語よめくをたけうさをくくりとう
かねところよあうつ義よけ基十郎殿まい
うみとさんもつきとのけのほさをろん
まくへいまちく出さぬとすさしもちそ
と思ひすいつきとりひこへあまのめ人り
りほじ語のまやうしを他たく立けりさ
きむひさまよありとまうきんためふうう
うれそまやしこうよはうまのきうさ

をはしくれもすうたそとうゐ五郎ちうをゑ
小あうてさども孫されしかありとゐ十郎に
きてし方孫の仏は老をじ語よまちたるよ
ゐくのをしくそ思ひくほよしまりれける
してよ定ちくみるおふをのめるときちう
くほすみなりの仏事をと心ゑて行よりを
あうもまやうし一ゑみをやみりてとひ出
て一の太刀ふてしまり二のふうふてあ
さいあそのおうりやつりうきん十人を行
れけし弱しうきふてあうきちそと思ひに

り宗盛やく六はらへはれによつ清てたつ
忠はもひとる在樺の刀八はしやまんのあ
くまをとり御く此太事をそおとはすゝる
文月あしの事まれしなまちつけのさやう
しよをきてひくのはやさいおちまをとて
てすひまやうしまちてやうらこやかい
なあよりけしさよあるらに思おもくうし
誘み立そひおもくう夜衆よある時なあに
つゞしろよげるをのをいつさまゝ郎ごし
出ろよありとおほくいりさしあるうしと

あはふたすはさいくをしてあふ小黒せんうあ
遊人いけ出やうしたかんふをけうさ勝おり
なふとあはていまをてあし夜衆をとつこし
やと思はそれてくれあいよ月いさしるる
ある栄ひゝさあるまと屋形はけしきさ於
まりうりうら志や成さらちやせや夜まん
とえもてよさしうるを立それし死んくよ
あうちやしそれよしはてはやう出こゝしち
たえさせ君の代は氣よや千代とけうき
いし深うしおりありていしまとありてこ

すりむきてさふあひて　あくまのみさ渡り
志よ五郎かたちくる前のもやうしをいやま
あけぼのまはあんまよみつりすどきむ御あ四天
王をはくりそへしたるさ渡すそ　ゆゑあつ
すそてふらさりそれしあさいふあやまたを
ゆるやすまんよ兄あしく花いをきやく人ゆ
まやすそやこおもへいりせ路く　よそくさす
第一二そんむとをこしりていきうきことをも
らしをきさ庵みりむしやくゑりほより
ひくりてをうけあもうこいかね事しうるへ

きりと思ひちゝうこまうせ志いやしくと
ひさえしをめつきのしてをおもりひもひく
どもをふくひつ涙ほ花なくあさ旦庵ふてそ
立ありたちつみのりたてよこ敗ひくさ
もりこ庵へすーさふこされてあさあいたう
志うへとうと大おも名ほせ五郎あすさら
をもさらのく二王へうらよそへかしさて
五郎ごきむ孫あこきせまけりのたちありうこ
まそれ人まて志りけるまのしと座け老父つ
まけの三郎ある八ケ国よ威こ将るよ那る

五郎よこゝろえてとくとふちてもそのかみ三まん
まちてきり大かたハ若おもくなき気くらり出う
その子なるまゝやちゃうらうへおもうなか夜
しきうきんとのおもふしちまう八色たく
とおやうもましてあまり深志さ八おもひもく
まんいそていさ御贔屓の人とりみしく座敷
小出ゑはつまちしる出方と草すりまそ
くけさまるへゝのく八夜りりそしつおを
ゆらおらりけしきうしくめとこてはさい
おつ下あるうてでん小ふおもりなほけしきふ

あまりてでくらりあさいあいりきさ座敷と
立てよりしまりの茶よ在なるさうつ茶をよ
即うまへりそなさくりなはきも孫さかつ
ゝ気ありてしやくるなまちかるあさいふよ
志さふかいしては盃の茶後まちさんのかま
いは贔屓あれは御さうけさいなまりはとそ
三敷まてあうおかしうりなれそのさうつこさ
あさおい気きるうよ久ムはけりの一ツ思ひ
よりやさんとそてまての座敷にお於てなり
めうをしやくまてとけちうくをまいつ

ぬはしやくふかられむ孫たゝんとゆる武たい
河四郎さへをんさとゝりておもれりしをよ
はしてゝうしよごりつ寺しめ郎と志まし
こさたれすよしよりちまこ弟んてゝきやくへ
器はしやく志うるへかりすそれしくとも
くまもくはひじもうしやゝかそなちくるあさ
いふさつはさとりあけ三とおしそのさっ
けさとゝのこてとしとりよさ手そのい
五郎あふこさ志やくよりふ我し今志もう
くもはへくまししを曽我よけしたるいそく

ますのは後四ふかおおもしれ中さんとてあるを
ろどもを小立くはせとゝうをおもしくへつらふ
くり一度をふけうさ志くよしてまくちっ
まくゝへとろ我りくはを氏へてあしちはま
て我ろへしてちそ夜りくれし色やめいよく
ねうしてしんよあそそへ性せうつくよより
九そうのすまへよあれくんたるましあん
のそこを大もて性せん志よふ出てがこう
のうきへ小あたふとみてうりすうをあよ
思氏のきおもそうしよし方あれもんあれとも

みておもひのほかのなんによにちぎらせしかばそ
くちおし武人ちゝは心志為義す也すけなり
をとうとをぐして曽我にかへりつ孫になを
なる所にうつくしおさないよりをこましく
と物語なりけれは御かりのはこをすゝを
てすのおこしの屋形をあつりくちすむの
達に申あるかしも力あらひんにおましめ
そんなるちまのつくるしさよとひとつい
もんとくらおしかつけつりてられいへと
いれなしとらをおほどしもおもちてう

すれくしを見ちなし志ちらくかしぞをそけ
けりなるすちを女のほさよみつしなつしと
らのおかおをいくしくしてすけなりをむけま
しとらんも見そかさりあるる為義とおなへ
もあるはく濃をたこくまいるしぬほおとらく
むかしにあさきよなふなるらうなんことひなれは
今よそしつぬすとはいれなかしうき世の
中のはて見なさくはかとの若竹ちこはなく
なふよをさらつかそくおかは中まし若大
ふちこりあれし世のなかのこなりをこをいつ

よやとおもくて心ぼそのこうにゆくそけふ
やゝのまぬ力乃ありしハひとこつ令の御ゆ乃
まさしきまゆもしくこうおもむる途けふさきさ
橋に思ひたまりし其家の御かりし苫とく
まり給へし君に志て御心やはうれの
傍なりさまさふをゆかすごゝ肉り給へとい
ひくしもおもりひらうばごとをなり行ますつ
なとりひあかりうちとふりく思ふ中国思ひ
志てせず出おぼさけの色をそゝぬて
ぜめて夏なで其りちな志屋でもやとそく

ことも女君のれならに物なきてめうぬわり桂
つかりしさにとく然んたあふまくふをや
謂れ詩然んば家を思ひけさめくるをのゆ
去よりふハぬうりを母こゝてあり八れ六
孫ともなりぬ危しみさ次郎もうつゝこあれ
おもハこなりたる一方すやをんあまさそとゝ
まし事あしうるてしともハこなり行と
しもあるくたしかまくりたのとす途とそ
のをつあやまちく思ひたくまつりおぶへら
ありしこといくれもふつこはおもハつせけ所

なほほうのいまをおもひあはするにもおく
てらそてぬるおもふしも後れうちしふかく
はへしよしおもひてに一もしといひてや
むとやすむけとりの御心地を御つかはしき
うちぬひのせんちくて世みしをまつのそ
しれゆへといふといひてきてをあ義され
こよやおうち入道のむそしふよもてこそ
まさうをせしまこあまは君にもめしけかせ
ま御おんしふるまうをらしまてまん
そのほんるやうを葬月よそにみなすく

馬の一ひきむあるらりよつりすみ父のた
のしそこさやうまきの一ふをかくすたとら
もふはしこころの志きん人小こゆるもしいか
きくおりてありつるたよりをおし申させ
出家御すりよせもせりなきまうけて
こけをそのこころもよそあかくてはあこけ
出家してきい佛いましやよ気ちての後世
をとらうへは我力をもたすのあんと思ひ
い世小在もを後まおろしつきらくもし
かとのおすくにみおいて花山ゐんとて一

ゐのをもんせうろくゝつゆけりて山ごもんよ
やかりけるたまへと御て席なけれどもむ
そんのすけなりつ行に命をおしうる忠義
ちんとの内ともさゝこに二ぎれたるく
とあまへてあかぬわり孫の道とてかくく
てとすゞはもとこゝろを阿へをすつかれ
さふあさかりしりぢりしなどのをいでけり
ぐりやてゝてうめしやとはすまよぜ
しと忘るや孫りくりしおぶいその君命
けましこ物の子形まは嫁さゝのうちも表せ

あ路りしめけり女の方のはゞあくさい方
よろこへてとこゝを思ひたくまれまれてそ
めしよもあるや誰れの道のみするさや
恐ふの袖よすりこうをよすれたくまつるた
よもるしけ公さしあまつ孫とを御かなこ
とのたりつふをもいけりよ人あるらんと
ちらのをそれくしまへ忠にさやうしよおそれ
からおりし孫らまとあるしくかいを
しすみそ兄のころをよ力をやめしけれど
いらりよあゝまこう為ちふあんまかひさ

しはしひきとゝむるもとすさてまかりでんとし
さうらふへくまいりて親をつゝみかくされろ
いはこゝろはむすは一ちもんのてんをさ
給かりそのむけいをいかなのたまも
も山寺に小まありしてすそぶみつえへてま
はらん給ひしもきくなり岩さきこさく給へ
みなあけ一日魚しもわけ様へてまゐる
すけしまて誠よむでひとり十郎に
さのふもとうかふしくもかりあり
そてをとうごしくそおほしし十郎ハく

くるとあんするに色もなくおもひいりける
心けしれかともさてせすしてさうつは
よくうくしけるぬる親あるハちゝこうう
ことありぬてもしなちつへ庭ぬふ見て
あるハ思ひしさきく給ん中けとも中魚し
ゆきもとき人にもらはおいまちた事そ
あたよやをへきそのくへ日かすふ名なけ
こらせもやと思ひはすまくみたみもまた
らせぬそまつして今までをさしりしはわ
のかけしさけよしてさてでたてまいるそ

もろ〳〵し〳〵す孫の道なりをあゝすも
恋とんせい世をおし筆ころすゝめりの方
小町みちをとハ世り給ぬ跡そのほ〳〵の衣と
言しとやくも吋歌いてくのち二つ九ゑは
ましくれもあれこんすもこゝれ計也さて
しを行とあく中ちこうりて時のうめとあさく
世をとせにやぬおもれしをもくてもてん
事すこうむ孫んもき御こゝろさしのかとこ
これ有りくおきれくてよけ也我んくもて
きの人ハすけありふせいのひんしやたの

むころあしなふまみゝをてこう恋のおさけ
とあるみ表よゑとせのへあわこのうちもせ
つゝはらぬりうてさこきやさものまさるこ
てやしきおしばあきけよ九こうれてカのかう
とんりうすゑ手すれ〳〵中ゑ道て芥世のしり
とりふもりまてをきあしし事乃もけう
しきよほこうのあるし孫も山あんの時
ともいりするをいせんの月あし孫もせ乃
あらんおりともいりす思ひてあさるすを
思ひいうしくまもんりくてさめくこ

あはそりとゝをはちてまとさてみしら
すてあくよきうのすゝふさやてを
てなさあ事でそをきられを行とふり行す
とぞそやさまうとの大しはりあさせあ
の方なり世いそう人よをらす申ニ一人ま
しまする母みた小をきり誠たくまゐらすふ
りをてゝ心つよくおもひかね候はんす
うみゆふらぬまらハすとをどゝ参り候く
うあみてつけくもあうぬわり様のたさら
うふしえくをあまりあ達かやうの大すか

ごみりまてゝさせ候つこう他をもら達しけ
れさてをはらし月の場あしこいはつ世に
ありいまをは申ニ思ふまもりふかぬ年あれ
古候をのく此みくるしこぞ大まいらす
御ありつハ人をまこ方なりぜてなくやた
よりみをありくそまつりさ候んとうか
頼候く一弟しゝしけるにとをとてく
いかくらをあくふらんとおもせ歴候をと
ゆうあの事さ有なありまよ思ひをよしぬ
あわりハわり様さまらんかもしさよとて

こともおしますなれハ十郎をせん方
なくさてあまりなるなけきはなれそ人々こゝ
ろにてしなかりけるたまさかありし心さしもなく
さらぬはかなき色をうらみによそすかりよそめ
と見せしてひんのかみをきりてころせ
めとらハ涙もろともふしけるかなさのつまとり
よ娘かくれなる物をいてもてふしきみえぬ
十六もありし杖よりちうつくおもくしは
むせふ涙と目をすてみくれしくはせこふれ
ことりのなかりそとおもひやらるゝし

しくれ氣を一夜よわきなみても明かされつ
しとおもひけくちろさく人の月のたしつ秋
のありあけなるはいかれのまれまた日くお
なをなくれしきや出けとえ邊いそのまゝよ
こゝろゆくそらをうらめしくいへとこいふ
もみはとりのよやきりふるとあけやすく
夏のるなとをまとろまそれりよたなれ
くもこ雲のきのゝめさらむつゝきまくらよ
むつらくれつゆかくふさめくよふるあつ
はさの浪よともうきぬてたつひのな

こり心中さこしあと思ひしらせたまはなかし
をとゝまらハかゝてこへいはやうよへく
しかハ十郎か遣をいさ発んとしゝ申
てすけなりハ後よりやう要てさしりあまん
してかゝろう世もなさるなりなるもゝり
にくをのいつまてハおかりなりいまうとう
こりのまいかまなりのつられをまそれてこミ
して十五さしくりとなめ出ひつちそてにと
らつこうもいのこそてふこかへてちろの
あつハよりてつよ志りしのこりてしこさま

うきるくさむちくをおもひけのつさかくし
こ孫をふとまきりしたりひのおこりけさ
せをとえをろ候よしらかゝしめゝく万代をと
うさし孫てもなおりけくへこよなの年すすけ
なりをうちまておくりたつきいるてし日
こそたけひくしてあしけなる馬よりれく
らをの分たう三郎をんのかうりよれっへ
ふりは馬くへつくし孫つへしゝをは三と
せつしひしよむまさこのまとくゝつゝ
とくゝなつまれともむ御のまらとくふと

さいこのわけ清なれしとゞめおきておい
こゝろこゝろもおもひたまふへしうてしむ
まハはやしきこのまそつはゝすありくる
ともしおりてもちなくといふしくむ
まふそへせりなはすけふりもをくるへし
しそむまよくゝおう坊じちのりてあつき
らと銭つとよゆくへし大たハむまくらべく
仍し君をすけふりう四つふとハミぶ人きつ
きうりとその者どもゑしくきつらす
とふしちほきてあうとくりくれ揃うこふ

う村のさとひある山ハ七山のさう寺まて
ときりきて十郎家よこまをひかくしまゐ
をとくりうく左近覚うれらはけさゝまい
てんとはさめしうしはめてわうをこゝろ
らんおこりいはくへきよなう手はせまて
あひろんすをいま計そとぞへこしやはこゝろ
おくして激よむじふもりおりおちきち
のころきときてぬ山中のこちをさやうよ
凡てきうそうのまつうさよひめうハ志ぬ
せつしてこえりしよおりくはそしなしの

のりそうしよくのわう猿のつるしさよ
こゝ成らくくとどちよせてまてを見くこ
成小むせふくありあり やくたてすみかりつ
心中おしもおりおくこれまそうしをかく
はへこよもたのかすうて一すちよしやしと
のあんをおもとさんかいせ残ふうくくのむ
そと仏所よくも思ひこりしのおかそておを
ひきまけてなくく立まうきくりけふや
りんかんの楼つのよみはちるつまちこり
を千猿んの露小むすひちんしやれむ出る

のよみはとほくよまひぞ万ちうの地よき
しそちこうりおつこのかきぬわう猿のた
おちうつまおよりすたうれよふかとおうり
みけの中まやすあらひおくうりうをつま
おてしをうことを尽てをあう名れはそあて
のそうのこまうり尽るあしひさの山のあ
ふたのこりしさは行速をあらしむまそう
はくとをるさ成の袖裏のもくくみちちま
うきよそり思ひのあまりまとうつ馬岩く
ちひう人おるゝう三郎よるくくいれけ

がはすけありしを見たくおもひらんを今もあり
のあまりありし行事をこ度しくこそ見えた
かりける度を滅よく逢ていえをせすとりて
けいく度もれなまへば小也事せうけりし
心とともあけまは今一家よれたくまつりて
それ大物一あとやさしといえなはせたく
三郎へてよ乃はは若生家とんせいにくを
うしこそけしてをさはつけり行るこうぶの
めあしさ府たうれおけこを見てあまれし
よあをれいそさゆもしりかりもばかるよ利

へりなるすゞよれ度しをとのさうけふう
ちあかりあ度をひうへ行事そこと見けり
まはとうい滅小めもられて思召まうけし
おてのもつい行きゝ今はうせゝてくらう
の前もよ折かりこきゝ入横よ入てしかは
十郎をまこきゝる事かあくてあくがまそて
そ在なればやてありてこういふつよ下いれ
なるいかとあくさゝそとらこうわ文書とこ
まれあしあこくのまのとのものなる時あと
しやと思ふおしくけその人とあくすさむ

宿こその秋なむなしくとこよふし鳥の旅
よそへ行く秋盛おける枕のかくしよりあ
くる思ひをさへらきゆく涙は旅つした
みはくるたよりをまかなしてうさしぬ袖
れそのましみこうれなりけるらこうりなふ
ことせの夏の顔をなくもうけうけくるよ
ありよありきていけの世よめぐりあれう
うるおもれのふを屋としたをおしますな
きんゆり旅歳月の上旅行くく思ひてよ川
みつふうさみと出らきよるいそげなくきく

父よおくきほけん思やう大よたてうり行ふ
まり一人のこくくみはて是しこやうとと
くあとい世せきうれをなし武三華御身よ
たふをあれ道てありぬ前のなりし行な
け数れ中のあけきあまぬよくのむまやう
あもるの数をやてなかりれやとりなり秋
のをみちつけちりて草こよをうる春
涙力の後生とつてひて大れ殿へとてとう
さへ折もうきなるはくも山のし旅思ふは
天地すてよこうちあいまた代り後らさ涙

時な人寿二万さいをたもちくはつせし
そんしやうさいてんにましますかせう大
しやうしやくそんなそけうこうをましてとそ
何天よらじし給ひまへりしやうた
うれのちゆひけりか娘の地行れの雨よつ
あるゐ義とあの南無んふそうと河まねく
ひこやうして御絶しくはよたんしくたる
大海のよよ　ふりさいあるあやし　あり
うかりしやう　小よらいあやうちう　む
う魚んい　立波の教あり寸あきれとくま

らん雨一の国となりてこれ仏さやうを以
ろめかうを為義せいちくるてしこそは
うのす万里のゆう海をさうさてゆくにあ
しのこ一すりこなる雨よ式波あかりきどく
まうりね今のひたいの山のふもと大さやきらし
塗んのましますせしとのこれなりさらしゆも
みやちこころ雨りにちこ海麗つなりこう
くりうく御絶しまさてあやくそんてんよ
ありり羅の水もあしもうつちあう川雲とゆ
あうもせば八式一このあしつゆへとうや

且もん殺てうるあしつも我つうむるらそ
ゆらしはせげを後人しの百さいのらうまて
川あ太子也まやうまて八十華のこゆの時
頭面両右こそうくる　まいれれるを
也こく拏ふさし焼佛ハしやうちうよしそ
むろんりうれれつゞゑへまれしハむすし
阿しのまつまとありしあうけくよをは
悲しける時しおやふ貴あまもせものひろく
のはせるきをかりりつのミやうしを人云
孫すこくふさしるをやまうれしうへらく

りよつりをするらうおりありしやくそん
きはよむろひてまさぶをし式兩のぬした
らハきつ地をきれにぶきせよ佛にしられ
つひのはとおをてしとの孫くしおきあこ
あらてまさくきまん志高六労さいのむし
つしや式兩のぬしとしてものつらく海八せ
家まてあしまうよ愈んせしをきゆきよひ
へり志おこある也さんして式ちけりつれとあ
はあしも作をも得兩うせぬへしとふうく
おしみ中せしおやくそんちうへしそ

今までしやけくらきにまよくらんとし給ふ附
ふかうし方へ向きたまへやかはせうひの扉くし
これもんと出奉りてよきこうれもやみれ
ろうをひろめ給へりき人ま所八萬さいの
よしめよりこれ不つねしあれゆらうおう
いまたりきをまうすゐんそこの山とおし
心中為義まやし給くゐ王遣もこれ山の王と
ありてこをに後ぬ百さいまてかけはうを
ひろむ為つよて二佛東西りはりたまふを
もとつらさまりたいまのまうしけの明神

みてましくなる東方よそをの如来なら中大
うの扉くしにらそもしくなるしやの扉
くしの東西よ別り給き今の十郎也どうう
ゆはまつはくよしたうれぬるかあるまや
るをこさうかけのつよくよ何りとつある
そふせれくまれひそりのよう弐力をよせ
けらんふありのららけくへうしす後世よ
な氣あもんとうし三郎っともけりしこ
て思ひなりて登りつ猪なるとうもそうけ
まひりくて諸歳のしはをしさくは

まて迄送りけるまてしもあら孫もなくく
大いそふそうりけ母のもとへ入しかい
とものゆうくんともひろそんに出て思ひ
けさは今乃は入りかいけとあらし山詠乃
さひしさおし紗てあと宅にてもまきくれ捉
とうなる馬よりをおりてとおるしくさぬひさ
かつさ折ふしぬ君ともあつまりてなまや
てこれ福御あけかやらんて三郎なみをそて
られおらしますりてさ恐しくちくさめけ
走ともうくやいふへ北事ならねもたく

折ふしまさねさりんてらしけて後よこう
うくとは中々うせゞ／へつ三郎中ゞるゝ
我もけさ君抱へ御出たる義にては いきさ
はいと厳をかさんやいふらうなうきをとち
うくまれよせて三郎かいちともまりしなん
ちふさん別なん事れかかりけりよくら袖
をとつおまおし阿てくはめくやならさくれし
こたて三郎在事いをかなまし激をまゐる
しゐるもみしの今ゆかで脇までまうしく
つきんあさうゝぬ事そうまへ（下ゞ思ひ見

すゑの二世までもたえんなくちせぬ物そや
りくしそう三郎いと悦されてそこよくり
ひさしき二世すゑをはこさせしにおほせけ
りされはたんにんをもて佛くを琢るより
まおほくせかの一かはしやうもくみちの
西ふりて國色くれしあ井あり仏はた大小お
ところ功徳ひてもうせをとめしてはそろひ
五きましうこうをみさすり作るこよれ
かしきの子ぞうむをのこ鶏いうしてと我
我まてよをそらはへしとやうれしてきやう

あやうの中小其兵さんしらる趣手よ人也
寺中よ免ちい出しではよりあのき出子
とずうしうる者を別色を人まふとそ名付け
はきらしやしきの者ともをんえ人よ作付て書
婚うずてくり御承の人まう御せいもんな
は福よたけ記鬼乃をこてかかたくり武婚よ
来物とくとらさうくう枚又西よつ三五者
をむあまよかの第も是ともあてくうふせ
第二千人までそくうい分る毛の三盃熟し
佛色をあきらしを始てあかんそんしやとき

まてをんち上受なちりんたし給ふること
やく人まみあなしを七歳にてましけちゑん
よせと天竺より生して佛くまこそ忘るり
う精のちえんを思ふ者はうきうう後世も参
也屋一まちをよのちらさ施殺にそおのくし
捌すらうたのたり三事あしもふを出る
忠うたけしりくりふるあんあひ若道依よ
ふあう八也夜の聞こんて八よ入秋の森の
ふゑ小心理みたし身をいそつてよ家とす
たう貴をいやし貴をちらつおよいね台成

道あり八くのふつみもあ八ろけてく也を
うきまり肉てしけてしみを嫁うくい雨
めしるるめつう詩をあるお曽十郎兼てさ文
道しして今まするく財理け日しぬいうまか
貴小思え給ふん也中ふんさ何うし若殺人
親着をさかまゐのは忠やくそん母へ帰り
おんれたあふゑうり天よより空よあい忠
やくゆみ八て八ちあかつ後こいみ天人理
下給り天王仮てしやくをんへんまて如来
を修すり行きこそ行しふるすくこをのくを

そ作らるゝ天わう佛の姫小ハ出居かの液
を数らまくれし我有きまんほう深大く也
こゝ両ば面かりすとて作る小天上りぬ毛
侍り我くんまやり三侍りぬもとを和て式出
よ液おかく思ひ出生をさいごう紹今の侍の
れしやう是也まして處人多らしこんゆゑしう
あんあひ思ひを侍る曽我十郎すて大よだつ
機分うれう天王なりやくうり色ん思ふ也
もくらずんふまんちのまうもやく也一あ
面し也答て吾富士かまく出立ぬ要ず出ゝ侍

常盤物語 七巻

A 00
5796

ちくさの花ざかり
てまやくんかうり
きんれくまきつ寿
めんそう松るすり
三升てらだいしのすゑ
まりこのま男り
二のみやの太郎小あさしり
屋たくりをきのり

曽我物語巻才七

それしゆじやうのまよへるぜひはぜひともにひ
なりゆめのうちのうむはうむともにむ也
されしもまきらゝすれありさまあまたある
うる也ゆめのうちさ世に行とうつはくとき
たむへこさらしもせ行ものゝあいくさまを心
をしらはさくなりをもへむむのれけらく
よあらしいさやさいゝのつふうめしてあい
しの恩をふくさまんとてこやうあいかふ
あはよおりてしへをこしちくさのさうへ

たるを見ながらもおもしろげな心
のあらくさままじいうそらあさましけれど去る
さなへことりふたこなたよやもとめかゝり
こしよそへわかきうらを見るよ
ふるさとの花のそのいつよぶりせも
いりおもしのきらくをさとまし
いまさら思ひ出られて京さけをたしこ
あいまもようけをといふもおし女郎さい
てそでもくをかおしとハ中へつゝをしや
このかよふれ孫ずんまいつせ孫ひしそれハ

心もかよふくまの恋たもよいとはまてをふ
けさのいろをあらかしかり我らうかの孫
をおしミゆやらんいうてうきりゆ人ことゝ
てくさをとまけなれそうのもおれつかず見た
は一かさおちそりかりすらこうしを意あけ
ていりおミ孫人女郎衆らうせず娘ちやう
れるゝひいまよましめぬりなし性おひ
うる母ハころ雨りてうきいまらうさう死た
ちやさんりさしよひとしきのをひう
きたなハとこまりつかぬ見たはいちそたは

と風なりしおのれをきくさなかしとあたり
のをまて風ちりつらん然れハむなしす
ミよしに悲しんやうなりしなりのけをを
ゆめありこどらくめたくきれらんとここの
花なしへてほすれしくさこなつけ花るる
なりうらみを
もちてハ花さくいろをほすれくさ
ひとつめさなし二まちのころ
そのほもきくさハ悲なんとさうこうて人
とてなみくさむつなそけいり名れしをつ

なくふさのさなりさらぬるを見てこの花な
つちにてまたみをちらはまこれ花つ田ふまり
あけいさなりあるやいうまさくさも二十
ほくささなりをほうも深あるなまひハ花の
余上のふり花あそれなりしは心これと滅
くミ人もとに郎こさてて人くきの事ハ花
ひとさらちてあるしく一ちやう老人たら
らうみうちしと見てゆりこれならふの
あとこしなりようらみを
あくなりなささてをいろつふなしへくさ

こゝにさくらもいかでこゝてまし
とらとさゝれハ十郎こそて出うらが
いまださうさらこゝをりつふゝさくさと
ありしよのこゝろれけりの下へ花ゝをか屋たうみ
つゝらんとたハわきゝるふゝをあきれつこ
さぬらくのまゝふかりゝりむさんありし
ありけけしともありさてもうれしらう思ひ
たけまつもくよ御ゆもゝを出ってぜてそてま
はるへきかはつ為いゆへこゝにそれハと
きむ孫こゝくあそれもよの～ぬけるゝありこ

きらくあそれけてめけるさればちらすい
またい名つ拵しゆ人こそのぐ人の子
かむほんおこしてゆりんまその於や
こゝていそさ忠そて御のちを目ぜよして
よるこふもくやん色めそれしりたゞへけ
つゝこゝを経てきいこまそ男よそへこあた
よりもまゝじでてまありいでんとあら
それしゆくすこゝてまあとよ出き忠う
はてしらうもそのついてよはかんのかん
たうさもすおるしてこんとこしきのつこ

へみせうけ十郎はまくらようしさまり
あふこしやくよ兎中うかゝはほこうとい
うしはおんうりめるへこゝろまそしはゝりみ
姥まけ入れけものうりまふし野はかり
のはとゝよおもひ立てはお歩し入たるや
りにゝく見えは小袖を一けうしなまりく
ときなくはせ母こゝてさゝきてとつうしかふ
きういともけてしもて君かつうふるまちう
ちをかけてをころんものうちふけふ虎ふそ
やあまのちうよしけてつはかりんをあるへ

きはおんあくはせやくありあさくしはたれ
のはともいおもれとくまり流くしいか
まこりみまいこうとのちくおくのすり
しよりやさしはさてなりくちくあく
てしま参れぬはかれつちてありとの
なりいふそこうし流れなりくはりさもと
おもれけくるふなりもしさ不あり
あうとむほんへものすくしくふそはゆ
同しあさそりし又馬くろくらしくても
のをみまはかりてへまみ虎はうもの

思はれごゝろなくてまて志き人ゝのうたまそ
あくさゝたまへうやうよせでしこそてを
おしむよふかりよくいふかゝ之を花せんかし
なを志ろ久れしとて秋の野よもりつく
ぬいるゝふかりぬきのこそて一つとりいさ
してたれよかりうしおまいらせやうしの
しらまそさう人まう小袖をもしもちなきて
いそぬるはあてのてこゝまとそおもはれお
なよりゝゝる太郎にあけられなふくあまかり
こふむらしくなれぬへりよくしくその

とあんしゐるよ母のかたみを抱きさしすし
こ志なし事ともむかしあまきをひさんし志
てこしやいさゝるうてうおもかせ為に
ともまてつらくや三枚りんまうりたつ
ひとしおもひあつりすてこんよそ母の方へ
あいてあれともさすのまじらへ入をを
いろもんこのしこまり志やうしをへたく
てそをたまうは子ゐてはりんどきも深ふを
めしつへの小袖一つたまはりきかりきゝ
つまれしよきはりんまくさうてたそやうさ

さてこそ一とりあへず女子あらしも大孫十
郎ハらいはとりていそぬこやの小ころ
ハもうこうのとのあり二乃ごやの女もう
みかやうはいあへうつすせんしかけしと
てちへじちよりすてゝ子かはおちやゝいく
志ろ志ちこふありみはこまうとそまろ鞠
のありしハかんそうしてゆくすくさうす
ともハたくむけしさかりのまうとのハら
ハひんあるまうハとまらもんとそうくの
葵みとおんはすゝうりさうとはすねつてゝ見

くろしもやうはをつかうかくいそてゆくときて
のかうよそいれゆるとらぬむひあをれニかり
うるすゞあまえしそのはこ王つさびりそは
そきハたつゆ倘し茶さるるそおんあおや
とさいや志こけふらふつさやしあはゆま
しとそとうやうよあぶつし倘しあ七たれ
まそしふけうするそたれめむい思れとよしと
とそいれゆるめ郎ハゆるさ倘しすまハか
ふりて宇けくのらみせまそとふうくりん
たうせうきてせんこそしあれ鞠おもれ

まててそれかりりやてありてもて忍よ、
ありてもすくはまうやうの力ままありちり
くうさし孫てや入へきまりしくこまでをおそく
さふてゆく人も女もしからちてけつる人あ
庭しきもしめせ人のおやのおもひぬもを
しるるをハよくおしてあまはくる物とうし
書はいつ孫つまやのかしひまては、そや母
こうてさやうあらんとのとまとのつまて
りしてもしまうやうあるとのともおやと
おおもひそさよ人のちくてをおとくどす
もてまてかくとじさこう心をよはもてまで
おとくしては庭まをやさしとてこうは
孫の人てまゝしすえさやうよせこしかり
まするてハあいつ一孫んつきてんゆみくて
いこうれせんこもやはせけふのおんうひ
めは書やうのくはゝとまねくきけもい
よくもうそうろそのけしきからてとの
たまふおおそれしおうう娘もんおんとくあそ
もしむりすやいつあるかしんおん君もう
ひみをそむくとのゆるし人はとらた

まいねそきちしめされん世のしてしちく
みちやうのんりうをんといやく出り揚然
いのちをきんと日千こつしてあくてうよむ
婦をんといふくらんこおちしちや九百九
十日よ九百九十九のいさをのをちろし千
日よまんする日せいさんよのありてこ人を
するしこよ行くうよくらり日よのりつ
いちうかいてひよくつつめを一件より
ろうひをんとを要こくかるしてるこ
さよいて見まは故こ勢穴つくしてく

その為てしおひくしくそのあうよし
らをんつめをつひをんとしもくさんをん
てそのう紗しあせるんちうちしの金日を
しうをんこさてさ日あうハしやをんどこ
そくやうぜめといれておさくてちろさし
とりつめ淡をおりしてう八十年こう如た
らあく大ち丈いこ頭えやうあん唇くむ
くとそる紀りる要これをつてあんちつめ
のちてしきるし出りやちてをとあたよつ
めいつ三ふつこ御出てまんこうつさい出

やうさへてちやうかをへさまいよ〳〵かな
きよきてのりしよこうをへかくすくさう
おしさよと父ぬらくちそのうめどしろし
てころりらころしりくへといふまちくよ
かめ深令よかりろへやまやといれを
ぞてとうめとうれちやうよろけいきさあ
ましけるきをぬき母ふむりふらい天神に
神をこれをもて祭へて大ちさけしまをる
らくふきみむちいをころさしとちるもの
いめうをかりこてやふぬきふもくし

てむけちうかんいわまくこりことり祭へ
くをふむちうしらかぬけて母もてまとう
まことそつ弟かむ言しまゞるこゝろさへし給
うめおこふせしちうふよりてかくま
忽が寡さやうのふをんおしをちうかん
しんとくうきふるうやうのみをだまもお
屋にあまゝしむるうれふてゆ物をまくきる
てや及おれをもくういふ事をこさてう
めをしふちてあうちやうかゝ志がなく
あんちあまともく我らまうかしへときう

さるそうろうさ子をおそふこうまさりての記
のはしれまそてそりんよ母はあさましさミのふ
りうさゐはすおかのくにけ百済国よりまう一人
りう子れありはりを取けさ天よりのりし
もんぬふみやきさをくはかんし取か国
ますれよろちさおの発るうとされし陸三年
きてむきれしまりすくきやちんさありて
しうせをめしてうみ聖徳もんをしよい
りくはくうぬハてんまんちやうおかるる
てうくしはさんハ六ほうのあるほしと

すきされさしたまれて名んまり悪太子い
のくむふしくすへきころかりうちうをさき
守屋ふりてまうしをほくかるくとりいさ
ずべしとつ路ふ大まう大ふあけさて取る
したまりすききされさらさハ悪刃くせんと
てさよくしをごくめ路れしかいちうう取
く太子まおかせはけてはちうをけりのきさ
よりそのあるまま衆されおかせらさけ
ふる太子ハたんちやうちいよこはせ
聖徳ハはうちしとやせてよつきれ取つ

いつゝにてしちゐにあかるまつりごと十九
ふくはらちくなりたまへれおさてこの太子
はゝうゑはまつ春尽れしゅ母の御さうそく
さしとけるしミ御かうれのための三年たれ
ありみしてくるしめたくまうし日ゝに千
はふあてゝくぜんゝよ見そうとゝそてたま
はくりいまつしおんしうれ之日をしみは
みし若てらふりされしハみやきされをとふし
ちむやし御志年よれふきしまてゝれ
とくとけるゝうしたまふそのしきんしの

あそ屁にてみちをおやくしくらきへうりさき
てあうみちのめいせよみはいりうりくれ
母親の志ハゝやすよそゆく母さうてゝお
ひあるころうあまぬおしへ若むつし
くてもうをもされて三よりせよと志ち
とまるとへ見をまうまを子どもをおもゝいぬま
てくしやうしかうりみたく孫つうて
いまそてすをやうちうどゐる世つふゝふま
しられしし太郎じちふてゝ身んまうきやつ
をんをし御あん一ゆりゆ屋むすーしら

國にもう一人まし候と太子をもち給ひまして
ろく王とりふけたらうたつ宰うくんに付
て千人ハまうのくハとりれうのりをよ
まうりそのくろねをうしれ大まうよまうらん
とくろすまん罷まさしまてまうをあつめてちか
さう菊わおん國きんこくのまうまやうよ
おしよせくかくめとりもそてよ九百九十
九人の王を免いま一人たらてりくひんと
りふあるりそうかしへていまくもまほとを
さきあ一萬里ゆきて王ありる渉ふミやう

まうとりふこれを飛て一千人よたまて
とりわやすそてまさしざさしつうりつへ
まうをごりぬ今ちきんかんよろちぬきむ
一とふくひをさらんとすこうふ娘ミやう
まうかつしやうしていまくわらくちまれ
よ一日のいを候をおさせよふる里ゑり三
りうをちやうだひしまやをんちくやうし
てやミちのたよりよせんとりわやをこさ另
罷りそて一日のりしまをとこ飛すその時
王くうよかへつり百人八をうをきやうして

くまこ七佛のりうよりもんにやちうころ
をかうこうせしかいその才一のそうふを
やうまうれたあみけをとくこうせう書
こつくんちんこうあんき為ミこつひとい
けやうとの御孫のふゝやう王代をしんとき
さて四大れ十二のしもしを名つうりほうけ
むくうことけくかさんこにみやもんそくまう
あまりうみふくうのこうりをもちやうきん
してからまちよあくさんをひるゝうし人をきて
竟こむけせん人のまうよいまく発んく

のとうみ吾あしを秘密だうみすゝめらるゝ
あくしんをとこすふし我つゐいうりおりい
まかだすけたくまりける尾ーりうさおん國
みかてりもんみやあしゆこゑやうしてすれ
らうをもし なまく とゝしをふりちなう志ん
をちうしむしやうちうりんぞ志へりと及ゝ
へうりこれしを嫩ミやうまうを称るしてもう
とをみすりくさを志本をれ志つ母宮てそ
つちくく佛くはこしやうかえくおかくれ人
をたもく御ごちんちおもちやりうしみおり

てもうなをとくとくもぬてまことやなをこさ
よまての川てうちこさをなさハやすむす
ちなき思ひらハす家なんよしておやおいある
内ハをんなき思ひらいすしてつゝへよとこう
ふるさちてもみも乃てくれ行ゝそてりうさ
うりふ事とこゝけるそ久郎と思ふ云ふり
ふる事は形きはぬあおりりしおまいえた
六はかるしゆへとのこそやんさりかれす
郎ハ我宿すそてめつをきて陸でてはりをり
為まりよおそくて又母君てく约て人迷て

久郎じちやてるいりゑすひろをんよあらは
志ちきてぬくりあまりよむさんよおはすら
てまやうしなひきあけりしこまいてめう
うやもちいりつくくここさて心さりやて
ありてをれしりしこやうちへあまこ心へ光方
れひんなるかよりて不しくのもうまれはう
まんるたくあのとの一人あうつきそひてて
あゆ人すみふりをふえんよおもりしめされ
ちつは出ひなきらんてはゆるしえうしは子
ふても内かよそへ抱きれら二人なうてハ

ムりぬさうしきくこゝてころよあみどうに
なこゝろとらんてんゆらりあしさかいそれハ
こつよくをてさしやうらりらしやハて茂
とハあるらをくしやのともしもあるほどう
らすくうのみれたかくらぬとしあけくなり
とハりんきやうのきてもあしゝすや十郎け
给はてそれなさ候事にゝはへなくらん
こさやりをしふかるよきやうかり孫しきう志
やしきゆきやうしふ孫し佛ふをきやう孫し
まつてふ孫し父母とこゝまてはこれをしな

しやくしきまいハ佛なきやうきやうしをありしめ
さ候まとをきやうしやうなかしけをおもし
すとあうへてでゆくおやとらしく子をおと
いぬなあれとのきや母こゝてあんちやな
親のよきをすあつむ所おやいてぬころう
ら子のちうくある事をいれこさうもん
まうそうなゆきのじちみたかしあ孫ん玉
きやうなこうりつよようもそ忌くも言ん
な候ふこゝぬこさあんせすなみてとやさら
そくいあしをはかせんめしいきてくぬ茂

くまそくは残りくこうしくはふかいなり
こゝめゐとめうまきみをころをちまでおう
うしくつためおりをや庵んまやくをまん
やくをしやうぜさかやまれをちぜをくん
まやうまりをぜんそんつこうさはこさとを
こまちいとともうぞせ人のちくしをきう
けるま行のやうよりろへこきそのぐくふ
あらのとのとくあるりしたちを行へすうり
いまさ出ちとりれくありすけありかさ添てすす
くはま一えんの内むなそかさ使しくなん

らけるハふけうかかてゝ父母よ心得
のぶのこさうちりうしよよ得へしゝをそう
そくつくこちよ思よの内へかりとときむ孫さ
こみすゐし時うけきやうを一ふすゝおはまり
ちゝのゆためよそや二百六十日らくまる
とは内の日六万四千の神仏おゝたらすし
ちゝよ恩くしやまとけ給ふ人ハ大かたをい
たくこたまふそんろう地祇もちのをとこ
まするおりしふかうのつとのくふむあくこけ
すひかと残りてかりしゝ楽よ也一つなり

のはあとをとゝかゝれハ一門なは志ハさも候
ゝすけなりよは仏前しゆへりちゝよりう
ぜうよりおくれし志うし老者なれ力ひんに入
いめしけも母かゝすしてたまつあまれ
み給ふ色さいつ㭭よは公にくまします
ゝ立よるけをあはまよ出にしきこへ
らん箱ふひんにおもくむそやあはれしけ
にいまぞりさりと中なるもいゝやとうる
へうら箱ー本かゝ孫とあつハの御よめを
くれしもしゝもなき物をいはさりうりむ涙

を給ることのた御ゆみて十郎いかりてこそ
しやとおもをハてもちなるあふこ絶ざりとも
ひゝさ大事よめをかいゝしとてもうくて
もいふうれなれくましやありても行よつ
あふる哉は前かめし出しおそくひしもお
とゝらそんさんよいまんと大事とさる
け相敵を立女もりかゝおもうきいうよや
とて見つくそてよひりまていし志きある
くかをふゝしいかりみれハ母をおく涙さ
すけはさ物よくるしおやとのまえんよ

してかさふますもかい弥ことそへくんさく
つたくつくれと我がよりやうでそれしもと
までハおもりねをしりや殿とて御行き
たまふまゝあらなれしとおもひなれともた
すけゆいしい御おや?あり人こいふもとさらも
ゆけをごろ面でゆくとの御そもその時十
郎いもりをとくめぐらせやまうつまし
て殿よりよりうしこまりりんかりけりさ
まとゝも志うひつ殿のすゝこなれもとうく
御をとをいまけりなりめうをこゝろへれ芯

たのひ我かくてうきしさの志うひ深殿志
こそりよーして前後をさらにさきまへもやく
ありて十郎殿を立川物るしあるそとえ
む弥こ芯き へ氣ゆくめうハ志ぢ候へそへて
よ志のひかひ志りしかしそもうつ弥かり
なれ志りつくありてごさも添そてし候もら
ひつかとしのものいそなれしも十郎とうき
しくあるれまてしらちつまつかりごや
あたりはは御をもいもそてさるしくとちなれん
かり母は在持をこてけふ座をや子のもう

なさけあさくれなる事なしとらしおいまえん
みしてん人のをおもねまうハらぬくも一門
をおほくしてるいしおちはまむきさんさらう
大臣ある子をる女小き親なうなしむなうれ
そうしいうてよくうる高貴うてようきと
おほつゆくなりとりれもまうて、まても激
をふりしくりかのくちこきやうくれつ志せ
うしこまりはて寄を母けくしくとまをとり
らん門あうのきらうしてなんちミ汀うふ
おろうのよやおとハゑんすうゝあり雨とミ

するよめ郎なといゝの附あなやすしなしと
きけハなもとあくてまうはを立ておしそ
とよ寸三年のおもとしちそりてうらめしく
おもりきけくしくでるよひうれしれ忘をん
もはまのこまうハ忘おしの存寂よはて寄陳
て父深思ひ出されけりしよ袖をおさまけ
はさてをぬ郎ハをとるひはくとこうけ認十
郎をいりよあくこやすもんとしおりくは
をやすなりけ給て馬やでてけるのくい
てねるよもうらなし人ひんかしてち乃し

うちてハいや行ゟよりてつたふとく
とゆ人き女ちゝかちきゝてきんつくゆん
のすゝめともやさゆゑれさまちゐこてそ
まゝしくさいのきのせよと在るまゝハ孝々しく
のけのふさこの一つ貴ゆゑそへて二人ハ孫ゆゑそ
ちきこうりけるもく兒とせのつこ落ひてその
さうゆさ十郎のむそのさうは茶をと五郎三
郎ゑりしてそきゑれしその孟母とりありて
ものミ孫んふけうの事うていよ孫情し
いる志げしよこ飛さのけ世わとハとりよ

ぜんたくし親と志しやうよ孟さ母すハかふ
らすけりのおハそふあるそくうしかまくるう
めはちゝふの六郎の今やうりちりくう演ん
太よこふ忘と守されしを五人あまも兄を
しきゝもちゝまでこう王殿ゐちと母うま
志附まれのまやしすと守しありまするゝを
あ情ゆゆへくしすちきしよせをこふへ兒
いうしはやうてうよ孫とりんゆのよしくお
そしとぜめ候はれ志もしきてひよおよひ
ゆるを十郎こやしたてま貌りまは五郎

あふこ絶ひくさうらうらひてまいた
りぬれ君の代々代々小一ぬいるちりの
まつ雲りくは山となるまでとおもしく
三郎んめてそまはへりぬるそのまうひ
やうしをかうりくてまうきつぎさう
うし さるおや惣領まこと子孫繁昌ぶけ藤ふと
ふのおそれ今さやさへい修をも思ふる秀
袖のふまゐ進修等のは孫をせしてとくむは
じ安をかなら二郎んでめまそかへり宴
母をおもうしと思我いけまするまさ

くてしつまへてくくらかりなまへと
ありぬれをうけたまはりしとそ孫りぬさ
のそうしるよぬきうへみくうしくいへ
とをへ人よぬれいへとてかりよぬりかう
てのよるをあう孫うをたうひのこさこの
うへさうつをそてふつりしくちなきぬは
さてとこやう祐数をかうぬれし母え
をくりつたまはぬるハをこかしこの十郎
小袖をかり二郎ともみせすいかふはなそ
ハとのかをとらせぬるよとありひしはさ

ハかくしておちくの女郎に求でゐるやよ
ちうさきんぶくらひきたまきてくとう
せしをこれと二とくをうぜけりしつらう
三郎ぶにせぐりとさへ先もおとくみさ
せうるそやうだれをし朝のすく山の
おくみもの人へよりゐるそや父にはいと
けちくしておくれ一人のまくにまふ字じ
せらきひんあきをまうしさふもうとくる
つあはかにをよおしとのあれやの人つあ
きまむへさとく滅をもうしくとおう始

ひゝはそのきよきし女ちくうから衣をそ
ぬきしゝけさて兄弟の人くハ我方にゐり
此こそておふうみを求きうしくもすいさ
むきけるおりなたくいまゆるされすじて
はたきやぐゞゐるまうおふましいさて二
家のく病槙におそて夜でとおちせらまけ
ほよきをおろうあき行さにうへせとはいか
つあんりもるくぬ弟のかるしさよとこう
くもいさ始りしもり今へやうにお何くた
りくうじちもつまてしおはぬうりまいら

世にありてかれまつる親のけうやうをまさ
しきは光もとまておもひぬ事をあり
あまりこれ三条もそふ帝うの身にくはへ
おそれさうもん殺あはひうてまいる附る
物ごしふそれいてまつりてあくさこ出に
うる今御おろしをかくかり一日大小をふ
ここんてく孝やうつあしくれしまに教く
は父をおもひてけしやうせんともをもい岸
教くは母に親をおそをまたくまつるはまさ
まれいかとおやにあてもは施はおし給つ

世まてつ未せせめしあぜきにすみしる叡見
おしいさや我ら一筆候てまいらすれてこみつ
こさんとてもをすりおりしうくこかり
しくふ出ろめくりありけるおくはまれ
これこのよしよありさ志ん惺君
浦盛生年廿二歳の世のなごりとそ書くる
ちるふやまおろすあらしのもろくしさか
ゐなちりもてくもいうにせん
大郎ときもあきやう弥ん二十おやや一世と
中せはのあいすしやうとゐて氣あよって

ともかう歩くりけるおのくまことよいきま
しきれらうく逢ぬときくさまりくもく武
而にまろひ入てみしまの次たまのへしい
さや按うつけせんとしてゝ志安ふ城し
我んらつのぢりりちちらひすりて右まふ
やうにとてさりしりりのしやうしつ歩はよ
そなさりけるむかし言人をとつゝの而
よきもいくさす體ら志人におるしとて馬
屋つあきまよきいそくりけるさいこの文
によろつやうの事まていかにしけるうく

てかくなういさやいまの一家をくをえたく
まいらんとそいひ夜もれよそいそくなり母
乃なひけるハかまへて人といさうれ志ぬ
ふふをふきん人をひんかる志をしおこかま
數男ひあなけるてしさやうなりしをとか
むへつくをみくしとんら君くをさやうふ
そあつーそのんてよまりりあり安なく
あつけのしやはまてよ人のあひつけゝる
まていたまふへかりとくしもつの拾るし
まるにより弓矢をたもとといそ家へ急しむ

をんつめのくすくしてこうつ庭へゆくより
もやあきんいつものもちてきてしたまのふる
らうらうつよく二三度してやくぜられたる
ありう所ふかすけてこれだけ物つふと
ごめくとそおしへへるめでたさても色
よいとさす平郎をつやうのおしへもいま
をとつふりこおもひさらう思ひろのあるき
きてあさらくしくうえれとしそ義経ふから
よくりふ郎もおこりの激むさくもひよそ
めふとてあししく後つ作まとのこさいよつ

まけ残てられつよたふ逢かれども人め
ふもらさじとていろつけることより思案より
かし思案すくよ作たりしとめよつけおもふ
りすのふうくありとこしまうて庭へくる母
色を見座れてたくふの庭思ひごと内り人
ふ亡出あまてとありくれし太郎ださちくり
馬よのつぶ物をおちらちゆくとのをあかる
みふ人もてかるやうしをとそとくまり
ふりんよは道ゆくとのゆりしとじら作達
てあういてよくれ太郎をふ我母のおこり

をしへるにも今一家とやおもひ立しあふ
まのみくるしくゆくてなりけるにはるかに母
きられしをもゆめゆめしらすしてわかれあふ
貧ごうおそれし程とてそれはなり
ござむ保つれしをうらんのことおもひまよ
の縁ぞとおもふくにあふ記さんありつしく
てひるさへ見えもつもとよりかりつなどそ
う貧くりけるまりよふ逢ふもちつ山の志
くるこもへのはのなみ月面雲はまれしま
よきとを里小かけてゆくきまれ夜つミ

ちのゆくすゑをあんじけれはきよさはあり
て参りうたてしをもらせりおりて家督若
ゆへとあんもさしあらしくはそうよか
すゑのせんよりて雲ちのかりをおもりしと
と終ん尭をたあよのこゝやらのよりしし字
そうし我かふりの道をあけしほ猟一ゝえし
ごろむげとのをあはよあふ安心のあるや
らん志りしこゝふさてのまのよままへり
すらつともみはたゞ三郎めうつらをつめも
おはまうそのおかつ四五人めしくしてじゅう

出ける在続母と兄のとひさつまはいろもん
ならち出尼おくり侍りしくみそいれける
ひそれつきやうむつて武のはきあるせ馬
のりすしころおれ気やう十郎ち父よに
ふ道こも武やうそしはつのおとりおりめ
郎ち忍かうしの指数矢のおこやう弓はまら
やすよいくゝ侍まてちく小ちすこしよた道
とをこれをもはつれおとり也山寺まてこ
ふらなきしをいろく詠せけすしくみ於る
十郎しけて小た尼りとしをゆみ出ろく

さてしやうありきの子と思ひ給へとやい
つきをきよけるある者せられいつある大将
くんとりかせもゆりしりしおうをあそれ
世よあらし継小のくむらはへ世あるしく
そうきつさちくもろとをゆかへるあらしい
ふよりきしくありあんせさらしくさあは
くり女もうかちまとを尼く物忠の御かかと
いそま侍微いよもしとすくはせ微ようき
らえんある出なちすくろちあるすともに思氏
つゝ孫ら道てそそのつこ北のしまめき侍ふ

たやけなくせんなうそんせいとさうしや、
花子なのりといそうきなくをいれいうし
れそうゑものかふ寸家にかりより晦ぞあらて
よ川はぬんうしふりなしてやうもらしく
くあんとしうおもれへまてあるふる原は
をまゐ色紙よていさきらよそ入まるる
のちふもおをれあるもきこれしそさいこれ
わう孫ぶりゐりと思ひいてらきてあるれ
ありさてもかまくし夜なあれさはっゝる
よは程のもし武出るなこのしこれ人てるをこ

夜ふむちぞそへていきさらは道まてすう
いれゐはたあうりおしありはは丶ゐる里を
一すうよ思ひゐりぬきをなのいこさうへて
さうれるのここそはそうれはそやどろも縁こさて
てきらんは思ふ猶あうしはくすくれし夏まて
心ゐしまくよほんの作さひう花在紙ゆめよ
ありしてくもやくまやうとふむきれしは
あれよ武父ふこりおしかりける母ゐくす
我夜すくれどもむちなのたんせふらんと
てはりうけくとちてゆくやてありてす

郎すかるをまきらうゑさ國とおもひたらふみ
れこりんくてしよふかりいつてむりかよ
大だつきくつきさんよゆきさふうしかして表紋
をまうさ候やまおりそのやまようしら給
二代目一代ある鳥在りのや海雨はあて
九草おかれし くふ泡定おろし ゆかりそ
れりしら兄こ代と弟んとしみきのうしら
おハさりをと説とらるかるしそれ激をあ
芸茶とらえ余をのかるとりぬまきらとて
さいでしよや おくらんしてきをやてようえん

と思ふて芸者のおもふて志ていまたて詞を
おもハ御一代家をけりきとすかれをめて
歩でよハ芸にたどく俗は行よりりでうむ
おしくてきれてよかくりは泡花ぼしの代
うけてのちを走りムりす初れおしをうく
とはこれなんるすおのくは光もうし大こと
よさまやうくんとてたけくいきめばふち
りのかししやあり一人は子のおもれすま天
よいのばあきれしてまやさい女くさいふん
すしやうくんよろつこ娘而よ弱でもうりあ

やういきたるところかたきこうれるまき
あやうくんやすく兵衛そてなかのつま
ものをかれのへよいてをさらをかり
くりかうへ川てあやうくんとらよくは
ここぜのりかりくるじんしやうきうく
らのくむかしくしそかりぬかしもく
あやあみてあやうくんとらよくまはかは
やところへは城をおうしかれをおりな
けりふりすまうたえおいの子を父そう
いするてさふりむまあからなくをてんと

はうもをまに雨よ月はみせきまりふくれ
まらくぶくむまのあぬえまはあんしあうい
かあうす川へ兵衛をまもあとり上るに
つふのまくと付てをておしくりめいしや
うくんの子まてされあれよりちくとうよ
くりきうるとやをうしをよ奥てくこれ
へ兵衛をそおとれくはくまうのん矢のこ
とうしふかとよくらやせさいよそありよけ
はあるされちくちうたいの刀をさし川へ
の兵はをよきてんつうへなかつ屋をとり

そへ馬屋にまかり父のりうを見にゆるしん
ちやうきうにいそなしちむしまのふちの
ちやうくんなりちうるに父のこと心
さし娘りしちてれとらきなる野へまゐれ
なくろゝぜにといふに武なる城をふりし
てうりちやうにいそへなりうしかゞよく大
れよろこびてうのまうにのりむまに後
うせて約福に千里の野ゝにいて七日七
秋そうろ孫なる八日の秋まいふおよれて
あるなにあれにけた鶴むかくあつまり孫

うりそのふふのまふかしたけ一ちやうあまり
ふるところのきうりしんを日月をかうへかる
やうみてくれなれのちうらをかりふしなれ
こ武をたよりし山路しかみへ武よけるちふ
やうくんの子ぶりなれもこれちうちうの
てきちらやと門てさうけういよい武てし
ありあやまさをこうのかゝりれまふこよ
いさてうりをさしはい内とてなれしう
しやまくむまりとんておりさしつる
ふなぬれこうを武らんとてなれしとらよ

でなかしらしへたるりしのこけむしたは
ませをありけりうやうの心けしまそけね
よろこびをりけりまの世よごさちくこい
あくさうしめとよくいつくはやなありとそや
つたへあはされしをゆきとりの子なせさい
ふるまきておやへてこきなうけせハきのかな
あめりきろさしてよりりしみを屋のかちは
そやこのかなをうこふそともるくるとそ
さうとはくいる矣のいしよらいとのを
おとまうきれのとをらさは為武

十郎こそてや原うこなさやうありごとす
りふりよあはての物語なともつさうこさう
たてけるへはとこそまうしけるやおりよ
よばうた物語あしくすておとぼるなりう
たなきもあまうくをあまきの衣なてさう
うんすやをうるへしらうせうふらやう
つあられなれさ紙らくあくまやうなもと
てとる為まよやとたをかまくむちとじち
そいそさくは十郎ハあしうしをこへてゆ
もんとりふ五郎なもとみをこめんといふ

いはまあり或三四夢あるくてのよれなく
せかくらはなりける欲心なくさはなくん
さんはいゝをいゝそはちらよをて慥めよ
りく慥てさいこれいゝ面をもちさんと
こし氣分りと覚ハせりこゝやりの一くもん
たらよの一通んなりともじふついなつへ
させんち志さふりその上志れなんさおも
くもをちりはあつこうるためしありちらは
らつりはやなんちやり孝はちかりな
子とさしめくゝ多茶ちやり人まくらせ たまれ

なり虚んを何うなんのありそうとハかせ
せいはゐよくちんぞしあを孫ちゆりける
ゆくはちやりなりやりはおかさしてなり
ふり絶まこゝまく勤し判せいの升をよれて
うしふもぜなかはちやりちくりまりまで も
たもりりたまふ りある通りしすくらし
おかり茶御てらの中はちりなんをおもく
余をうろくちくちの御余は のもかる孝人
ましまさは まつりうをんとゆちやう人を
くれうのまくは孫とハへたまし孫でゆの

とありてはてしを見まはしたまふあはれ
ねたまの上はてし二百余人ちまきをまれつ
きらん也行ら悔ゝうゝ一人ところしめとみ
あまらせせら花殺ん出なまよいうあゝりまきよ
ろりうゝらてかりしはつり之変よせざくり
あしやまごやて十八よあり根つうまけ檀
よきすゝみ出ていまほゞおんのあまれしみ
はくしかてし行よのいずしてはへきいまき
らついのうありともかいりたくまいるお
ありでしよつきんのくのよつきんあま

るりつきれよ出かんやまやくしとてもを
みあの師そてそうきあまきせ根んてせいめ
いう有まんさ徳つ贵根つよ人きさしめ
あや兇はは海な出り不は滅をりかくさせ
なまんてはかいかうをふりあけおんそんのは
てこをは絶しくるなせすくうの余残はお
出ミありてはおあいうまとも出おはくは
うおそせのあしまれくりきまえは出んの
は心中也きへんてくるせてくうかさ孫てやか
きしくば八椒うく思んはくめてく施んす

為孝ふさんりすそのごく上人のくちずみ
にけにせり。かれ像をおしくこうえ御心に
まかせけり。為義にならすりきさちりじ志をおこ
されまうりといそかまほくうしハ志ゆん
にあまる母院ぬらてい今一家こんしやう
思ひうさみ己ふムて極り気へし待たまふ
てしらて出たまふでじくぞあまけむい
りぬ。若しふりし其後母ハまくにゆさ式す
らく教諸をに母字をそでをせじくりハ袖
にあるに寺思ひをよろしすきしやうの御おん

もうりにて母のあまれしをなきもてたまふ
為義の御前をのきしころうつさきたちて
こうきゆんしあるへくれ思ひをよしぬたい
めしともせじくうのハさにたふまかくり
あうことにむぜふしかりありせじくうを母
の心を免ぎりめてすくしきさしめせ志
しやうの御おんとくに行をすかたせへりく
衆生のうはおもせとそおはしてへことの家
就母うらしおこさてあうたみとこきしやう
りおんらくをたしふり路へとしれおん

大ついよりを賜りしとハ、これやのをのつ
いれそめたるおやや一世志三世あさき
あられこあり志らせたまへあんあいして
あさけを御まさぬそけふの傘を志つゝ心
身ハこち哉こたまいかうくを為ちうあふ徳
しらこ親の素へりこさらつまりけりやなやう
あん大てうれハ子志れあたいしを一人お
りしますちて大てうをふりすてあしら
ぜんふんよきうし志親ハ志そうし誰しも
いさこのけわり猿これを志すへきて

ありあるくふを奉る人うりを情ちこはの
おもきよそうし今かくれたまへ志しやう
をやころうしたくまいる為素まくとみそれ
かり親ふりをいいを徳をせれてもあなよう
ぜん七生やうまてふけりそとりふく徳誘
ハ路ハ公るぜうくげまこ大れちるよきい
まり志しやうのあんとくをほりしらそこま
けらんこもとこ母のふけりようこうふを
ようひつうり身のちさ不まありくはせ母
つけ祢よひゆまつ素ふけりの他かりし久

てもあまりありあまつくのせかいは我のこ
きんせ世ハかりはしやとりふりをゑゐてあそ
まことのもをつまそゆく志しやうの傘よ
かりりたゑまつりてはむひ心を気へし
さあうし一むちをのみん心をぶとのもち
らてく久きかりりゆく しそてあこり
のたまくをひさまくるもう いふ我もまて
れつふさらもえけかりをを得まひて得て
ちをへもんよかしなまへやすてらきくお
れしすへ行とかふゐ峯とまそうれ志み

たまよあしやをさくをなたあかひつや
うふらんとゐ思あるてあつくや いこすまし
かりけるとのをよハ母いを夜すさきとを
思ひけるむへかりけるきらくを仏よりくて
うやうまよう求めをみるまよあしを語つ
をちくりや人一人ある子あり月ごと
ちりしとをほまをかつてその子箱いはは
すりあり一日ゐんしをみたくまけらぬた
よきつけをとあくて除ありこやうゐうつ
あひくをきつつあうすんたくまゐるす

おしおうきに紀の川にすかりきこり給
ひていさ河にさし渉よりかハあふさ
とほうひ冬ハあらてむ何やまはたくめ
なまめ花なりへりすとせしいくらし
あはころりう心よまう動てくれしよと給
まゐれしも上人をあされしこありてちるうよ
まう動よとの志ハあるよりて遊んしを
しる道なまりるしてまえのあられこへ
もうしてこさよハまをもつるひろんうてま
ほらんとつまれしそうしけふをいまつう

まゐらせまつりなむさこまうらおしくおし侮
さためとおもへし城をせ歎あへすましくよ
ころうしせむくやうてをそてしりたよ
なまへへこ名けしなまてしうつをたくまを
めるとあふらをすあんせんとしてあくしう
りあかりる哉しを母のハかくしるあをもとを
しなさてよるをかくりなはさ河をなまハけ
まもそてひきまけかくてたお心をあ
せミつりつすきらりよくしくきら
めしゆへおしミおかしめさ渉くのりハ

うりといそうしはりけすわれこふこしかの
てをすまつしらてくは世をゆめまかろうと
もとをふしなまく佛とすりおりよふして
つふすむ孫つしちよあ哉らうるるくさち
まんつくもらぬをさとりとすりをは
を後すれとゆゆえしいおしけ衆生せん
あく鬼とてあらよしとれおうせありしま
すおをさあしはおやと弟子とあり志と之
てしとふり也こふ一しんのかいんよりや
さんいか大事あてくあしの一しよきう

おさまりて人といふありうれし母ひうへた
は袖をすこし由尚しはゝをとうつよ哉あん
まうむいまてまゐりすあんまやのむとくい
りをつふさまとれうれぞ母激を獨さ人て
さらはとそ教るしうりせすくすくし極楽て志
ちすよゑりうりしくはらくそたのむ
し哉せいめいおそろしとまゐしりあまるし
七しやくよゆうゆう哉ゐ道は魚いをたて
ちうへさんせんさんくうをのくうしふを
りうてせすくうこゐちふりよすくてせいめい

あるいくさやうして其事をもらうくしおし
りも上なりしてしそれしやく四大天王下
ちくんらうちもち八大りうわうまてくも
むしやうしてすてよさいをんよかよひけ
まはこわうのつるとなてりうくうの
きんじんへいもくうるはなそうよまはあ
なりてまはなそひあるはなくしまやし球
をとりまもる忠さうれ大もやうふごうミ
やうもうなりくんをふり経はそれしその
附せいのい摩訶ふうて其事すせうくうの

めうへをふてひやうとう大悲一ぞうめく
てんさい為それはすなはちもやうへのく
おふさめくせうくりよう所なりやるそ
よみにや御あせ球ぶうしこしんまやふり
こゆすひをくさくまいのふおよりゑす是
をみるひくせいめいうきとくのなうら給
せうくうのひさしのきくさよりうしく
のぞて其ばもなりありさてせうくうの
こしよむなけふりふうてくなみ其のひか
なりしうと革来くのとそまける忠さ

うのふしやうこやうまうをよみたてまつれ
ぜひきこ二いせいのちをめしとりてこうし給
我たんしやうよとむきやう経んよちう
してあんやうきやうせかよむのくとり給
へちうきんしやそくきんしやうかつあや
まり給つあと一心のかきんをふしくはせ
ミやうわうあきれしとやあやしくんたきう
のは母あこゝかくれしあれつは滅きうしく
とちのうさせ給ひてありんちうらとをありとりすべ
ゐんをおもくして一人のおやをありすべ

めいよかちんの心さしよりしでをあきり玉
まきへいそしをしんちういのちまうまうさ
はへれこやうしやをたすけんつのこゝろあ
くわちういきちきうさのたまうきらすう
るるくおやと見よとあうたよきいくんあ
らはきくはミやうわうのはいさたるよ
しミやうくまふすかりいてゑあくをはく
めかたしたまとをかくしけるしゆえ
くしをいちせいくうくふくふこゝろあり
かりちこうし人をやすかり給つ事在勤

ありし大めし あまりさせし三井寺よりあつさの城
ひきずりて寺のてうしやうの其一也 あつさらせ
給し御城くまふい よして御むすめまでおう
迄りてつまよびけるときそ秋代大へいふる
ちうじやうの御おんなうやうよしゑをおもこさ
りょう小豆(?)ゆへてら残らず代りてはしらん
こし言んよ御いろ庵をとすさみましてし
ちやふよふくしをすさ御むまり今はその
おをまきのありておほくはとすなりなして
すみ郎をこうりて義経様よりそ所でなる

まりこ河をわたるのふうなうハかきり
ゆくる㞍を頼三郎盛永の箏よりも坂旗の今
までのかをと一円小田ぬ旅ねくをとうり
給いうちふる日あまでも今流までしもりの
あまれしさよなくや給いのよをと日川黒瀬
よこりてんかをときりしとされなきまめて
八橋なる人のめいさふをむく附名物の
道かりは残らう行方武道残すり現出なる
やも残利御くたくはくうまて三河なりいは
けふのあけぼの山うまくらう旅ならん後

王御前志こゝろ若侍をともなひそれあちこち尼
せけるへとんのせどをまんちう三歳まで
のつけたゞる六たのけちきうさきとゝ
彌んしまふてはころ色のしばさゞて
こうえしてこ夜打入るうやうまて十郎
五月廿よあさ彌を志つめまりこうま
あとよあらそふまうあらそこれ
五郎宮て寺のたて悪や思ひなんむうは歳
けらみしちおもしうくそゑいしなけ
まるさはよき娘うくそたのむ滝りこ川

祐やれこゝろ花よおあせとおもへこ
う様まおをれつゝ孫と猿る子か阿弥陀の
りんまあうき滝てらゆをとのまある猿打
をこ様きゝのつきけよこ夜猿ひうへゆん
すへはさてすなるなる人生て三ケ國小でも
けるとはむしてもり也紙むまは子あ伊川
の雪そさけ、ていさりとの雪乾後あハするる
うの國富士野をそおもる彦と歳へむんふ
歳さよかつ宮てきいこ不ゝうたすまて
そふへ瀬へむいさむまは古里のあるありや

おしかり言ん難このそらをさるくくと
ちあつむせさしうてくものこしすけふりいけ
くをそこ燈ちて孫しもくふりめのてゐる
をもし實親にてやは絶て三郎もせを施
のくけふりいちそにては教しさのを薗乃
くろ武はりに雲のかくなてはしう教ちよ
て人笔すくれむ右武事をの思出居遣
そうてやしうむるゐおひけそけれもうり
いま御かふす業ちうとおもくは
とりちおうめ激くてくり女郎けありさま

御乃く成心よこうきんしてなはゆくしさ
武さらくあさらしいさめたるやともとれくれそ
さかりこゑまなりて麦あう大いそこいそ
やかる里をもおうめたまく肉家よ教起て
な田つるもりこう侍そかそちくりへとてお
夜ひさよせうけいくうし二ちやう計つけと
おりぬナ哀くふさめておもれふうしこゝま
うけいくうしおゐて武くりめ郎よいさけす
りくと武ゝるかくかひよしやうをしくる
物哉かのあとのふこえりおりうしてんる哉

おゝみたり三郎が心をとほりかのかの人へおい
しうきうゞし曽我へなしはでし武士は
ふたてもらずかおよりすしそん候あお
らぬけん人でうこゝふて兄弟をよすうし
こふぐるをといまくしもだくぬすゑん
とあさけらんをわちおしいうむうりとつ
兄弟はとすのまりかせのちきて元服す
なをよまをよこえをせてもらうるかと
みたく刀きよこう付の道のまへこそみて
なしくれしむさまのりぬ六弥出来すれば

二のゝや兵とおほてうりいはやけ事一
もう諸縁といふめう出て性のよりあまも
兵事をとせをやう在てやくるといそれ様
のたすね二世は志らずんる義いきゝうゑ
人がそれはいすやいうるる人の世かゐは
我らう死よ紛ころこらもんよこういする
弱やは兵事ゑるいをん分ふてはと残きは人
すう出ではわんの心ござうんとてもうとは
うたんしてあれもくあり久れしゝけん人を
馬よりおり弓をぶおし志がなれたんでい

いく〳〵ゆきかさなるそやかまくら殿富士野の
かりとおかりくらのついて夜いくせて夜
けたひの物語よと思ひ立てまかりいけと
すよしさ孫迄てあまれし人てまやう深音ん
かりられ馬くらみ若くてのべ物狂へりう
とてよとを夜露〳〵其うしきを御と〳〵をもすさ
遠ける袂みく内しさよりきけのよしうち
もうかえすてきんそめむしくをたく是
よなを見すり露ひて二のミ尾まこうさうし
うきみけなといそあそひ露〳〵とやくれせし

十郎をけなしこまり存じ候へ共々様のつりう
まかりて只物も存すそ小思ひ立ゆ馬を山
城まひの猪ゆて夜中は気も也しこうり
う仕ゆくしまふけ佐の殿御すうい人宅中
なれしばしくへなゆかてりとさそ待ゆて
とし馬引よせ打のり东西へ打わう猪け
りたくらのつ孫とはさく候先そ究後なり
なる猪を狩ら打死れ後あひとも遊なんと
附あのさてなり猪て一道小かうなを為高
小女れなひかるしさはそきしをかりけす

こと道よりさいちのこゝろにて舟よもちあつ
りけるよとゝろみ給ひんすへきかれふし
かけしの頼こうむさらんあまとてもすけへ
き命ちゝくおもふし事也けりぬ為朝も
弓をもつあり発一時を志度して出陣をせ
やめさうけりし小矢たく器を炭也けれ字
引をさゝさうはあその手こしのかりとて
こらうさてあり九郎をとゝらさうへてき
ちやうもろ事四ヶ年也のくさするす
父下於也其時生年七十二さいとぞあまり

保元天下こゝろ屋御一乗院とて西をさもよと
すこもちる在ゝれしこ六そん王の御時をうけ
てのためふかきいんこうれ兵をめされてとふ
志は由すきのもとふまりいそいのりける
おきうしもうまもらんのかりくを打まてかく
まんふく松よ西上り為朝さうてまあく
為くは一の矢うけ知張人とて宮いらよ
一人をいそん勝す揃けくしよくさりうけ
をんするよなしちく打かつてゆりのあり
の其時しやきてやたくのす北とやそりう

せむかくさ教して上下なれ人心をぶ
きをこれきようもやをきらせぬやうしめ
もんや紙ら思ふ事何でも物ぞうしい
うそうもやと何からせさ絶とてすう一つ
教よとくむかうる二の教よそいうそうる
行とあぐる敵く八代十郎されようし
大郎名あきうきうきよく出すひけうあ
飛まれて一二悪恐なつへたくふし哉也と
て思ひあまりせるかさて出液をさやめてり
川額小弟様の御山を小付よるる

當代物語才 八巻

A 00
5796

箱根にていゝ風あれ事
三嶋までかきうけいし事
富士みまかりもへの事
蹴鞠まりの事

3288

曽我物語巻第八

那須の爲狩山とすハくらしこう第一乃ま
い山なりしか西はてうさんおくとつ
ゞりてきてかよの月かけ残やとを前こハ
きやうしの海まんくとらしく波けんなりつ乃
あのともゝく宮ともむきのさいきやうもせう
めんりをたおほくうりけんちもんき内きり
うさい衆生をけうし給へすうりのこやき
とらなりけさうりゆまく一家ろんをむちふ朝
きなのく悪不小おもらさしとちうれたまのし

つゝ親父をおいてかはゆき人をもみすてゝ
すゝりこゝろやすうちやうらん詠らくしきや
こととむすめのこしらへなまくいさゝか嫁す一より
はなは山みさをりいままで嫁ぎまで候は目
は三かゝんはくふとんほんぎこ六雨すよ
こだくまゐるとうてものためありあまりに
る孫へと孫ん事ありてあはゝのまう
そのゆはうりかゝるきやうまうやすて出あれ
なまひていつりへ今の物語を孫へかくら
よふなり孫へことてもれしよりはいまで思ふ

へきまならすの事そよ孫かまを父も孫へ
孫んくくのきてんちしきしめしたもしく
志てでて此そあるれはのつこゝろをおもひ候ま
いそうらうみすへこ人はたのまゆるすま
をきさいけ出家はよるへうしすくそゝ言葉
た小ぼうくとらあるとつかいたよすてみるうさ
はへきしてをみるの袖をとうかはおしあ
てはかくくとあれ孫へて十郎殿御返をか
志ごまり入る見さうろふやまてんのはりはす時
家も見捨やそて御のり上りかくらにあり

てんおうこうりを中へこきまてけしを母よ
一もふ常うもうゝまゝんぬ又おそれしをおりしまけ
ゆく今ふおそおそりけつけそう守護は孔
なしを軟数おもとは護く千劔破のうちつ
とく也右とてさけ兄也して三三九とすく
兄護は行くなふともげてこしくのこう
もいていせまんとしてさやまれ一こうしとり
いうし十郎よはさまゝりはこうしおとゆゐ
本常よしあるつ三代行ってしとて三のた
しし正才一よ聞しつこう從ハしあさあさ才二

よ要おくしもいふ太刀才三よは刀之名跡
もちちんとりふと銭屋やあらけまおり
りうもは三のたかりとはけりしてもこゝまで
うり御子きよりゝ御けりしかまくし夜の
もこよふり護はて圓の大将くん護てうれ
そうし現世の上り護はよしきもうくれも
うつたうしをいのりのためとてはけ山へ
まいうしせうばいうすてんつ事八一うしたこ
のたしつ砂はたるよりて兄をけふく小
たえまつるおしうやうし志護くとしけりまゝ

くりぬ郎ゆはいやうこく作ものなちを一
ふりとりいくしハつきくり広なちとやハ
むかのし夜ハくらやの作附大かくへ申ふあく
大ゆみといふかくやどめし三ケ月まゆく
らせ一月まえかくせ二しやく八すんよう
ちいくをひさうふくふ物ふくしてとくし
け敁在ら沢二のからぶ枕まだくらきし附
ふまるま西風ふきてこれからとふきうこ
つしくれハまうせまそくふりかるさうし
三てくうかりく殺せすまひきれくりくりら

いくまうてうくとかうけてをむしくりみ
きよりをうけりとよりおふつまくへゆ
作られぬおかれまそのかし記まきつからを
めうきくれハ四ほうへ火ゑんこふりのむしま
けはさもこきおちまくれハむしこをとそ
作けらきくゐそ捨しまらんさのもとへおり
つらきこりそきりそのかしさふハおりく
夜ちむちうちてんどうしして人死うするます
家さありきとろらいきこれなちをまくう
よくそくらき世ふあまいのむとくまらいてん

まけしくして御殿中さはぎしこの事から
のきとぬけ出て大坂へ一ちやうつそこに入
かうる悪手仕丈しやのうらうしら九いろ
ありけるとねよきそハこりへうりける事
後よりそは殿中のさらせしもとてまかり
はあやしとてあくを鶏さらふでみ給ふて
申くはふしきと志大ましきまハとくしやさ
おゆけてもたなきたでそ出しよ置して八まん
とのへゆつらきけるそきゆでの娘しきよ
ハそのきつじちれしましハめハあれ付て人を

まるとある文書ふ八満丞じちへまいられ
るるふ人への中ふみうりのかうのうろ波志
こりふ志てナ八九計なる八女一人むしつ
よふありて八波とのちむまよりいてさ
おうしうでのあろへいまんとすがのかうる
おのきとぬけ出てもし八めの兄でれうれ
ふ残こり残せをちうつおよりけすのもへこ
八いヽめそれしよるぞちつらしせられをぞう
まうろり飛て出なち八め乙りとお付てを
なきへつりそしやたてつのもん食らいんべあ

もしのそとへ投られたるを進みてのき
せくめは其の方ら六すんもうりまけり
あつる半分ぐたくそへてとりきらり我よ入
ぬ又まはありあけるもん首ん付よして
為ひしつ〳〵よりよりあるとのをらてぬ
我もそしてむら立そ而ておか違くれ大芝居
璞ありうしつれて六芸とすよ独すんよま
さりたるをやとうとこや思ん言しあまめ
は六すんを発りおくをゆきごを発り也
あつけてを違へり言んしちう代小を所

たゆへあり出をおうそんれうれぜんとふ為
めあよしこすう至座敷んちやくしき肉芝りとら
よしろそのつて〳〵流かるにかれありす出す〳〵
の佛していろまのはしやもんよこ〳〵絶座よ
されどもとを蔵ふりしうせんよ父現ふり為れ
志のうたをんもけりすや品をりんうせし
ま折まけ未國さしてそち路よふかりり濃國
ちたかこありつ後の行みせりふねにら
けりてんの家人おまをたりやうへ御き發ら
つきうや現けくの字郎うてまゐよさうし

僧入て後にたゝふる人形かりしから
ともつ大悪子九郎もしくとし尽いまるさ
しまうとのつてくるまのたいらうくりやうしう
のまくまうく文しておらしくはういうま
してけ谷ふく形くれしやまんまさり
きこやうちやう為孫らくを父らしとも
は方は御山よこめうきてんちくよし野の
ふか一めてせしめ孫く宏栄孫んまされまう
は（…）をとあまししやありまんこつから
とくさしねまよとむゆりをこうふりける

あひの思ひをおしいきさまりてたゝたく
まうり孫くかうけくよほさひくさは方
ありぬすこいうしふかくかくしまさくして十
三よなり峯ひろるとしゆうてしのらし
こうおふ志うつひてひるをたのきあきん
とよとをなれこくうり孫ひははかとの
国なるいのへ宿あてるあきしとのたりうこと
らんとて秋まられおかく入りしうなお
こあふ志をまありしよしことつとの一人
おさあれくけきやうれつも志十二人なり

とくめ八人よてをおほせて、おのおのハかく
らうおけをもつてやうしさふらふ大刀やと
てあつまりまてハさうせられけるよす九
のとしはやうへれすけなしけにをおもし
なみときうしめしかまくらふ上りらん気
ふいりいくもとふくして両国の大将くん
ふくもけうせられらけよきし家ハうつ
ぜんよしらくこはぜらくとて付は山へま
いらせられなまれてゆませんよひつり
志也よてかりしよをはらみあらこちかし

うはあんよらそてまつりてらうせ家なりと
はふきてあらしとえハ京よのあり留てら
まけいそうれとりしるよりしけるなしは
みんかくらよふり給ふも今しらんさんよ
ハ入らくハよらしこともむさしとおそれや
らまてあきれしたるそとよきたく数敷国ハ
なまへはもけしうしきつかよりんらくい
こやりよをせめたへまいらんよ行つらら
うはうはうるゐきせのなまひくるときも旅心
ておほせけてけふくれしきさうよやしきん

つきしはいすはふちんのてうらいけさきに
てらくどもおそきてまいらせなるりかり
しよりのかてりまし気色くはみなおはし
めしあまりけ手をとりあんとてまかり参
ちさらぬていおもしてなせどもいまのなう
ふりきれは言うの城をふりしける色け
うしもたんまてうら虫なきててはなく
足遠けるふありおしくそおもきれなは兄
才の人ていはこ馬よむちをあけていそきき
けはもとまたてまらうくありすうたるて

すかるちうていまのつけそうのはせうてむ
ひとへにはうくきんとおかくらくり香と紙
らふちんくよをはる花一はく紹はうく
ちこんとうききやうくんりうこうれまま
へうしをとよつちれてたしまの大明神の
御前にあゆはさにくれ代人てたまふかくこ
我はさこ七歳はての歩さけ我いてほう
居くまたくまりうこきのすちもろのまう
まそいのられなはまうと思つすまりふか
すか我らいこ花のてまうけてあしりくを

あへ二尺也しなまよへへうす重二崎大
明神とぞ祝しけるみなん人のこやちしけ
よさりてはあるにや余ちやうおん
といのりけるよいやうまうきつまとこらいの
はよは人ての何けくれこびの大ため余ぶめ
ごとのミすゝる仏をむさんぶりるつやうめし
ますせをを荒後のわでまくましくうさて
かしよりみうへそせしくるきゝみなまへ
て大川や三川よを思ひよをくるこをまて
けまはゆてとかきいふこさ伽ヶ原よ川

在のくしけなまり菩我兄弟を忘おい付
まぬ兄弟それしてひんこ我孫らへせよう
ちん隊をふかりかれもちうりあしその我
ぞそこまてういかうへともわ余衣ぱけいご
あてはまとあしゆましいあひさはの由而
よあしくくるうちりうえん太さうへをし
我りしておらせくるされかるをきれふれ
なりこしより富士野いひろかれしせてごく
るくていうあふましそのくしあひ娘達よ
うけなまりて人てよふれいして我そ河へ川

りけむさしの國にハおさけ山にてやう
し次郎志けにてみうら和田さんをしより
もりみうられもけよしを志をおさめける
みもちもろすけふるこもりさへそんもの
うてたけたる太郎ゐふよし下野の國小ハ
らけの宍の孫三郎ともゐふよこ山のとう
後孫せらさりその國よりけ多川村之人て
をきられとらしそい三百余人おりまう侍よ
ハするけ山のうしろ志けやすまちもくらく
太さへまへこけまへあさい所の三郎より

ゐて同くひこ太郎ハ小野の太郎もりのいぬ郎
そやしの留守をも山の三郎うきいの六郎
いさう黄の孫うしほしまのひこ七志ふや
の小ぬ与あひきやうの三与をりしのとして
四百ゐ十余人なりそしてけ弓をち馬よの
付侍三百男孫をあまたんとてし越後せ
せこを山へ入をぬらの東ハあしろへら孫
をきられわ八富士野をもり野をうこぶり雨ハ
み川をさいもとしられさまをさしそりせ
出ハまんうのこうしを孫よのつりたみく

くさりやかんをはりのすおひくらし思ひ
くゝみいとゝめくりはまうのその日つは
まるうそくよいらきのてんのみしまへの
かきおりよろそ志うしはかりきぬちやお
紀色大をんのさしぬきふくきへかいのむ
うし紀志はしちふりよめしきんせんあし
けもる馬のめしやくよあまりゐるに志ろ
くらおう鞍あつふさの志りうひけてそ
めされきるはゝん供やくたとの太郎はう
さのやくいらし候し新太郎らんのやくハ

お山の太郎は志ゞかまかひこゑ十郎おり
そのかかゞ一人たてせんれはまやの六七百
人は馬まりりとてゝさりしを中ふさくま
をくれてゝさりしてうつするおりともの
ゞおしくのとうまろか一しやく八すんの
太刀はしやく八すんれ大刀をもさく
誘う孫のさうの三人しもちゝるをよく
うろけよはさては馬のされそへうらり
ゝるはちんれはすゑはつゝきけ山行と
女うおそゝまへさせゝはむまじらまろしよ

してよき人なくて見てしそのなう読
千話の出立しける銭すり月をま称くしてお
はむろ武冨士野を見なく見てしうくて山
より縁がおふくあひおゆし思ひくよさく
めて御まうれ御心気よそ入よりるまさけ
山乃六郎志けやをゆんてめくよあれ付て
なう二うしらとくむうりれ文なぬうしら
一てういくさうきめつよたけあおやさの
人をとめうしらさそとくめりれ書うりも
の跡みすな付人くともそきさくし変にかき

いの六郎武右衛門のくれ何くこふいく術
まそ縁一うしらをとくめすしてせこふさ
何く志ろをやと志けこくよ気をうけて
まりりくる利害ゆんて乃志けをうも縁一
うしらいそこはさる術うふ不と見すくせい
やさろよすさうのはくりあふるよむちを
すそへてくるりさ風にそおしく侍すて
ふ二三くんふりちう人てゆるじちあけて
もむんとする不よおもいねかんはなよ馬
とのりうけて四あし一ふたくう女くと来

あはてしを忘くなりけりおろすへきやうを
なくみのかはゝき不をなくしてれ変は
社家まれり上下もんぜちをとなくして
それしくこともすなはち今主馬人を許さるゝ
よみちんはするともそへくかりなはきよし
けうち候へつゝ恐とねをもしともかく
ひおこなひくえのむちを折そへて二川一の
をてうろおもちてしゆよまりかう
馬はあ河あをもそへられてまなびしきよお
ちて行ぬしをゆさるゝ弓の事くいまって

かゝるをたてゝ出もしこちへてうちる成は
主なる人の候ともすまし名れのりかりまり
うりすくかり座にあへたりともしおり
をその後殿下君の御りしのあまりかやむ
なもつの雪おくりのつもりや三千七百ちやう
下されなりけり時の我んなく日九ことや
あまりつ是に出もしともんせめ人にう
ふかりなれしかしの御祢ようくのつ出けにふもし
鎌一りしら出来りうちりて名ん太氏かく
かるゆんてをとり川てそくたりけるうけ給て

へいはふかやと思てやゝとりはなし
よりはいそきあつをりさ內すちゝのはよ
くひをうけきれりとそいぬこさゝるさ八はた
鬼王とのとをとこ思ふ志けるにとひくさ
り二の矢をとりそへはむちちくらくさす
所よみつけはよむまとのりつけてあしらゝ
見たゝかひところよおもたちて馬ひけふ
其後よしちかけ山の六郎志けやすも扇かう
へてよりはいそてもありえん太よは志へて
るよりうきぬ志てハまうしをまくらうみす

二りのやふくそとくまりいくる志けやすと馬
おしよせたる所よえん太ゝ馬をうけよせて
そのき志てゐるけすくいかさくめてゆそ志け
やすかうて心へぬよし扇のたまふそのうち
志てる志けやすうや一ふそとくめゐる鬼王
と新人ゝぬりまさゝえん太郎義盛しあ
さまらひてすやうかりそれしう侍さまれ
又一の矢二乃やのきさひありやめハ六を
あうこめう一二のつえんをあるさゝまうけ
すくも侍さしくいける物語よとしれまはり

ふでやめを一ぬりてハおかりそりそりな
りしおさくてとりはくものぬりも肉乃ち
きよくよおもひくはき言ん太丈ふいすり
あるしでもの筆ハせらハぬ礼うよりて心
きつとき書けやすきこま打よせさす人も
ぬはう書け筆すうとそめさる書ての也
たくらん太もさか者ぬりくはもおをひる
むくし筆ハぬしおくしたるやはしうれ
けもへつとくめいる筆れすいかくうき
てと廻書けやすき庭ぬていふくこまつけ

まりしさう書きくをハふと筆どしとうぬ
そとくやま手きに流るはめうんありくん
太くりふうれくりこ夜打ぐせこ教よふり
ていふやうきれちふまよふうく文やる
そのもそぬしよ書けやそ守て筆けしく
の筆ふたらへうれ思ひの色の数段までも
ぬしくねすよハせしゑさるそぬしとぬる
りし太じちてらひよしのうろいの難りき
ちさそふあうしハぬしるしをやきけやす
守ていもれすやさそふあうしをそまつよ

はいまはまてゆかしきうとの名つ立田の
川なミまちてゝくもま秋のゆきさしこちハ
むしき流なく中やさくあんけりなりけるふ
まてとする所あり涼のぬしとゝもをハは
まけふゆへるて我ちゝふる波まもつまて
ゆのもこうかくはい初夜をぬしあるへき
いせれともつもてもあうちかまへさ液
はみなとこそ錦の色かもおほく今人
太政ちてしとしちもてくかけ卯月のこし
ゆくちをあまむけさこそぬしもなまつまけ

やとはてたりしよ打発せられさて隣す
日月を越しとの楽しくきりえくさかん
ち人よよかね羽を御ふんハとりま発すなと
まひやすたまらぬなのこ出てハとりま発
すうきでさかうてあへの猫とえせんとそ
すそよ矢をもそぬき出すらん太もちてきま
ぬとのあまハあんのつゝもとりかまつふ
をそまあさしぬき出すうちちうつらう
こうハいふよおよりす肉のきうあうふ物
あかり志かハちるをちてぬをおしふへて

うちとりてんをもせよりけるところの人
ひとしもされをとくかん太よいしめされハ
ちゝふくこへハなんおりみしなをよし
ところせよやりけれバいりの人こなまの人く
なりちすらうたへそより来けるみまほん
まめ人てしもちるふうたへそよやきしるを
けうの雲州人てなうちなうてこへそより
まゐるれりくふの人てなおりてとの
なされらぬるもちてふうたへそしせよやけ
はあまとりつさの侍な二つかまれてよや

みけるむかしをおさの人てなちて概う
なくそおつまりけるかん八ケ国のこふあり
すなわし国中にまてけく福の侍武よりまん
よりさなりくまくよくふ江ちなりて攻さ
ひしめきにハしめきけるもさけ山かなまし
しめよなきまり給ひまうしめし思まれ給ん
まてぬらしふとなましくけるよりまを
これを御覧してあまりくよりとりまめ
人と殿下されけれ和田なさやうもちんの
あひへ馬うけ入上まけらゆそ勝ろんめり

あるひよそのでありきてせん猪をとゞめへ
の猪は毎人御前へまゐりきよとの御ち
やうかそは也大きんしやうかそいれその
のちぜこをめしうのきてとかの新六郎
こりし太とり つまり前はして気きなり
猪そのやうちんをやふれになり何やう
なりしるり也さればすや君のはめくこゝあ
猪添くはあきれこれふつくしてあるこる
まうりぬ秘かに諸人てをあまりれみれそてき
近しくるつ也もゐる小世静まて猪しれ

よりて一刀にさんとそで思ひなるうくでて日
をくれしかかおりしかいなりをなりと
こてふくはけ後おしこなることふなれ
此國の住人新田四郎にてはふいまゝ猪よ
ありますきておちくる猪をあら持不まいく
年ふるさきてさ房いのきてかふし草
かりすう六つ義くるつぬしをまきてぬ猪矢
ともの日かな立さりきう大さよたなれてけ
まちはたらくいやうゆうつ者門さすで
くうきてん思んもかよふてこしてでてけり

かりうのはくとめをたゝかれておちあふ鞠
をふくしていさはらに中珠ありてそと珠
しかるへてほぶさりしをきいまれとりけよ
せかりは薪ちうてありかれはよしやふけ
たよしやたくつふとそおかせ下されしかり
人をもそおかやきふつくうやすのはちやう
しうむばりきやうでんのめいむざく行す
つ光に志りんとそんはるあひくしてけごう
とまろおかるまてありこをあまさう物と
とおそれかはせ大のまてやきをぬこいくし

へて一矢にこひさてもありけ雨にやよ登も
さらえよとしはれ来のりゐぶ馬にまとをに中に
をくうてふけあけおちもかゝんとはる雨
にりふりしもや男はかん弓をとりあを打
すそこむりふさ肉にそのりしそけるされし木
けりの積こうのでとりかれ森いのら強ても
雁をたく馬珠りしもきうけ大將しまうもを
すにまけいりてこくうをきこんてまちりまた
バもうのがくわうしやくそんの帯うほし
弟さかんと八幡のこ服にむちをあけ弟

里ハ道せバなふとひ付しを見ふもいふて
後さかゐ新田におし　むしろふのやさしこへ
声もこれよりもしさゝれけおはくとうつな
よねらく天のつぬとし三うしら王のやう
つひぜしろつお見おりくりとむらむれ
せぜんてもくそ見てさりくり森もいよ
くたくりをうきこきのまくおやの下いま
もんぜやをこまりみすしてもつまどりてま
りりまいたまりしなけりさくりむうしき
一郡よさまそおちよくり大まうまよあり

てゝてともちしともそりそこらへくまさ大ま
なけ共いの森もあまっててるおひぬ新田う
いにやおきれ家んは前ちうきやきくねま
此まつ共よむるわよあやまこすこ去つ刀
るぬぬ共どうなるよつ共くそくありねひ
二三同のうちこそりくれし森を守そくをで
ぬすん去よ根を入て立をくみふしろなり
よくれ新田ハ去とひおりてみりのごくめ
をきす上下のかり人もあさとでくぜんまか
こくんのかるまひりねるとまるくもとく

のかりのりをのりかりこらへかりせかく
せぬ鞍あうふおりかれ君を心より御読し
てかりもの内つうきやうち一名よふりし
とはかん在富士の下にてめ百余町を
給よりいさおひあまりてそでをしきれ
ことは旅ハかしれすそつくまいハ里とす
あの山の絲まそそをしくかるきんふの
かつかりしきは変ふきされ張きすすて
とうめふかり御とかめまやそやそ　その秋
實殺のナ郎よじちあれあまさてさひ尚や

うかりし余いくちいちくてあもうれをし
なうしかまらんこうのみれよしきんかんせ
ゐまそうらはへかりしをきひやをみ付ヶ
ひう芙はめよかうらんそそきんしかる折
かしめつ御馬とあまかりきつはみし世
もうせも孫まハほ日本一つあう馬方まて
きひまりは人を先をみそよしや新田とまて
やさしはふるてをうけよあやまれするを
しとくくよもりててハきやうさうこ
うを新田からうとかりかんくれれハあつ

さて我らかさらうて今かうめぐりうは、そ
屋ざりのうちはもとよりいかくまでの
うる為まゝそ思ひありける六二三十人ぬ
貴賤まて行旅げしてきけて入新田かじん
の貴さめ也御所でこの人を先をてをてよの
たうむにはん殘也あをおうこくよそて日毒
そうもんの人と出あひて又出ばうとしを
うつひくれはさよふうこの人もあまくう
に逢しのの新田かちんもうのかまをもて
其七少そうなきくり被もんありしす杳

ありさまをさうしありて富士ゐすそのへる
いの森のむらめありとききをまうぬきも
ありくりうち原言ん太ざんをとんこうけすく
そいまこ森にありすしておちくる森を詩
けはうけるるへよ川ひさてもあつは
きせく一をもるうるいさしてとおもへり
けむくとりあへすうくあうすれし
あつ草のきひとうきさをゆくさうの
そて君ともに矢をいふくありうは
君分めしてさんつうありとて先をとかし際

すそ野百余町おそなはりけりんてさま式
名所で旅いもりし亭すぎてたにおんさ
やうふあつうるましてよくとくめ六道と
まうしきいうまとそすけるる御堂をさゝん
をんのぜう浦經をりして槻さんなるより
ありようさんせちとおもせ下されなれ
りしこまり存ほよしこやけるころふうち
ちうそん太うけすく侍のさまいしてそう
ふうやうるゝうさん才一乃さのにゝ
上ハ冊ちやうをうけなまり當紙乃人を残

ちうけてすけるハさんつうま御しどをす
されてほちりこうハいわきをおろしまず
はやとま太す君はをのくありはものは
との舒中されよりて糟今家かまくらへのら
らせましくてはめむうふり登して
りすこうむふ入らをよとやなれもすなり
せほよねよ以すしてうしこ偏りいりゆく
こやうまはすけへたのゝうそまひるゝそ
なりきりはなん太かさ孫てすやうはき
しまゝをてうんのをやうあさへあらしと

まんしゆといゐてちそくりよくれこさも孫
られをこまかくてあきられくれん太まれしくをす
うきんこおもとれいるるきまさよくつけしあり
まれなるやけうれまやも一すんをもして
そ大せうをまり人も一こしんをもけてその
くんくをまる武ほひれ子もこきつひよりも
ちゝいかそんをつまてふくましやうつりの
まうさよめけのほうこうよりてうけき
まよくもちうる為武はさめて御まうの名
ゐはまくるしやもう為孫うゆるしてあり

もへるいそくるそよくくすりしまさて
くひ球武進とのはちやうりはさくせよと
の名まてそあるあんけまやゆるきちても
とあんもるよ国つくん球もけてちうしたる
つれをてあくろうきてきちりをく
あんしみりりをそてあやうし人るたく
ミりしていけりうむよかをけたふかく
てまうとあるゐは志みすこ氏をのかる
ほんひらくもちのしけらいらをありぬて
其ぐへりうこうす為きためおしすあまれ

うまおとハ六よふかりせむけらもしやう
つゞ一文字武者てあくさましするおほく
みなゝほそてうやうかい出てさかくれけ
長谷川はあきけころをつくし排ひける
ちそむさんあきけ十郎うその日へしやう
そくに名を忘きまたひつうしちあるあ
けりきむうち馬のひかれにあうけのむつ
まれまき檢うくひきうてあうすへ
れ走てやをけ大つまぐけて何けるけぐう
つはまのまん中よりあしけある馬にのれ

くゝまさてそのりくりくりめ郎うか手日
陸奥やうそくにはふすくれしあれにくうう
おかるひやうりんのなけうさきふうまれ
てりく さいめはてうを三けかさけ承くま
はけゐるひそれしよさんこも日まね秋けれむ
うのし承たふやうまむきくさししゆるのまく
きろれそやし何たうまおひあし二承どう
のはまのまん中あけある馬にまれ忘の
くらまさ武てのりくうりもるうまはせく敵
きた付て十郎まはけたう人にかとうよきこ

しかり人〻みな旗に仏を入りつゝかをしして
よのかんさんに入なんところよのあり多
みかく下り野をまけ里をうつみかれはよそ
つゝくと思ひしよせこそやふりて旗なう
三つしあいそてまかれ色ちいことを見る方
よろのもけつ孫とうおつをうそそおおもく
しかれそのひつしやうそく花やかなり姫
どんきうのひきあれはたいまくらのむかせ
哉はこまりの矢おい姫哉よせごしの弓へ
まんちゆう気きんしやうそうしちたるど

きうし若なりかさあつしよふさおんかせ
く瑠哉馬の姫ろくくましさはまろかく
つもんのくるあさてそのりうりかる馬かき
こふるめいもありてもくれさやうのり
てかり三おうる旗よへたうりぬ馬のうけも
をよなりかる十郎てあし既ぞて宗旗ならち
若がるよせこそ食ふりておちかるるよや
おけうへしてたつまか絶よろ十二そくの
矢の中さしこうりてはつひやところあり
とりくこもかくのくかりつかくり待よ文

かいらき宗くわうの山にふかれてはまむらう
も花のひさあまそむくゝわれ志てもるらう
これやよの不成てふへかしすりうあるふ
きんさんての為義しをおゝろさ志うあとう
とをらさらんとゆんてよぶしてそくかり
かのよ次郎もおもぶしく中さしとりてかうれ
さりんれせうくれ君のよめをうけ給
いもんしやくを於さ孫へりといわざもふ
とうきいてすそてさらんとむらよあふみを
りもそへてめてみあふはげもぞるしへ三

ゑ藤と友歌つとまん中よとりこめやさえれ
どさりんよさしあてゝはらんとする所よ
術經うちりしのじんやのこりくんすけあり
うのりたる馬をおもはねかしれよのりう
けくまけけりのさ國よころひかりあやまさ
ち弓のもとくをさしてむまのりしらよおり
かうりめういこえしとちうをして矢まいり
どあふちあまりかゝあまのありさ國一の
かくめをくれちうけをこさてまかりこれ隊
ふうらきハちるりよむぜのはぬ藤をとる人

にいられけり五郎むなしくなりなしき
むねよりおりふしてあまをとられしやくき
かはちうの内ちかるしられしあまされけり
我屋福てこ地よきんちきさとのかうしたく
いまハかりともとつうわとれしよむ腹け
よかりぜこのやうゆはなりゆうしこれを
うてひんよりあきこは事ふりひとこう
むなきみをかりすかるむぬりのちふう
へて物をおもせんよりをさつひしてあく
まやうさかやうふをおりて孝山禅とくん

ときかるしきかは十郎是を見てきらうく
まちなまへきれしたてさんのためハいしを
うかうしてくれける庵のあるまいけた
残うるミのハいしハミよあうをあくさ武
のこころりまあうをせんひりきうし志む
はありうて心残れへここうを川たおく
およれを乗を待なまへとし馬にきよせう
のりくりを後もんているまじはらんとそて
十郎うくをし五郎ハうへ五郎ゆけは十郎
とく怖りよそめをを流くミくりはらおう

けりりのひゆにたれもその日をもてよ
くれなんとすむさけ山家なかせもらくま
しませむこやうなれのあり様をはくく
とはらんして今までそんの縁とけねそや
あまれゐいけの御代とおもりくちとうや
一どみつてもさ絶ゆう君の御代よこうやう
のりもうれりけすきけたくもよう教子性
球をちぬきれも人きよくささおもきを志
てまるとむきんふおんらうりうちはらふ
遊ちやりまハ明日おまくくへ入らせ座

ゐきあれもこうれうらてもうちみましけ
よりきつせんと思ひ給へとも人くちあまさく
まゐはせ弄すみてそうみ給へ給ひなる
まさきさきよりうはく山のもとちりふ
これ文くれとまらて見よう
とおうかん給ひておうらしくミおまへくりおり
かりうまらなんたさりんうちうひの
へうりきつ行事をや書紙のとのはらよ
まゐしこふりつはくとこいしおまみをな
ぶすきけたく守て夜山よゆみ日うけおつ

こゝにふせいといへるをとこちよぶすやものゆう
くれしきうふ残ものにてゆかし残念さいやら
りゆりしん宗太ハおもをさうてそありうわ
あるしを君よりもいまさのさしきしうこけ
よ残るらで走けうてのは守れふしのおも
りてといふるうしてせはさられた人ゝ守
ていまよもいめぬそうくうつまさんとは
いれおつうきちてようかりてたてゆるをや
とかあれ〳〵る走けうておわせうるさいの
ちとやしおふ物ハやまれのつされにくすり

そむくの代残おさむは物ハとうさのされ
へそんをふつふとさん娘ろんよろて今り
をさをてしをあらくとこうやうれあせものを
もろくめしはれてまくへしせいゝとそ作
なるを後世我のへてを近はけて今在走け
うてい不へましませ等ゝの物語するんと
の残くもうしこ海り存よし恵んゆうして
十郎おゝくゝかいれそはるもなけ山家ハお
きけをとてもやこされす残走りなまれけ
はそやあるをきんしてめをとうふ 物あく

みつのほどの施いふりしつこゝろもちのけ
くどいやしむかしの名人のつぼのおさけ
とまらぬくまでくらりさしも己の心な
りつませどへもまことすといふ十郎なる
けよおさけ機くしてうらの心と恋さり
思ふまりあらなこよれかりさりと情け程へ
そや君な明日伊豆のつこゝ明後日かまくら
へいり務御供をよし其きちつ五おとれ
ほどめ太望へ常といふめつらしくも思ひ
いさめのは命うすまやおよふしそきる

かくれたさうするる時宗うきけたくかい
ほのらきいよくいよれとかりとそほさ
のるうまうよ思ひほさかし者まれ
なほしあやりての心な悲しき思ひやらきて
むさんなるは若君がさの屋敷へ入給ひ出
かれ国くふの大名せりをやりほしをして
そかでりるば曽我の兄弟と人なまくに
志もの入れいそ同るうらまでて十郎
のやうな時不な屋敷へ入り太望ら二
人つきて主人をあやまく思ひなしすゝめり

引ゆさてやくこのあんないのたくうへらく
とて未方もりをたせやくこくをとめくり
くり思ひくつ海くれもん欠しくのやうと
れもしれあうくらてしとかよましを爰
よ二の糸のつまくすゆるやくこあり
あうまくや於ん書れも我らうりくのもん
せちうきしつたいぞうの一をど川筋と也
あつれぬいざうとあの序あふくさは比海
くすへ其をの尚しあれしふばらんとみ其
まて立よりをまくのちこ詠ひよ存ていまて

児まはくこ其さへりんう座敷あうきまえさい
うるよ一をひこしつまくとあうしつ為義よ
心へぬ抱うれまつとやへてよかうすもる
我をつて人どしい忘くくよかうをいれく
をもつてうい へとす作くたきとしゆうて
すて絲ある書栽のあよりしせよいまわる
ぐへもりくのをと入へあうをもけ孫ち孫
とやられられしくうせんそのちこさやうで
しもしるやうとまるよりておやうよ也
はくとのもやあうしむしうやう丞はら

ありしおりから入てとゝまりけるに祐經か
ちやくしいぬばうはけてうし今は前後
すけ殿にむかひ扇にてさてたゝきつれ
十郎かちゝこやうの十郎かとらふ曾我の十
郎殿といふこれはすけつ孫か曾我殿にては
立よも須くといふもせぬきもすけありとさし
をまうけすやうこれから入で來ても
ふしのせきやうなさんとしのぞうか君
とでゝうり黄瀬川にてあけるもひせんの
國知行ことやのまたことふれか表と下て

ふりちやくしいぬきうよしやくとうせは
うまり志ける折ふし此伊く狩のたいくな
あるへきこよれの大事み引かえてす
ろむさんはよせ思ふうち狩場小屋ち
てならすけは又志者のそとはりてきられへ
といふ十郎かくてはりんとそおしのけぬ
ふり祐經か志よ多きめんのはゞさせそばは
おりける孫や殺原たを祐つ孫をとうさ死と
つぼふかる莫くもちい在よへりうすへ
のさんくんありとおはてさりけしあくる

かゝる里に盛の務て人のやとゝしてありけり
いかにもちやくくるるあはさもけれ孫
こうをれ色者不孫孫へんくあくちいこう成
まうりやうし一不孫を見まけらもゆりもろ
も一たんいうくむへかりしこと身一やうふ
あり身二よおちあり身二よ思うしおやや
身口よ思うせありされぬよ一そくの中の
おくふあり一こしおもしさ哀よりておら
へてすゑしよ見そたくちりころよのそこれ
ほどさりもゆやしこふそそ思う餘もさうしと

いゝかもんともてくまれらぶりんくは
ひよ思ひたまつゆくなりめんくのちる
おまつ成おくあるかりもかつりようれ
孫ぬさしおかきは山高まはおきらのやよ
やあうり孫ひ言れよなどいはるうのく
おかくちよをもまつとりてあそひ孫ひ
かゝるかまきのくめうとせりふをあらそひ
くうさはくそんくまよかよひしとは思ふ
の御せいもひよりもつまりめさやすの
かあくひよてをやうく達孫ひくしとさつ

こやうしたゝるもりつけてやきうしなふる
あれともきうよたうをあまりさん御經の
らうじともあまるしらねぬさ附られ
やそそれをとけいりせものうるへ
おりし代くもともくしてうりの代とふ
りてめしくしらうしさんてあふのしこまと
てそんし經ぬうしすけつひ一人よありて
けいよはま事きんたんぜをしてやをぬし
ぬはうてすけはひうしたるふありて年
月をへむもさふしやうとりつをあまりて

よくみやたまへすゝとのすがるゝ家でとゝく
いなよおよりすうて御出ていそりこれ
あるきやくしてもしたりたまふみや今日
もしゆこりんさんよいりゆくゆ傳そつた
しりたてまつる御武あまきうひじんの國
さびれこやのまうじうあいそきる人ぞ
何うちらし七年君乃はふしてかりうふ
りしよまやうめうしてありけるをきの三
つ方御經とりつ歳中けるあれさは死をとう
うふりしよまやうよあんとしてもんもう

なさくさりなれぬはつすけ川かよなまり
おしまんとこかつり、なまよかやうよまた人
みたふそかけりくるまをしかせてしくるる
そうし御て梶原と祐経いりくちおれ
といふそのあきハいまそわやともおそふ
てそんきさるおくらくよさまへす入
そしりこうちを中一両箭りて馬の草
かれところをたちなまへとありくてすけ
はなつおそれふてまいるやうみさおそれ
なまりしほうてそつのみちさてあそれ

なまへ姓なふ殿しらててうさうにいへ
またてなまりやすきをたたぬいとしんせん
よりをもれらふむ河にてまつ能をのもを
よそむれしすして御きのせ教んしくの馬
のやうとかるよやどよりいさうまち
馬ともあきらゆくへしのりはけてのり給へ
おましれよ人のいふすに誘いてもけつ孫
りふんとおそれ給りん事きんしやうよ
てそうおみま曽我とのうらとるそくるす
そんしそはいおしく思ひなそんきうてまちうん

これをあはれむすひきやくのあまりこんぜ
りはつまいるごおほしくうりいまうりまし
あくたれのいこんをたやしておやこれ
契るを見してはつはさよりよせきやく
しんあまたもしてますとくふれまゐらせしめは
ぜそのさうりやくめくらしさしそへ十郎よさ
も其ほうつきさせしやうふさいそのさう
りやく術經よきをそのほうへりやく兄けるよ
さすそのさうつきをすちよさすみを
ハかんよりて思ひしるハよく地獄のく

まうそんなりある女ででおりけりうつゝる
爲義とおもひこれしまつまたこれめんことさん
くるよいれはるこうきくるれあまたの君
こともみてうこうハりの國の侍の守所は
ころをおやの敵うて今までりやくこ共あを
まちつもをとくさし孫てものみつへ共よある
をあきれけるけりのり共敵ハおもてよ
いれけて一ころしおけりけるふりもおしま
やと千萬百萬すもりのとを心をおしくて思ふ
やうまでちりしさやうれといれちうゝ

すみかりごとも孫をみれてこきかに心さしふかう
くして一ところまでとふとつくみそと契
しまたうこゝやりのあとますみありいかるを
あるおもしもめ郎むかしくかりめらまとう
えんりきそふそんきれきいこらへは
あせおもひそめてとくまりしをふさけ
ふうくそおほくかさりんのせりかしくふ
らぬ君のかるりさは紙をもちけまかくる
とは夏みをきてをしてすてあのほかけ前
いかまうし給ぬはぜんへうちあまさまし

ぜむさかりふ詩をよこおほくさりいまやう
うまく夜まへとえかれて二人の君あふ
こたゝやうし琺じらぶりうほゞあへさらしふ
ちちをせふるせんおりもんせいかされり
れの枝のはほるするいはづつくへよまう
かあをみとりふ一ぜい琺をし二をんまそ
ちうりなるれ雲間のかけ就とりありて
三ともすてしうりへうりかれそのうちうけ
をけつ孫こうてこしくをなふとうおもれ
筆ふらん蓋ら孫をも帯ういもしてまれし

ればいやくをしてあのまへにも誓紙おくく
とおりしめされまんちをあまやせ思ひたく
まつきたりんの悪からんかうこまあら
をまてこ志ばなうれうしれをしまてつかいを
よくへれまふへまするまこいまよりつらたい
うれよまくかりあるへかくすこれ御ゆの
ほさたまちりていせはゆりんたくしまよ
まうゆそや十方路ハらんいやすしりよ
をせこけともいまただす一まれ給く一ハ
きやくしんのあ一ハすけつるういまれ

のあやまくいくあるる為義御ぜんへうらおも
しろしりふうちやくしせせのくれせい
ねもうもやしそたくくりくはすまなり志さ
いよおよもすしてもらふるあふ義さ川と
ひさて君りをむうめのぬうみのた義の
でもといふ一せいをを上て志りし倫ひなれ
う父よきうくけをかよもしてとやぜんうく
やをんとおりひえたゆくまれのてよ天ふ
けた入ゆく、道ほうひもけさんあうまれ
よ実よおいりうしこふめくあんうしこハ

けまりのもてあそびのよひちまちいてゆりもし
とほうてしし入道どのしさすういお袍
れせしはめなけうひもんしもうりそま
ひかりける莅おはてける人ても見ゑる
まるつるはまて小菊ちをよかを妙之君
ごとをもしめてそはやをもおけくぬふぜ
いおりくてすちまいとりかれさ祐經の
うつ者思ひへしもそ十郎よけりりけ
きは十郎とりあけ三とおしてあふ乾とり
お徐しうしおまけてかくはなあよれる是

よけとのいすかくいくへともわ余夜よやあ
をけるまさくはりうさ海明はきしうりてつ
祢くとのわかてし色いと海こふていそてよ
かりすみおりあんしや第一のおのこかり敵
なふせういふらんと思ひおしもよふちう
くれさくまりいまてすまりとしおいまう
とのもしの父をもまるとじちたまれける
ふをこふ龍濤乃せじこてていまこうれ
う舟うしおそわせんけふさよすけるやし
よるれしらちやくそんまえもけ隐こにおもてを

やうぞうきうかおもちにまゐでやうせら
きぬそれしきいこやうなおかういちあるの
かうじことをよみつけてかきらかちろう
主はり三郎也それしとのうらぜしあり人
をやさそ出てはらんこえとのことの出
そんみなむすんのその君よしふりきた
てまつりいますけつる一人にまするある
出ちきとを君似たんの物におりめされ
ぜんそのむまでやうこそやよしくへハ
すけつ孫にも見られおもるならうそは

らんうれの山ばふらんふくもけつ孫おもとハ
ありく絶ハうらうきものをみてでくしや
なむかれちくうかあみ球もりてちりうまさ
をまけふせい之あまれなるとそやかるまを
うじうなれ守て敵れしうひかすまに世に
在人ハおよびまやうさいちすに仏かとまり
思ふまハとくこうはなりさらしますんの
うれしきはりあしえんなるきみとく
わがひとはあおはらぬおもや行とやらん
悪人と作る肉にうきりつひつとうけまう

たおれつゝまてとけるこひさおしたく
ほとり時なく出来ぬとてさらされはいろ
よろこびいくさすよこ六りも色をち
めぐりあはさりんのせいこれを修行者は
るすりけるまける色言里よう弥ふりて幸
あいをあいりけす人をいてほしきんなある
りけす思ふ事すへきいはれし南無阿弥陀仏
とそするる後のおもれあとすまひしさられや
兄弟の弥んかれとあまれはそおほくしけ
郎うくいふことたちうてすおちち屋敷へ

のゝちはやまいりいろみをおらしもやと
おもはれしうせ大言ふ身葉のおしまして
たくむおしくてかへりかけかみ内こうむ
きらんあまき聟もくうていまつもてもはすへ
くるくへてうてわうしこうふはうかいもはる出
としや今夜ハおちちもおしさんと思ひ侍き
ともいまのもてもつきくられあしも一の
かちはい忠徳門二のたちふてとりこぶ
いとおもひけるめてやてこよりいそうり
五郎あはさまちうるをくかとくおく

てう、もをゝりるところへ十夜寺まゐりてはし
つまま地まゐるらん、め郎こゝてきつぬ
たま人と待まつれしきまおろつのまやおわ
しめすすけるりをさゝそんけるをとし我さ
へをんのや敷へよひ入座せさけそあうの
見よりつきそていつはくるえんこゝあし
くはくはうりふゝまやおよふら何ふれお座
あもれしとおもれーつとはすて一不よ
こうせそんてこらへける心はーおしも
おりたまへめ郎を返てはふちをさるす

ふくは人こともこうし経よまではつをーして心残
けくをはん我よくはつはじちよを来まて
けりふつゝ一方けるとをしくまこりた
くはそうし其座敷のあれあちすうゝの
格帯らんーはくるまやきためあんあいを
よく見おきはぬたうし座敷のみすおぼく
して見まりたる人を不くまこうはけま
あふきはうさてあうハうそへくまけり君
の此座敷よあうへて打くりしハ伽羅の雫
郎何ゆきは一とんま一てういさうきをん

みたけたおうきまちあんのうも山くまお
さきこれんていし山やまこうちまくや
飛あかへてはありいりしゆはまたは大け
山くろとあまされちん大ちんさもいけの
へこなまおさまやまはうんちこ山させい
のまやうそうおりくもんきう孫にも
やまむしまりあう汚やおうちしひきち
てうみたむ孫のんてやくことふらへてさ
ふらみありひからの丞みむきうけやまの
肉きてことうちう志まあゆうこあくきて

とあり山ちしまの家むら売るおはの國よ
はちもんのもけ孫た孫さう海の二郎もろた
ねたくしの三郎多孫りりこて、あの五郎た
孫らちこうの六郎た孫かぬうさいの三郎
常ちきけあふさしま大原小むら庭飛ちあ
らへムふり上野代くみかゆはいうりいあし
ちやうぶくちやうあんいんこうこれおう
こてら梅のすやまうみ大さし大むろかつ
さの丞ではこりうくろ川なんこうて山
まけ大その家たまむらあまの國まちあし

さいはひするところでしなのゝ國よりきた
いろいろこのりくろたをわうさいたゞ村
かゝ丹の六つあしじんのもちは黄屋の穴
をふらへては也下野の國よしおの山のの
ゝやゆう黄ちあぬ彼じちりくしたのやこ
むすみふ河あしゝまのゝの人ゝ屋形
をふしへはぬさりゝの國よしさんまほん
彼にちやあひこやしといえ二郎ふしかと
やのゝしぬちふや乃ごしもきのゝもしまの
せしをうさ地ことうの人をお八國よし

りをまらうしふ黄つのしふおらし大まり
うはら山こしゝえ國ゆはりしあまの志
ど州三川衆國よいは志だちゝしてゝおり
え國よせ大くゝし衆の四郎跡きの太郎忠
の國よいハたつ続き丹あふ兄の國よし
山しくしうしまこふろいむしありさしきと
し屋形をふしへは也たゞ家乃人ゝよしゆ
し黄の十郎河しちゝたうほうあおこおし
む路らんもの太宮かつさのすけふし屋形
をおらてし也もんぎし八う國のいたゞ地

う國にてよみならはす事とせしよりしてそれ以
まりおもしろき和歌のことの葉ハ歌じんの
ちらくさきこゆりきて君乃御為とはしまんせん中に
思ふくめめんよ阿のほとりのくぬけ九百よう
さらきこえりけんくおもひとかくつれやうこけ
なりけるく漢まくれもなきんしくとち
りもひとくこうちらさらさしれおもそやうこん
の数二万めでん三百八十余首んとそし
て上下の歌数のうちまん八千首んの歳
とるひじへて小語をやりじうこ後あしへて

おもりもはれりしみそうたるそのそれら
無いさうけいはのしつらひまたは花鳥の
ぜひもけつ孫う歌にこあり人くもしこう
おもハ言んめう字てさてきやくきてなるい
けくの思ひりつある人あてゆかなハせん乃
國の僧人きゝゆのこゝやのわうごうあいて
らしのぜうしやう札で川の、めけるを
あるへおきてけりのふのもありしよよ
ひ入すけ給りをまひまゐる和歌よりなりつ
はよおもてにあてくらゑんともさし侍

むねんさよふしきさしいのちをとおもたゆ
はるをきとのよ衆うかりまして手みて哉
りゝにこくい武ちのし作はこうむ武ねわ
まめ京ノ乃て色也大かしつめよ入てまを
むかしくはる繁せいきりうきしくを御こ
らへふとのりよあまーは為長みをよりす
南無阿弥陀佛とそ申々は

書物部才 九巻

00
5796

和田酒盛へ行し事
兄弟やとゝ瑶の諍るり
およろへ文が参し事
鬼王だゞ三郎帰しり
吉川魚太郎若り
酒盛しくみてとゝあらましし事
もしつくわりのり
祐経やうし状くへしり
すけつ孫小とらめさり
十番ぶかのり

すゝ　新版曽我事
かゝめつとうゆくゑり

曽我之物語巻第九

来てしりつゝもとゝまりさかなうりねてし
ゑんなけくゆりて二人のへらさばなあい
ときやくまやうつわう猿ありあはしゆう
まんありふし今よもしりめまちなし
はなおん出小袖ら福物おもふ者あう生
あんむさるよおとうらすふけこひををば者ハ
ゑへこきあそふえんあまめ郎や統やのつやの
いかきしらよままけりてへへこさしもつりさ
よひせん者かふどうぶれっ七歳ばふまつた

そうつけり此歌あんとの御下ふをと論も
はとしふ役さえふくこりくこいきき国
みごくするきんはいあつまりじつきへお
もんところふ文人くもりてしくれぬやい
ふむしきこうふけりんす聴とふうさこ
こしどあんするよ人らしえぬふ是翁ハ天
のつこまよき人としてきい在もののあけ
きはちぼこへてうりされハとうごうふい
たすけきやとはざんしをきうこんあまり
よこくるいちきハすけるりふ学こて茶ふら

とへつうをこゆんもとねすふとすられて
けなまもるとそうれくるあくて歌のふ
言んむしまたんどてはうあうりいさや和田
夜の屋歌へゆささいものたれめむでん三
つうるてしそ二人じちつましよりのや
歌へそ紗うるやそらしをり也あれてい
うふとのちうふうそはうまこうそんもき
もりくう芸ていきうもしめてそてそあり
まもらん仕こり男れな手れ京んえんふ門
みもしぐへやあるあ手すうあふれしやぶふ

ころおかしここすめてきんはうやすの
書きのけ給ひこえんすまじくの物語
かあのうましやかん見ぜはりんため二三日
つようゐふきがりいそてよりあまりれお
もしろさよもつくあのくけるをかき死そ
へんへよきしくはその猶也そんしそ気て
んともれくれをわることてありてうその
ここ高橋良こうれけんい後也なんとける
かへらのでしてよりなりか今一度たれ
発んちんとそきそりぬらんとあまれか

思ひなるはさそおかくと飽あきましく見えくは大
身をおもしろく御てもかきんて思ひも
しめてたゞだまもんに行そ若飽りさ数を
来客鶴りふきりまりよりまりすまらもし
めよおすへなりけるをとそきけとり出し
すゝめ座もなり盃二三ごめぐりて後和田
のなまひなるゝあれなまひてさもよく志
なく志そして一ちのちぢよくありへ
しじ詩たくよいありゃて歌しく思ひ
ゐくとてけりの除さけるなり折ふしから。

もろ〳〵太后歌の旅をこおりけるのゆく
りふを守りける行ますそやつて夜営我れ
へるみせハよくせよとおほせらきけるふ
ちんなり川のあやや入りくさといふこと
歌きゝてこそいりりくぜをのとおりける
よけりありしちんしてこんとおもをれ
ハ志もんの物語行とこゝてこふんはみて
よいまんとはのなやそこれ我んくまれ
にまてし光本上ふを志ろしめされきり
ちよ村けかりと歌のれしらすけしたふなれ

とともかれさうかえれふれよ志あひて御せ
をけつまつりはまうこさ物のふらいこさせ川
はるやよりあしをとあそひてはえう君あれ
さいのけ雨よけ入君よし歌りそさきすり
はしあひくしひさて物をせすはかりてり行
ふくをゆへこうもんとかへあひさうちれ
をのあきれりしきそひきゝをのせこよく
でよ志そへしふし一うのまちそとかのは
うこれ本すゝてあまかしそりしとおかう
へす志けかありてらしけりしふれ歌人

とかくしやう之それハけすくと一番う
すしをすゝめく行そこう和田殿をそまし
よあひ給へハよしあさまりふをふとゝた
てゝの蒙らんこれをくゝりつゝぬす
ありしてそらまられちゝく銭をくりおと
をまんさんのものふて行とういふと思ひ
志をしてをむかしをしてもつてのた
まれかるハさつとよくおよく者をむをき
馬よちくのはら物ハどちら日ねちう中よまれ
ばかりく見けるふうさゆくてもてんよせく

くまれうゝちハぬ盗あしてよとあるとぞや
これそのハ十分ふきていかしそとおく
うおるぬ銭毛とこゝて此らんほうぞよら
いをとるとのあし行福のすりと為弐
しやうそくれふちきりてもそのへ盗とよ
すゝれもうちりしへうきてまるとやけ
者ハあさいなふ見盗ハ徒りのたちゝう
おもの者とゞりこゝふてくんくまま也
せし盗せんりをかりゝへゆあけて我ちう
程ともしてしるりん事やすうるて

とおもひけるはじめて守りけるよしにて國にかへり
和田のさかもりはなかなか今ちかくもうしろをはてこ
ゆつよ物語すたれなれ尤こゝかくせを
つらはまへすきりけるいかやうなる
中あけんりんをらしあはれ日まへて志そん
したまふといはおきてつねには前世そ
氣らまゐるこれ人ゝに其座敷よりそ承知
物ぐはぐ侍るかやありてすゝ申けれ
なくうんのちちうこのしつりけれはけ
まて並ことくなりうい打橋大將かてよせめ

とおもふ折から座敷をうかゝひといはれけれはしよ
郎守て實ん太郎このや俊ありて十人をはく
一二よこゆりふせあんと申すきこて勇ま
しすたれもくるいふよおよひけすうしてそれ
わしりまきの野ゆへとて志ていふ里銭は
きらういおもひねところへよりいけて時
に侍ちそあまりあるきとてそうてうんな
百余人の兵者は先つまてくゝの座敷のそ
おしよせたるされとも人はふかりけれは
はけんに一つふうく人いつやうまあるてと

おとは志ふ六つ外人ゆゑ名をかりたり
せうくんしてもまりしハおそかま敷そ
たゝしきつきや孫をふうくある我かなて
くんきんうひをれきとり多うくこんて
ゆためいうれをきけ法はかやうつ事
ありあやしかりき事なり叔兄弟ゑんくて
をふけゆく天をもまぬり見て十郎いれけ
はいさやきのはまよりきやうしやりの思
ひ志まとるしくうをみうこて曽我へま
いりきん志ゆるまへとておのくうきと

かれ給ふ我らぬのやや三ほよりしてめてき
よろこれしまず兵衛ふくて七九せずせう
に月の秋よおてくと丹のかりなひをえそ
ちゝとちれ明け小弓みこ矢をとりそへて
あそびしをいとゞ我しそ黄の余よあそら
へかまきをうつくるりを孫うれなさしを母
悲せく志為ひしるり文ちゝの恵敷と給ハ
一度不まで二人あうりてあくさめとこと
人ゝゆはいまゆりし也すけなり八十三ゆゑ
ゑん俺くしと郎八十一よ筆給よのかり

こくをんせしは十二月八日すくつこて里く
よりのいまやりかん所へ所をへく道志
みむこ王うけとよをもおくり物をおくしま
してちくの父とるしあけくれなくちくを
此おく思ひきんそんへきりうこつにつ
そんせいのりしに難なく此所までもかは
孫を尽そめしすみつきありよそほし
まゐるへかりしに此事よりてこて一
人天下にまこれ菅我へまけくまりしなりお
ここかなりて母のはりんぞうこう悩り志

うりいてしと死たまれれてこそまくまかり
さりて世をさていてしてり志るのこみかり
よりそうかくくくり孫ひしりうろうに契
をこめしすまりこ川ゆ所りのこそうけ
[illegible]持寺大名まてつあり所海やたくの
をこにらくのりともとれのやうにおはくら
そうりあふを事ともくるしくりこいのち
をとし父にあこうけともあつきやうをそしを
は母にたむけたてまつるちやら一世なち
ふりとかせとも是とくこにて末世まで

まのりあまんこあるしちくかと、かさとく
められハ大ぶるまれ踏一つけてそうきた
ぞりる十郎ハよもしのすくめ郎ふかゝり
くるハ大へんそ思ひうより也め郎うきり
ハれ十郎ふつハりくるなむこのつけた
くのますなりさてさいれしをあるしがん
ききやう也あまれしよきらおほくさして鬼王
どう三郎をよれてなんちりそさ曽我へう
へ向て小袖をし上へ偸いらせよむまく
らまそう哉ふらそてま待き志せんのどうけも

けせんふかゝりさる仰ゝるきさよりすひかん
むまうけし球父のて武ふ心けし梅うくし
てきれなちすきてむ秘んよ存じ候おれれ
ぶつう二人の子どもの親へよ仰付けんへめ
川三川よりきくさうのけいけふくみきせたく
らきまひうせしけおんわき親りくくしま
そんしけくつくのまとりこけん芝かりを
しおもく様の親へふ御浣し久よそて二人の文
夜よ倫かゝらせと弓や矢なるんち存よとう
しるそなれあてつゝたゝふ見うへむちや

ゆみけとし二人かれか君にかり方へやゐて
くれむらし黄金よりそたてし二人かより
まとらせよ銭をこそ梅くまは是なりて
おちゆ人と在々ゆきも二人の老武士大名
孤児とそうけ取てすゝるを我ら何かしく理あ
しよ下志もんの事ゆへ君よりきうえ小余
ともてまてさん川の何ともとこうきなし
ゆゑ下郎らいゆのちとおしむものとな
う横よ形人たくく愚らきゆへゆく志貴ゆ
やうまてこうへうちゅさすとをなさし計の

ほとゝをとかくれも十郎ころてあのくう
思ひよけ不孫ふきてひやうやうやうる
とのことをとをまおくまておんもをせても
おまきんりさそむ孫んおまうき此世の中何
ますをおをふやうおつもいうくりかも
りありらんさくんを三せつたんあり来世
かく式おんきをさけすまへしへて式てこそ
しと球きくく當我へとゝけた絶えし
究後のことをよ咸ゆりなんなりはよ事あ
其四地学へふむ物思ふ子とを待たまへの

母のこゝろ子どもをやらんとふけき給ひしに
忘さりて以よしうくとやて今身をと
くいそきやと申りなれらなて三衣取て頭
ふましきこしめ給君とをもち出よりそ
きうしころ頭あけ来てハ久さしけもこさう
さんふく見あつ其日をあふ其の風をまね
其なんいう孫せ行出さむさ衣も衣服うき
孫てこるとをあしてめさうせ其を名も立
そたゝ月ごとを引し是明著ハ忍阿弥みゝ
三歌たくまゝり御世みをいそてさせ給ひし

雑やの物ふつおとるへ其たのを数もいと
おしくも思ひ来今けりうそゝのさて
く付そひさうせよるおるしふふさけちく
おちよき取たをひまかりかてりて人とか
ぜん孫ん万年ぞだまちは為義うたくは
とをよめしくせられ以へとさいさけふは
子乃親のあとおしたふざらくよ教もおし
まとをさんうりきやうたひの人々もとろ
よりくそでくなばりつ小をしそうへまく
其物ととも經たうくきくいのうらみまん

ありくん生之のきいもうしこころれことを
心よ思ひうふをもけてこうしくせせ申云
止所いよそれもけましきあきもおこり
思おし起事つくなまはな今いそさ出
次してはつらりまこうけ後は悪わつい
なれりうしこまけてやりなる事有しても
母のきゝなれをいてちくもよむちをあて
しよを表は何そひやせいきこのいまよ
いさなまて為しをもなれしてまつるさく
らしを去るしまやおちよとの作申孫小

ほうめしくはけんすてられさつせて様
行はりくまて為しのふうへをまる事き
う起力乃をそうこそさあしくとうはい
明さろわさし思まとふしたれハけしさ
たりれようりうき道て貧れしきよ所け
てゝを知やあけ旧や善むすてよ明方ちく
なる物理いをけやなんちちもやくを行と
うき孫くしせめられも二人ハ老ともいへ
うるかほとも申為秀余いけくくもおら
ほいのすきうをくれされたけ道出して思う

もくぬ勢のぬ進表もられてけるとききらん
してこ人の袍をひきちうへすてゝ力をぬ
りんを附宗しやくとを都の武士二人の方
よりおしいりて殺せしとおいれぬるハ孫よ
あんちうの仏さしせけ也まかりともりく
幸我らもとよ色んをく球なくてせいなる
をきうそらうせきをいくすおちうもせん
らん大かうさけを御絶せよみられやこう
惣書うをへし我らは令とをけるとりかと
としこさやうへ歌ひをつきすてあのく心得

まさのしくへゝうすけよとなせいするよとよ
りさすとあしらうのましを許されあゆぬる君
のおろせありきこひの歌人を語て當我へ
してこうかてりくれたうれのかの内さこ
そなかるしうゝめと思ひやられてあるし
ありきられしやまちあ太子の十九にならされ
いのちつけりしとおこしうんとくせんよ
へなまいしかまやつくも孫せきんていこ
まを語りとうくうへかてりしおもひとまさ
らまあをいまて進くりくゝのつくへむかし

貧こまのくらをりふる里へとはいさけ
ごとおろ?あこみそごろ侮りなほめ月夜
思雲ももてぬゆふくれよいへくおそし
ともしらぬどもそなへむかりとかくれりみ
てあらしせともみあゆるくるころかへち
そむきんもるきてもこ無人のおもらしこ
なくむらへうへしぬ今ぞ思ひおくるり
もうしいさや宛後思ひそかうもんもする
てしとそすらう其秋れんのおもしにむろき
るひられも貴ふうくうれしるゝ小村千鳥

のひまれのそてをもしとかてころとこけ一
すんまさらのつゐうしけをけよくけく
ろゝやまれしやくゝこうれくり乃ちからを
まらふるおるしくめ前りういまやゝみ
あまぞの小袖思ひきふのくうらこたるをう
りしのやゞみや志あるるらんかしさゆきれ
ひさあれにてふたを三二不くみいかれゝるふ
こんちのもかまれくる里わかる庭のつまよせ
さらせそて袖もむすひてゝこみうけひやう
をとし思ひかしけ代川よくうけあり貴の

はうの刀をはし定し一ちう代々どをこふり
こゝにおゐけまとかすゝめはをうて娘
きうつ山のしこをいえつ面したのもしと
をあまりあり十郎定くまいかりあけてこ
あさへおさはいく也附むゐあうぬうれせせ
そんさんぜんといふめうこきくるてさはあ
ひせけふれ隙もはるましそれもこれてう
きいきうつ兄気思たあちふて殺よすける
をあよと兄たくまれらんも今秒うて因式
それし兄かうれをけくしくごまとりそり

すうとよおもてをどえんをこれをう記でと
おりひそれもまくまいけしあけけくしく
兄滅くるそりたりれ思也思内おしものう
まそあまれしありて今冬きさきまて人御いさ
ゆへしてゐ郎さ死よすゝみそはをす十郎祉
どひうへてをとあゐともあまゝあるゐさそ
大分思ふり彼りしかへゆへ作三作くりふ
てりしかくるふ後日のはるとまくもりを
といえそれもはうそやおよれ稼つとてあ
忘さやよまゝう忘るゝ麦よさんまとほん彼

こやこゝをす言んもらしあまてそおくり
まゐらの女人うらしこうすりく里銭あまゐる
而よれうせ我と銭ゆひうきなけしをうこ
めと銭る為我様ちうなりりくれいくせん
や適すら娘をのそなふ老そや見もとよ我
かけてと銭るしらくよそてゝ事かま教
出立うりあやしや覚をすましとそとうめ
まゐるくましりしぬ老也これをやうきんの
うなち人こゝあうやうむへくれいや訊ふく
こ御 ま殊久けん後れうよれうあふ為う

為すとのはさてありと銭をましさしとそ
以志ゐるす哀しちもらひてはとう発を
御 我物なり見しはちや孫よそあひこや
とつ為の御はうひ也とおし孫くといれは
まはさうも覚をせと存るしくり実をとす
我ぬまこいまたいくのつれこいく志見せ
きけいあをうとおは為我事むけうし我
おき寄ふこあしちやふゆさゐるまちもの
すけう屋敷の前をそとおりくはちてふを
きとをさ倚くたてくまちやうそくのけい

あの物数十人あまをかく重銭くさしてそう
なあるなふ物ありしまこれもなく秋かけて
と銭る絶やる悩しさとそとうめくかめう
しらよまてはじちうて思ひのありくるし
うくをとてじちよきさとをおしひつくお
さへてと銭るハやうあり我らうあらめ人
なるましは肉しこと成ならしきやう
しとあの意そとうめくる我らもきやう
しもあさとのありとおし務くとりなし
せはしうくへとも大やうせややまうとをば

とくまで言んして非とをあしくそおしゑ
てたる八郎ハ我と銭へこそらきて大我よい
うのていれなるもくうしかりつ務もと銭る
やくるしさ老れわるまれ残んとこれしう
さは不へかうとらうはいるをのよとと然ん
と思りんやけちろもくさとてめよてまさ
けましき物おもひれなれし去番の老花色
とゆ秋妻君いやうしきあま君やうそやう
やうしらうせれきて然んなあやけとくめ
よとおひけさりめつも仏恋へうり屋とく

くさうかりてみよといふつまのよみ太刀銘
ふかしと詩けふりすゝめもさはみつこれ
くゝと立堀是若さてよくゝしたりつゝぬ老よ
すんちやうちやん被より和離原へ大すの御
をのくそのは銘よ気はう天ふしよはる人
をはきてゆ人さてろき者ほてさけふさい
えしさうきんすはうて被らしりしよ御めん
ゆくへやしら給てそいれうりくる侍めんせ
いふよかつふのりゆかさふしちとかふちん
之其こゝるゝさちてやすしちやうちんとの

へふうみすゐてそのむかしまく代なまへとそ
いかりなほす郎ばてかうるせすしせうふ
なれはりふかすちんしてこんと与兵衛
ま式をの楼いかりなほその中へおうく
とふちましりこうてんふうらすれくとし
見まり給いすやちやうなん限なはしちふ
孫なん衣いや言ん太とて兄弟の馬屋某者
也いはそやまけ去との和山へよ路人の時
なんこんま入はしをいかにも死はれはやと
いふ其あうまとこらしまらすき共あゆを

あて十らうすけ陣のくくとまもりゐけり
すけなりこゝろしとおもへとも代ゐんをこう
ゆへは まふし給をすさう しゞめらい ゐり
なり時むねとよくくまかりて殺まゐ思れ
出しけることせよりせ貴とのく御なりか
よ者あひ参るやうにおかや拍るみやや十郎こ
とこうちなれしもおもひなかしはそりーこ
のちうら事ら殺れさうなりみしなさる
八人そりてすれ殺つふなゝれなかしけ
かその人まて御しくなりてとの子人を

ものゝ殺くらもよわりまひてをしもちまゐりね
うそるなりゐおはくうつれ旗のちりん
ふておしくなる庭のたちなひあるよりさ
とおしなまへ也りつあるよりかおりき一
をとけあしもりつちゐる御校なりともおてゐ
二王液ひを志てまふすさぬう一番へう
とりれなりせ十郎はておるしのかこ也けり
あかりゝ後ふきりがりんしてすそめに
けりてみをと殺りなり時むねをわりよかてあ
やゆち志へりらんとおり殺くやへくとくそ

弐と瑚ひさておし出す兄才八人ぞなき
に瑠璃のうしたるちらしぞ十郎祐成
かるなるやうの雨ふるをいうふさもうを
こふる我がこゝろんのけうちしもろへす
くしつちてもとし守綱りみすやまさを見く
ないさむ葉ぶうき大事の許よあし
もしとこう見てはく才ふりしもよくちう
ちんしめ是是やふるふ思ひせけはらく
てうりいさとおりをやめなはも今よまで
旗さりしとそすかく旅かるるは思ひせけよ

てくれいありきやめなるあひ道記を弱
ばよ世のしやくそん法もんふかくらう
とらはなまひ志まもしまくわうきくらう
けちもんかだめまさうてやらとへうりかるあ
そんまやとすなあんせけ弟一のかけてし
ふく御しくなり御どもうのくまう思まて
うのふ之あうじよ血とそのくくまられ
ころなまだやり絵なけりなるくまうい
まりとおしてい又く撫きそんて屋もまけ
おりかけせんまきけるとはげよそ追とた

みをれら給ひける所へ武くまハさよひめ出家あ
むらけハ墨色みをてしとそうらもんりを
あそらしおんてさをかくあくまうれけ
此時かるあそんしやハ御中みて御あそた
何事いうふそんしやや悦く思ひとうふそん
しや少将殿てもなんくひくしやしてす
これよりちりしけ君のせけありれ時君よめり
姫君しう陸まきをんきん武のみこりあを
かも私子をもてさりしまかねきハ秀逸い
さうよあかりしちりくてうしゃまくしまん

そくのあり世ハかうろ所りり姫君武そし
まくちくりりあれみかうすけいさと我り
もうしかくまらしくくしやを若所へくくここさ
そこちうまそ忘さりしうる孫よものさて
ちり王武まへ姫かよ居しんかよきんちゃや
う若とんハむよやくむ三かとかきてちう
いくさあよあきて喜をちく多とちく月ど
うそびやすこうあり行ゑのうまてちやう
らとよちやしとをたてん万月一かよ
かしてあしはんふちやうのくもんあり

ゐくうしめし なまゐ名ほとくわうる銭し
じしやまへてこゝろうちともいくさはら
まおりてふきゝいまひとくはなきまやい
よくいまりとあうくしそんしやのり
まなけはりすこしひらくまけうまんしん
ゐれけらしとあさゐしくきうおりくれ
その時ふるちまやくいしやまんうれちん
しんまやうくうかやうまんいまさましや
などをきやうまくによられとのる手う
かみへうしすとこうとうしてゆくいろま

娘かゆきちもよこのゐんいむちやうきせ
くもんくさのてふるきやくつうる銭うけ
ゐちそて手ちわつなきういさしける其心ふ
もつりてふうのゐくとおうりのそらしとの
なまれりるとこつよくてし一里銭けて
くうやうらんもいまたうけくさふぜうし
大まをあいりうそんしやひきくしきうせん
よきゆりゐつけまやうんとしまつく
思ひうさしとわも銭孫思くうやうまよみ
てゆうわくわうをしとはん思きやしけれ

よきほうへすくはらくるしとこうさ、
めされてこう侍へらてしそちろうといめ
くせものゝ座敷の前いろを為まき我らと見
まつり奉る者ありきしにを候はるまうちよ
をたのうす候ひんにて小次郎まれてじんに小
候の勢よとてと綴るあんのちうく川しう
あ者兵数十人あつくろくへそてあさへ孫
小ざ八しくて入りぜんにてちく一そ首
弐二ちうとちん言し多ちけ落人也花衣んよ
てもつぬやうかくとおりかるきれしと許

あるよのけるまうけよやさうむけ者をおすり
くりをもちやよ花をとけるやきてあしもや
よもうとおりかれへてまうあらうすしそて見
へかるすてよすけつてはうや我ちうくあり
てもうそとい魚もしらうあけむてもそて小
や敷へいらんと志かはと花十うあくろう
そてをれうへてきれしくてさよ打あれあ
もせ州ぶ者陣まを是まし今こうきいもの
こさとあま近ちう侍ちうのよ孫ん十州せよと
いれれくちるてしとさきや一たれ雨

よもひてをあるをせんとやうさうの佛
たちもやれあふさうしたる金よもそん
もさりたまりんあんらくぜうとよもろく
たまへと武将しでやうこさ内へそいり
かくかさしとをわうこうかれうかやうよ
さうこれすけはよあるハさる所よ座敷を
うへいりくねをたくむおしくうしら宰相
うちあしてん一人をふすりうりさもいう
よとえもりふりあけでまはやうしきを琢
るしやうこ将監とよれ者あり人ねおふ

くみしあれともりりふつうきさけよさい
みしうりくれしもだそとせうむかさをふ
きうんくハちうらくや敵をふらいてく
てんよあふ武将よみしもるしゑるるそむ
せりあり敵よまてふこさを鶏よ我らふ
さをこさしおよれハけりとをとおもそれさよ
あまましわるふをはおしくれうやうふかのる
てきさるもつも青我へかくとよしきま
さるハ物ゆへふせくれよれ鶏うぜうきん
あうう るしくれさうひしてやうせまんとそ

かゝりけるされともは屋敷の奉公まいり
またちゝ娘乃七歳なりけり狩野法けんかの
てうあくてくさしはちうしめ天狗ありの
まん也三つていまやうよこよれとあ御
けるよとこ歎よいふおかしけりいつき図
伊つけるうのつらうそくのやいらうまてま
強打とくめかしうやうせん也思ひ大坊の
けむもく二三すんすりしあしもやふあ御
見しりけるうかとうんて思ふやう一ちや
う曽我の兵衛のいろ〳〵兄弟さとくましそ

よるひるはけめくり はるさやうの人ふて
をやせまやうしのすおとゝを思ひてみせも
あんふさたうりけす兄弟を敵れうへかるや
うこをまつてあきれてこうをぬかりけれ
いくさもしく思ひてさんへをんのせいうか
かる屋敷のつまと我ひそうまおしひさ
何時物をといいりすしてあふこ法いくして
また孫きすりわつは出よしきいとやくほんあ
うこれらとまま孫きけるをやうこうあまと
思ひされまいまれよひさそてめひらあん

にほんとありながらそやちんたなと
さらやれなれしてほんたことよありて敵
りんのこやうしもせんらし彼小山屋伝く
なさつ小田まるへの山なこあるそといふ
もそくせうちのれなきそせともせてぬ敵
のあと風なたよかものみふとり心あるよ
とたしやまてやうしれしらへそ入小なほ
こさやうたれとをみ立そひてうつまけふり
あけよく見まはそし困うおへかたのもし
す敵せここふそかしふりなほ二人のあと

め敵見あるにあくりしを見まは人をもしさ
へもんのせうちてさしみせうしやうと旅
忠らりおおふこうあれなうてみすこし了
のけて越後とこうかしふりなれすち敵球
見れけておくく小いれなる芳ま春もおり
こうふれをふり落くすけはのをもすなり
小夜の参てみちとそいれふりなる財宝
ておつうあるはちてもかれし我くやうせう
よはま非佛よいのりしすなこすごうあれ
とうたんけあかりのおちまうみうてしくそく

あはれ武ばてしすけの孫こそ千太刀を
百太刀をふりまはしきりけれともやかたり
弥くちんとてすそろ武てあら立うけ
きくはほしめくらさすけつ孫をむこやう
のさけにこいぬきはてきのいるともとる
すぐて於後をとりてそのしうりゑば二人
の君様をもきぬにおしまれうてぞいりを
しおろしその主教ふろちとえてきくま
けそはかけしをさ十郎殿にまいり給しも
ん郎ちあともふそのくりゑば二人の君をと

むしめにまさりかりけれどもあまりのお
そろしさにおとをせすきやうたけの人を
たもけつ孫ぞぶうにをさてそのくめとめ
をえありせてじちうふの武てよろぼれけ
はそあらしける三千年にゐき花されをある
せいゆうちりうのをとくうこえけよを
をめうしやうとんけをも殺ろのゐくたお
ばこいふあきそれにたこのば敵ありて
おりえてきやしくとそよろきれゐるさ
し二人の太刀を九郎のせうにあてていやき

ひさしくありて七八歳ばかりにてよくもの
やしなひてござれども武家門のおそれたく一
太刀かたなおそれけるくし武者あつまりしかり
十郎これをみてまでも忘れせりける物
をきるを死人をきるにおるしおそこさんを
のぼりてかのつきけさきれを法華経うかしく
よけしあていりよきさんとのけるのかえん
きんに入ける常磐入老性まりかりきれ
ら相のてさこそまちあかしなふとてきちと
げくかし答にそなさにやさんをしなとお

こされて法華経をよみまりより心へかりあるに
もと光まずいる石をさりもいれをりてすなきき
き海に松をとしてかる太刀をとらんと
するところを立け気のふる海けられ
珠こしあたてもせりつまるにゆんてのか
あふをめてのほきのまをさいりき殺まても
我稀とちそれたきりけるに十郎をたかり
やおかとのつまふてきしのつきもそて珠さし
ありてうていさ殺きりと我しかもちま
らそしち入かるちてりあるもかふかれし

ちうくんこそきり付ぬうゑするゐさあた
ばふあたる石にくくまするし我よりせう
しもおゝれきそそうしまつおゝんちうへ
やがてもおゝ申しよや五郎とくしろうのゆく
くく三太刀にくせうこうへりくれむさん
なりしありけまなりあくふかい ぎるおう
こうふれ申ゑおひまそせんることのもうの
秋ちうのたしかまかりあやまちしなまゝふ
人たれ出たまふ ぶ人くさとしで出りくり
後日ふあうそつなとおいゐ。それしきも刀瑕

あふりをとうをしてあつもれかしてそよけ
へりくる十郎おひうけてひるのさらくしよ
しよき石ぬ打あいにくまくしてよくるるをあるゝ
すましとて左のてこばり右のち出下うけ
て二けよこりて打のけへりぬ郎もしぎ
よをはうのたうをこ二よこりておしのけ
へり四十あまりのかくくなりうちうしれの
後よ四けかちりてそうせふくはよりとへ
もりはる抱うれふさくるふけすさくふ後
さいなるもくさいゐて四けよなるへしうむ

きんさよやうおもむきやういうちそとかく
一とうとりあへすよまくりたるは
むまハかな志しこいねちかくけりのさき國よ
四方のおもこよりよおりたり
よくくはうまうりはうれ一こゑいしそ
をきられ福あうまうはりんもまきぬりかまゝ
いそハ時宗志うあもめとくなん母つえそん
の秩父じけぬ今ゐもらうなせとおしとた
うつたよりれちあしじやとまあいて出け
はうすらいなりたる於法經ふとめとけう

けりくるうとくめねりしこさ毬打てのほど
丈夫けくんの時とくめれちはあ敵じちた
はまい殺すさうもどらてめそはしはりんど
てぶ郎へら晦うてふ秩めきとをそておさく
こゑんのてよもなまりては刀かうしのよ
もしふそまつるとらすとろんし殺つふとそて
けうをこかしもと鉄進くとさすなとこよ
あまりふ声けくさしけれはくち宅へると
一けふありまくりか掴しう後ふ人れすくる
あぶれふあつこうもゝ進志その孫六ふま

はくらをゆりの僧とそすゝるよしせう
よりてこのたゝえん也為相にきせい中御
前にて法經をえてむ時のつゝるす一こう
のこゝろ我志ふるいまとくめをゆし奉る
うくし那是也こしそんれはめくことそうかん
志うるさすうきも多連ぬ一門御中あるれし
こや思ひりし我くまもあさあくうしさい
ひるうし一緒し恋をしいよよ敵をんてく
とは自たゝる為りさとこさんけのちうく
よより六ちんへさいしやしとせすめ门志

いんくまのつもんあさうし今川くしてくて
一縁んれな太氏ちんあややまりたまなくて一
りうちのそてしとふし縁く阿弥陀佛こそのう
うしてや我をあそいてくりくれすうかて
いしやうなくちてめ郎ふま代ゑていれけ
何をよれふのつそてんくふ志ちきんとけと
もしてえおんあやうるてのうさりくると
ぶうなん人をおくふをきけちうからん我
なのふを見よいけの國の侍人侍なれこう
すけちりく まさ當我のす郎すけなりあるし

くめ言ござる孫とて兄弟のとのことを君の仰
敵まへ□て□おやれ敵一らのくごう左様
門のせしもけつ孫を打兄ますりいける我と
思ひしんくても打とてめかくこやうぜよと
い通たりるのかりくるふ所かまへ何を怨
どもせすきし少しも気色とさふおもりとも
ふ我教をありてよもりかれしを東西南
わよおどもせちをこしのやこみしかひ
てよ走りゆれるまさぬ出老をもし一つ書
りやうよきてはけてもんさはあうさも

しハもろ殘ものめとしてもひとのつとの怨
いてんせする示を寺けるして守雄ちさ之武
そ一ちやう賞我し人てうほんい役とくる
とおほてまりいりよ精義思ふらんかき
のみすくさせらきつぬたよつうき老ら
さはきて志そんむるりありめてまる
まりゆくと在られて出老あらかりられ
兄弟の人ても志りしやすらん敵とまで怨
ふかりられもすもりれくるらいさや附宗
ひとまけおらていよ一家をてまゆあれたく

まつりおもふ事ども語りなんと事ハ又
むかしよりきりつゝ絶なむとすく山の中
ふミを色いろしるのけうようなどをぞんぞ
まいれりすむかしよりしん佛申まつれ
たるまでこそそれしもつつこそあまりの
ふくさまをこそせすやくありて代修つう
てうしくまつるてどもおもふすゆく弓
矢兵物のあつかひめはむりそめふミを一あし
をよくるとりつ事くちおし共よふミく
ゆりのちのおしき物あう入道殿をしきん

あんよ色いろしいりんなまうしやう
ようあるをみしまする事ありけりを
思ひのこしておちゆく貴母ふたれめむの
りとうとたえまいる為ためうさせは
けうようわうおんあうをくつさうめとう
をあらはしつつさんいてまし子どもの中さ方
ちりぬ事あらしもそせめてこれさんこ
そそさいふミをあてこありき八我らうへくささ
をしてうぶふ嫁しふまし八ふけうくき
てうしこちくよりすいめいてさけまあまれ

さん志よあくのきうつれをもふいくさとの
いのちおしまく當猿の趣ともうまくらり
きりこ川志空をとはさせらもんあすま
らくりしそよ一らんらくれ志うりといふ
ことなるおもしろそとのも夜雨をちらん
いきうひう志夜菌るきりのちくまのさん
わ居琉球のあり海まてを君の御いさのお
よりぬ所あるへしすてんまうくりちよ
りうさらん雜居一てん四うれの内よりまの
くう於の御くん足つかよさき御るし

たくらまくりのとりけり琉球くむくうゆのこ
らし志てん志ちのおもせともおほくすり宗
まおされてなむりふて記あうもだちのめく
きの出らぶん雜をいのちうせうりさりもき
とすなれいす言さててとのう仏へんと
てしをいれあれすなりうなをりはるよも
志りぬらん一あしをひさんあし二とこてく
為なよむる獻球まくりけくりさるわとま
よごちのこれおそろしけふとたとをたくさ
てし二人の表をとうけ志よちらくまらうせ

こふんでもけつ孫をこらしへうりおかこう
なれもうなきなるとこゝくまこうちこ
りりそれよわいうかくほと矢先むまよ
くろよとれしつきあはけるらくよくそく
一まやうふ二三人とりつきてひこあふ物
をありけふさ馬よのりふうしら声ある
物をありそれしもまうしとのく出ほ紙
とはゞ六ちゐちてこうふをおく頭手屋
やありてむしや一人いでさてすゝるハ行
出ふ逆ハまう君の内赤まそへりくゆらうせ

黄をもいさすそあれ也とそいれゝ給す
打むかひていでんおのりぬまはけくちめ
きゝけ候てあくいふをのくいうふる物そ
されハむさしの国のちうふんたいろくの
色いむまのもけとふつはすけり守てくん
ゆき入をのおるしくでずあうらんたのは
けを御へを紙らふあれてうやうのま
をくまふんありさまあう青額の物をよて
黄打て出すぞとくめよといれてあひけ
へりむまのもけさくむみはまちうれすれ

てみけるほうおしけけれともけきよりれう
孫つけてしちこ後達太刀をけへまそはさ
きりそく二番よきまらうあ籐むこよこ山
くうあはこやの三郎とおのりておしよせ
くりわうしちむかれいれなほさまぁんさ
思ひきみの恩たよた豆ゆきしく流を迷し
くまのうけまあそふうやうれちやし数ま
てもおのきうこともよこうまし見れこふん
たそあひてかを物そくなれども人をおら
ふる事まなし手どもわうてあさの雅見よ

どてあけまそさしりあるとをきりすけこ
さふさしうさしいあつ後のおとくおとん
てかくばかりまもしとや思ひ立すもしれ
頼むところ候すとをかりて打なほさぬ
言つ太刀けなけしゆんてのこうひうひなほ
しちおさんしてひさきりそく三妻まある
あの国の住人おぬへの孫三郎十郎よもし
並むうれてひらりのてのあつりひ二引打
あつきれてかけるうの御志よの御妻は内
まきしり入献を二人もりてもあくんとさ

ぐんばいうちはそとかくれもちてひやう
よぎうりしくを見うりまて日りうやう
のはまそあつまりたる所もんにとびた
りきの国府ちうふんりうの小次郎貴らま
くれ出すりそくめもんよはちよ兄く弟や
めともあのりおしよせ十郎まおかだへらま
あひんきらせひき出すりそく六もんよい
せれ西の侍人うどうや太郎せめ来てめ郎
う太刀うけりはし二のうてこうりかとはき
てひきこ出そくせもんよするのくふい

侍人助太刀のいうおしよせするふみう
をうけられてひきしりぞく八番よ志か野
其西のちうふんじんの小太郎狩野ちうと
ふのりてゆうまでありあれ志りしうてう
ひらがうひはをまうきていぬかよ助す九
書よいのの西の侍人ころの小弥郎おしよ
ぜ十郎よりちあひなるういうし志んくれ
おふときれて出せきい出てうせよりりけ
きんよひうの國のちう人うすきつ八郎
おしよ弥八郎まへりあれまれりうまら

きてしせよりはつ秀よあまの國のちう
人あんさいの孫七郎かのりて敵をんゆく
よあるそやとしうちくけ十郎しらむらひ
てくてやさしくおもてふうてうち死よし
うるを見けらんくふんそありもひとをけ
てりく見せをくんしきとをとをけてかく
見せをひくぶとられてうちあれくるや七
をさおとのふりけうまやねよふとりれも
あへすらんてかうる十郎あしをかそちう
へそもめよりけてちやうせうけりくさき

よきあうるひをのうけまへ秀けきれ球打こ
まきひさしりそくふとはでてしなかうしを
その秋よきみてくりころのちきも八月廿八日
の秋ふりくれはくてさはくしかうる夜を
ちやちくのうとくありてさをられくよち
そやとそもしてのくる雨をこきしうきに
なちうくきていける秋ちやうしとくりても
けよひあこちりむうふそのとくむると
きるきうきてひさきりそく始をこちらんよ
けとりてミつうく打しるるころをあり二

人気揃ともよまりけるハむさしさかしく
れしや揃ともいふなるされもちがふやうに色
ごもちうくされと思ふ太刀とこそあれつねの
うくをもを見でようし敵ハ十人なる二十人
あるを後日にゆにすまれらきやう大石
引そひをいさせそのありふくふ乃り阿
りんむけるる物どももりふとちハもりくれし
ハ御むまやりと称りくなげといふおゐう
らうさまれをはげておけあすこれとなく
屋敷しくよりまいれおくるとりくふんの

見のよれをつけてありけるを二せん言ん
れ屋敷よりされまいくさしなれをきんせ
う忠のつきうしきくちうふをまさりつきう
二人ほともさる出て敵にありんせもして仮
もるありき国こみうのとりまあふうきて
しりくば不まむけしの國乃任人しんされ
のあらう四郎とおのりけてすこ出てす
くるてこさちらん十人をあまそれしうし一人
まやおゆゐきいそあへやたれめんせんと
そいれくおすうじちもひてやさおきこ

おもむきりかたれ志やうようりりてける志
の雅をもりをあまてをやよるとはをんせん
のむらをもあるおやくくるとりれてとんて
りかけむくものまちを志すす御めん
あきとしにけりるをすう志けくおひう
けふりあまりよふけ丙ちくしそこ志もう
武士と在ふりてたうはひよまくまけふるは
は翼よられ代國のちらふんよいちかいと
うよめりたらのこうすくを出てかくるを
りつもるる志まことのあまし君のは赤心そか

うるらう世武士といくさすそなれきこかん
といふよ言すゝるなきてあたなしぞおもて
これとれやりけるよ蕭我淵くましやもうう
をやの敵じらていけるとくたれりふへ
きそおくしてあらうつかまなるうおやの
こくこ花なちんれくち瑠武らりすさてう梅
よかい恭き人そきもんとりふ色かうれの
國乃僧人いちのもとくれつのそうのたゆ
ふう志あんつりたりの流頂けくころしとそ
こそとうあつてきとくてこそとのかぬすひと

よミけりつゝ山けるりんごうにおどりい
てらやすまくゝふ手本くみものひやう
しもくちりさゐとを矢よりそおもひとらし
くき山里にけすべ人れんそありさるを秋村
あまりしとのもるやうなまりかりとをも
ちさきすひふまへあひまんれいくさせん
ありておいそうまる絶れいまござむ孫にあれ
てらうへおしまんよそをとりつありて村
太刀ふみちをうさられてひさまりなくき
庭をもしめとて兄才二人うてふりけてぬ

十余人を害られなげてあふおもて三百八十
よ人ありみちくゝ出たれまれも一家よさ
へてらとのやミよそありふかる人なおく
ありなれとを出人てのけしさ残りくさく
やうしこよもりかちてよもるおもうちあう
てなきやしおりくうていけれ国の住人
新田のな郎よすいまちもとひいりり嘗
紙の十郎すなありうむうひなそ新田入道郎
うてけふよきてもおかんとすけありなへく
きききしけいありそのままうしもたかりれま

しゝ給ひつゝおはすによりかよりけす今ぞい
まうしきこえやしなる敵にあたをむくいけれ
あまさ人のうらみのてにかゝらんをらん
や心ならずもりけるに御返事にあふこそ
を志るれ一つゝ志方にあるしくはうて
はからてにみけて後日ふくわいしやうに
おこなはれ給ひ候人のほどこそと思ひ
給ひせいれてしちあれ名は十郎が太刀を
をこしすんのひられし一の太刀を新田か
されちふあやりはきのからにこひんとさ

らせくりさしれしをたくはふくりつきやすのほ
□き者なにもおあてさかしすたおんしやう
ふえのくさまりけるをいけ國れ住人にけた
男四郎うてはふしやう給ん廿七さい國を
いてしよまりのうちとも君にうてまつり
あをもせうかたれにとくめのまう孫をも富士
のすそ野ふさうしすけりともしるて見す
まりきそこかんを引あしいつまるにたえ
うれにきすことけけりあれうらそうのせ
てうれくるに新田荒四郎をあゝして也

十郎殿これのはかまむしやおくのハ敵ハ打
あれてうれふさすりちうるをよむるなまち
よきつたふあせよちよそのしうちけくま
ちりたれも太刀をひろめくくるところ
ますうらうつせ李よきを進よ多りへて
はなかつのけて打福よひさりのひさとれ
られていぬいよありてきこしのこころ銭め
取きつひよおよもんとする石ふなちより
ぶおし右のひちのしけきをけしてと銭を
うしはふいま殿うしと思ひや敵とさして

かつりかくる銭十郎のつるかうしうけあるる出
ともそむさんとある新田殿ゝ太刀の傍ごと
出向くはくるひ取銭てりこのかんさんよ入
よ出う書おハてよなりくらんあそんねそ
りしうへぜやとのうてはふとともまられ
てけふもとや思ひかんをあかりつくうかく多り
ちのあれさうりてそぬぜあるすけありの先
後然らてむきあふれあるぬ郎殿りけくよ
おるそやもけありすそふ新田うてよかく
りむあしくちのそむそどむ殿いまへてあれ

ざる性守忠すいりよをもして君の御前によ氣い
よりせうり色のまげきを一くまけひさ
て死りくまっくの山小そて主代ゆゑさそおひ
は義理くおむあミたすりといふをもてす
生年廿二さいにして言りこう年よ月
二十八日の秋重汁ふするの國ふしつす
その豪とさくよ多り弓矢武男のおられ
いまよもしのぬ事あききをかやれあ
ふいのちをうづくしうしふたうけいの
ちまさよすつまどもあ悌も思やすをん罡

重料よあくるあまれしといふをおつつ父よ
郎等あようえ後のもてもどこてもつひ
あゆりとをいまは一めうんと思ひよたくほふ
飛月もやおわされえ太刀ふりまもし大
せいの中をふりまけくもしりよ包兄つむ
うひよまろひうありうめしや附宗をく
雑よあつけ孝さいのくまていさよとそ
もてくハおよするそやふうへいの為哉
う武男小をなのすは主ておりきのせやとおけ
くらこさうご大いむてひて小りりけ

ゝやおもしろやたのしといゝならふたかれ
若ちうけさし梅かえはしもこえしつまるゝく
汝そまつらんとおしものまでおもしれや
義よまうこうり若らしきとふのりてむしや
一人いてゝ又郎ないけくへゆきさしるぞや
あまれゝ御ゝを見をてゝおちりるぞや
見もんありしそうつ孫かるやうけもゝも
とぶてきさあり太刀ぬぶおしやなこう
しなあまのう、御ゝを見をていのくへ
お川ゐ寺すみかり八新田ゝてようかりぬ時

むなきまて体つてふみけてくれと申まと
しぬぬ力そやいふれからき八こうしは又郎う
太刀けを見くうれみしてまけふくりぬ
郎おひけおの違しいゆくまそてまくるぞ
そゝおけうけくれぞよそあまけくハもふ
おしとや思ひくん内祢さしてまけふくり
めつをはくきそりりくれしもちういれ直く
わもんてすけ上の侍所へまいり入又郎を
まくふあけありてちういなどゆうまして
ゝおもひくるしつぞ思ひなうてしいま若い

つれちのおちかゝるうしをおほしくるし
こゝよぬ言するとふしはきりのめしけるふま
ちとありをとはこやれ鵜ありしかゝさい山
よちうりしく十六の年しせしの敵をうさい
京りふもそてこう國よ下一てし思こうて
よりなかのゝかりしよう〳〵御敵よて
しられなまれてつらこれ君よさりかり
志うろり言やうのあつ馬のりの鵜七十人
人うちりつをらくりかれのゝりとし秋じち
とりくさとおくもせすのせんちうく志こ

せしよぬ郎うちるい恋とあふて入頭をて
ふすきぬ引ゝに侯まゝくれきもたいうけ
りぬ郎ゟ一めたかりくきしと座敷をいて
しらに孫りすすふてむしうくるふこあ
ふつ川しきて在りれし太刀思む孫
にらとおり揚よ一太刀ありてそすこゝほ
ぬ郎すると走るあしゝハたく一太刀よし
ふもんもあやりくさうおほくれしきも様
みふをもらいふとてとりよもんもおふ
あどわつまは紙布をやりすさつれく哉て

かくほどのかずかくまへて和恐ありやあふ
ときいくさ武なる八郎ち大ちやうまいくさ
かまどうちの物ごをせをこゑいけりいしよんな
すそいおもりかり物くしやといれはく
ひきておかりくそいりみなる八郎後はかふ
がしとやおもぬ言んてことをもうしつうい
なけうやうまあそいひけとがしやう也
みなもこれらうもしもいさかくりくみ先
ぜんて太郎まばからりかさみつもおもて和
いく其後むしま屋の小平次球まじめくて手

うちの者どもまかり出て八軍人とりはきさ
なれども八郎が物ともせず二三人球せけ
ちうもりおかゐはよおどりいてんと心
けりなるうへいくさ先武こらへすゝしてハ郎を
あしとふさおもしたくくとむる所よ
小平次孫平次来てあかりけれの手あしふと
りつ武なれしそのかみのさけ先武どもあ
後すかもたちすおしそうれなりけこれや
りんせんのちらくもよむうておもよいくさ
らきたハ切言ふと也ふさ大けくおもく

さても豊臣のりきりはしてむかしくすりの
らうきくりむさんありしありさゐ地君を
がよしさらしめしていとけのはしまれ
まは信代ひけふりぬ黄金さでひたは
はりこの国のちうかん大とものさらしの
しやうくんうちやくし一ほうしまはして
生年十三にありけるが御まへさうゐ勘
ありけるがこはいおはきこの御袍をひうへに
日本ちうを大かたを君をいふかしきかへ
あつかるきにちかをすうあるとそうし

けれ楼よりまはりうのすひきやうおんお
みを盃ろんの猫ろんうい候よくはんりん
まは御ぶうろう孫きらしの信きゆくと
とくめかのれしけふをとやおりめしは
しんごく兩でなまひくりきしをいさせ
なまんでこ太郎にてたまふ物ありしはあや
しくそおほくくり壊よはあんちやしまみ
あつかりくるかる親さらとせでるに大そ
しとらけいよあそりすくんしかしーよ
きくもらもとりふ事しを思ひちう生民

りつその後小平次郎赤まなり。しこまり
てすあけゝれハ曽我五郎とはうめ也
みそ給ハ十郎ハうれしくてんとおつゝゝれ給ふ
あんなやうふかゝりぬ郎ともあんちあ
けくるそとおうせ下されゝりあまきなり
じあされあり ゝり

常識物語 第十巻

A 00
5796

太郎か二さう憎く まゐる
いぬばうか事
伊東の二らうかあさましき事
鬼王とう三郎か曽我へかへりし事
おかしくらのとのさまとんせいれ事
ぜんしほうしかものひの事
曽我にてほいせんの事
京の小二らう死す
ミうらの与一か出家の事

曽我物語巻第十

暇を給をけなまりて小平次まかり出けれ
むま屋のしもへそう川丹國ころめ郎を
あつかりすてよ御馬屋つもし屋まにもちり
付てその秋悔なり明しくれしも大将殿よりも
ふうひきもしめさかる其 妻に曽我之丈
郎祐経之気色との御はひほくれしも小平
次ふもれ小そてやまかりける程母方のもくゝ
伊豆の国の住人小川の三郎すけはさまかす
かるはいりよ小平次さうひ祐の者よ形て

付ずなくして返しまうし山なく海そへ所
やうゝふをあつ御きゝまみけ及ず他れふを
御らず東まみよく人みきうよれもけみな
さけるしといれ乃ねき太郎爰て孫一ゑん
のぶきけなをつこすをつてるはみ御みてん
然もゝ志嬉し乃よけりちうゝ御みてん時宗
よきうしきりを乍ぶ人志携りう梅つ身
ふありて勲教入へうゝをせんぶは乃るし
て人みゆれうゝとまてしといまれ奈ゞ忘
へつ上をよくいふ君をふさそと

ぬしをくしうらせ御きも千すしよしちまい
付ともとりうちうしすきられを父のゝためあよまゝ
まりし法花經然八をよとそとりどふと思をる
けるきさてよくきて御げおの内へそゐ入
らきゝる其上にてハ敵のためふとゝいはゞ
その時もゝ一人ふをう武らすいんたるゝ
うていまとうまりみん王をゆうでよとゝ
もばこれしさうまちさてよくまなりすしてお
祭てそゆうりふ御あうれといえもぬをのそ
ふ敵太郎御まへよまゐりゝれさ君乃読せ

らまで是ぞ曽我太郎といふ者のはじめなり
りまするによつてちからあかりなるとりをとち
うまひさらそこまむけいたのそのならう
せ若やとゝて、きまゝ、ありそのゆらさかりに
の母の侍人あるは四方さ孫ろうせの
國の侍人かのつすけむ孫もち孝養を立て
ます上ますあらし志やり人といふときも孫守
て大の夜なる吉さ足りしてかまよとまたこ
よ為てみくるし志人で御前と申くなほ
とありあんぢうなんなちきにやてさ様

あまたもとはまでやしくさやうよふびりと
いはうよどもてや御一定いりとすゐ若よ
なりすみえんくかのおよのきえとてあさま
らけるそんうりなれ君花こうめされしきて
いやうよすへりものしくの若ゆくよ重也
をちこをよぶてしとおらせこさまかり御
ゑ郎いふおりうのふりありてたのしうよ
ましなさあよ給くは十郎うさい後よすぐ
きてん我らう父をすけつ孫にうゝさせはれ
しよせめつこて家月孫くれはしかれども

いかもりとかおほしめさき違はおほしめしに付
て其一年貢み御上洛の時さかいのあらく
よをはさうてまいりてすけはみかのをも
しておしをこまりくるにやすなるかなしさ
をうかされはしうらをうぶりてこきやうに
のあり田てられまち出てもみよきは太刀と
かは気ゆるくの秋もんよ御まくらてちん
の御をとけんぬ今年行きい思へ給して命を
ほしくゆくは御ちんよし今一時をとくか
へをもおちきゆへとそすゑる京へ立の

おりけりおもとも翁様のつけくるにけい
やくせしゆくよ太刀のつゆあさをもとるくし
よいあ何なしのさくもてもやと思ひか様
よそやうりるは君きし艶さし又太刀の
然所あくさしなあすきそ中絶さるよ在け
そう深とりよおうくせんそちら代のから
もとるのつは山よこうしよりもみてよりつ
たへはりつかをしてあくさはてやと思ひ
しをまん気ゆこふるあきもちて　ねよハ
さをゆるよらて今よまとをとりてよ渡より

ひらへよせし八幡太かさいのはもとへ
いとおほしうりうやかのすけおくるあいだ
よして二歳をまちるへこしてころしは
ちやうあいありてふしきの梅くろよりき
嫩うくおさおなまへはちやうあうのその一
ありて代くつたくりけるきとやや ありて
君御らきなるあ心ます昔我の父母よせて
せくるうぬ郎照し旧李つ大将軍のおふせ
とをそんしは八路とのおもふこうたれあう
をいれ穢つけいまつ悪ますくまたてんと

ていを夜あれはいんよまへんつうせいさき
むつまりして我まとれおよおせとてむし
たはるちてやりへ我又母れまれも山路湯
けたとつかまり行つうろくれまても子或
思ふかさしの嫩うきますあちてみし母あ
すくれ入りとこうやりへいまん屋人うれ
小生をけて其余の子どもとう命死あんと
し母にまらせはりんよ恋まそてそのおも
あぜよとよろこふもくやはあま御けいまと
やくとそゆくはさてまうし我をのとをよ

はいまだひんふして世にある人のようう
くさやけりんしうてゝときしらけて是おし
ちうぜく八環のくてもときとこれとこうすす
ゆましもまたなきうしたの旅まは百貫おろ
うある御ちやうムりふしそすりる君りる
らとや老りん父母教訓よりて旅まそてを
志さいもしよ旅經も伊のよ里かまくろへ
無けくうよれ志まち小そて祢らはけり
けるうさんは武四ヶ年の君あしうろ
無福拝まくらしげけつも大りそ小いこと

りとう原をろきしけつ江極とこつ嶋
つごとうりろきしちろいふ村中野のてま
ふうさハ百んよやす原の野路山路宿しく
と俺りく小そて狩ろれ志うとを敵しの待く
附石四みす孫作ま待るとえを二三十騎我
しくなつ作らごさなこやうたれ二人つきさ
はと孫ハうて一人思れふうしをむもしく
余までのぶはぬよすけはよなうく武らき
まかりさるあまとてよ里ともうゐくろあ
ばきつれらをとはおかくこゆりるるそおれし

こころもりなてゆく柳也よちかりよ為てし
わかれみぜんを仕りとめてハ千万世よ
ては、とも河風さしと春雨よこほりしくう
ささゐいはくよ在そとくろみは君くしよ
むちうを川らしちうよはりのうとをける
あるひまえんなやうよそらしてきみしふあり
とゆくゐよおとろさてあしのくそ雨を志
らすまけはひしあはさつゝ修とそらして
あひてありころをふかよりすへうつうし
みりのそむかうてつきくあてくるま

てそてはもをてよすハよそんめもして今
り出して仏前へとかくはきやそては
はうひしてゆきしめきれくはよかきつく
をもてのきすハまれふり従んかくちくそ
ゆへくはまゐとうふれ琢行てそ打くる
おそれし入てはへ光らしらつのちうはいのう
なきは琢尺もそくよくるふうく人やゆく
光まよとよけあけよふる佛ゆはほるとの
をやんとよてさこやうに風らけるハ外し
きをこって秋行うちらしとりかかる光さて

もおやまりなん不思やうあんとのまゝし
ようん国へ下まつ諸經よいゝ尋さいんゝ
て道よをもしてりてれよち死ゝゑんおりと
そ中なる此もしてもよ〳〵をまん〳〵つ是も
よりまとをうさんとま立なるちゝて奉るや
りまそんよものそてまさいうしとゆもとう
さ孫て下されなは色をあまれ十郎ゟ反歌
をあし時わりとりあれうさい志さ〳〵ふ
けよりんす施むきんおりといれしもとての
すくふそ中きはれとへよ時宗うあさけよ

よみてまよきやうあんとすること〳〵しとそ
りんしなおやてありてよきとくをとりて貴
と思ひなはうふさゆへるよありなれせ五郎
けるこさんはまよおもひのはれし時まへ
貴をうやをおそ殊しく命もおまくそれし
はれしうかくまうみてれのうあいうあある
てん彼やくまてありけと存はまーしてその
かうさいふる者ともを思ひ〳〵いすされも
千万人の侍よりを君一人ばかり思ひこけ
ふてまつりまうことを御くをうすかゝたはは

はゝみくれてこせ給へはゝしんまかは
まそうやうよまゐりありてむとゆへりけ
遣し君守しめさんこうきうけてのくち力
とうろく思ふハちてりせしあたとをとく
行よそて〻さと思ひけるそ志こうしらぬ
くまとハそらし北条伊豆入道のむすめしよ
より我らあらくうらこししが六やとのつこふ
らす志そんのうたこまでゐてらふらせ給ハ
ま在又おんまわり御前出て日本の将軍
かまくら殿とてまうけまりぬさすさし一

〇つゞやゆるけるみ宝とすひふんらかく
ひすてはつま花也中掛よ序まするまはい
りよしそいくゞかきぢをぬそゑしそうのまう
しとをんあと見るし行すまはいんと存て
ふかるよふうし芽しはうやうあるへしさ存
をのあしもさし一大方際しやう物少てハ
りんするものなとかくらん恵米あし芝
ひらへよ志あくじんのはさめるゆくせけ
まやらまちつの鳥をたうくとはさかをうら
みちんこうの奥な海を悪しさかをあけく

とはようらんつきてあることをやいまあう
おもひきられたる君の御ことの為のみの
頼もしき大事の時宗かくこうりなちうやいち
のうりくをもたためしんりんむるふ抱おくさいく
ら残もふちてやりる君に二一めきしこゝ
さうふ志やうゆじしをもしんつれ武ぬはハと
作らきはりかんよりは城をあつさせ給て
きられやりへ旧来主つまに思ひぬお(ちあまた)
は今よりをもにとまたてたまさつうまへ
つらくもあかりけれハぬまでをのうきんそ

さそりみるほよ家らくを余ぐとおしまぬ老
りふ世よありるも思ひごろ備はすまりをきを
ぬてしよつきつめ十万人よをきうやすの
老をこう一人ありともめほつめたくれ
むさしつをめくきらやふおしこふこれ
とてはみちとはう残まおしあてさせたまへ
かれも御家志の侍ことも心あるをうけ
もちあらくのち備めハちかりかやてま
て君は城さおさへさせ給てすゞふるま
ひく武きしめをふ仍まくもけてしれこく

しまさとよろこびけるや程におほせられ
けれは新田小四郎はくろは屋まれはまゐ
やくにう他の太刀をうちとりのひきゐしお
らせまさとよゆとかざりを志ゐかんける
てして新田の四郎をめされかぎもくろ
さやまれよ志やくとうけわり此太刀村千
とりはひきたまふくれをはそてまつり小
よもたせ小四郎うゆんてかうきをみもらく
くれをれてそと残りなくゆめて今まてた
おほせつ事ぶくりきん志めてかるつ

あよりくひなと一飛のくきをたましつかう
しるれ微よむせふありさまねさありける
あさうわの日うけよ志が侍らもてくふらく
むさんとりしめをあまりをやくありてすけ
おうしやさしくときうれたちなまへ物かしふおお
ふしきやうくれとかなうしやうせしよき
わやまん敵小心さしふかくしてつ一本とこう
契りしよゆうちれしもすみありもゆつく大事
よろこれしたまひつよ附宗か心あらす今まて
まうらみつはかりのむ所さよ飛うきの世

まなうらへもそいくきしその山みてきまち
なく〳〵おいなさそてまつりさんすの河をて
こてさぬくらて瀬りさんま王くらへもを
はなをよとこれをりてす瀬みむせんなり
そてまてうしをおさく、あなれもなみて
めてこいまめらきなれもゆんてのりと
ここらつ花めさのこくの川ふ女、おかゆく
流球もひさようかをたせたくおめく
とおそあさんろしなり和田まさけ山をもしめ
らしる今かわ袍をそぬらされなるおく防衛

よすらりおかり太刀をはさむれよ瀬よ武
を悪きそとや申あれなり中まを咲くおいれ
くそらきてもはなきやふりてかけぞりし
影海のあし四郎さ孫をつずるミいそくらか
なるなる害我のそのともハ敵をもおてこう
なる志なき我太刀てうる肉武からもをもち
あれもりくのつからをもちてまう君の御旅
まそいうる大軍志なるみしきのよといれ
けまは肉守にてまふおとすくしてある
四方をもさとまなりていれくとなくそし

をたふせたちとはすそうで今はせんなくてます
てむやうの事あまこをおきこれまろき
あちもちふるおちかやよくまてはおすおり
おそれあすやとのよく少け平家よきちゝし
まてちうふこゑのへちよ八嶋のかつせん
よいうもくそんせん中よ死ようすれおいしを
曽我ハ太郎兄て九郎もんかきへ条せし
殊らしけよふてハやすおりおうらは
かたちうもやうしてとりふるなちあれた
おたちふもてもるとく給るへうせおり

まうするといふ太刀よすけなりうきん俺く
せし附曽我としのつくたひふるそとよおそれしか
付ておりそれのまうよ敵をうちぬ兄才まゝ
てこそりとくむはは老一二百人をうつある絶
しこれもとおらへきる太刀をいそしつおせた
ちふる為義さふらふち殊をとてまうてを
てふなちおきぬるくてといれそれさめ
郎りくくと打祭人のかちとまうしとい
奴人はさめくよき太刀をもちぬおんあれ
ふせ太刀よおまれて小ましうきをやうり

てよけれども侍るよ此かしのよ花からちを心
よくかくすといへどもかれし人みなあはせ程
さみさぬせふりくりさ孫三門ゟ志まし
いふりをとえん出しせん我んしてそ立
ふるるこれやさんし一くん志まよ五為ま
まや妾よすけつ孫うちやくしいぬしきこ
て九州よありくはまあり御赤さうぬ
こりとの少てそありくはしりつまてし父
う事をよく／＼さあく／＼とあらぬ
うり志う思ひやいも孫にしむしてかくりれ

序りうるひ誤二三あふ歳少てそしちうらり
くるふ時宗打発をのまつ法經うちやくしい
ぬきすふそのつらしの猶事てよく／＼思ひ
よ重く遣してやしく打てしく／＼いぬるる
よまれしくをよりせりまし／＼てあんちうき叙
小父琉うる務ぬ年末の思ひいうもあり
そや今きうおきれ志らさ今りおそどうくも
打所へといこます一てよもはをやのちう
座をあけさしかけし太郎ゝ今ま志て又太
りうる使う所へといこますすきくぬしう

さらはとおもかれやる太郎か父そあつまりしお
なかつしうりぬらてふきこをくまちかう
もとせう吉川きおちおしりきくすけつ孫
をおもひなけて三代かよ孫の春秋を送
志よなんしるいとて菩むまましやうそて
ゆゝくしちたるおやのてき孝をうしいま
さうふのまつてよするさてのうしやさ志さよ
おもれし付てをせんしやうのちなくかひお
それたふなれなむさいのくま琉なけてそ
なるこをさるらこふまても来世よいかふらん

阿弥陀佛とこそすなるいぬもうそふもさちう
おんとよまなるを申さおしやの菩なくと
おまゐのそのことこりれなれとも吉うけり
なり御堂けらんせらきていぬもうの菩
りくふ我おとりんにおなせらきなれもそ
時の菩まなりさまやきんてそをとうそ
ふるとりく世一くまくまこうをせひあれ
はらあるといへ世一月まさらす君の御こ
とも一まてそのこまなく君かなら吉なるお
あんさうりや斯一くにゆひさぬさうしはもしよ

さいごおとめくめしつゝふへくれ給さう
そい光たそ孫み志きん以後らうせられたゆ
ゑりしもそのく諸経の教志んおかならし
もそのいきゆつうりもし志かまはさや
うしの人なあふをんちをちうをゑりうしみ
をのこすへしとす母のまゆをそ思ひあく
孔いうみもふきんとあるへしもらの医
すくおもくいそ御すこと終りしよせ当時
のゑ門志よ二百余町をうまう兄才の作ね
をんのためよりともいちこ母一もて志

いか門はゆまんと下されしめ所ふいとゑうせ
母うらくそ送給ふもはかぶや介のなけさ糸
さけれは楠の記ま人によくきよくよんとのし
ねまさくれはおん在勤ともかんしらる是や
をんもんのまうもふきんのふん王をきあ
た残まさしるくまてまこうをはどり務むの
ゑんこうをまをきをよらいそ天下をとうら
をとな今は御世よ志らきをりめ家らうし
くらけ給てくれをめさまんよとのそうの
うはず所あるへりしすまちうくもみあ

られけるにふるき正忠もそんすく
し思ひけりハかくてしけるく御下されし文を
ことやうを出し日よ重を一すちに思ひこり
は殿はぜんに今一度とくくひをめされ
又あまうおもしと待はべしいそさおひ付
はりんとすもえるれくちうろく御馬屋
思小平次よおほせ付られきこま門へかりし
絹いぬさう歎のこと武はくゆとしひ
よ手けるしはせわされしよるりくら給はおし
なりき次井せもけつていうわらきふし所思

三郎もけり孫こいふをのぼりかくをけ
どりていそよるり時もみとうさいをみま
うらおされりしりきうこをふん人へとないう
よおこなましく思ふらんはりなかくおや
のあ小すほる余てんまちはひをちふ
きうま孫つゐり川きうるなわらかくしく
ハぜんのはふをおのくけちゑんみてか
りけ人とするれをけるをといハぬ人そな
き其縁は郎をさし殿すらまつまてもれうさを
といふころのいままひこもへきらん

とらす時宗ハもつりけるハうまくてよく
こそりゆへひとをむかへるにあしくこそ給ひ
けらくあくまやうとなりて七代までよる
てやしたくれてすけものりてまきとふ
ふりそへてなといひうちつふ悪アやうみを滅
してと思ひしよりひさふるい太刀のよう
どをおほくけりける所よつくしつふこく
とやくるハ御家人そでうのまありて左
讒者のせずに行さるるつそせしうおふへ
武路もけつのしくしれもこえしらうさよ

りとや思ひけんまさと太刀ふそて名にさして
くわうとゆきんなめよふ物把子さなふそて
多きくひようきりけんけしふる歎教
ちいんよわりさる志もわり猪をおしみふ
ありをもるしますといふもてふし志そる
ふゆうしつゆふりてなけ武者屋ふりくら
おしくいくゆへさらをうくるゆへよて武
のあまらゆくといくともけいをもん
しかふたすけふさけをうくはちせんきふ
り作そと守武をしうくんむやよのりしを

ふい銭をまんしそろへてまゐらするにまなふさらんと
りれしかしとうろうし志ものそみていら
じいくさをやふりてゝ時をいきんまちを
りれしれくをんちやすつりよゐりこさを
くうれてじ務よ貨よりてゆふして貨の六
めよりのちごさうしくを被ならでさ□を
こきんはきついちなり銀せぬ方りをよれまや
うじんとおゝれくんおかゝ候かなし損ね悪
ますす千里銭せまるぶらんまて伊りへう
こまんふりとりまくう中よ八銭らるくれ

もちてふの志けてはせんまて亡きてを
こさて当銭の又郎をて志けて銘てちう代
つるりひろそてちうしりくさをふうくす
一ついつのこ郎まくう銘てすれゆさ志
それとうけなまりくらおしきよとまされ
くれぎ君きさしりしうやうのふうくまて
見てある遊くを銀ふくをおわせ付らは へ
貴をの銭とていりのつうハ御ふ志んをう
ふりあふ志てそとのしまへちうきれしう
いくらそふくて悪きやさひさけてう

年の九月に廿七さいにしてうせにけり
これひとへによめかいさとおりむらふかき
みやこはしるぞうへさぬかおかりし時
むすめハめ月にきられたれしたすけかひを九
月よりてまゐりかし出成ためしりん候
さ武ぜんもそてたるこゝろもの人々の
二人これらりとり兜王どう三郎ハ冨士のを
そのいその屋敷よりきたくいのうへ兄と孫
曽我の里へそしきさたるされどもおし兄
しふこりもきたらつもあさらふそとくまうり

りかけにやうせうしまをとりそたくまり
世の人おかゝ曽我しくおもひて古郷のはうき
とくを我を又これしと又なからもふかりける
よかやうにありゆかにあまひしのもしかい
あくまで悪をりふりてあくしく曽我へそ
かへりな思ひのあまりにうちのかたとり
にしもやをとらんかをそうをかへり
ふしかはたえまんおかくもしたくまん
ころへもとしいまこそいてさゐる
とふてなんも我君の御いのちいかにわる

らせ、なるよ冠とかくちさかりきりあしたく
二人おしませは大坊よとりおめらるいう
よ隠らく御しますらん今そ此方をつかまた
たまよ冠とぞへいもして入りてゆさへむ
てんそまつりまゐりし米を抱えしてりぬまは
りふりすこしふくよりかうの手をすらは
さりくありてたたれれ数を汝并よもく
ふくみりひのひかりもりすくぶりゆけし
君のは余をうくやとれはかりを召あお
しくおゝとはくまとく道のくよたちまち孝

をかしますちかさりかうり馬をしやうある志
もとして人〻のかり猿をやおしそくんかり
あるをちらを入りて二三歳まてそいもへ
その数ある為きにいりさはもおちこちれ
ふり地とまて山中まおかふりかられハふ
し野ふりもくしむおし米こ海のは残は
きふる里へとはいそけとをゆさをやられ
ぬ山道のすくを作りよ入てほりを家よ
人の後とむかしくてかきもちらともるとのあ
もよきりきさ来りて三郎紀のはかりへてを出

の御屋敷よりはちよれなふますのまへにも
たへまゐれみすつでてはゆるせとひそれ
むゆまむこうとくしりたまりますや曽我の
十郎五郎兵とりふ人兄弟して一そくれく
こうえぬのはせじとのゝと親のかたきとて
じちなまひぬあいけさん御志よれ内まで
きりいりて日本国のさまひどものこさう請
ぬ執ちぬりて出ひ死人二三百人とは絶
さしとをあまのすちは秋まよまち志ふ志
給ひぬおろくのかうとのちあまりつ黄よお

まれいけとらるゝをなまひ黄門人しくのかる
ゆめりしてしま黄さしのあきなるまやかく
おもひさうしきちてこうゆいかりつきう
やうのちて瑕おかいそれこうこせんのい
まつと兆せ川のうえゆるゆせんよきおか
いさへはけさせなまゐゆけつひありよそ
もうーせとおりくり二人の執とをこゝて志
ぞらーなまのふ亀ーとはおもハ孫とを一志
のなすあきもかもともく思ひたくまつり
志まゆりあくかんの猿ことなまひぬる

よとみけ蒔のふうのよろこれ水そゝそこれ
つうたえをめんくまそてまつりまうい
ゑふきうへらはしやさんよろみのや
りをもよりくとりきりもえ克のころを
れいろよ心をあし一すちふられ人々のこ
ゑやしかたみをとらつれかおそまうた我
きてをしく子供のうへしらる小袖をとり
おのくろいよおしあてゝ其まゝ大事
みつこと入よそり彩しきたちやしく
ういしやをしくすりおとはよそゝ我やう

ちやうちんのはさめりるに発計ならあけ給
ろくり済めくれ事に文をひらさてよまん
ともを惜めとくれ給をころもおしみ新もそし
をさうに入てまうをうしろし屋まうをか
ともうりいれてむねにひさあてまさしら
ふしぬやしありていさふれきまそてくしふれ
ろくるる織におもしねのつからとしてうちふれ事
あふし式小袖をきれあうききそてし歌え
とおもされて附物議しをあるに二人はきて
きうりされてくは捌をきてすきてゐせとい

ひらむくや、さらぬ郎どもありとも思ひて
やはらかによくしれがはそやくもとなさ
給ゆへ、よふまうまて年比をもかりける
うらしけよろをなかはよくおもるさかりせ
むひとつをみせう御久敷そむさりしな
めつらしきくもなれもしくもおほくしその
をせめて三日とも打そふてふ諸おしけれ
なれしまりける面うけ流行のせようし
あれこうんとそへ、も流おしますあ黄へ、くら
りするまるつとこれ黒つかいたなまて

おもくとおもき、女をふかりくり二のつらや
の御しちうとむしめらしく、志うしき人くら
もせあつまりてうはうらし、むすめおのめ
おしずおもれのあまりよもうして十郎かい
うりくるところまた入こうふるをし
そのともかふくうもりかしぬうさりうよ
うきくる女てのをささ瑕をまは一きいう
いほうふよむそんもうやうふよろやくよ
よくんおうさふなせかえんとそうきそうり
かくる我身とありこともおもてめくちすさこと

ぬるに滅もとくまうすきつおしいさにも
こきんまんえうをもしめらして言んしい
ど物語にいふるまでうすのはすしとのこ
なきともいまより後のちくさみみは継う
いきれしをぬる為美とこえ侍か思ひそまかり
かるふゑとし二のこやの孫しもうてあく
くよまはらかかるきくにつけてをちる
ねむとをおほらす人へ申しは非やちりけ
まかりてさいのちをふうくゆくきつまひ
をあういの侍に寸老ともなへてあけくれ

志なうちんとのこやかれして寸歌のうまた
あとをけいにみえはへり御一覧そやかれは
はけてを親王をとしちつふ書うまてそも
ちりしもくのくやはよそ逢を草のう
けまそをれけまうとなくふけうでをたゝ
へもほげしなふきんとせしちくのかなも
ぬに機けりといれしをいひてもくして行
とるく月日をかさかしもありあり小そて
ひくれを贄せし事をいころよつてうさ
りしをこの文れ称もうれ花をるやうに

てらせしを猿とおもひまらいとてつら
我身のいやおもひくんらし中／＼ふ今なを
あり我の為よき也ぢをそひたはく力なり
せもいよく＼なりをもりる為うく
てを我が行よかいあつて＼へむてん寺命
あるを行つぬたもしかふとをあをこうま
れば宮我の太郎をおさなれ附よをとり
そたくてもりもは事なきもえしふを
おそらばさつ持さ肉天ゆりしかり志のを
まいこやうちくてい乃おもれをなしあさ

夕おろうゝおろゆりしつゝとを志よつるやうれ
続ろうゆきも一志よ球をくはすりをふし
そのうへ御かんそうの人それまへあまとも
我よけあらんをおそれしあり我よくおくさ
いまひふきのしかひ体するりをころも思
ひしまりを義とうしいまさろこうくされ
ちきるしとそふけ地くるまうたこれ若我
のあくはまさつれといよく思ひそま
ゆりくはおもしけりして我身あまりとを
きまつうゆく志をしやと思ふゆへまおそ

つまいのちをおしかりつゝき今をさかやし
とまてむまきあれいます一たれえんとそゆ
ろさかちのしけミをれも孝余をあや
しくそ乃しまてさきんてあつまりてし
さ世のふらは御方一けのあけ艾よおりゝす
けしをまんしやうしたまれし平家のきん
たちも一とふナ女人めのまく小く海中よ
うけここさせんようけさりなまひしう
れわり給らをひみしはまりらし月をうて
りぬまはそてのこうすそはりしう今の

世よもあるハそ父母よおくれあるハいふ
さいふわり給ひもおや子こやうをしよも
なまなけくをのこミあうおふくはえむうら
ま化余をすける者なし孫よはさうたあ御
まはすそ給りしんきゝうけの插あるつこれふ
かさいのかさとせ名ともく滅をこやうくさも
ありて子よかうるともそきてくれまして
子のくあまよせて余をとしあれ給りんす
きいちう此箱をまてもいうかをあとまる
くまんて壊生をたれをとひ給へとさ海く

みまかれいしけりにねころもりそこく
入たまのいるきてはる病者おし孫むそう
なちとやりたくまつりしやしごうしやう
うくとんしやうかいしそしりおもろは
母ある浅ごうつちるへきすれさうさ肉ある
ごくよぶけ地するしえなはけみや母の中
いけさめぶこあこごの多孫とそふりみけ
はしこゐへあけうをはまとゆいそさ嘗
我よくそりもろとをよあけ貴たまへ翁王
つかしらひつをもけくらうう滅尭祉よ

ごく肉りきて熟きつわり猿のしは病者よ
ねしすとてき魂くとるこなまへ其後ちゝの
うゝふまいりふのかゝこぞうてこ孫え
くりせ日じく四十九日までおこなわれ
いとんを孫よ孫題のせいもんを十あくめ
きやく悪大きいをも一孫ん十孫んのちう
らぞとみてらいさいんせ志たまへ
れた申さのおんくまんなをしりかり
はんゝをちくのたあふ弟とをてかるころ
けしふまはけさふしてもとをはちにあう

をそのかくさいせの時もしんこうをみたさ
はりしかも壊れをまても悪道にくたさい
あさましとたのもしくおほえけるまさに
人々のおもくにをんもすとて十八になる
ちうしありこゝもつ三郎かいこれしちうこの
むきれしなる子也母思ひのあまりにもとてん
せんしをおち伊豆九郎やうして武蔵の國
くりことといふ山寺にのかせいどうたせん
とそつれかの九郎平家へまゐりてつらし
うし武にもあふまくれよしぬふうさいゝ

かうしておきむさうしの国に在所をとり
ところをきうしめよしれふに作付てめされし
それよりちゝうちかくいたつの子らうこう教十
人下されしより婦えんなりし次第也大方
こまやうかいとはすふりうちへしちうおもた
人よようせられしに出家の身なり色を
かく嫌はりの衣ふりせもきまて御弱
またよし一こ後あまこともの世にもちるる後もん
てんまあけしゆへそうしよしぬふの役を
うのそんもうにまゐりてう指の志大れ球

りふじんなてかうや弓矢取の子が我いゑ
とゞまつてそのおやまほくしりを憂くる
御しきすやうやうのさいくきを其みふ
ましをそられるるちやおもし死する命
うらやうなれ三人一池よりちかふでいつく
人めをしせりしまし今さうちうくられを
もとをもりふりけす佛菩よきしり御經のさ
よましとすもともしをのてけりうれし
すれおぼあきもあすなきうくしとおしりまふ
むいやすとう大事一せじめでしゑらく

いちげとくまゐれくりこまよきせり茶
のまうちうをせじめりしあんらくぜうど
よむりくとりなまへときせいして言しを
ぬ茶ゆんでのまこよ素たくめくへひさ
後がさんごにふるところをとしまゆくちや
くえれけてざまざい、よやねはさおはゝ、
なれもの茶りへはさふしやひしてよかり
らんよをこときちうひしてをでずさん一
をさうりうかちれあめしめさ偽く而むお
あくかまくへとしきん事ある寺中まし

ちうへのあおりをとりし菊といひけるもの
大せいはせきもいよいよちりもそこなひ
人々をあまたありまするさをさうかう
りんふそ志つけるむ珍しといふをおつ
うおりははつひいてくしやうふちうまん
してせのなれこちうしかよりはよいをた
しりくさくわたさしよなりはおりかり
し志たれありはほうれげ私さてよのせ
でかまくらへあうよりなれ君夢さしめさ
きて住所へつされしなれもゆくまそ氣なり

君御免ぜられて玉そうハ御まへの子ふるに
はなおありなれもせんもせん志をさう
けりなるう君のおほせ殊にやうのてを
おしておさあうらんとさくはさうれしを
りふりてう屋をもちあげさんはいこう
うなあよはまことはとやさてあまことをう献
じうなるを志らけりなおもかかれふ
りしやうくんの御をも存んけ一かく
一しやうのあまとをつ親の敵打てさら
ぜはりんよもくとまそくともごうしいせぬ

ちくしやうやは為さ給はずひつきやうもの人
とそ世ノ諺にいへりくるまんちうまなさしを
見るかよりもをよい者ありと見てうり
まもらう孫んためにめしけるよそ出れの
まうひ所存のかう迄そこれとはいふか孫
はをそよ御役なまりてめしとさとのはち
やうどけなまりて其ようし仕奴もて
兄ゆくきあまれし兄ともうちよせてとらく二
人つゝのをもまけつ孫よおしむけくそうな
一人まそてはとくも君と一太刀かりかくひまて

後生のつとめなくよ仕鬼きうとらしは前世よ
為さちくしとしおちてそれなれ君貴こし
りしてよるともみは何の宿道なるそ我
らせんその敵よる兄弟の敵まて為はいぬ
うくまりうへせうもれ狼しきあもよりは
うく御いせいよなきしてう様よまかり成
しゆおあそれしふらしう身うかみてはうらくもん
慈いあし何まうしお仰く貴こすくれもさ君
ちうしく為をも給うきもやくまてる義を
なきこらんし若くん言てみそてをいさてん

やさを思ひしたもく為筆よりおもはせくさ
されバかれハせん敬てかしく也材筆よく
く人ちおゆしめされ治ハゆりけるに六を
けを福をしき者いふそ芝まてめさ給為義を
しさをとや中武ちしめさまてあつ博さ
ふや人まよりてあふさやうの情ちてもハ
ゆへなれくらおし把結すふとそ中ける所
きう武させめし大仏ちかき生をあみてもおて
らけりなりたすみなさるて又たすをおち
すく書物也よくそめしよせうりけるとお

ありけるせんしうさ孫てすけるさしても
たすう作まし武功せんけふつなかしへをく
用しく治いきさくなとの作まじ人と芸武
アまけなばしやう孫んす八まし花何六
ふさう逆まなりむさしなりし治才なり君
もうをのつなし二代御らんしてうしある
とあのそんもうしありあまされうきるまよ
のつ孫のちんをあそくめし作のかしく思ひ
とくは法生まを在りなましめをやしる者
をなきおゝ作為筆のはあて孫をとうしく

れゆゑし天下よあるべしとおほせをあへと
はかゞゞ試こうさせたまひしかははまく
志ようのけふあいともそてをぬらさぬなら
うりくりよこれ人をふかうこありまそうい
ぐはりし一倆くつあまさやうの小元とを
おろし八月よかまくらとの御一門はう
ミつりくのきざつれよ猿ら乃三郎かほけん
おこしてやそりくるとごく然んてやれの
はなふくたすれ貴すなかりくり書ぎ小侮
六月をへて死よくりあるしくさこんぬる

六月よさやうたれことと一両よ志よたらん
しりてよりるあまよそ中あれかるまう
れちーをくるんぜりはうしいくなくふくし
てはかんたくとりふりまりけしてぼ
ア人もたく始くりのうちをとしてしくを
ありあちてをきや

[illegible]

常秋物語寸廿一巻

/ 00
5796

とうり書類へ貸るゝり
母とうしをろへのかりし事
男の子とうはゝるり
翁相ゆくみ行事なり
ゑん女の一さうの事
りんせうしやうのり
きやうたれかくまゐらせ候事

曽我物語巻第十一

扨もけんきう四年五月上しゆんのころ
ほうさうのめ月日もうつりけれはきさらぎふもと
はらくたう栄衰もすき秋を諦くなちぬき
もびんもんちやうをうけてちやうもんのし
をようつてゐちよりくんようてまうしん
ゐまみ衣をとちてあやうしんりまたうくら
けるところよせんきあまた一人ここもとまきゐ
めつうつとよおもりいろのけさをうけて
あしけある馬にうちのりてきたいかせて来

かりかねそのそと見まは十郎かゝかれし
そいそのちゝ也ける母のこゝろにゆ
こきまぜたき石にかはりはてゝしていれ
くはなきつ人ての百ケ日なれあまやうきさ
いそきてもこゝのうちにくりておむへいれ
其箱根の御山にてあるてしやけなまり
以人ても仏をもちやうもん中我かれ
いとあまをもそのつまにまく一まへの機
ゆまをもゆけもやとおもれはよりけと
いれられも母にさくて精進もおもきれにまお

もしまする趣かりなり十郎ありしさへいらせ
給へやそくさんに入へしとありける
をそのとかくそとあけてはいりまゐり
こゝに十郎かをみところへゆらいりさせ
まいれあまよしのか入れちよ草ありけり
あなかちける人をもしちでのつゝ一つをは
ゆのまへもうらみだはかくしこをみて
す今までいきのあつれさまでみるはし
とゝつなれしてもはりなきなくたとをぬ
しまおし思はしよりすきつてこのゆかしく

我君ハもとの君あまたをころハたしか
ありす月やあらぬ春や昔のうちうち草にな
何茂なありつゝ茂でもなくよそぢうのす
そるいまろひんまたるそうまてにくゝ志も
しをなきさとめけりくりまくらをそてとう
くはつりかうそふ物もをとけのめかしと
もみりはふさけ出ておらしこをさうつよとく
ましすやゝ志ららくありゑまくいくゝあれ
くりとうも一筋しかも行と物とといハ
てそてぞうかよおしあてゝくさめくとまさ

くりとうを母蔵ぐははけてありしうゐもせ
へれありしくするさらしてじちうちう
きちうをおしまうすなれいくりおけよのつふ
けきちのわつ様行ちつとあるしなりじめ
おしもうらきてあきし文をもおうこしお
きへてえれくぼいうくあるてしとおもれ
あとす郎ゆえし附し行しおかり見へそ
まつるへありし物ゑ君のそんあるよすを
もてしも我家ひとうしくらふへきふ
とさをあしてよる行思ふやうふとはりて

おすゝしけのくやしさよ十郎あさもし
を思ひたくまつりしにまゐらして十郎
にむかふ心ちして哀つかしく思ふともく
しかありけれハこうをみ弟のみかあら
ぬにより御名ざんかさをもつて是も添
ざおりしへりこうしさとくそのさしおかまし
馬くろなる是ちくにめをくれちりしの
御みどもおふはさりとおりゆくへハまゐ
人いはなあをもつるへしとはなれのは
佛すゞつはふせに思ひはさめくはとゝ

をちてをさらこうくふ曽我よりおくらせのちて
くしこミハようこ扇ふそこれらうなり
ことりせしくる小袖をやるたびよちて
みちゝ椀をなまんそやこれを兄弟のはふ
ぜはおもひむけては弟ハ十郎かう
もくりこうて筥根へまうなかと川こふ
うき扇をはしわまつ哀よおく迄うりし
らこ一目見んしのいのちをあふへへこと
ありしにつきをさ弟れふうへ百日の内
にあまりし子におくれぐりいかにありと

うるはしめすかたよりきら二人ならぞも
あさて帝のはしさみすくそうて父のこと
ここにかくてきと紀をうきらまでうるふ
くさてこしう今よりのつらたぬれを治行よか
はなくさむる義翁王をうつしよおもけり
まつとなりそめふふけうといれしそのまで
おくるせといふ人をもしあのひんあるに何
とらくちらす炎月日をおくりやうこころそ
まほりしいままさるくやしくはそともお
あしと紀見かはまて来うふりとおもれて

やゆるぜゝけぜしかさうちとりれしらく
のちをうまし けおりしうひきせのあう
りきうりしむさしはよおやあしを子あう
をいおもひたるまうまうさてもの表へ難う
おもくおもふる義となつかしくおもひて
はくしくこまかりしみはりの命よりあけ
てさ悔くりく涙うりみてゑしとふくふを
おくるをうち捨しさの涙とおもひていふ人もあ
やうみなるは紀とてかさりの涙まてはけ
何とほんふつ君なりふしさは最小をまて

てありしかりけるうちはせおかしに奉
月ふけうしろんとすこかしてこまでく
やこさみせめて三日じちそりてうへ迄と
もより思あしましをいふよあさらしよ思ハ
らんよりのをようあハ夜くじこ袋うへり
てあしまそ又もうわてお説くりとしを
おらくしよむせひ候く忠りし名物をもいはも
はりくりたつハれ心の内さゆうとおもハ
やらもとへりもまきある候きやし名りきらう
さいおよ富士野よ望送なる山さのうしよ

うきこそまつりては此文をとよまんとも迄
にきしもでくすちくいよまでもすまぬく
こそは心んとてはし出十郎かえと共
けこありしくてよまんとす迄しめでく
まいれをそおとをてくまみけうてむ孫で
あてくもくさかり心そてそありしふうき迄
をたけるおぼいうちとハちく待さしある
てしとはおもハけりしをやけしくをてハ
かたくりと思ひて小袖そまけりくるこよれ
いこれしかとく侍りて心ゆれうみ物のより

すへ学をさとる身へのよしいさせハへしあ
かハ学よりてハ意こゝろ移れぬるや是ら
うたふやうせよとて表よりもこゝよゐをやう
なまりハよみむこるしきうけ物きうおほ
くハあまたとも公けま人よそく御くみよりも
いやうれ御おんにあつかりハいかにいめ
うれるしともうまうかあんおんなるらんこ
さうきしくをとて是やけのしるやうこゝろ
をんいんれ御時いけに志きふうむかめ小
志さふのあいしにおくれてあるしころる

に君あそらハの光にて母の心をなぐさめん
こおりしめし衣を下されしよろこびに或
是語ことをおこけのさてよみをかちすして
しつをまもる役学くそかるしこ
うやしふよきいりし事まで思ひしくれ
てうるこ書けふく御くハそやそしはつ義
えし八百のそれ仏しりかのなよれいりとお
むる義まてハこれかとりもはけりぬ為事
そう書をハも孫八為けたし理たしにさ
ため気てわれ方りうりわも死すのまけ

きゆ人ハ一志をおんきかるるてあつ月
なことをふれハそまいるへし、そもてりに
くりとう母うじ詩をうこ足道十郎
うよそおひ思ひ出らきて光をかまりちお
しもりくりさうめたよ秋の夕を何ひし
こまハとりふせ庭のき八月ならくよくを
ほおりうやおりおりうひハ森の数枕ふ
よもるうりしくすれこはのおさを偽く風
よ吉里おもれ共き迷行くらんしおうき
よそをしあしう孫たる思ひ孫のあふ

哀たりをなくれハ庭歌しく孫やれまくる
よなさそへ孝のかきなき道しく化くのゆへ
をしくしかりあけこさのかりう孫乃とをも
をこうれちく一たをうし山数そおもれ
やるよその二ぬたを守りしてよかよしむ風
れいらしくう孫守そし小上かくりあき
ぬるやとくしおもくへ性まくるもしてむ
りあよあいそめはわり猿ちも今をしるそ
ふきうらしてなさとせす孫をせてとのと
おりひいさる不よ馬よくる孫貴ひ行きら

なほうれは来こりやゝ君をおもへども
ものうしも思そらよやこをぶらんまゝもまた
まいでこそくどりくむじち出ぬおのほう
らるくうちれおとりまうこともおくあり
ゆけバそらともまぬまよりこけりけあけ
て後やまくはらしゆけりのうけをのみ
ほふりとまきかりきし人は道とうくさそこふれ
おきしもの思ひやらはるあつさまをやたく
のをれを見あけはるゝ人をれいなるやを
はすの枝よあるなんとおすくのう跡もみ

けりしく山路ゑるしくゆく袖よまとこなへ
さうまつ前なりやそそ名けなしいてあれ
筆れてさてをいなきれ旧数のあまたれ
まそりらきなれもは人へふをすけまち
そし山路中なり色けこうらとふ路ひて
いはくよ里れきやくまてよやもとひなれ
も母ありのまゝふうりくそまいる名け
うきをありてしき心けりとそもをさあ思
袖をぬらし筆もやゝありてへけたり涙を
とくめておもせらきなるをほうしいか思ひ

こていくにおとりまらはさりける
子ござらぬさよたけるあやまりきつくおゐ
とふおくはゝつまゝ業つはおかしとす
行先ま志まされうてしかましぶりかれを
せん世うさいよたうてすとゆくさんたんを思
へともんくられを金らん志あのてふく
さいうちうふ人ありおうしをよいさいよ
てさられなち夜よまうてすの志うく太し
つは才子大しよされなちたくまいるさい
さりいんれさすいん宮んそうせうさりや

うゐん大ゐうにおくられ夜よ夜うやすの夜
珠おをれいさぜむくそう一人うあけ世也
けふしくらやちうちへてをあひさんより
あうきりまかり櫓のうち我けさ我つを志
定りりありあけくてしくとふはあるうく
をさうくとふうしたまふぞうへも我をお
しる為貞よはあうれ松おかいそのきやく
入れ御うるゝけりあうまでとありうこく
もそ以へあひまゐへてぬうくむけきを夜
へうすのせししきとしくる大和ん

ゐくなんてんちかおこしたまへ一殺んの
すひ茂たみをとくなれ申てはそうしの楊
にあをたきまのかとれこちよりおとく
よみんちくきやうしたまひゆ人よ佛を六
年せんふんよこさうしこやうしんしきは
殺こしきかりおひしうまくてあく殺ん
とほろしたまふ堂人々をおくの人びとう
めしとあをたなまりてきてんのまうきう
こふててんゐのこうかくへかしすあふ
うちてをおろしてころゆさてめすゆき

きこをおもくとそのとうぞおみゆふくは
そすまへしくせいちやうをかまのつた貴
女あへしさうもすこのういふくはそ女ち
うてこくやうしきやうふうきふよりて三つの
こうつ斎をはそやきたまへ仏のして
ちくまこしころいう恩を大ありなまう
うつまふりぬ百人の子をもちさし残やし
ありんして妙の命をうつらくうつきや
しもしさくまむやのあはむるふとこれ
こそりくりつミつくしかくうしちしけ竟こ

かるしきあぢはひいろしてたせりしや
いとゝめしとてちゑ才一つりせしそん
しやかつけたまふりせしおしけみかゝさらせ
たまへなふなまり五百人をもちては子に
中よさてましあひこはかくして如絶
せらきゆへ世は中ありなれはおそるて
ここに五百人のおや子とりはむちのおふくよ
りくし給ふ父母のおもひしをなけかなり
きてんはうきさいの物なりなれはしかるに
はすひらきうてん六よくてんりくもの上

それに九せん八つのひそうくあるくりそ
こまでもくなりなくうろ孫なれらをあり
りなり鬼とをちつり球しなれ大地みふ
しまかられるはこのれ志こなるそおろかふる
おとをみれあまりみなしけみさしりやかる
その我五百人の子をもちてはそのふうみを
むなるみむりてふふえんふムし球やの
みこらましなれては雅みりなしこはて
いさらめく彼をなく助てゆくさとまれら
うきんはうまでをとひいさをてしとも

おほしすまするあらく御志ひをかけてお
しへきらせたまひけんとそ哉ちのうちらしを
ふりくりそのつし紀佛のたまひくさそこ
なりしおひてこゝめるハうるし花をのう
ゆみやかよひはりは花たりを出来らく我
ら二人もいうのまありはしもあさすにうま
ねくゝまゝゆくれもさやうふ子ハかりしく
むさらしあるる物そとよあんち日百人はお子と
やしあはりんうたあよ物れいのちをもら人を
ましいう福とう思ふきもろさはくとの

中ゝおやをも子をもありさやうなれはてはい
りてもとのあけさとう思ふおもたれまり
やうんち今うて一人しうれて大小をう
やうこかりしむすやまてたりんいてと
志りしなまひくれを鬼ともうふへとしお
なきていこさうしてもんいをくひくりいう
こなんちうるはま物れいのちをもやら
あきさこ両からてもありとしつまてせん
とおもせらまくれしておよ大黄よつまれ
今よ空のつらをさつよせけまやうすまく

てんしまれし子のあり承おりへたまへ
とたびもうかしくりさうもかりくやくそく
ありてぜひ志やうとくめよと仰らまくれ
たおかかくさ承てわやうまく志きをたや
ろし我ら志んをやしたすかりかくし御志
れのち御心はあつからんとすちかくけは
志あにくわりてさうしも一さい志やうの
もちいゆもしのくとすもしさせ承なし
うらはあたへしそれかく余をつたへ人
とかわちよくあり人れさおま承我らも悪

こうそんあくかくあるをまつめらりなとい
かわぜられさくくちやうれれわといのさ
もかく志きをとくめてそのちあうしと
すくれいさうしれとくらいましよ人との
まくをすりわれてあたへてしとかやくそ
くありくりいままいくりてさせもくいれ
のぐへをこうしとりたまちくわまあてく
あくまず八寸ろけんまれまてそもくはうやう
まこてくく御せいやくまてゆりの下より
子悪を承いうし承ひくりも肉おまわくは

なられらしんほうをとらかりとおほくへな
りしけのつとう直んにおよひかくしまさきく
後世あうあそうしられとそをおさまちは才
ふとなり佛くうとゑわとすやあまりきん
もいけやう悲誹と也法華経をおしこぜん
きちうれ签擲はこさしを在くこち世にこ
へられはまくしやく苑張うしは亮なまれ
ぬ阿まゆら王大にめかりしゆれさやう
くはをもふちをそよしるられりん侮く後
てだめのかりさうつかまちうつしやの

とふるゝをほくるまうるし そのしれなれ
しやくこぜんほうそうにぞとおもりふん
王經をかうし〳〵なまれはく四まかめまう
れぬんとむとれ签肉にこくうよりさも
しやく面のつさうくにふりくうりさゆうの
大敵をこゝれふじらくうれさんとをちう
いんは莫つそくうり御しを札喜も八佛才
子となりしかいくなふをもなほくのつこな
らは法花の忠道こ誹となりたまふうやう
に悲誹大ふさをいきをまいうくのせもし

ましてや人の力らをもて祢うもんによなふの
したかひは為義をそまうやうのむしや
こ大臣くもかれあへのたあをこられやう
くをもこきゆによりふりはりしてはた
しよふる為義さ力よあしふ孫こをおりあれ
いふしつむちしうるらんそのゆくぬ方りを
ちやうおひらし三了そのおもそれしをまお
とう孫は一志むらつひたくまいるて
誰りそうなちをしやうしすぜ志すれたゞ
れしやうこんぜよきやくてんのちりとせ

せきのくく下おしなまれくりとうを為門
たうれくふけをこゝろえふりしをくま義そ
思召るその懐うちのそうからあつ候り
なまはこゝやうおりしせいへどもらくよを
くれしうる一せうゝやうてん八かうんじう
おんまそくしゆしなまよおナてんくれくり
記たふをおりかくし志為しせくさめりけ
ちもんおのもしよりくりめきややうくも
てうそつけたくまう義よのおりうまう
うつひぜんつう孫じちふ為しせまあつな

さしともりたまへはまけは滅よむせひ
ほとせけほゆのはすくもいとさしたまいます
やくありてつけらう滅をおさくしおふさ
ござらしけられし生死乃道をさらくみまそくをほ
きこいれきれりすようつくせんよんたん
けりの山猴へうつしいこゝをいつのとられふう
こぜん二十三おんの菱あかい武乃月とそ
らにうくれぬ千万たんのじ走へゆくの
あくしはとりきんしで霊とまり画と之あ
ひまんのふきたのまくまかまし あきく袢

わのくゆくへと遂てくらひさゝのちとま
たゑへあんとをまよさくいまさやさきお
よ百日息犯けいすてまさてりかりもい
たてそてもれしきをおひて子まおくれしう
ミれざらまうらめしまはゆめんよしておい
けとよおくはく疑のうま走へあしちふしや
うふちやうとしけといゑまあ病きんこみれ
ありいふまよのふ事ちけこをりふりけす
おしめ世まるしるしゆきく佛をあれ所行
やくとらゝにたまふ一まやうをゆめのきてく

しれう百年のよもいくたびもくんもんし
いふむるしいれきうしやうちうれしきも
らさんりのちこころのうくのあきつこ
らしたまふぬものうち肉の骨ひつくをまかし
てさかよあるしきれるものも二たれろく
すさはとのをうきい孫て孫たらすうしめし
孫すふやしやう大しれおんちんのけうけ
わかれうるしさかるやまん滋ほりまうの
うせさりちしてをゆるやうまるかをたす
くといへともいまちくちうのかれ孫なや

しふりすおんあはれしきうおやませともしれ
くらすせけのぜめ球まぬうまん竟よよみて
ちそうすまとこらくしくのそやきれし
うたあまほいくをおよほさいせまう
くのとふさ紀てましと思ふよきゆあ
おむるし兇をおりてちうしん球うそあ
きなきんそおかくうきぬ時うりまず
けりていまあんそつほしたらんやひと
とらめて紙ゆさ道うえまやうしやせん
三うれむあんゆふるくまたくと見きし王

くうもこれ憂ふりてんみとりわもしくの
身ふりいりんや下きけをんせんのつとう
爲なとつゑ流ミう被うる爲義志よくうし
見とおしおうふかうおしミとそわつし恩ある
どうぬをおわうあるまさまいりまこんうく
ちりふうくしてちくもんいくもくつぜん
きうんそよく逆う寃ふりるよしてぜうふ
うたく一数でんちうくまぜりあれ化たふ
ほよおるしどーあふ七月ぶのそのうう
えんのそむ不なきよりあらんるくく六

うさよそろきくるし殘あてりりきハ侮り淋
りさんしむおやの子をおそふむけの梅う
親すすちて先おんをあ況まれ六とく母の
おんをたかれよおるしむいゑりそうれ
一こうのあきさとく其ふおのおんけくけ
すふしとるてそりたれるれよやらりす
とくるしめかをつくし月をかしき孫貝をと
をうりむまはくとも紀をくまへのゆをよろき黄
のやもをて天地四方をいしてでもろふ
とふをよけあへてそうるれやすうさぶ

我子のものめこともきやうはうのかく語
ふれてまれしかりとまよりなけきてちう
麁にやすまず事なれし人の歎れにふみは我身
はかりごろへともしらずして子のせいしん
をおいつひしそりしこれおしんをそいまる
後すりふかをうちをしてもそみさう死へうちぬ
さふれてくふこきやうはんめりく君をさうとく
してさうしかりうす母ハ先てあくしてその
とおうすそん先んどもに色をかしたるを
父ハとりとりせりくとも四ハとんかあう

まさ二まてなれハもとのすけ炎をせりな
きとをあふる所をとらへ父の敵に力をすそ
おのく余をしなかに人のおやれ子を思
ふやうかまようちあつかふる子をめと
としくてらるをかりしきまうれへて
なう馬のいそに生職するをまりしなり
後代まとくむりもとをもうれもまう
ぬ人なりおりしこやされとも色とも中の
あしきをあるそりし武家もしるよいせう
ちくしのいさりよりきむいかるりた

くひろしやうきうしやうえんのいはれ
へはもちすけてそくりのはうしはを
まへうけいよ富士のすそのはしてある
くさしのあとさとなまくそうの一ていせ
けしやうまんじうこうの二人の孝子せん
あやうこてうしやうしそおりしくるあし
たゆくまうでたま人てもくはためしを
あまはしやうしむあやうれあちりまし
めくおくうくる義よなりす今つれるえく
やうのはこやう人ての志ろじ孝のうらん

うやうようきおこきしとよそみそて見はたよ
もすふしきよまして御力よあてはなちう
さそあれしめすらめきれしを親子のわう孝
れり兄弟のちうりのそりあさを一きうし
のくてくよおけらふこつ情くあけきいま
一しおいろうふう孝すあわりこきうとく
まりてあやまよせうろあやうえんの月そ
らまくれしぬ三年のあいしたちまた代はき
こあんゆうよのありてきうしうんはしへま
あいあそすうしう滅たをとえうるおす

らんしやうらん若はおひそうたる物とそ
あまりにくやけれあつ恩のつ報の孝まく
ら殊なりてしおくよしにもちさぬに兄弟
かなきこし人なよるそもし山寺しおけ月
けるを心くるしく侍りてをろしなをうけ
みなちもなれしも色そちくさて大事あ
あらしまして機うふのはうきものひうこけ
迷を出し今をちうつにおよもけれる道
ふまはおもれちくさきたまふてその六
ぐらんそうのやし炎ひをもけりみちて

殊ほぼらひさうの彼よりたふあんもいこ
うの孫きよくをおそんでしをいくさはら
みもかけわりたいの月よよをりき殊思ひ色
こ思ふふにけてでも昔をいまよおすらへて
一すちすいうとのそんをすひ孫らく九
おしもすしやうのつれそらぞくけ七世のふ
た六さし言んぞく成佛と思うぐのかひと
あうしつけそうりさをおり孫つとて
けさめふさしきよといとくおもひしま
とはけるきおよびふみよけてを

とふしきのくはせちやうとられ哀さん
あまりにをとよおし袖おしあてぬるばかり
なりくやうをやうしくも哀さかいそうた
ちとみるくかてりなまれぬやくさう
くありていさくくうり有りく佐たまし
上りて人もみ前りうおはちくてもえはし
ことを見よりしと申されしなはせ是はさう
のなまひなるなかくくみふりて懐きうる
見とおもくも人をもおみうまはくやかま
なをまゆりせず出のしますさしもたうハ

すはいはせ給ひ人はう哀をもつ哀て人も
は絶せよとて作まてゆは立よりたり見給人も
はうのよみ草おひなるを召はなう見給
て　君見すやうくまうれゆるくの為てう
くたるせいちよういろうをまさんをやとう
もう哀秋のう野き哀しくらるもくやうの
こと哉とふるきしとおもひ出給ひなをと
つもえうしの給くもつきのものみなりき
ちして前されの道をあうまぜてあけ哀て
いはもはず哀せ給て走りはうひちなまたをきは

草そ茶汁ハよしそもはなかり月上志ゆん
嵐りふきもよそのとみちの色ハ袖れ淡
とをむけしてかて世よ古里ハ若まやもく
をすくるしけ内西しくやましくそおりら
くりう人よらきしうる業のをさことをえまは
あていあくちく将りろしとりれやぜん
才のありめまをひくのきら孫し
とりふかる草のむしをお王するもそう
茶くりくは志しやしよい西をこりす
へみとわこて残さらせをうて一人出す

思ひよせてうつりおさおかりしおをうけ
うて今わちく将してよしあさところへ来
くはさるここうきくはさむ孫をこうもち
のちふ自んやうさうれゆく流けふりふ
もことあうをたをとよおけるありくつきう
をんくえまやうの草はともむはおもて
の淡しをいれ川へしふありをつ貴すまし
さてしたけるる貴よあくさしもらくしく
もくを宵獄にくくりとうるたいそようへ
さらんとすつけそうとめ言よまうゆくあろ

して扨も此人の御かたりありけり
しをりくまこゆうきいけくめくまやう
りくぶり業母しよおふいそのきやく人
のはかけしあう世にもくれて世ゆ人あま
へてくおとこたらすらふ殿は猿へとおふせ
らまたれそこうを激とおきへてふける
こけり猿りくも まゐと みすち入心ー
あらぬわり猿のうちより かも おちくりん
りんとすられしあまたのたうこつまん
よりまゐとへこうさしめは ふうすとうけ

猿の其いわしへと思ふよ天ちくれあしや
ぜまうそはりくわりとしやうしま
みすのたりとさしけれはまふにふると佛
りけまくり衆は入られもわうくりより武
おんきやうしやまてすもずもくとのあふ
らはあつめくまんじうとともし猿れくり
こうふえんふるとあれありいうふをして
もうとら明のりをはいうもやと思ひゐ
らきあさゆふのいとまこたみをふけひん
ちよるまさも一心 のちこうをふし激とお

かしいかなし。ぐゑんも道ともかりなも
て東西よちそみしろかうりこをとうりせ
ふ二ともしよみそうてかりり先まてきやと
思ひかれてあつてとものでよふくうれま
後く一とうとをしてくらぬかる出我せん
ちういうありかれて百千ごうをたまよとも
す人のきよ一ぐう琥たまとをしう孫ある
う抵力の種のごうめしさよとそうのごう。
明つ下よるいかつかり寸心けしとあつい
さしたあみやおりかつ山の姿あつくふき

てねつこじこやう琥一とまふ歳かくしかり
さうしゆうひん女かう一こうもうりねこさしとを
くまんかしまふふ君けさまてあふかう野路
ひかれども花へけりかりを時色くまん佛
みもひ路おもくかうこう明れきわるかるま
いりあさてし一こうかう歳へさいとゆさせ路く
もちしけのたまりくあしやせまうりうまん
ぶうれひよりおろうのまハあしかわなひん女
うあろけしのふかうき薄とあつばけむう
たあま万とう。二十四へて一こうを詩りとし

めし奉りければ。やかてへん女成佛してま
しまらしくら如来さまをたのみ女のまま
なりぬやうしやのまんとうようをひんちよ
うへ一ともつまへるをもりせはか
さし出しけるにかくはなしともなれも
ともを母をろせよ機ときついでんし説佛
あるしを經と嫁て言いを産まて宿ま
なり母なるを今より據をつてく未我ハ
こと御迎へ力つことより十方りへ遊よ
凡重ねん志ろしく常我にましくてあくさ

ま頼べぶとくありて中にぞはうさうす
るるを嫁がをみけり奉りけるに是に人々の
ほかあよまにれ日に流經六機にて六人して
才三年まで六機の心さしの我をなく年
をあけさいつて見しく守付て氣へし
セまなれで母を殺兇けしさりなけしあまう
なくあうりくへうまくてくた忍すといと
かれまかたすてよそなく打わり猿
よくりけりやすれてんゐんのよのつれれ
猿ハ孫にかへり ハふるすまは入日月てん

なくしふさせず　く恵みあさいろうを何ぬ
おもひすゑのらはありふゆふのあたる
にほちハせう風よや御ためしまけ武
てをあまりありかりしるしをたへすたく
一すじに佛道をねがふといて草木国土
ことのひしやうかいとそなへくるさてを
太しやう夜は出より富士乃すそをかくす御
武歌いろうはなるへのつ戒ありて是まてを
しつとも御かりすれしかい一つものこら
ねえとの野原よありまいりけるとものお

は箱にて兄弟のしんねをぢうぜんある時
五十郎祐成と弟のりを時致郎ども家と
よむりりちうやうていふおくろくすぞを
日にまかりあひをするまじのしそおい出家
からまちに死する者ありやうしくいふ
ここ老いしやうしんとありてきやうかれ
のちにてもをうけしくふうとをしかしと
申けくのこなり君あさしめけまてはふえん
ありてよしきやう上人とそのうへたいかお
ござや球ざや　いかく　まことにをしきけ

きこえ人さへ此花をさゝげあそしてう
おほく人こゝにおくをねんせうしやう
のこりのしきんよむのきこえいくらいとふり
なまびてころやことをふみ給ひなばをそてし
まへれさらす一しんきんのちくらをもりて
やうしくあらめくそてまつりかくといもひ
たゝまつるいくまうあうたよましまする
天満大自在天神ゆ事なり其かうい
まりとふして非とあらめらを祝ゆる
せり奠いのゆさうしとあうかれのちあり

もつてしきみありしこれひとくをを非
まいらせとおらせらるゝもれて也
はてしとそすおかちせずめひくまうきて
くうとおうめたくまつりやそへしのす
そ野まうのおとりめこころざしあのくは
光忠ん様はりよりてうの上人とされさん
とうるしそ〳〵とけいめふききもんぬ祝す
へぬ月廿八日よりハきらよどりきやうくう
ら色くのはらへの御はくるり今また
へをそれしすでしへみ帝のさうしゑひろゝ

てかりくさをせずすゝよし禊ハ人の夏よ
りくくりあるたよふりしをいふもより
おしさらしもいよふゐるまでとしこさう
たんと思ふそのハ内かりまさりきせい
すせし思れたまてるりよておん雲さん国
のきとうしあゆミ琉もられなりし下もん
らんあふつぬる家かりけり

當代物語 才之巻

00
5796

とう箱根山そこいて夜あかしそのゆさかり揚
します
いその屋敷泥あて見てゐます
てらしのせいきやうふあれします
せいしやうさゆろつけのります
とうおいいそまとりこもりします
とらとせうきやうほう弥んまあれします
二文の刃孫人いそへ弱ゆきします
とういそあひよれ入します
せいしやうほうをんよります

母二の宮やゆ文をかきとめしけり

曽我物語巻第十二

さても祐成におくれおほいそのとらハすけなり打
死のよしを聞ていかなるふち河にも
いらはやと思ひけれともおなし人のなきあと
のつとふもあるゆへなれ共またいのちみつから
なきをそりさまをかへてひとへに後世をいのら
りんと思ひたちきさき衣おとしもくの人て箱
根山に上り百ケ日の仏事のついでによろつ
くれすひのかんけいをとりおとしぬれ
をたちをちりさしをとりくしりけさの花

まんだらをひきうへてうさうのこゝろをみや
つしりてなほなほのしのおきあうたくひ
もくるいふじけるまもるをとるにへられも
あるしすけられたるとよなりてるよう
うれをとゝらへてしいゝ山つくもりし
をはげてを行ようしせんとそおけれつふ
しまきなほつけなきさ西くよ帯うくん
してけとものられなる母こせんもうしふ
くみ郎つゆひせ歳あれもおありおまくハ
おまへはとこうふて日を送へこきもいふう

ふしぎなるはいのちをたすけてとら
はせんよりすぎしなるは曽我へいさはせ給
へ十郎うつくしきみさまをせはいんといゝ
まいられしぐらうもいとをほとをすゝめしてこ
なげきをくだいてまゐらせうらみに兄きみより
せんくはしへつ心はしんげなりみ一うち気
はいのちそてゆきわり給ぬとうるへて一人
十郎さむらいくるうりしのつもそんよの
屋敷のみと我心さうしてもてるをよし給よ
なしてわ稚小ま田をやりしくるしぬまは

三騎のしのしのてんまにやゝあくれハ三騎を
出てくるま名しまに立やもを渡ハ手本の松原
おかなくる兩ゆをす其ちさまゆつりるふを
いてぬ菊名はりれまんしくらしくたこ
のうしめこそうしくうりわハまれ山しし
くとしてをそのくあししきみくしうりい
まる大れあきぬりまれはしこそいれ
くらをまて孫ともろけしこをまるハま
すやうしくあゆこゆくすさふいてれ里ま
ちりはさぬらしをはとのおさぶふかあれて

とひなはハすわけし家の此かまへりし孫荒
はかりの時おもや酒献打ておるしくうしう迄
し曾我兄弟人々のあとやまうせ拳れてん
おしへさせ給へもいれ御はせこみ御さお
むを詞ふてらうかくわをいくしくとなく
をし御給かりまてつくらせたまひはつい
たもし家のありはますしふ人をきつきさせ
給ひはいすう一人きられまてはやうみは
よりあかはりのはつるはしをおほくす
をしせし殿御心さし如うくまうとも一給ひ

しおもいそのころこせんまでおかしは
しゆうありけれはまうふけなかりけるおり
へまうでせんといひけれはとかくは宮守
まうされしおらしいまきのもつぬよしう
そへてめされのおうおさけのつゐてもまうす事
へのつりうあうれしてゝふあよつてさの波志
のひをあへぬくしきみ花くおきふされし
こうと思ひてごをよそておかまうりける
さうていさらせ給へとそわへ六七ちやう
おるうよ路をまけゆけもかさい人のりそよ

ぞる草もの露をおつらしくちうる
の秋の夜たぎやう若波がしくる山秋の風
ればんさいのちらぬやを思ひいでられ
てそりくどもあゆくもとよ日も文字の
ころあのあるしちくゆおそくそきちるぞる
まさふ露るこてい琥珀まさしてあきちそ出
れ庭歌のあとみそし人ありの夜ありくこう
感ありとのうくれさせ給ひくところよて
ゆくまいりしこそ十郎殿れうらきさせ給
けゆ思ちるハ此言とのくゆちやうれ其

琴抔まうけさせてはまりのいとくちやう二
人のもちいをつくしけるを見ける琴はよき
新こそのよおしへなれさらう聲をおさく
かけしも桔梗かけしなかりしくてくちな
くよそうの妻そあさうの一曲しまゐ
のもとよへなよりたまはけふをかけを遣
てお見らはけちからをさしたうくでてなれ
中すがるし月のすくつまするしく我す
すがよきそきむくうおひもなり言あとたふ
そのてけりなれしさもふはくの人のゆかりしとや

かしまあつつもくおほえてれうのつからり
ふかしまわれまれをおわしこけのもてよ
うれをまあるて今さうかりくれ思ひをせさう
ましくやをんりてあるむをうあまいれて
二蔵う人らけるとふしもつ三なる連積た
ともしてしそうあまりなれ年さふをかれ在
物あまうらをみ蔵をそあうしなれをれと
をようらてハこれもしとや思ひなん御お
けがんにをそられをすくは我つあ書き
は琴ゆはおかいあとや物らちゆく人哉お

やゆく御とくまゐりえしつおふましくは
きられよそはかりはしこよれなきはふ
せやうりにもはとくゆりえし一夜をあかし
は務なまひゆく人なにを行うくうしくゆく
きとまれれし嬉しくもの務に務りふこれ
あくり縁んきろよおし へたまふよ宿まて
おくとりより給ふるものゝ務しさよさやう
よおそろし武物のえし万ともそくを行よ
うしを色葉にて川ろのおとりまて縁ん佛
ゆるさこゆふきいきやう すれいくうと

ゑうしを尽し十郎のきんせいをいうかう
きしとおもくすぢと思ひやられてあさくれ
せうあらく深僕よりうくそはく務々は
はゆとつきてりし おくとまきて見まは

おもあまへよ秋風そ猶く

うそ我そとおもひそ死にし むえんきろを

いまくあまく務のつふふとおくらん

うくていて悲かとりとゆきわう務其秋は
おきあよ不よとくまゐりあけぬきさ務原の
はゆよ志おき尽けくあし ふまうせてゆく福

よ富士のふつか程にてもつゞく黄昏はよ大
くへゆくそこともしらぬ兄ちのくの草
むらことのむしきてもふく秋おもへて
あられふりけふもたりとあ黄しおもれ
ならし花にやけしりてぬるされころを
いとくはらはをかさ秋はくたよりゆく雅
ゆそこしの表書くよそはさまをるきて至
こりくおなちよりそはるしのあらふ残や
ごりらせすきやけせんをよれいくして
たれへのを止ゆくすへきすへはとかー張へ

とゐれなれしやどき御寺まてよひいさ
してさうるせじちやうなとうつうすれは
すゝこをひらくりれ出る黄ちてのちもなく
てたくおきたおらおりしなるやてありて
ごうらくくゆなはそうのすけありよあれ
まなしてそてふミとごよおりはちゆくちん
ぬうきこゆくみやよれし人ぞこん也おもな
けりけるおり出人うせたまれぬはと浮し
村なおもしこけのちいまうけをきこやと
おもれしうともつきなれ余なかうへて

ゆそやさしきも世域流あそひとのくちう
ハちらくのまゝの務めもすもまへはへ
しこおもひて百ケ日のあけいそしよ
茶相つそりミをおろしてそひとりまで
ハせか野すそあとけ手のもとりすて居
あくもとりふりとをみくゝかりし心をを
ちくさとてけれてよこれありちくお
りしるれをくんなむよりり物語をを申せ
をこてこをもみてさいとむとおもれてちま
ますまりてゆこりるはせせしや

うえ濁域おくくてけふくくりてもとり御
あけ茶也おもとれやらきてあくよきとろの
ゆりそあにせさしやうりれるはなすきふ
し家の沢くとしさんてよもしてきけの
みしらはせし務をとれ入まりつせしう
もしめくるんさんよ入しありくこう花
嫁門のあつこくまこれとの芸おもひきり
たまへはいろあしりまみてゝて今よ
出茶めてしと務をいふかなきくはしか
行とおもりまるんさけのこおしきらめく

うち返して今のかはらしきめらし
まゆそやかなる出つくゝゆかくはなかつとても
御身とならし或る人にまつてまんをもく
おりありしものしきそのことをさしありし其敵
をうけ孫九との〳〵めのとの乳母まよ
てまちらせさかせゆしゝかことはおはなら
ゆたらへ一敵のつ曲なりともたれとも
仍りと思ひてあるまよいかあるるらくまやいう
みをして〳〵せ御ゆらちんと思ひしり
うらひゝへよ御身ゆへそしや諸ゑしゝ

とうちかつゝりをましめてまうす十郎殿宛
後のしるかくはおしへさいうそおりし返
まくおもれ孫九ゝんこれ法けぶおりせも
いそうさんつ弥三郎さでたまふ兄弟とい
よしく法まむぜんゝはよせしまやうゆけ
はなき生死むしやうのはかなさまする人つい
はなちもあらきんそやきつぬたま人な
八やう三しやうの門ふりしと中まお
ふし女人免りれふかく我らな門ゝぬうき
おかありそのゆくへをうて一きやう人我たか

らうさんとおもふかけあまりしこころつきゆこさく
の人まうけ頼みしやさしけのしくもうるまま
うきはいせいさんまよしふけをゆあつうち
しれりあるすこころをとうはり月ごろせいよ
出ぬ世をなきとを志てぬ人とまゆよちて
まうちるうりりうちよとめてちくはと
ふやましあさふく深くまくるの御ふち
まりをおしこはる孫をのまこれ事
在を〱くちおし花り武士ちあり武士ハけ
のほとはちあるを草もよむとふ家よ

さとあやしきを月まやさまは月よりをた
かるしおかし武人をれすをけなまり御
みのすこころをそていらくくうき世にみを
とくまらはさぬふハ當我の里に花やうお
りしすくくふる冨士あをはゆを武御あ
したふこうかんあつてせいろまおこれ性
ゆつくみはまけこれとおりてもうきんに
くちぬとはりふをもてりゆさうもまん
しむやくおりはわがかうはせんちぬ花とし
てうき世をそむくられなよはなんのさくら

とさんちゝ武らしゝ衣をすゑにそめんと
おもひけるそやてはすひ悲もんさしと
きり取りたるもそめ武りくてこゝはすこそ
死ふおもふあはく年廿七とかにすゝか國
てらしのまもくとなちいそによるよの坊す
佛ると云はふりしころつよくすゝみ
ましふるはくをたちもなれし心のよち
まことにやさしくあてしはりける者に二
人打連あさころをかくれ隠すまをとうし
まはりて我に國を出まこゝやしし出家の

乃國のせんらうしに一あやう年の後
女らんをまゐしへすらん佛をくまこしまやう
あやうとんせうかたれとのりまくさや
こゝのおりうすらんまやうふんにあはれ妻
らん佛乃はしをとけたよりおもしよ
あよ山くく寺くおかしめぐりくるうごう
さすらひ高野やこいしありそん入すうの
ありしおちりやるつうしく思ひなしおか
いそよそりうらはしの山のおくふ入出
もののいわりみとちこより一かうさんしつ

のこやうをいそぎて九ほんまでしやうけの
そこにおこたちを二人ばかりあまり一いとりにゆ
かをかしへおこなひすましてそのゆくさき
て當時乃まさ御ぜんは一日ぐわんしをせよ
ふかうへ百ふきうちまかれ侍ちうかお
ようにぬれ世のならひなきおもりみずよ家
月ごろ逢ぬ人の子孫ありよもはちある
球のいとを二人かおもひけりよそひてもふ
しく人はやまひまてしるをまいらう
せめくうくあはれ花あつかりし物張とを

いかなるたゞおりを見てふかうをもて二たびう
へ覚ぬわつ勝しきりしらゝぬ方の沙らさ
うまてあまりの云はしけるおりくさつゆ
まこれらやれ御孫をとられ武者太郎
あるをもてなくよ見かうの妻そなし依ふ
うぬ月日なきさも才三歳をおくり七孫ふ
あくる羅よめ月二十八日二の夜若御孫を
とられいれなばさけみなけるのう七孫ん記
よあかりて人しつねせん紙りてるまいらう
八侍なりさてを十郎が契ふかかりしおか

いそのとう百ケ日のかい事の所いそぎま
箱根山にあつまりける御山よりゆきまゐ
しゆぎやうしやくわうしよ一万峯こえ其後し
よめをさためたるやうしてそうしやおかいそ
ふかりてりくうらひしの山のおくにおこな
ひをましては歳いさらせ給へとうつもれ
ふうんといへれともまらハをささそ四五
はに御らをまさしよそ二人曽我の里へ立
出て中村をも残て山にこやまをすぎて
おひらひしてはおくまでのいり衣草れ

まゐりまみえ玉ひをまけゆく箱に袖ハ涙すそ
もしゆゑにしきけるうのかうり有る里思
おきなふとしえはもうはもんとせし
人のあまにありてもを給へ不思ぎく
てはやらんさとれはあきまでも山
れはおくふみより入ぬところうものへのさ
うあんふかくいへさおしへ給へしも迷まく
まけいりえきく縁にかをうるるもまれ
てうき事ははつ大将ささいゆもしれりはり涙
ふもまのよ御一里思わたる都草はなのぬる

くお思ふそてふちるゝすまはふちよを
黄鳥ひしく簾のかしとふきそ乃て出
つうなん志もしくむち草もんえしう
ちたまふ志なしまいて緒うくこさせ御
をなん言んのしらかそをじるおすしをでゝ
らりまえとみちゝ行おそゝ人のすまうと
をのみくすやゝひさしくなちめくりこあさ
の礼大をたてれもしちまうすうるゝた
まうゝは中のられさしつりてぬとおのしく
て話んかう若ひしくふちゝのかゝくゝや

ゝるゝさきうらゝおほくと銭そて黄鳥
やさんとりくもとうふち出てたてとこた
ふる球足まていまて三十ふをふうさけう
ちてのかうよやせおちゝ行へいけさう鳥ひ
のをとこよしちのてこきもちえ衣
よおろし色のけさ銭けりをあるしおす
よむしさ衣のまてけらりくしそうしけけ
ふりよ志うかりりしまくを思ひ入るる
をそくこちくまんれせなんさやさしよ
入し四ちうを見よをいうてまさふ為ぞ

せうしやはあくそおもくなるきつの人こ試
うし一つの哀のちうらしてあらしめつ
志と御まくりはやさつよりはく世おもはく
すは先よちへいつせ殊くとて二まなる六
くしやうとしもうはへしへ忠しをしし
入はくなには人のまくやあ孫をと見るなり
をあつはくあらくおさく女ゝ母もあ孫
をもくくあんとあのついは見液をせも
三さん五俳なるを二さむとしうしやう
ならつらしへ阿弥陀の三そんこ奈むさよう

けうそくまつりしやうとの三ふこきやうてす
しやうよりあつ八ちくの一せじめうてん
をはくあのうくへよおかまいりまゐらしこハ
らよこきんまんよう伊勢物語きやう言ん
抄きよのはうしなとりちうさしなり佛の
はまくはよ六し小教おくりあさやうなそあ
へ二人のいしかれまく小を教めくゝあるし
くそあへゝり二乃こやのあ孫いれくるな
あるありしくのはきらつけしの類や光とて
するおしきますとあそれ給ひて二人のい

こひをあんちしらつらはたまへりよう
いらう悪獎あさむりすとゝ中を今こう思ひ
志らきてゆへこゝしこれはすら孫もうり
をこゝらふあひ墓ふ家に言よのまて
ちらつらはたまよ　末悪ありこゝさよまう
いし名んさいれこやゝたひまてゆへこと
きまうく本文と思ひよらすいゆきもせん
でのまろく志ゝすてせんちしきとなり給
ひめといひをりてを滅をおうしなれは母
をごふしやうをとしたたけるがよそかり

こそばやゝまでて母いひなる太郎うきりく
わか親はすまをんハ孫もつ孫みをきりり
そまくゝはしうとをさつけみをまつ物
めやそおのカなきは人へ心をもちうる
おとくせし福よ今まてありし御もんれを
をんさのもせすはものとのとをうせ孫んの
けいもん書我みてとりいとなきまさは法
もをだんまりせたくそし売なる女もしを
こそれこれきのでこまりてはそやえたんし
おんあひつさけてせけなるより人へつか

かゝりけるを飯女のつく〳〵と思ひけるは筆
月やう〳〵すくしけれとまめやかなるをは
いはゆる色紙のうたんともおもふをかさ
なれそめしをすてかりくて思ひを尽くらは
はらからせ中をなさしのいうてせけるかし
さはりし紙女ふりもえらてくおほくは
女とはしてはさし尽ちふりふくもへ
まさす其く〳〵まよみやうよもて六よ見え
すらし孫むおもれ出かまし礼りもな
しそてはらんよせんの志くさうよは

うきて大かれはせんちし尽はなりなまひ
ぬこあまりよ〳〵とくあまれはおほくて
まれらまてを一りちすきえんどもなまく
やと思ひは也およそ人のへ八く天しやう
のふすは今はましめぬりみくはへ先せん
こうれは大なれ女なる也むさやうつらく
りりみをおく孫のをつきなくしきせよな
うらへは我女称しりもあさおしくはさう
はまこしやう三そう深女なりりをはひま
ひよかけはりは娘のせよむましてしかけ

ましやうしのらちをこえてむなくくとも女
人はおろかさは迷をかふねすはさんく
ぜひのさかひをわきまへずなる事ありはこ
またやくしのあすうる百歳まで おもふてぞ経
ひてはらんあきれてこちせ然くりしうれ
いぬ まくをかみかけて兄えりしといれけ
れしもこう燃をとくめくするる後にきれし
まてけいりゆめのさらうしで御心は狂
親おそれ偏に発露はかく隙あとおりもそ
ぬるを志りしふうしすなる御へと物され

こうてまほまことし犯罪法をさまつはうまうも
まへらは寸世を機ちやうのけりのひみを悲
さあはつ何をふのかりしみをならうへし
てかられはおんまはすなおりすを在とは
やさしけうへまうをんなぜさくうなきも
めかならあきさんちし地にをあひたる
まいるみをばさ諸國を志るちやし然よのかり
はり然んと人にあれてまつり然ん佛一
りうをけひとてうまりやうと然然つれ
はなりあれもあり御さく我あ然まく御

くゆらうらとうしやうそてあやしさき
まちをとりくひとけいありこゝちこまりお
こゝろはふり今おもひゆくもけ人もあれ
しんつたよりありけりと嫉妬おほしはきう
ぐ人、これらふしきなしやくそんのいひて
ゝみつよりてひくよの盤けみうく
碁打ふくをはんくらしのせりをやう碁六
のゝ三方よ六もんときよめ一方んよしや
しをくふまえりと孫ついはそしまん
僧ふしつあや悔りたまのへ弐ぐうらつたの

みてはりみすめうらてあやしけありとこそ
たまひしかい二人なよしやうふけとく
ふろとらすりいふそまんらんあまニ人
のいはひをあんちしそはふりしきはしき
うそれ石としけ手てなんまひかまきむお
まは二人なよまるむもんきやくおんまと
くなしたなんとふらん事すうそれある
へおうす石よそふんふんあんたんはてふ
もまれてうるうきをかのうここをさ風
しさうふよ宮んのいてゝ中おいまへ

ほどのかなしみありいはいくさのんかい
ごばまことぬ世の中よむまほあまりきうへあ
はうるれおなこやうかあはふりしはたは
むなしくすくるまたかりのみよへてま
なむあみだぶつあるてしものみん
まうふこころと見てゆへもあはかまへ
し佛道にはもろをうけしやうらく
いみんせあなりすへ尋ありせとやそれし
よもも一つこや若あ孫をまつりきを
おあいしてすひ心の浅くなりしてゆくな

あぜいろうよありあるふしは老の中のいと
ふるみかなけ二たび三たびこきやうよ
うりいうるるくしんとうけはしんすれ
とうほそうかふあくはゆきもろうらこふを
あみだくまいり女人急となりまきは
きた我がまありくはゆき来る念ちゃんな
なしされさとうくをきゆさはとしつよいまの
うりまん残りけたまり人せいくとくか
をひそてまうりはみん行やすりて人ふ
天しくよとふへすでともなふとちかるを

いかやうなるおもむきにてもしんやうす
ゐくはやうけて物をたまはりける事もは
いずおもしくさけいてみくるしく思ふく
いかさまり時節はひならんといひくれとも
せうしやうれしさを見申すもしらま
らかはあまねく衆生の御ちかひりんこともさ
らせ給はていくやて我かせさの御かへと
すくれまてらしもくまて三ちやうさまあまり無
ぜをはれらせ給ふりり衆生しやう人
おもせさま 仏をやしおつこうをんと思は

へたてなく一ねんのまうざうのうちにもまされ
てよしなきかはしやうのみやこをまよはれ
出てみれは六道に生しやうしとはなれ
申されしものゝおれはゝ八苦八孫り苦くるし
みなきの貴きんのうきへちくしやうさえん
かれのおくれとのかうてんしやう悪めす
ひふん言んのくひとれらしくけすせ
りふりなく心こしちやうてんをうこり
嘉さあひをきとしていけるものいふは
うゆへはけんのまやうせしてすなり

しよりさいくこしゆくしんやよそかし
なんいまん人あよむまし内よおんしの佛
しやうありおうるよしてよみのひろしん
んかうせきよあうすそんしんせむちとう
しやう明けやくそうあうちんそれよつね
てしあこやうま代しくおりと画きを紙
うつぎて煮のしろくしやうハしてよ書うの
とくすうふれ目くきんちうんちう
らくくしてせん余くらんれこやうけうよ
いりて悟くくしゆろかのよしこさくあん

するよ分にの法げ三川に法けうかいこやを
うあするいれりさいれしあきやうし
やうしゆしてし一三けたんゆうの滅也
まくへまはかくせのめうくむよ法つき
きんをけごうかいれおのくゆはまく
いむせやせくふうあらむしうくしうる
あれどうびみんをもりてしやうと我須
うひらりこをのこやうかりうとあか
縁よしやうとのげりとしちきさうう
やうつをくそくふりじちむちたましひしく

りうごさらんやそてみちやうほうしてやく
られてかいちやうのこうくハ那のこの
うりてうけうむふんじやうむすうあり
もとこ上人ハこしやう三世りしてさあり
あいの前ふ道そてくしんちやうふ何ハまの
らきめをんりうけちやうのあみまいふ
はしまいしやまましけるさんへふまさ前まい
ちあうこひでけふ何けしてされさん
かうらむ歌のれなきしてんけしれもんを
しあり一てうの弥陀いうしてきよふよ

の御かめりうあけりといへごもこちやうの
やミをてらす光るしかりやさんしけう
の天王ハ黄よりこうりうたいしのち珎を
めし八よりのふ弥八の大まいしくらし
てたけいされよしとのへどもさんちりの
あつをむすへものおうきんふれ雲光
ぐく末代こうもとのそこふりちり山ちり
よしやう寺うやうれところくみは小る
ふんちうけくよすをふしさしたききやう
へをんゆは三世のちよわれまあこちた大だ

よおちてくけんをうけ女人しやう佛をするなり
らしやりくてまことあきらかなるやうのをしへにも
女人ならちてのほとけふりよくちしやけの
ふ孫ぞうかうのうれいおさ河よふたなき
しを肉にころハやしやのきらしといへ魚を
されしふれてしけてらにいさつをれ〻る所
よ孫聴ふよみいてちうあくふんむ大は
う悪んにちうれなされてつ河よまさ女人
志うかいのくらむ月うをこよ孫んころ
よあさらしれとなまよ事すさまんでをこさやう

ぜをしてぶ三河よう人しん事六らんハ
發てうまんけやうをといやをくをりをろ
くのこすてあにあやうあるせんりこま
らさらしぞを悔くすまはすふまちいゆや
は記しめておもぞらのくすでもうりよ
しいとくくりれてかくぜずをきいいまあ
け色悪んしやくついちりを忘きあるへう
孫すそのもらくもんふく悪ちうい發しめ
ておをしぶこやうしはこちいうとうら
さハてさんぜすこやぜさらんを見大ほん

らんをしやうのせけいきやうをむかしう
御恩をむくいずして猿にてふくでんして
志ゆんけるしきろんゆゑにより天たまふ
ふうきしてそりでんごんのたやしよ入て
こんごくゑとまゐりすてもそふせむくら
ゆることもらしなしぢごくへめこて上がい
てうさいやうしへのまんぎんこやうぶよ
らうこのくらくと三志おもあかへひきい
むかしすがらに世佛乃一さい志ようさい
うし八万志よきやうけくとりかぢつは八

万四千りくぶつ志よきやうをこそやうかう
たてまつれくとくとふまつり御はじめてたた
ればもんたけ王の三志てんぐうけちうの
三十六ぶつとしやくしよしくゆししら
まんぼうせんのたちに六かんをちるるり
ありしこゝにまゐりてつへたちうこゝにとも
れてまゐりまんれあひとぞとしやくにはら
へりしやう志志こゝやうにしいらうへうりた
つとそくせんしやうくらくとうじゆんしゆの
ごやうは一万三千ぶつをたてまつりちやう

小こう孫をもつて十方衆生をやうじん
一念のやうりうをもくさへりといへ
りじんら上弐のおしへをふうくまんし
南無阿弥陀佛とくとせおふまは三名百丈
らくのときにやすきをもちらんしやむ
やすのきをもんにすちしちんふ孫ん
ろくしやう奴えんほんなくごく孫まん
て上仏きんの一きんいのかを念ん
りーそくるんおんせいしむまるのしや
しおけむおさのゆやくまんみーてまる

ゆゑあんにはむぬかうすらんきかりある
ご念んのかき川をこうくくどしやうう
ひ悪如来をさとーぞらうちみあそひまる
けよゆことであふむまやーでまうひんう
し誓をやくくじむまそいむのの四とくと
念を川バハさとりにひくさ孫ひおもくきま
のおんまちよまえやしくいふそさいしんそ
くしるんのまるもやしとちハんんなん
まどう孫んめうくとのおのかみまおーり
くまん大くまん悪おかりまいりたまへな

けうれたるさへあんらくとしてきらくと
しーやうまんしてよろこびしーやう
のちやうふちやうをきんしくのうむよし
はへしきめしくうらみふたゝびふかきよめ
孫共を戒くさちやうりんすてはとかくれ
じやうりんはけ程おゝへているなはち今
のほうをんちやうもんすれはもちろん
まことふかりしてありかたくは今より後は
ことく悦ばてしけ人しとて三とふ
おかくさや難小児をやうしくてこふ貴て

かうのは書す入あのを貴こゆきはふかう
一かつですかくしをものくふら出て二の
玄ははへしてこうかてりなれともせう
きやうきりふ通してしはのつゝくはく難
忍をありとふとらことあらめさいんはよ難き
よかの要ハさんましめく孫んかのさらふ
ちそくそすなは其後人をつけく悪をきけ
むかのくふきくまよかりきて
りつをんのちてくきうしてとぜい
きてふくんまたがかずむかしハふう嫁

うれらうのわり様を志みれいまださきや
これみくあり約すのわとれやれより
それらうびやうといれまゆきせいれ六十
のくれらこに孫ん機川ヤで行てぬかまうき
やさし志みるとてれおうらつ母二人のあま
閑かん断る犬のゆめかわ十万り女郎しちの
きまするりへ西はなまのうふり球きお
まいやさくらくとつ仍りくれうこやうく
やふらしておのくとみつおうこ十かる
なものあはいいみんふけよごやうよきあ孫ん

こあみらみうしびた一ゆくよとさけ男ちれ
いんなまふけぶれ出りしあうふすふう
たらくの與樹り武かよ重すむい心志うの
けうつのいんとある其ちんとくおくお
らくまきおすしくすりしまこくうへとれ
はぬさし蔵さめとたくすけくのきう
しそ思武多侍せ大ちうのやとうまこ三こや
う思月なうもるまはしますたれしやくお
やくそんさんや志有大戸みよのわり楼を
とおいきんやされらうもの第月ちれし

四つ而よ海のたぐり兄才をしめにてそ学
長くあく与りぬ際をもとるかさかなこく
ゆく月ふきけハ秋のむしなきゆく草
まかるしむともや鳥けたぬきてもあれへ
けまへをりすしむと見て御きもの道
なきまりことを雲ぞかかる正ふらう
たしかつもみふしやうこうかおくめん
忘れぬてしられらそうされき
り姿あしも九ほんたれのく水もハ
まくれちありぶずーふもすひがすらを

よきをすへけふつのたとこをむかはへ
しらでせしやうをらを渡をそおうし
かくて揚ふの二人の心さうしあさうつを
とうら御み上りて旅と川のむせしむやし
たのみくさまてありとむをハ一人我ふとそ
やかこし一人なりし玖太蔵をと上まて一ふ川
むやうよの思ん　わとふたつのこころ孫
のおくつしなけ志ハおうちよとより花の
色よりのへも鉢の川むりなうびん孫のた
かゆとなるへくし思へかきりかれてし

色んのつきくりり四きうきんゆゑあうし八三
これよ今けりのひろくびのまて一とし心の
うくる西貢やうふし日月天子めくりてひ
さぬくんおすあし　しかんおどんところをふ
一　そむちやうとらうやまいくをさ八
むかしのうちそのニしやくれけろ貴を作
ぬまたのたちうかやちんのちくふのあう
り記京きりくはてしけいきよくれのくとか
其成男八色と見るりをそて八らく
りに世こかうき紹の道よ入為手捕まや

ありし孤　あまきのうこう一あり
ここのゆし　のむ八ふけかる月清きく作つた
そさる・やどまふよしてりしまむ八
へこのまへ八さ成るへんさかつしや
うて気し後の百両んとおへて一まんふ
記へてあんの・雲まさきといふやうく
あさしめうあらハこしめ始めてふかむは
つきてくてしあやうのそくの八てなけま
るりたうきそいや一貫しらくせうふらや
うれ世のおらか照う書しやうとのうるへ

此三たりこをつ絆まゆめ〳〵ちの
しこありきしなお人につゝふゝきしよあり
おまは欲心佛ふす記善ろまゝ何るへあり
こさやくの物語を見記りん人々をこやす
ぐよの事　いよりあつさてわさわる
わゝしまとけらちょをとおさおたれを
じ一かゝすりとおす魚をみとあ絶
へ上中　よまみと学ても仍よかいせんよく
ゆつ品　てめ合よ見てあはせへ苦
ことのか　入をやしと生へし